

# 剣の帝の異世界冒険

アルクロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神に選ばれし男が居た

その者、名を妖悪剣帝と言う

彼は神を敬い己の世界で過ごしていた

だが、そこに退屈した男は違う世界を目指す

彼はそこで何をみて何を感じるのか

始めまして妖悪剣帝という者です。

初投稿の作品ですので。かなり粗いと思いますが。楽しんで読んでくださると幸いです。

この小説にはこんな物が含まれます←

これは東方とハイスクールD×Dの二次創作品です

これはうp主の自己満足品です

キャラ崩壊が多分に含まれます

これは駄文です

妹紅は俺の嫁、異論は認めん

後、オリ主はチートです

後、残酷な表現があります。

誤字が時折あります。

見つけた方は出来ればコメント欄にて何話の何処に誤字があったかを教えて下さい

それでも良いよ！って心の広い優しい方は、ゆっくり読んで行ってね！

(因みに書き方が台本形式な理由は、どのキャラがどのセリフを言っているか分かりやすくする為です)

# 目次

ハイスクールD?D篇

一話 「二天龍と戦乱の結末」	1
二話 「魔王少女との遭遇」	8
三話 「魔王少女と従者の帝」	13
四話 「理性と未知のステージ」	22
五話 「魔王の従者との面会」	35
六話 「紅の魔王の品定め」	43
第七話 「白猫と実力差」	51
閑話 「黒猫と神々の王」	55
第八話 「二人の赤龍帝」	59
第九話 「従者と不死鳥」	67

第十話 「立場とは儚くそして強い」	76
第十一話 「恋の気持ちは神を超えて」	81
第十二話 「甘い月と二人の太陽」	87
聖夜特別編 「愛する者の為の聖夜」	96
第十三話 「暴走の恋心と信じる心」	103
第十四話 「バレる本心と今後の心境」	110
閑話 「鴉は鳥に優しいかも？」	

117	第十五話「劍帝の苦難の末の力」	117
120	第十六話「愛ゆえに」	130
136	第十七話「ペットと悪魔と神様と」	136
152	第十八話「神の遣い（パシリ）」	152
158	第十九話「廻る神の遣い」	158
168	第二十話「切り札」	168
186	第二十一話「力の代償とオシオキ」	186
194	二十二話「地獄の始まり」	194
207	第二十三話「言葉巧みな罟」	207
214	第二十四話「怪獣娘と劍の帝」	214
221	第二十五話「拳の言葉の重み」	221
228	恋菓子特別話「茶色い菓子と恋の模様」	228
233	第二十六話「会合の劍」	233
249	第二十七回「邪龍晚餐会」	249
257	閑話「神のハーフでの戯れ」	257
262	第二十八話「灰色の苦痛の末に」	262
	第二十九話「愛とは本能のままに」	

第三十話 「秘めた思いの交錯」	272		
第三十一話 「煙の意味と永久の契約」	279		
第三十二話 「真実とは知らぬが仏」	288		
第三十三話 「死なぬDMはとても怖い」	297		
第三十四話 「見える世界の裏側に続く」	307		
第三十五話 「悪神の悪心」	316		
第三十六話 「白き翼を与える黒き欲望」	325		
第三十七話 「力の開放はウサミミと共に」	330		
第三十八話 「飯マズ嫁は報われない」	336		
第三十九話 「黒き世界の真実」	348		
第四十話 「呪言の切り裂き悪魔」	361		
第四十一話 「悪意の喪失と善意の悪意」	368		
第四十二話 「見えぬ壁の先」	376		
第四十三話 「焼き鳥はタレ派か塩派か」	400		

表

		?	
		四十四話「迫り来る黒きドラゴンの影」	409
		第四十五話「ゾンビの竜は剣を折りました」	416
		第四十六話「変わる世界観と変わらぬ主人公」	426
		第四十七話「女体化の説明と墓穴」	437
	447	第四十八話「暴力を超えた暴力」	
	454	第四十九話「伝説へ至る英雄伝」	
468			
		第五十話「半減の頂点と付加の帝」	479
		第五十一話「白翼への英雄の一撃」	486
		第五十二話「忘却の彼方の帝」	494
		第五十三話「大紅龍ちゃん大勝利」	501
	507	第五十四話「鏡の中の大戦闘」	
		第五十五話「帝王の帰還」	514
	522	第五十六話「仲睦まじき不死夫婦」	

530	第五十七話 「小さき王とその秘密」		
	第五十八話 「外敵の侵略」	539	
	第五十九話 「各々の対応」	548	
	第六十話 「偵察の次男」	556	
560	第六十一話 「無双の兄妹：前編」		
581	第六十二話 「無双の兄妹：後編」		
	第六十三話 「黒幕の正体」	594	
	第六十四話 「帝王の夜」	605	
614	第六十五話 「強大な兄弟の組手」		
	第六十六話 「剣帝の逆鱗に触れた結果」		623
	第六十七話 「茶色い血の味」		634
	第六十八話 「紅き王の眠りと白き巨兵		
	機」		643
649	第六十九話 「双子と次男は仲悪し」		
657	第七十話 「帝王の再来の決定」		
	第七十一話 「再来の帝王」		672
	第七十二話 「そうだ！京都に行こう」		
679	第七十三話 「不穏漂う魔都」		691



第七十四話 「英雄と霸王」 | 702

第七十五話 「霸王の悦楽」 | 711

第七十六話 「龍帝の逆鱗」 | 726

第七十七話 「王の怒りと刑罰執行」

742

第七十八話 「酒盛り乱心」 | 757

第七十九話 「痛みの代償の強さ」

767

第八十話 「偽りと真実の激突」

775

第八十一話 「虚実の強さ、真実の脆さ」

783

第八十二話 「執念の真、敗北の嘘」

788

第八十三話 「銀の神と紅の帝王の激突」

797



## ハイスクールD？D篇

### 一話「二天龍と戦乱の結末」

剣の帝の異世界冒険

ハイスクールD×D編

第一話「二天龍と戦乱の結末」

此れは幻想郷の迷いの竹林にあるとある家に住む男の話

剣帝「……（旦那）ハア：クリスマスが近づいて来てるからかは知らないが、カッ  
プルを殺してくれって依頼が増える……（旦那）ハア……」

剣帝の横には大量のレッドブルの空き缶が積まれてる

剣帝「……このままじゃストレスが溜まる一方だ！夜鴉様——!!!」

夜鴉「んだよ、俺は今リポD消費するのが今大変なんだよ」

剣帝「スイマセン、ちよつとお願いが有りました……ちよいと異世界に行きたいんです  
が。行ける異世界有ります？」

夜鴉「今かあ、えつとハイスクールD×Dくらいかな？」

劍帝「ふむふむ、それじゃ、ハイスクールD×Dの世界に飛ばして下さい」

夜鴉「おっぱいでも揉んでくるのか？」

劍帝「違います！第一……そういうのなら嫁に頼みますし……単に強くなりたいしストレス発散したいんで行きたいんです」

夜鴉「なるほど、じゃあおっぱいと戦乱の世界にレッツゴーだな！クツクツクツ」

劍帝「何かそれ誤解招きませんかね？」

夜鴉「合ってるだろ？俺はそうだと思うぜ。じゃ、行つてらー！」

劍帝「はーい」

そう言った劍帝の足下にスキマが開いた

転送が終わりそしてついた先は紫の空に、激しい爆発音。

劍帝「……………何この世紀末」

ドライグ「悪魔ごときが！」

アルビオン「神ごときが！」

「俺達の戦いを邪魔するな!!」

劍帝「……………なるほど、今は戦争時代か……………時代誤差起きてるう!!」

爆発はその二匹の龍が起こしていた

劍帝「ゴラア！ボンボン喧しいぞ！其処の二龍!!」

ドライグ「なんだ、貴様！我等の戦いを邪魔するな！」

ドライグはブレスを吹き掛ける

劍帝「…………弱火だなあ」

そう言つて劍帝は片手振つてブレスを掻き消した

アルビオン「……ドライグ、こいつは舐めずに行くぞ」

劍帝「あーもー、五月蠅い奴等は嫌いなんだよねえ」

劍帝は何時の間にかアルビオンの後ろに移動していた

アルビオンは尻尾で凧ぎ払った

劍帝「ウザい！」

劍帝はそう言つてアルビオンの尻尾を受け止めて掴んだ

アルビオン「Divide！」

劍帝「……………（・D・）チツちよいと苛ついたから、やるぞ『ドライグ』三回だ」

『仕方無いな。必要は無さそうだがboothboothbooth』

劍帝「有り難うさんドライグ！オラア！」（アルビオンを敵のドライグに向けて投げ飛

ばした

アルビオン「ぐっ！」

ドライグ「貴様!!その力は何処で手に入れた!!アルビオン!邪魔だ!」

劍帝「何処でだつて良いだろうが、(っ、ん、)ハア…」

二龍にアツパーをかました

二天龍「があ!!」

劍帝「そおらよつとお!」

二龍の尻尾を掴みグルグルと回り始めた、すると、回っている内に二天龍の尻尾がミシミシと鳴り始める

ドライグ「ぐっ、千切れる!」

劍帝「おらよつとお!」

劍帝が二天龍の尻尾を引つ張った

アルビオン「ぐわあ!やめろ!」

劍帝「断る!」

そう言つて劍帝は二龍の尻尾を引き千切るつもりで引つ張った

アルビオン「DivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivideDivide」

ドライグ「bootthbootthbootthbootthbootthbootth」

劍帝「大概コイツ等の尻尾が硬いから苛ついてきたし、たたつ斬るか」

二龍の尻尾を離してから手刀で二龍の尻尾を斬った

劍帝「ぎつとこんなもんかねえ」

ドライグ「このクソガキがあああ!! boot h boot h boot h」

ドライグはブレスを倍加させ劍帝に吹き付ける

劍帝「( ㄩ、) ハア…ドラゴンショット！」

そう言つて劍帝は左腕を突き出して、其処から赤い玉が出てきた

アルビオン「ドライグ!! くそつ! Divide Divide」

劍帝「先にテメエから片付けてやんよ」

劍帝そう言うのとアルビオンを殴り始めた

アルビオン「ガハッ！」

ドライグ「俺を無視するなあ! boot h」

ドライグはアルビオンに集中する劍帝に爪で攻撃する

劍帝「いつてえなあ、オイッ！」

ドライグを殴り飛ばした

ドライグ「ぐっ、まだまだあ！」

ドライグは全力で突進してくる

劍帝「あーもー、面倒だなあ、重付加10倍つと」

二龍は身体が急激に重くなった

ドライグ「うおおお！boothboothbooth」

剣帝「落ちろ」

剣帝はドライグに音速で踵落としをした

ドライグ「ぐつ、くそつ、こんな奴に殺されるくらいなら、アルビオンとの死闘で、死に、たかった」

ドライグは気絶した

剣帝「さてと、次はアルビオンだな」

アルビオン「ドライ、グ！うおおお！」

アルビオンは加重をもともせず己の爪で切り裂いてくる

剣帝「うつとおしい！」

剣帝はアルビオンを音速で殴り飛ばした

アルビオン「グハツ、くそつ！」

アルビオンは立ち上がり剣帝を睨み付けそして白銀のブレスを吹き掛ける

剣帝「あーもー、流石二天龍だな、頑丈だ」

またもや片手で振り払った

剣帝「…その根性に称して一発だけ俺の技を見せてやるよ、死ぬなよ…蛇帝砲…」

そう言った剣帝の右手に灰色のエネルギーが集まり始めた



アルビオン「くっ、ドライグ、すまない、俺もここまでのようだ」

アルビオンは先程の一撃で精神力を使い果たしたのか気絶して倒れ伏せた  
剣帝「……：気絶してるのは撃つ気にならん」（空に向けてビームを放った

夜鴉「おいおい、時間間違えたとは言えこれはあんまりだろ」

ビームは触れた途端に消滅していく

剣帝「仕方無いじゃないですか。文句言ったら襲ってきたんですもん」

夜鴉「勘違いしてねえか？てめえが今、俺に光線打ちやがったことだよ」

剣帝「あつ……それはスイマセン」

剣帝は土下座した

夜鴉「じゃあ英雄君、本当の時間に行つてら」

剣帝のけつを蹴り飛ばして時間転移させる

剣帝「痛い！行つてきまーす」

夜鴉「さてと、ヤハ君久し振り殺してあげるからこっちにおいで」

剣帝は男性の断末魔を聞きながら時間転移した。

最後に見たのは黒髪の少女の姿だった

剣帝（さっきの娘は一体……）

## 二話 「魔王少女との遭遇」

前回までのあらすじ

剣帝が夜鴉様に頼んでハイスクールD×Dの世界へと向かったが、ちよつとした手違いにより戦争時代に行つてしまい、二天龍をボコボコにした

— 駒王町：河川敷 —

剣帝「此処が駒王町かってハックション！寒っ!?もしかして今12月!？」

剣帝が駒王町に到着した日時は12月10日21時53分だった

剣帝「……もう夜だなあ……泊まる宛も無いし……仕方無い此処で寝るか……掛け布団は……マント汚したくないし新聞紙でいっか」

剣帝はそう言うとき空を歪め自分の時空間からトランクを取り出しその中から新聞紙を出して掛け布団にしてからトランクを枕にして寝始めた

剣帝「うーっ……寒寒っ」

その晩剣帝はガタガタと寒さに震えながら眠つたという

次の日の朝、太陽が昇りだし日差しが剣帝の目に当たり眩しくて起きた

劍帝「眩しつ、寒つ、うーっ、寒いなあ…取り敢えず暖でも取りにブラブラするか」  
そう言うのと劍帝は新聞紙をトランクにしまつてからトランクを自分の時空間にし  
まつてから歩き始めた

劍帝「何か面白い事ないかn：アレって…もしかして…」

劍帝が見たのは転移時に見掛けた黒髪の少女に似た少女がゲームセンターで不良に  
絡まれている姿だった

劍帝「…：女の子に絡むとは苛つくし、助けるとするかな」

—ゲームセンター店内—

不良A「良いじゃんかさあ、俺等と遊ぼうぜ？」

??「えー、でもこの後用事あるしなあ」

不良B「用事なんて後回しでも大丈夫だろ」

??「でもでも、私はまだ此処で遊んでたいの」

不良C「此処より楽しい場所に連れて行ってあげるから、来なつてな」

そう言つて不良達は嫌がる少女を連れて行こうとしてる

??「ちよつと、良い加減にしてよ！」

劍帝「オイゴラ、其処のガキ共」

不良A「ああ？何だテメエ、俺等に何か文句でもあんのか？」

劍帝「ああ、有るね、取り敢えず、嫌がつてる女の子に無理強いすんのは、格好悪いぞ?。」

劍帝はそう言いながら不良達を睨んだ

不良B「……なあ、コイツちよつと苛つかね?」

不良C「ああ、ちよつと苛つくな」

不良A「1回締めるか」

不良BC「おうっ!」

そう言つて不良三人は劍帝に殴り掛かった

劍帝「ウザい、五月蠅い、苛つく、つまり、こうだ!」

そう言つて劍帝は不良三人にも止まらぬ速さでデコピンをした

不良ABC「二いつてええ!!」

不良三人はデコを抑えてゴロゴロと転げ回っている、すると、ポケットに入れていたであろう財布を各自落とした

劍帝「んー…幾ら入ってるかなあ…おつ、免許だ、えーつとお?コイツ等の名前はつとお……………富士田山尾(ふじたやまお)鷹岡空(たかおかそら)茄子森修平(なすもりしゅうへい)つてえ!初夢か!」

そう言つと劍帝は財布と免許証を活き良いよく床に叩き付けた

劍帝「寒いネタ見せられたし、これはもう一発打ち込むか」

劍帝はそう言いながらデコピンの準備をした

不良ABC「ヒイイイ、御免ナサーイ!!」

不良達は財布と免許証を持って走って逃げて行った

劍帝「(・D・)チツ、暖を取りたいから来たのに逆に寒くなつたし、腹たつたから帰る!:(・D・)ハア:また河原で寝るハメになるのかあ:」

そう言いながら劍帝は方向を転換しゲームセンターから出て行こうとし始めた

劍帝「今晚冷え込まないといいなあ:」

???'「あつあの!」

劍帝「ん?何でしょうか?」

???'「さつきはありがとう。私はセラフォル、レヴィアたんって呼んでね☆」

劍帝「あつ、はい、僕は妖悪劍帝と申します。以後お見知りおきを」

劍帝(まあ、会わないだろうけどね)

セラフォル「さつき行くとこ無いて言ってたけどどうして?」

劍帝「いやー、ちよつとした事情で今は家に帰れないので」

セラフォル「じゃあ!家にくる?て言うかおいでよ!さつきのお詫びとして!」

劍帝「良いんですか?ご家族とかの迷惑になるのでは?」

セラフオルー「良いの良いの☆」

劍帝「そ、それならお言葉に甘えて」

セラフオルー「おっけー、じゃあ冥界にレッツゴー☆」

劍帝「……………冥界…ですか…」

劍帝（まあ、知ってたけど…さてはて、実際に行った事無いから楽しみだな）

セラフオルーは劍帝の腕を掴んで魔方陣に飛び込んだ

劍帝「おっと…ほお、此処が冥界の貴女の家ですか大きなお宅ですね」

セラフオルー「そうだよ私の家だよ！ようこそ☆」

劍帝「では、お邪魔します」

劍帝はそう言つて家の中に入った

## 三話「魔王少女と従者の帝」

前回のあらすじ

手違いによる時間誤差を治して貰ってからハイスクールD×Dの世界に改めて行った剣帝、着いたのは夜、寒い思いをしながら夜を越し散歩中に美人に絡んでる阿呆を追い払い、その美人の家に行く事になった

剣帝がセラフオルー・レヴィアタンに連れられてセラフオルーの家に入ると10人以上のメイドが出迎えた

メイド「「お帰りなさいませ、お嬢様……」」

メイド達は驚いた様子だったが、声には出さないようにしていたようだ

セラフオルー「うん、ただいま」

剣帝「流石、こんなに大きなお宅ですね。あんなにメイドさんが居るとは」

セラフオルー「そうでしょ、まず人間界だと見ないもんね、あんな人数」

剣帝「まあ、そうですね」

二人が喋りながら歩いているとセラフオルーが一つの扉の前で止まった

セラフオルー「此処が私の部屋、ちよつと待つててね」

セラフオルーはそう言い部屋の中に入つて行つた

劍帝「あつ、はい、分かりました」

劍帝が部屋の前で待つてっていると部屋の中から声がした

セラフオルー「入つて良いよ」

劍帝「……やつぱり結構です」

セラフオルー「え、何で？」

劍帝「だつてまだ会つたばかりです。それで女子の部屋に入るつてのは少し抵抗が」

セラフオルー「良いから良いから」

セラフオルーはそう言うと劍帝の腕を掴み部屋の中に引つ張つた

劍帝「うおつと、危ない危ない、あやうくバランスを崩す所だつた……それにしても綺麗な部屋ですね。整理整頓が来ていますし」

セラフオルー「それ位は当然でしょ」

劍帝「ですよね。ん？何だこれ」

劍帝がセラフオルーのベットの下から紙の筒を引つ張り出した

セラフオルー「あつ！それは……」



剣帝がその筒を広げてみると、それは魔法少女のポスターだった

剣帝「ほお、魔法少女ですか。これは中々」

セラフオルー（うゝ、また幼稚だとか思われてるゝ）

剣帝「女性らしくくて可愛らしい御趣味ですね」

セラフオルー「子供っぽいって思わないの？」

剣帝「ええ、思いませんよ？」

セラフオルー「本当に!？」

剣帝「ええ、本当です。それに、趣味なんて人それぞれでしょう。それを子供っぽいだの何だのとは言ったりしませんよ」

セラフオルー「そっかあゝ、有り難う、剣帝君」

剣帝「はて？感謝されるような事をした覚え僕には有りませんよ？」

セラフオルー「剣帝君にとっては何気無い事でも私的には感謝したいことなんだよね、私の趣味を皆幼稚って言うし…あゝあ、剣帝君みたいなのが眷属になつてくれればレーディングゲームにも勝てるんだらうなあ」

剣帝「眷属？レーディングゲーム？」

セラフオルー「ああ、ゴメンね、言い忘れてたけど私実は悪魔なの、それで悪魔同士の決闘でレーディングゲームってのが有るんだけど、それには自分が悪魔にした子を連

れて行けるの、で、今度そのレーディングゲームをする事になってるんだけど私には眷属が一人も居なくて」

剣帝「ふむふむ、それでセラフオールさんは困ってるんですか。ところでそのレーディングゲームのお相手は？」

セラフオール「私の許嫁なんだけど……」

言っている途中でセラフオールの顔は暗くなっていく

剣帝「……何か嫌な事でもあるんですか？」

セラフオール「実は……その許嫁君、言っちゃ駄目なんだろうけどあんまり好まれないような性格しててね……正直私はその人と結婚したくないの……」

剣帝「で、それを言ったらレーディングゲームに？」

セラフオール「……うん」

剣帝「ふむふむ」

剣帝「これが俗に言う政略婚って奴かねえ、それにしても、こんな美人困らせるとか許せんなあ……仕方ねえなあ！」

剣帝「それなら俺が貴女の眷属になりますよ！」

セラフオール「えっ、良いの!？」

剣帝「構いませんよ。第一、貴女みたいな綺麗な女性が困ってるのは見過ごせません

し」

セラフオール「有り難う〜！それじゃあれを自分の胸に押し当てて？」

セラフオールはそう言うのとチェスの騎士の駒の様な物を剣帝に渡した

剣帝「これは？」

セラフオール「それはイーヴィル・ピース（悪魔の駒）って言ってるね、使われた相手を悪魔にするものなの」

剣帝「ふむふむ……あのー、押し込んでも何も起きませんかよ？」

セラフオール「あれ〜？おつかしいなあ〜、それならこれは？」

セラフオールはそう言うのと今度は赤色の女王の駒を渡した

剣帝「おや、さっきのとは違って赤いですね。これは？」

セラフオール「それは変異の駒って物なんだけど、普通なら沢山の駒が必要な場合でも一つで済ませちゃうって言う凄いな」

剣帝「ふむふむ……あれ？やっぱ何も起きませんかよ？」

セラフオール「あれ〜？何でかな〜？」

剣帝「……これって使われる相手が強過ぎたりすると使えなかつたりします？」

セラフオール「聞いた事無いけど、有り得るかも」

剣帝「つまり……それが理由なのでは？」

セラフオール「どうしよう!? 剣帝君が眷属になってくれるって言うてくれたのにこのままじゃ……」

剣帝（〇、口、）ハア……仕方無いなあ……何割か封じて貰うかな）

剣帝「……………入るようにはしますかね」

セラフオール「どうやって?」

剣帝「まあ、ちよつとしたツテを使うんです。ちよいと窓開けさせて貰いますよ?」

セラフオール「えつ、あつ、うん、別に構わないけど、何するの?」

それを聞いた剣帝は直ぐに窓を開け少し身を乗り出した

剣帝「夜鴉様!! スイマセンが少々頼み事が有るのです! 来て頂けませんか!」

剣帝はそう空に叫んだ……すると

夜鴉「俺! 登場!」

剣帝「……………相変わらずですね。夜鴉様」

剣帝は普通の様に対応したがセラフオールは驚いている

夜鴉「で、俺を呼んだ理由を教えてください、知ってるけど」

夜鴉は剣帝に指を指してポーズを決めて剣帝に質問した

剣帝「知ってるなら言わなくても良いじゃないですか。まあ、言いますがね。いやー、

俺が悪魔になろうとしたんですが。力が強過ぎるのか出来ないんで、少し封じて貰おう

かと」

そう言つて劍帝は夜鴉に女王の駒を見せた

夜鴉「あー、これね、なるほどなるほど。じゃ、やろうか」

劍帝「ウイーツス」

夜鴉は劍帝の頭を鷲掴みにしてぶつぶつと何かを言い出した

劍帝（何だろう、地味に痛い）

夜鴉「宇宙天地 與我力量 降伏群魔 迎來曙光 吾人左手 所封百鬼 尊我号令

よつと、これで大丈夫かな？」

劍帝「そんなじゃ、少し試してみます」

そう言つて劍帝は自分の胸に女王の駒を押し当てた、すると、女王の駒が劍帝の中に消え劍帝の髪色が銀混じりの白色に変わった

劍帝「これで良いんですかね？」

夜鴉「取り合えず大丈夫だとは思ふが全盛期の一割も出せないからそこんところよろしく」

劍帝「……………マジすか…此方に居る時はずつとそうつすか？」

夜鴉「さあ？でも慣れれば解放していけると思うぞ」

劍帝「なら、さつさと慣らせるようにせねば……………そーいや魔力とかつて有るんです

よね？どう使えば良いでしょうかね？」

夜鴉「頑張って・・・ん？やべっ」

夜鴉は携帯を取り出して会話を始めた

剣帝「はい……そちらも頑張って下さいね」

夜鴉「もし、大変だったら呼べよ。あー、今から帰るから大丈夫、」

剣帝「はい、では、またお会いしましょう」

セラフオールは頭を抑えながら青い顔で剣帝に質問した

セラフオール「……………今のって…誰？」

剣帝「俺の友人ですよ？セラフオール様」

セラフオール「へえ、そうなんだ」

剣帝（あー、これ驚きすぎてる上に夜鴉様の言葉でダメージ受けてるわ……………仕方無いなあ）

剣帝「セラフオール様！」

セラフオール「な、何？剣帝君」

剣帝「眷属には成れましたがまだ魔力の操作とかが分からないので教えて下さりませんか？」

セラフオール「あつ、うん！良いよ!!」

剣帝「後…翼の出し方も教えて下さりませんか？」

セラフオール「そっちはねく、出ろって念じたら出るよ」

剣帝「ふむふむ…こんな感じかな？」

剣帝の腰から一対の悪魔の翼が出て来た

セラフオール「上手く出せたみたいだね、それじゃ、ちよつと私の持つてる山に行こっか」

剣帝「はい、了解しました」

二人は並んで飛んで行った

## 四話 「理性と未知のステージ」

あらすじ

セラフオルーに家へ招待されセラフオルーの部屋に入った剣帝、その時にセラフオルーに認められ眷属となりレーディングゲームに参加する事となった

剣帝がセラフオルーの眷属となってから数日後、レーディングゲームの前日、剣帝達はシトリー邸に来ていた

剣帝「此処がセラフオルー様のご実家ですか…やっぱり大きいですね」

セラフオルー「そうでしょ？私の家より大きいからね」

そう話をしながら二人は一緒に歩いている

剣帝「近付いたらより大きく感じますね」

そう言いながら剣帝は扉を開けた

セラフオルー「あつ、有り難うね、剣帝君」

家の中に入るとやっぱりメイド達が出迎えた

メイド「「お帰りなさいませ、お嬢様……………」」



やっぱり今回もメイド達は驚いている様子だった

劍帝（やはり驚かれるか、まあ、良いけどな）

セラフォルーの自宅でもそうだったので劍帝はあまり驚いたりはしなかった

セラフォルー「うん、ただいま」

そう言いながら歩いていたら二階から誰かが降りて来ていた

??「セラ、お帰りなさい……………隣の男性は誰かしら？」

劍帝「申し遅れました。数日前にセラフォルー様の眷属となりました。妖悪劍帝という者です」

フォルストウ「これはご丁寧にも、セラの母のフォルストウ・シトリーよ……………えっ

?セラに眷属が出来たの!?!それも男性だなんて…」

セラフォルー「お母様、そんなに驚かないでよく、別に珍しくないでしょ?」

フォルストウ「ええ、でも貴女の場合は趣味が…」

セラフォルー「劍帝君は可愛らしいって言ってくれたもん!」

フォルストウ「あら、そうだったの?それじゃあ劍帝君はどうしてセラの眷属になったのかしら?」

劍帝「単に俺がなりたいたいなど思ったのと彼女の手助けをしたいなど思ったのでなりました。それ以外に理由も何も有りはしません」

フォルストウ「ふーん、そうなの……セラに恋してる、とかは無いのかしら?」  
セラ「ちよっ!お母様!」

剣帝「恋してる……かは会ってからはまだあまり経っておりませんし分かりませんが、常々綺麗だとは思って居ます」

セラ「えっ!」

セラ（そんな風に思ってくれてたんだ……嬉しい……）

フォルストウ「……そうなのね、分かったわ」

剣帝「質問は以上でしょうか?フォルストウ様」

フォルストウ「あら、様付けじゃなくてさん付けで呼んでくれないかしら?」

剣帝「えっ、あつ、はい、畏まりました。フォルストウさん」

そんな風に廊下で三人で話していると扉が開いて部屋の中から一人の男性が出て来た

??「セラ、帰って来ていたのか」

セラ「フォルー「あつ、お父様」

フォルストウ「あら、アナタ見て下さい、セラに眷属が出来たそうなんです」

剣帝「始めまして、セラフォルー様の眷属となりました。妖悪剣帝という者です。以

後お見知りおきを」

ジェラード「ほお、そうか、私はジェラード・シトリー、セラの父だ」

劍帝「ふむ……ところで一つ質問宜しいでしょうか？ フォルストウさんジェラード様」

ジェラード「構わないが、私もさん付けで呼んでくれないか？」

劍帝「あつ、はい、畏まりました。以後はそうします」

フォルストウ「ところで、質問は何かしら？ 劍帝君」

劍帝「セラフォルド様の許嫁の件、用意なされたのはどちらで？」

ジェラード「私だ、セラには早く結婚して欲しいからな」

劍帝「ほおほお、では、もう一つ聞きたい事が」

ジェラード「何かな？」

劍帝「明日のレーディングゲーム、我々が勝てばその許嫁の件は無しになるのですか？」

ジェラード「ああ、そうだが？」

劍帝「そうですか……質問に答えて頂き、有り難う御座います」

ジェラード「いやいや、構わんよ」

セラフォルド（劍帝君、一体何を考えてるんだろ？ あんな質問したりして）

ジェラード「さて、今日はもう遅い、泊まっていきなさい、セラ」

セラフオルー「はくい」

その日の夜はシトリー邸に泊まる事となったセラフオルーと剣帝、その日の夜に剣帝はこう考えていた

剣帝（言質は取れた：明日は殺す気でやるか）

ドライグ『相棒、俺は使うなよ？俺の力で勝ったと思われるのは癪だろう？』

剣帝「ああ、確かにそうだし、分かっている、それに俺の魔力の質ももう分かったからな」

次の日の朝

セラフオルー「ふあーあ、良く寝たー」

剣帝「お早う御座います。セラフオルー様」

セラフオルー「お早う剣帝君……何その服装!?!」

剣帝は執事服を着ていた

剣帝「いけませんか？」

セラフオルー「いけなくはないけど……」

セラフオルー（格好良いなあ……）

剣帝「セラフオルー様、そろそろレーディングゲームのお時間ですよ？」

セラフオルー「あつ、うん、分かった」

た  
そう言い起きたセラフオルーと剣帝の二人はレーディングゲームの待合室に移動し

セラフオルー「勝てるかなあ？ちよつと心配」

剣帝「大丈夫ですよ。俺も頑張るつもりですから」

セラフオルー「そ、そうだよね！きつと勝てるよね！」

そうやって二人で会話していると部屋に魔法陣が現れて一人の女性が出て来た

案内A「レーディングゲームの準備が整いましたのでお迎えに上がりました」

剣帝「だそうですよ。ほら、行きましょう？セラフオルー様」

そう言つて剣帝はセラフオルーの手を取り魔法陣に入った

セラフオルー「わわっ、あー、吃驚したあ」

二人が入ったら転送魔法陣が作動しレーディングゲームの舞台となる作られた都市に転送された

剣帝「ふむ、都市部ですか……狙撃がしやすそうですね……」

セラフオルー「それで剣帝君、どう勝つつもり？」

剣帝「此方は二人ですし。俺が敵の対応をしますのでセラフオルー様は待っていて下さいませ」

セラフオルー「あつ、うん、分かったけど、剣帝君一人で大丈夫？」

劍帝「問題有りません、それでは行つて参ります」

「そう言い劍帝は自分の陣地への道を一本に限定出来るように建物を一本の劍で斬り道を潰した」

劍帝「（、ー、）フウー…これで奴等は此処に来るしかない」

劍帝が道を潰した数分後数名の武装をした男女がやつて来た

劍帝「おや、意外とお早いご到着ですね。それでは、セラフォル・レヴィアタンが眷属、妖悪劍帝、対処を開始します」

「そう言つて劍帝は二本の劍を抜いた」

ポーンA B C D 「「うおおおおお!!!」」

4：1という一見勝てないように見える戦闘だが劍帝は何の苦しそうな顔もせずに対処をしている

ポーンA 「ハア…ハア…何で劍がかすりもしないの…」

ポーンB 「コイツ…強い！」

劍帝「（、D、）ハア…まだまだですな。弱過ぎますよ？貴方達」

ナイト「それなら私と！」

ピシヨップ「私が倒す！」

ナイトが急接近をして劍帝とつばぜり合いに持ち込み、ピシヨップが魔法を唱え落雷

を降らせ剣帝に命中し煙が起きた

ビシヨップ「やった、当たった！」

煙が晴れ始めるとそこには一人の影だけが残っていた

ビシヨップ「アンタまだ残ってたんだ、てつきり魔法で吹っ飛んだかと思っただけど……えっ!?!何でアンタが無傷なの!?!」

剣帝「この程度ですか?……(ハ、ハ)ハア……」

其処に立っていたのは無傷の剣帝だった、ナイトの姿は既に無い

ナレーシヨン「ナイトA：戦闘続行不可につき、消滅を確認」

剣帝「さて、次は貴女ですかね」

そう言った次の瞬間、剣帝の姿が消えた

ビシヨップ「あ、あれ?相手のクイーンh……」

ビシヨップが喋っている間にポーン達とビシヨップは斬られていた

剣帝「(ハ、ハ)ハア……この程度で勝つ腹積もりだったとは」

ナレーシヨン「ビシヨップA、ポーンA B C D、戦闘続行不可につき、消滅を確認」

剣帝「さてとお、次は何処かなー?」

剣帝が周りを見回しているとまた目の前から敵が来た

剣帝「次はアイツか……さっきのよりかなり強いな……ん?」

敵は剣帝に目もくれず走り抜けようとした

ナイトB「アンタの相手なんかせずにキングをやれば私達の勝ちだからね！通り抜けさせて貰うよ！」

剣帝「抜けたと思ったか？馬鹿が」

やはり何時の間にか追い付いていた剣帝に首を斬り落とされてしまった

ナレーション「ナイトB、戦闘続行不可につき消滅を確認」

剣帝「残るはルークが2、ビシヨップ1、クイーンとキングか……ん？」

三人の女性が飛んで来た

剣帝「ああ、飛べるんだったな…仕方無い」

剣帝はそう言うのと翼を広げ中に浮き…姿を消した

ビシヨップB「周囲に注意しろ！」

ルークA・B「言われなくても分かってる！」

剣帝「注意してた所で音を捉えられはしない」

剣帝はそう言いながら三人の後ろに立っていた

ビシヨップ「なっ!?何時の間に！」

ルークA「アンタを倒せば私達の勝ちの確率は上がる！」

ルークB「だから、私達に倒されて！」



劍帝「無理、俺がお前等をもう倒したから」

ビルルA、B「「はっ？」」

劍帝が言葉を言い終わり三人が動こうとした、だが、足が動かなかった、腰を斬られていた

劍帝「さてと、後はクイーンとキングかな……持ち場にかーえろつと」

ビシヨップ「せめて…道連れn…」

通り際にルーク達とビシヨップの首を斬った

ナレーション「ビシヨップB、ルークA、B、戦闘続行不可につき消滅を確認」

劍帝「さてと、キング達は何時頃来るかな？つと」

劍帝は遠くから飛んで来た弾丸を平然と躲した

劍帝「ほお？銃なんて近代武装が出て来るとはねえ」

そんな事を言っている劍帝の頭上に魔法陣が展開され大量の氷が降り注いだ、劍帝はそれを難なく回避

劍帝「狙撃がキングで魔術はクイーンかな…」

そうこう喋っていると劍帝の後ろから声がした

セラフォル「劍帝君」

劍帝「セ、セラフォル様!?何故此処に？」

セラフオルー「劍帝君が大丈夫か見に来ただけ、駄目だった？」

劍帝「駄目って訳ではないですが……よつと」

劍帝は平然と躲したが

セラフオルー「痛っ！……脚が……」

セラフオルーに当たった、いや、敵達は元々から今回はセラフオルーを狙って撃つただのだ

劍帝「……貴様等……俺の主を……俺の大切なセラ様を傷付けたな」

劍帝の髪がどんどん紅くなっていく

劍帝「……許しはせんぞ……絶対にだ」

そう言った劍帝の手には真紅に燃え盛る炎の玉が有った、そして、劍帝はセラフオルーを抱きかかえて空高く飛び上がった

劍帝「消えるが良い、灼熱乱舞（ゾンネ・エクスプロージョン）!!!」

劍帝はそう言い放ち右手にあった炎球をレーディングゲームの舞台に投げ付けた、すると、炎球が大爆発を起し舞台は消し飛んだ

ナレーション「え、えーつと……クイーンとキングの身体の消滅を確認……このレーディングゲーム、セラフオルー・レヴィアアタンチームの勝利です！」

劍帝「フンッ、雑魚共が」

その後セラフオルーの許嫁は無しとなった、そして、セラフオルー達は転送魔法で自分達が居た部屋に戻っていた

セラフオルー「御免ね剣帝君…私が勝手な事をしたから剣帝君怒るような事になっちゃって」

剣帝「良いんですよ。俺の主を傷付けたアイツラが悪いんですから。ですから。顔を上げて下さい」

セラフオルー「で、でも…」

剣帝「良いですから。顔を上げてくださいってば、俺はセラフオルー様の顔が見たいんですから」

セラフオルー「……………嫌」

剣帝「はい？」

セラフオルー「さっきみたいにセラ様って呼んでくれないと嫌！」

剣帝「……………仕方が有りませんね…セラ様…お願いですから顔をお見せ下さい」

セラ「…分かった」

そう言いセラフオルーは顔を上げた

剣帝「やつと顔を上げて下さりましたか」

そう言ってる剣帝は眼鏡がない状態で笑っていた

眼鏡がない状態の剣帝を見てセラフォルは驚いた様子で剣帝に首を傾げた

セラ「剣帝君、もしかして眼鏡無くても見えるの!？」

剣帝「えっ? ああ、道理でよく見えると思った…いやー、あの眼鏡実は伊達なんですよ、だから、無くても見えます」

セラ「それじゃあ、今後は眼鏡しないでね!」

剣帝「ええっ!?! 何ですか?」

セラ「だって、無い方が格好良いんだもん、だから、主からの命令です! 私が付けてって言わない限りは眼鏡するの禁止!」

剣帝「そ、そんなあゝ」

そんな二人の様子を扉の隙間から見てる人が二人

フォルストウ「あの様子では、セラは剣帝君が好きみたいですね。アナタ」

ジェラード「ああ、彼ならばさっきの戦闘ぶりを見る限り文句無しだ」

## 五話「魔王の従者との面会」

あらずじ

セラフオールの眷属となった剣帝はシトリ邸に向かいセラフオールの両親と挨拶を行った、その翌日レーディングゲームに初めて参加して敵を圧倒していた、だが、その途中に自分の主であるセラフオールが傷付けられ激昂した剣帝はレーディングゲームの舞台を吹き飛ばす威力の魔術を撃ち放ち見事勝利を収めた

レーディングゲームから数日後、セラフオール邸にて

セラ「ねえねえ、剣帝君」

剣帝「何ですか？セラ様」

セラ「こつそりソーたんに会いに行かない？」

剣帝「ソーナ様にですか？駄目ですよ。まだ仕事が残付いてませんし」

セラ「もく、剣帝君の意地悪」

剣帝「そうは言われましてもね、終わらせないと休めませんよ」

セラ「………はくい」

劍帝（…………仕方無いなあ）

劍帝「セラ様、そっちの書類渡して下さい」

セラ「えっ？あつ、うん、はいどぞ」

劍帝「どうも…………さて、やるかな」

そう言いながら劍帝はさっきまでの倍の速度で書類を片付け始めた

セラ「えっ!? 劍帝君そんなに早くして大丈夫なの!？」

劍帝「なあに、単なる体慣らしですよ。はい、お終い」

劍帝はそう言いながら全ての書類を片付けた

劍帝「さてと、仕事が終わりましたし、この後は何をします？ソーナ様に会いに行か

れますか？セラ様」

セラ「うん！有り難う劍帝君!!」

劍帝「はて、何の事やら？それより急がないとまた仕事が舞い込んできますよ？」

セラ「あつ、そっか、それじゃあ、急いで人間界に行こっか」

劍帝「畏まりました」

そう言い二人は転送魔法陣を展開し人間界へ向かった

セラ「此処がソータんの通ってる駒王学園だよ」

劍帝「ふむふむ、それでは私は少々散策して来ますので、ご用事の場合は此方の番号

にかけて下さい」

セラ「えっ!?一緒に来てくれないの?」

劍帝「……………ソーナ様を驚ろかせたくはないですか?例えば、俺の事を少し秘密にして後でバラすとかして」

セラ「あっ!それ楽しそう!」

劍帝「そうでしょう?でも、俺とセラ様と一緒にだと驚かないかも知れませんし。です  
ので、後で俺の電話に掛けて呼ぶと言うのは如何でしょうか?」

セラ「うん!そうしょ!」

劍帝「それでは、また後で」

セラ「はーい、また後でね」

劍帝「さてと……………此処に来るのも数日ぶりか…」

そう呟きながら劍帝は町を散策し始めた

劍帝「えーっと、確かこの辺にあるゲームセンターでセラ様と会ったんだよなあ…ん  
?」

ゲームセンターを見てみると店内に不良らしき人影が見える

劍帝「(ハ、ハ)ハア…何時の時も居るなあ、ああ言うの」

劍帝がゲームセンターの前を通り抜けようとしたら

富士田「ああー!! テメエは!!」

劍帝「ん? 何だ誰かと思つたら初夢三人集か」

三人「誰が初夢三人集だ!!」

そう叫んだ三人の後ろにはもう一人いる

劍帝「アレ? 今回は人数増えてるな」

富士田「ああ、やつと見つけたぜ、今日こそテメエをぶちのめしてやる、やつて下さい! 座頭市無華(ざとういちむけ)先輩!!」

富士田がそう言うのと後ろからスキンヘッドで大柄で体格の良い筋肉質で背丈190は有ろう男がのっそりとやつて来た

座頭市「ほお、貴様が俺の後輩を虐めたという輩か」

劍帝「別に虐めてねえけど?」

座頭市「御託も言い訳も聞かん!」

そう言いながら座頭市は劍帝に殴り掛かった

劍帝「ふうーん? あの三人よりは良さそうだが、鈍い!」

そう言うのと劍帝は拳に向けて三人に撃つたものより少し強めのデコピンを放った、すると、座頭市の手が腫れ始めた

劍帝「まあ、こんなもんか、それは単なる打撲だから一週間もすれば治る、もつと悪



化させたきや来な、骨を叩き折ってやるから」

劍帝はそう言うのと四人を睨んだ

三人「二ひいっ!!」

劍帝「あー、ちよいと疲れたなあ………ん？」

劍帝が歩いていると電話が鳴り始めた

劍帝「はい、もしもし？あぁ、如何なさいましたか？セラ様……はい！はい！畏まりました。では、すぐにそちらに向かいます」

劍帝はそう言うのと駒王学園に向かって走り始めた

— 駒王学園：生徒会室 —

ソーナ「お姉様、本当に眷属が出来たのですか？それも男性の方が」

疑っているような目をセラフォルーに向けながら質問している

セラ「うん、もうすぐ来るって！」

ソーナ「もうすぐですか……で、その方は現在何をなされてたと？」

セラ「町の散策って言ってたけどすぐにそちらに向かいますって言ってください、後一分で来るんじゃないかな？」

セラがそう言った次の瞬間扉が開いて劍帝が入って来た

劍帝「（……）フウ……セラ様、私来るまで何分程掛かりました？」

セラ「ん、三分だね」

劍帝「三分…ふむ、やはり少し鈍りましたかね…」

ソーナ「お姉様、そちらの方が眷属の方ですか？」

少し驚いたような顔をしながらソーナはセラフォルーに訊ねた

セラ「うん！劍帝君って言うんだけど、すつごく優しく強いのに」

劍帝、「どうも、ソーナ様、セラ様の眷属の妖悪劍帝と言う者です。以後、お見知り置きを」

ソーナ（どうやら本当だったようです…それにしてもお姉様どうやってこんな方見つけたんでしょうか…）

疑う様に劍帝を見つめこう訊ねた

ソーナ「ところで、劍帝さんはお姉様の趣味はご存知ですか？」

劍帝「ええ、知っていますよ？」

ソーナ「あの趣味をどう思われますか？」

劍帝「普通に女性らしくて可愛らしい趣味だなど思いますよ？というか、人の趣味にとにかく言うのは野暮ってもんです」

ソーナ「…一理ありますね…」

それを聞いた途端にセラフォルーが誇らしげにエツヘンとし始めた

劍帝「……………セラ様？何をなされて居られるのです？」

セラ「ソーさんの眷属には男っ気が無いけど私には劍帝君が居るなあって思つて威張つてるの！」

ソーナ「私はちゃんと見定めてるんです！温情でなつてもらつたお姉様とは違うんです！」

ソーナがそう言つて威張り始めた

セラ「うう…：ソーナちゃんが無い胸を強調させながら虐めてくるよく、劍帝君！」

セラフォルーはそう言いながら劍帝の胸に飛び込んだ

劍帝「よしよし、それは悲しいですねー、よしよし…：ん？」

劍帝がセラフォルーを撫でながらソーナの方を見るとソーナも泣きそうな顔をして  
いる

ソーナ（私もお姉様みたいな胸があれば…：）

劍帝はその様子に気付いてソーナも撫で始めた

ソーナ「えっ？な、何をしてるのですか」

劍帝「ソーナ様も可愛らしいですからね。可愛らしい女性の顔を涙は似合いませんよ」

そう言いながら劍帝はソーナの涙を拭つた

ソーナ「えっ、あつ、有り難う御座います…」

剣帝「いえいえ、普通の事ですよ」

剣帝は笑顔でそう言った

それを見たソーナは顔を伏せた、その顔は真っ赤だった

## 六話「紅の魔王の品定め」

あらずじ

セラフオルーのちよつとしたワガママにより人間界の駒王学園へと向かった剣帝とセラフオルー、其処で生徒会長のソーナに会い話をした

剣帝が二人を撫でているとセラフオルーに電話が掛かって来た

セラ「電話だ、誰からだろ…あつ、サーゼクスちゃん

からだ…うん、サーゼクスちゃん？えっ？会議？今から？うん、うん、それじゃ、今から向かうね〜」

剣帝「セラ様、サーゼクス様は何と？」

セラ「この後会議だつて、だから、帰ろ、剣帝君」

剣帝「畏まりました」

セラ「またね〜、ソーたん」

ソーナ「…ポソツ…もう来ないで下さい……」

ソーナが別れ際に言った言葉は剣帝は聞こえていたがセラフオルーには聞こえてい

なかった

剣帝「またお会いしましょうね、ソーナ様」

そう言い残して剣帝も退室した

セラ「剣帝君、後どれ位で魔法陣展開できる？」

剣帝「もう展開しました。ほら、行きますよ」

剣帝は自分の足下に転移用魔法陣を展開してセラフオルーを引つ張り転移した

セラ（剣帝君の腕の中つてやっぱり安心出来るなあ…）

剣帝「セラ様？もう到着しましたよ？」

セラ「……えっ!? あつ、そ、そっか、うん、有り難うね剣帝君」

剣帝「いえいえ、お気になさらず」

セラ「そっか…あつ、そろそろ時間だし行こっか剣帝君」

剣帝「畏まりました。セラ様」

そう言い二人はとある館の中に入って行った

剣帝「此処は？」

セラ「此処はね、魔王として集まる場所だよ」

剣帝「ほお、つまり、仕事する場所ですよね？ こういう場所があるのに何故、自宅で

仕事してたんでしょかね？」

そう言いながら剣帝はセラフォルーを見た

セラ「え、えーつとお、それはあ……」

セラフォルーは冷や汗をかきながら困った顔をしている

剣帝「まあ、俺の慣れてる場所の方が良く仕事出来ますし。文句なんか無いですがね」

セラ「もー、それなら問い詰めるようなことしないでよ！剣帝君!!」

剣帝「スイマセン、セラ様の可愛らしい困った顔を見たかったのでつい」

セラ「えっ!?!そ、そうなんだ……」

セラフォルーは少し頬を赤くしてる

剣帝「ええ、そうなんですよ。ですので、許して下さい」

セラ「………良いよ」

剣帝「有り難う御座います。セラ様」

二人が話していると上の会から声がした

??「セラ、着いていたのなら何故上に……隣の君はセラの眷属かい?」

セラフォルー達が見ると其処には紅髪の男性が居た

セラ「あつ、サーゼクスちゃん! そうだよ! 剣帝君って言うんだけどすつごく優しく

て強いのに」

剣帝「お初に御目に掛かります。サーゼクス様、セラ様の眷属の妖悪剣帝と言う者で

す、以後お見知りおきを」

サーゼクス「ふむ、私はサーゼクス・ルシファー、現魔王の1人でセラの同僚だ」

剣帝「そうですか：そういうえば、サーゼクス様には妹君や弟君は居られないのですか？」

サーゼクス「一人居るよ、リアスと言うのだがね、可愛いのだよ」

サーゼクスはニコニコしながら妹について喋り始めた

剣帝「そ、そうですか：そういうえば、本日は会議と聞いたのですが？」

サーゼクス「おっと、危うく忘れる所だったよ、少し墮天使が人間界の駒王町で見られるようでね、それについて会議をするつもりなんだよ」

剣帝「だ、そうですよ？セラ様」

セラ「墮天使がソーたんの居る駒王町に……ソーたんが危ない!!」

出口に向かおうとした

剣帝「はい、ストップ」

剣帝が腕を伸ばして止めた

セラ「剣帝君!!離して!!」

剣帝「何もセラ様が手を汚す必要は無いでしょう……」

セラ「じゃあ、誰が墮天使を倒すっていうの!？」



劍帝「俺が行きますよ、だから、安心して下さい、良いですね？」

セラ「……………分かった…でも！ちゃんと無事に帰って来てね？」

劍帝「分かっていますよ。それでは行って来ます」

そう言い残して劍帝は転移用魔法陣に消えた

サーゼクス「セラ、彼はどれ位強いのかな？」

セラ「多分、私より強いよ」

— 駒王町 —

劍帝「着いたな…さて、何処に糞鳥共は居るかな？」

劍帝は音速で静かに足音をたてないように街の中を墮天使を探しながら走る、そして、人気の無い小道に辿り着いた

劍帝「この辺りで気配が…おっと！」

劍帝がバク転するとさっきまで劍帝が立っていた場所に光の槍が刺さった

墮天使A「悪魔風情が、我々の目の前に現われよって…生きて帰れると思うなよ！」

空にはおよそ20人程の墮天使が飛んでいる

劍帝「ああ、そういうの良いから、とつと来な、雑魚共」

劍帝がそう言った次の瞬間20本の大小それぞれの光の槍降り注ぐ

墮天使A「フハハハハッ、どうだ！避けられまい！」

だが、光の槍は地面に当たるよりも前に全て爆発を起こして消し飛んだ

墮天使 A 「何!？」

劍帝 「この程度か? ( ㄩ、 ) ハア…お前等がもうちよつと強かったら”アレ”が使えたのにな…残念だよ」

劍帝はそう言いながら姿を消した

墮天使 A 「フハハハハッ、口ではあんな事を言いつつ逃げたか!」

劍帝 「誰が逃げたって?」

墮天使 A 「なっ!?! 貴様何時の間に」

劍帝 「何時でも良いだろ? それにそんな事知った所でもう遅い、消えろ」

劍帝がそう言うのと墮天使が A を残して全員爆発した

墮天使 A 「な! 何をした!？」

劍帝 「教えても無駄だから、教えない」

墮天使 A 「答えろ!!」

墮天使 A は劍帝に右腕を伸ばしたが…劍帝に触れる事なく右腕は地面に落ちた

墮天使 A 「な、何いいい!?! 何時だ! 何時の間に切られた!!」

劍帝 「あーもー、うるさいなあ」

墮天使 A (ま、マズイ、今は逃げねば…コイツは強過ぎる…逃げて報告しないと!)

墮天使Aは飛んで逃げようと翼を広げたが、翼が動かなかった  
劍帝「逃がすと思った？」

何故なら劍帝が掴んでいたからだ

墮天使A「ヒ、ヒイイイ！た、頼む！見逃してくれ!!」

劍帝「お前見逃して俺に何のメリツトがある？」

劍帝はそう言いながら少しづつ翼を引つ張り始めた

墮天使A「うう：わ、私を見逃せば墮天使に恩を売れるぞ！」

劍帝「こんな物に興味無い」

墮天使Aの翼はブチブチと音をたてて千切れ始めた

墮天使A「ギヤアアア！止めろお!!頼むから離してくれ!!」

劍帝「断る、墮ちた者にはもう翼なんて要らないだろ？」

劍帝はそう言うのと墮天使の翼を生き良いよく引き千切った

墮天使A「ギヤアアア！き、貴様！許しはせんぞ！必ず殺してやる！」

劍帝「あつそ、テメエにや無理だわ」

墮天使A「ああ！確かに私には無理だろう！だがな、せめて一矢報いるくらいはして

やる！ウオオオオオ!!」

劍帝の首に向けて光の槍を投げようとしたが

劍帝「無駄だ」

劍帝が指を鳴らすと光の槍を投げる事なく墮天使は爆発した

劍帝「（ハ、ハ、ハ）ハア…汚え花火だ」

劍帝の周りには爆発した墮天使の死体が転がっている

??「な、何ですか？この惨状は」

劍帝「ん？誰だ！」

劍帝の後ろから声が聞こえて振り返った先に居たのは白髪の少女だった

## 第七話 「白猫と実力差」

あらずじ

サーゼクスに会議だと呼ばれたセラフオールと剣帝、その議題は堕天使についてだった、駒王町に堕天使が居ると聞いて行こうとするセラフオールを止め自分が向かった剣帝、そして、堕天使と戦闘を行い殲滅した、その際に白髪の少女に現場を見られた

剣帝（ヤツベエ、見られたなあ…）

?? 「……これをやったのは貴方ですか？」

剣帝 「え、ええ？何の事かな？」

?? 「……こんな惨状の真っ只中に居たら惚けても無駄です」

剣帝 「……それもそうか…？警察でも呼ぶのか？」

?? 「……この羽根は…堕天使…」

そう言いながら彼女は地面に落ちていた黒い羽根を拾った

剣帝（ん？羽根を見て堕天使って言ったって事はつまり…悪魔側かな？）

剣帝 「ひとつ訪ねたいんだが、君の名前は？」

劍帝は彼女に一步近付いて聞いた

?? 「……人に名前を聞く時は自分から名乗るものですよ？」

劍帝が近付いたのに反応したのか少し後退りした

劍帝「ああ、スマナイ、俺は妖悪劍帝、ちよつと前に悪魔になった者だ」

??（ちよつと前でこの実力？）

彼女は訝しそうに劍帝を見る

劍帝「さて、君の名前は？何て言うのかな？お嬢ちゃん」

小猫「……私の名前は塔城小猫です」

少し警戒しながらも自分の名前を教えた

劍帝「ふむふむ、可愛らしくて良い名前だね」

小猫「……初対面で女性にそんな事を言うなんて、貴方は変態ですか？」

劍帝「酷いなあ、俺は単に思った事を言っただけだよ？」

小猫「……そうだとっても初対面で言う言葉じゃないと思うんですが？」

劍帝「……それもそうかな……」

劍帝はそう言う少し考えるような体制をとった

小猫（今の内に部長に連絡を！）

小猫は連絡用魔法陣を展開して自分の主に連絡した

劍帝「ん？何してるのかな？小猫ちゃん」

小猫「……………貴方は知らなくて良い事です」

劍帝「えー、お兄さんちよいと気になるなあ」

劍帝と小猫がそんな会話をしていると頭上から声がした  
??「私の任されている町で何をしているのかしら？」

劍帝「ん？誰だ？」

劍帝が上を見ると其処には紅色の髪をした女性が居た

劍帝（あの髪色……………ああ、サーゼクスさんの妹君か…）

リアス「何をしていたかと誰の眷属か速く答えなさい！」

劍帝「えー、俺h…」

劍帝が喋ろうとしていたら劍帝の携帯が鳴り始めた

劍帝「ん？ヤベツ！流石に時間掛けすぎたか!?……………あつ、はい……………はい……………はい、今から戻ります……………はい、心配掛けてしまつてゴメンナサイ……………はい」

劍帝は通話を切ると即座に転移用魔法陣を展開した

リアス「ちよつと！待ちなさいよ!!」

劍帝「では、失礼します。私の主が呼んでいますのでね」

劍帝はそ言い残して魔法陣に消えた

リアス「……………彼は何者だったのかしら」



## 閑話「黒猫と神々の王」

夜鴉「さあて、来てみたけどまさかここに来るとはねえ？」

??「いきなり魔方陣も使わずに転移してきた奴が居ると聞いて来てみたけど、流石にこれは勝てる気がしないにやん。」

彼は大量の人間の山のとっぺんに座って欠伸をしていた。

夜鴉「黒猫ちゃん、可愛いね？俺の配下にならない？」

黒歌「私には黒歌って名前があるにやん。」

夜鴉「じゃあ可愛い黒歌ちゃん。俺の配下にならない？」

黒歌「・・・メリツトは？」

黒歌は彼を訝しげにジロジロ見るが夜鴉はそんな事を気にせず黒歌にウインクしながら答える

夜鴉「君の悪魔になつてる原因の駒を取り除く事、そして自由だね。どうだい？」

黒歌「なっ！そんな事出来るわけがないにやん！出来るならとつくにやつてる者がいるはずにやん！」

黒歌は驚愕したと同時に否定した。黒歌の常識には到底無理な事だったからだ。だ

が、彼は顔色を変えず、呑むしろ先程より口角が上がったように黒歌は感じた。

夜鴉「たしかに君達じゃ出来ないしどんな魔王でも無理だろう」

黒歌「なっなら！」

夜鴉「しかし！俺は出来る、何故なら俺だから。俺に不可能は無い」

黒歌は驚きを通り越して呆れていたがここまで断言するのには理由があるはずだと考えたが答えは一向に出てこなかった。

それを見かねた彼は溜め息混じりに黒歌に質問した。

夜鴉「君は神達の神話と言うのは聞いたことはあるかい？」

黒歌「神の神話？神は神話で出てくる物にやんよ？」

夜鴉「神々が神話として語り継いでる物さ。そこに出てくるのが俺なんだよ。天照にでも聞いてくると良い」

黒歌はもう驚かなくなっていた。嘘だと信じた方が楽だと感じたからだ。

だが彼は黒歌の事などお構い無しに続けた。

夜鴉「信じないなら良いさ、だけど本当の事さ。まあこの話を断れば君の妹がどうなっても知らないがね」

黒歌は最後の一言に全身の毛を逆立てた。彼は先程までの飄々とした雰囲気とは一変して明確な殺意を感じ取ったからだ。

しかし黒歌は攻撃する事が出来なかった。ただただ恐怖し一步も動けなかったからだ。だがそこに救いとも思える足音が聞こえた。

?? 「王、来るなら先に言う。皆、攻撃してしまおう。」

夜鴉「オーフィスちゃんか、たまたまここに着いただけだからね。連絡出来る訳無いじゃん。」

オーフィス「なるほど、じゃあなんで黒歌と話してる?」

夜鴉「可愛いから連れて帰ろうとね」

黒歌は目を丸くしていた。あの無限の龍神、ウロボロスドラゴンと言われるオーフィスをちゃん付けしたのも驚いたがオーフィスは彼の事を王と呼んでいた。

黒歌は妹の身と自分の身の事を考え配下になることを決意した。

夜鴉「で、黒歌ちゃん。答えは決まったみたいだね。」

黒歌「わかったにやん。あなたの配下になるにやん。」

夜鴉「じゃあ、これを身に付けてね」

彼から黒歌に渡されたのは黒と白が混じりあつた鎖であつた。黒歌はそれを腕に近づけるとその鎖は黒歌の腕に巻き付いた。

黒歌「にやん!! なんなのこの鎖離れないにやん!」

夜鴉「カツカツカツ、黒歌ちゃんの手助けになる物だよ。次は黒歌ちゃんを妖怪に戻

してあげるよ」

彼は人間の山から跳び降り、そして黒歌の胸を貫いた。

黒歌「キヤア！あれ？痛くない。なんで？」

夜鴉「ほら、これが黒歌ちやんを悪魔にしていた駒だね。」

彼は黒歌の胸から手を引き抜いて駒を砕き黒歌の頭を撫でた。

夜鴉「これから一緒に色んな所に行こう。大丈夫俺がついてるからさ。」

黒歌「わかつたにやん。じゃあ行くにやん！．．．ありがとう。」

彼は空間をねじ曲げ冥界へ向かった。その後ろには黒い猫の妖怪がついて歩いていった。

## 第八話「二人の赤龍帝」

あらすじ

墮天使を爆殺していたのを塔城小猫に見られた劍帝、その後小猫にリアス・グレモリーを呼ばれ質問されたがセラフオールに呼ばれ名乗る事なく冥界へと帰った

墮天使達を爆破してから数日後

セラ「ねく、ねく、劍帝君」

劍帝「何ですか？セラ様」

セラフオールの前にはまだ書類が山のようにあるが劍帝の前には少ししかない

セラ「劍帝君の方が先に終わりそうだから、お願い聞いて？」

劍帝「何ですか？お願いって」

セラ「今日人間界で発売するグッズが有るの！それを買って来てくれない!？」

劍帝「……………（ん、ん）ハア…仕方無いですねえ。丁度今終わりましたし。良いです

よ」

セラ「有り難く！」

劍帝「いえいえ、己が好んでなった眷属となった主のお願い位は聞きますよ。では、行つて来ます」

劍帝はそう言つて魔法陣に消えた

セラ「い、今、好んでつて……よーし!!頑張るぞ〜」

セラフォルーはその時赤面しながら必死に仕事をしていた

— 駒王町 —

劍帝「えーつとお、頼まれのはステッキとポスターと……多いけどまあ、持ち帰れなくはないかな」

劍帝はそう言うのとアニメグッズが売っている店へと足を運んだ

劍帝「えーつとお、セラ様からのお願いの品は……これとこれとこれだな」

劍帝はそう言いながら店内の魔法少女ブースにあるポスターとフィギュアを持った

劍帝「えーつと、他には何が有るかなあ?……つと、その前に会計済ませてくるかな」

劍帝がレジに向かう途中面白そうな本を見つけた

劍帝（おつ、何だこれ?読んでみるか）

手に取ろうとしたら別の手に当たった

劍帝「おつと、スイマセン」

??「此方こそ悪いな……えつ?何だよこんな時に……」

手の主は茶髪の高校生だった

劍帝（左手：ふうん、今の”アイツ”の持ち主かな…つと、その前に会計済ませてくるか）

劍帝は足早にレジに向かい会計を済ませた

劍帝「割と安かったな……（へ、；）ウーム：用事を済ませたいし、転送するか」

劍帝はそう言うのと狭い路地に入つて手荷物を全て魔法陣に入れて冥界にあるセラフォル邸に転送した

劍帝「さつてつと、散歩でもするか」

そう言つて劍帝は街をブラブラと歩き始めた、その後ろに二人の尾行者が

??「本当に彼に触れたら赤龍帝が？」

??「ああ、間違いねえ、アイツに触れた後すぐに俺に喋りかけてきたんだ」

劍帝「フンフフン、セラ様にお菓子でも買うかな」

劍帝（後ろから俺を見てるのが三人：当代の赤龍帝と…一人はお仲間かな？まあ良いや）

劍帝「スイマセーン、これとこれとこれ下さーい」

??「何でお菓子なんて買つてるんだ？」

??「さあ？何でだろうね」

劍帝「さてと、帰るかな、腐ると不味いな」

劍帝はそう言い人気の無い枯れ木道に向かった

劍帝「さつてつと、其処に隠れてる二人、出て来いよ」

??「へえ、僕等に気付いていたんだね」

劍帝に言われて木の影から金髪の男と茶髪の男が出て来た

劍帝「当然だろ、町中で魔力放つてんのテメエ等位だったし、もう一人に至つては……

よお、久し振りだな」

劍帝は茶髪の男に向けてそう言った

??「一誠君、彼は君の知り合いなのかい？」

一誠「はあ!?俺あんな奴知らねえよ!」

劍帝「いやいや、君には言つてないよ、君の中に居る奴に言つたのさ、おーい、だん

まりか?ドライブ」

その言葉に反応してか一誠の左腕が赤い籠手の様になり声がし始めた

ドライブ《やはりお前か》

劍帝「ああ、そうだよ、俺だよ、懐かしいねえ、お前等の尻尾を切り裂いてやったが

あの後は無事に生え直したか？」

ドライブ《フンツ、心配されずともちやんと治つたぞ、ところで、何故お前が生きて



いる?」

劍帝「んー、秘密かな」

一誠「お、オイツ、ドライグ、アイツは誰なんだよ」

ドライグ《名前までは俺も知らん、だが、奴は俺よりも強いぞ、その上奴もブーステツドギアを持っている》

一誠「はあ?!何だよそれ!!ブーステツドギアって一つじゃないのかよ!」

ドライグ《いいや、一つだとも、だが、奴も何故か持っているのだ》

一誠「何だよそれ!!」

劍帝「オイコラ、テメエ等の話なんざどうでも良いからとつと来い、折角買った菓子が駄目になるだろうが」

そう言いながら劍帝は魔力を開放した

ドライグ《来るぞ!》

一誠「行くぞ!木場!!」

木場「ああ!分かったよ一誠君」

劍帝「速急に片を付ける」

木場と一誠は劍帝に同時に攻撃した、だが、当たる前に劍帝は姿を消した

一誠「なっ?!アイツ何処行きやがった」

木場「居たよ！彼処だ」

木場は枯れ木の上を指差した、其処には枝の上に立っている劍帝が居た

劍帝「お前等鈍過ぎ、それでも悪魔か？」

劍帝（まあ、この前の雑魚共よりは良い動きしてるけどな）

劍帝「さてと、それじゃ、片付けるかねえ」

そう言つて劍帝はまた姿を消した

一誠「今度は何処に行つ…ガハツ!!」

劍帝「先ずは赤龍帝からだ」

劍帝は一誠の鳩尾に一撃だけ軽く蹴りを入れた

一誠「グフツ…」

劍帝「二時間で動けるようになるから安心しろよつと」

木場「くつ、イツセー君。くそっ！うおおお！」

劍帝に向けて斬撃が放たれた

劍帝「オイオイ木場とやら、人の話は最後まで聞けよ？」

木場「関係無い…僕は彼を…仲間を守る」

劍帝「あーそー…なら、掛かって来な」

木場「ハアアアア!!」

木場は劍帝に向けて思いっきり剣を振るった

劍帝「俺、鈍いって言わなかったっけ？」

だが、劍帝に剣はかすりもしなかった、指二本で受け止められたからだ

木場「何っ!？」

劍帝「(っ、ん、) ハア…もうちよつと強くなりな」

劍帝はそう言い木場の鳩尾に一撃だけ軽い殴りを叩き込んだ

劍帝「ざつとこんなもんだろ、じゃあな、少年」

劍帝はそう言い残して魔法陣に消えた

—冥界—

劍帝「セラ様ー、只今戻りましたー」

セラ「お帰り、劍帝君」

劍帝「いやー、グッズ以外のお土産選んでたら帰るのが遅れました。はいこれお菓子」

そう言つて劍帝は駒王町で自腹で買ったお菓子をセラフォルーに渡した

セラ「私が貰つちやつて良いの？ 劍帝君食べないの？」

劍帝「良いんですよ。元からセラ様に差し上げる予定で買ってきましたし」

セラ「ん、劍帝君も一緒に食べよ！」

劍帝「えっ？あの、それ、俺のじゃないですし、セラ様に差し上げた物ですし」

セラ「良いから、良いから」

劍帝（〇、〇、）ハア…：セラ様の我儘には勝てませんね

そう思いながら劍帝とセラフオールは一緒にお菓子を食べた

## 第九話「従者と不死鳥」

あらずじ

セラフオルーのお願いにより人間界に向かった剣帝、偶然そこで兵藤一誠に出会ったその後ドライグに気付かれ戦闘を仕掛けられたが一誠達を一撃で倒し冥界へと帰るのであった

一誠達を殴り飛ばしてから数日経過したある日

セラ「ねく、剣帝君」

剣帝「どうしました？」

セラ「またお願いが有るの」

剣帝「またですか？…今回はお使いとかじや無さそうですね…？そのお願いの内容とは？」

剣帝がセラフオルーの方を見るとセラフオルーは真面目な顔をしていた

セラ「内容はね、ソーさんの護衛をして欲しいの」

剣帝「ソーナ様の護衛？暗殺予告でも来てるんですか？」

セラ「そうじゃないんだけどね…ちよつと、心配な事があるの」

劍帝「心配な事とは？」

セラ「近々フェニックスのライザー君つて子が駒王学園に向かうらしいんだけど…ライザー君は女つたらしつて噂を良く聞くから…」

劍帝「それでの護衛ですか」

セラ「駄目？」

劍帝「(ハ、ハ) ハア…俺が一度でもセラ様をお願い断つた事有りましたっけ？」

セラ「それじゃあ！」

劍帝「行きますとも。大切な主の妹君ですし。では、失礼致します」

そう言い残して劍帝は魔法陣へと消えた

セラ「今度は…大切つて…:…やったあー!!!」

セラフォルーはゴロゴロと転がつて悶絶していた

—人間界：駒王学園—

劍帝「これで来るのは二度目ですかね…さて、生徒会室にでも向かいますかね」

そう言いながら劍帝は生徒会室に脚を進めた

劍帝「えーつとお、生徒会室は何処だっけな？」

劍帝は少しだけ迷っていた

?? 「あのお、生徒会室に何か御用が有るんですか？」

劍帝が困っているその後ろから声がした

劍帝 「ええ、ちよつと生徒会長に少々用事があるので…す……ん？」

劍帝が後ろを振り返ると金髪の少女が立っていた

?? 「でしたら御案内致しましょうか？」

劍帝 「良いんですか？ 見ず知らずの俺の案内とかしても」

?? 「見ず知らずの人でも助けます。ですから。付いて来てください」

劍帝 「スイマセン、そんなじゃ、お言葉に甘えて」

?? 「いいえいえ、お気になさらないで下さい、あつ、彼処です」

劍帝 「有り難う御座います。そうそう、名乗るのを忘れていました。俺の名は妖悪劍

帝、貴女の名前は？」

アーシア 「私はアーシア・アルジェントと申します。アーシアとお呼び下さい」

劍帝 「では、アーシアさん、また会う機会があれば御会いしましょう」

アーシア 「はい、またお会いしましょう」

アーシアはそう言う去何処かへ去っていった

劍帝 「さてと…俺は自分の仕事するか」

劍帝はそう言いながら生徒会室の扉を叩いた

ソーナ「誰です？」

劍帝「ソーナ様、俺ですよ。劍帝です」

ソーナ「け、劍帝さん!?! どうぞ入って下さい」

劍帝「それじゃ、失礼します」

劍帝はそう言いながら室内に入った

劍帝「こんにちは、ソーナ様」

ソーナ「こんにちは、劍帝さん、本日はどういった御要件で此方に？」

劍帝「いやー、セラ様にソーナ様の護衛を頼まれてね、なので来ました」

ソーナ「護衛って…ハア…何の為にですか？」

劍帝「近々来るライザーとやらが女つたらしつて噂を良く聞くそうですからね。その対応にでしょう」

ソーナ「はあ、お姉様つたら…」

劍帝「良いお姉さんじゃないですか。妹思いで」

ソーナ「そうだとしても、度々困ります…」

劍帝「ふうーん、ところで、さつきからそこで俺を多少睨んで来てるのは誰ですか？」  
劍帝は栗色の髪をした男を見ていった

ソーナ「コラ！ 匙、彼を睨んだりするんじゃないやありません！」



匙「スイマセン会長」

劍帝「まあまあ、こんなにカリカリせず、俺は怒った顔より笑顔のソーナ様が見たいですから」

そう言うのと劍帝はソーナを撫で始めた

ソーナ「わ、分かりました…」

ソーナの顔が赤いのを劍帝は気付いていないが匙は気付いて劍帝に殴り掛かった

劍帝「おっと、危ないですねえ」

不意を付いたようだったが劍帝はさも当然の様に受け止めた

匙「チツ、受け止めやがったか」

ソーナ「匙！劍帝さんに何をしているのですk」

劍帝「構いませんよ。匙君の軽い実力試しをしたいですし。主の妹君の眷属の力をね」

ソーナ「そ、それならば、分かりました」

匙（何だよ！俺何か軽く捻り潰せるみたいに言いやがって…）

劍帝「さあ、掛かってきな」

劍帝は右手に剣を持ち左手でちよいちよいつと指を動かして挑発した

匙「嘗めんじやねえ！」

匙はそう言うのと黒色のカメレオンのような神具を左手の甲にだしその神具から線の様な物を出し攻撃した

剣帝「ふうん、ブリトラ系か：中々良い物だな」

剣帝はそう言いながら匙の出した線の様な物を弾いた

匙「なっ!？」

匙が驚いて居ると剣帝が眼前に急接近していて顔面に一撃叩き込んだ

匙「グフツ：」

剣帝「まだまだ終わんねえぞ！」

剣帝は流れる様に胴体をタコ殴りにした

匙「ガハツ、グフツ、ゲホツ、ウグツ：」

剣帝「ふむふむ、硬いな、それだけ魔力でガードしているという事か：悪くないな」

剣帝はそう言って殴るのを辞めた

剣帝「さて、手合わせの勝者を言って貰いましょうかね」

ソーナ「勝者！妖悪剣帝!!」

剣帝「彼の強さの感想はまあ、良い感じですね。ドラゴン系の神具持ちですし」

匙「チクショウ：俺相手にや素手で充分だって言うのかよ……」

剣帝「いやー、強かったよ？俺が殴らないといけないなんてさ、俺は大抵の相手なら

デコピンで充分だしね」

剣帝（まあ、加減はしたけどね）

匙「つまり、俺が強くなればアンタに剣を使わせる事も…」

剣帝「ああ、出来るかもね」

ソーナ（やっぱり剣帝さんは優しい…匙が殴り掛かったりしたのに全く怒らなかつたしその上励ましたりするなんて…）

剣帝「それはそうと、例の…誰でしたっけ？焼き鳥・フェニックスでしたっけ？」

??「誰が焼き鳥だ!!俺の名はライザー・フェニックスだ!!」

その声の直ぐ後に炎が部屋の中に入って来る

剣帝「へえ、もう来ないと思ってたぜ」

しかし、生徒会メンバーには一人たりとも炎が当たっていなかった、何故なら剣帝が炎を全て爆風で掻き消したからだった

ライザー「ほお？俺の炎を防ぐ輩が居るのか」

生徒会室前には金髪の男が立っていた

剣帝「あんなチンケな炎なんざ簡単に弾けるっての」

ライザー「何だと!!俺の炎がチンケな炎だと!」

剣帝「ああ、何か文句あるか？」

ライザー「見た所、お前は転生悪魔の様だな」

劍帝「それがどうした？」

ライザー「お前の主は後ろに居る女か？」

ソーナ「えっ?! いえ、私でh」

劍帝「どうだろうな? テメエ風情に教える訳ねえだろ」

ライザー「フンツ、今は結婚前だからな、決戦は勘弁してやろう」

劍帝「ハツ、フェニックスの癖に腑抜けだな」

ライザー「良かろう! 腑抜けかどうかその身で確かめるが良い!」

ライザーが炎を拳に纏わせて劍帝に殴り掛かった

劍帝「残念、甘い」

劍帝はそう言うときも当然の様に拳を躲してライザーを上半身を殴って消し飛ばした

ライザー「…な、殴りだけで俺を消し飛ばすだと…何者だ…貴様は…」

ソーナ「その人は妖悪劍帝、私の姉、セラフォル・レヴィアタンの女王(クイーン)だそうです」

ライザー「げ、現魔王のレヴィアタンの眷属だと!?!」

劍帝「ああ、そうだよ?」

ライザー「す、スミマセンでした…そうとは知らずに…」

劍帝「良いよ良いよ、俺が挑発しちやっただし、それより大丈夫かい？反射的に上半身消し飛ばしちやっただけ」

ライザー「だ、大丈夫です！はい！」

劍帝「なら、良かったよ」

ライザー（ま、マズイ…魔王の眷属にあんな事を言ってしまった…）

劍帝「さてさて、ライザー君、君は此処には何をしに来たのかな？」

ライザー「せ、生徒会長が美人と聞いたので見に来ました」

劍帝「それなら用事が終わったし、帰ろうか、ね？」

ライザー「は、はい！」

劍帝「それじゃあまたお会いしましょう、ソーナ様」

劍帝がそう言うのと劍帝とライザーはそれぞれの魔法陣に消えた

## 第十話 「立場とは儂くそして強い」

あらずじ

セラフォルーの命（お願い）によりソーナの護衛をする事になった劍帝、その際に匙の怒りに触れてしまった、その後、匙の力試しという、戦闘を行った

その後に生徒会室にやってきたライザー、劍帝の立場を知らずに嘯み付くが劍帝の立場を知り、謝り帰るのであった

セラフォルーに頼まれてソーナの護衛をしてから数日後

―劍帝の自室―

劍帝（えーつとお：此処にこれだけ回したら：此方がこうなると：（へ、；）ウーム：セラ様は今サージェクス様に呼ばれてどっか行ってるし：まあ、良いか、仕事仕事つと）

劍帝は自分の部屋で何時もの倍の量の仕事をこなしていた

セラ「劍帝くん！」

劍帝が仕事をしていると扉を勢い良く開けてセラフォルーが入って来た

劍帝「如何なさいました？セラ様」

セラ「サーゼクスちゃんにリアスちゃんの婚約パーティーに呼ばれたから一緒に行こう？」

劍帝「でも…仕事が…」

セラ「お願い…劍帝君と行きたいの…」

セラフォルーは上目遣いで劍帝に言った

劍帝「仕方無いですねえ」

劍帝はそう言うのと数秒掛けて全ての書類を片付けた

劍帝「さっ、行きますか」

セラ「相変わらず劍帝君は速いね」

劍帝「普通ですよ。普通」

セラ（劍帝君の普通ってかなりズレてる気がするなあ…）

劍帝「あのー、セラ様？急がなくて良いんですか？」

劍帝が足下に魔法陣を展開してる

セラ「あつ、今行くねー」

セラフォルーが魔法陣に入ると二人は魔法陣に消えた

劍帝「はい、到着しました」

セラ「それじゃあ、私はサーゼクスちゃんに挨拶してくるから自由にしてなよ」

剣帝「では、そうさせて頂きます」

剣帝（結婚パーティーねえ：ハア、色んな上級悪魔が居るなあ……おつ、あの方は……）

ソーナ「リアス……やはり乗り気では無さそうね」

リアス「ええ、でも、レーディングゲームで負けたから……」

ソーナ「それならば仕方無いわね」

リアス「ええ……」

剣帝「こんばんわ、ソーナ様、リアス様」

剣帝はソーナとリアスが話していたのを発見近付いた後、二人の会話が一区切りしてから声を掛けた

ソーナ「えっ!? け、剣帝さん何故此処に!？」

剣帝「セラ様に連れられて来ました」

ソーナ「ああ、またお姉様ですか」

リアス（ソーナのお姉様って事は……）

リアス「ちよつと貴方！ 何で魔王様をセラ様なんて呼んでるのよ！」

リアスは剣帝に向けてそう言い放った



ソーナ「リ、リアス!!この人はお姉様のクイーンよ!」

リアス「えっ!?魔王様のクイーン!」

剣帝「ええ、まあ、はい」

リアス「そ、そんな方とは露知らずあの様な事を言ってしまった…すみません!」

リアスは剣帝の地位を聞くと今までの自分の態度を思い返し反省した様に慌てて頭を下げ始めた

剣帝「良いですよ。俺が言っていないのが悪いんですし。それに、今回のパーティーの主役が謝ったりするのは良くないです。なので、頭を上げて下さい」

リアス「は、はい、分かりました…」

リアスはそう言って頭を上げた

剣帝「うーん、それにしても皆楽しそうですねえ。花嫁が乗り気じゃないパーティーで」

リアス「き、聞いてらっしゃったんですか…」

剣帝「ええ、まあ、言いふらしたりしませんので、御安心を…」

不意に剣帝は腕時計に一瞬だけ目を向けた

剣帝「つと、そろそろセラ様のそばに戻りますかね。それでは、またお会い致しましよ  
う」

剣帝はそう言う方向を転換して人混みに消えた

ソーナ「やっぱり剣帝さんは優しいなあ…」

リアス「ええ…そうね…」

剣帝（さあてとお、そろそろ来るかなあ）

剣帝はニコニコしながらセラフオールの元に戻って行った

## 第十一話「恋の気持ちは神を超えて」

あらずじ

セラフオルーに連れられライザーとリアスの結婚パーティーに行つた劍帝、其処でソーナとリアスを発見し声を掛け己の地位をリアスに明かした

ライザーとリアスの結婚パーティーから三日後

―セラフオルー自室―

セラ（この前の結婚パーティー楽しかったなあ、リアスちゃんの眷属君すつごく頑張つてたし：ウエディング姿のリアスちゃん綺麗だったなあ……私も何時か劍帝君と……）

セラ「キヤアアアア！！／／／／」

セラフオルーはそんな想像をしてゴロゴロと転がっていた

劍帝「セラ様!!先程悲鳴らしきものが聞こえたのですが如何はされましたか!!」

セラフオルーの叫び声を聞いて劍帝が扉を蹴り開けた

セラ「け、劍帝君!?!な、何でも無いよ?」

劍帝「本当にですか？」

セラ「本当に何でも無いよ」

劍帝「それなら良いのですが…心配ですので此方の部屋で仕事をするとします」

セラ「えっ?! 良いの? 劍帝君、自分の部屋の方が効率が良いって…」

劍帝「良いんですよ。効率よりも大切な人の安全第一ですからね」

劍帝はそう言うのと机に書類を置いて仕事をやり始めた

セラ（け、劍帝君が私の事大切って…また大切って言ってくれた…キヤアアア!!）

セラ（フルーは劍帝の前なのでゴロゴロと転がりたい気持ちと叫びたい気持ちを心の中に抑えながら仕事をし続けていた

劍帝（さあつてとおく、これ終わらせた後は…適当に駒王町でも散歩しに行くかな…）

セラ（きつと劍帝君の方が先に終わっちゃうだろうけど待ってて貰えるかな…一緒に町を歩きたいし…）

二人はそんな事を考えながら仕事を進めていく

（十分後）

劍帝（さてと…半分終わらせたし、飲み物でも淹れに行くか）

劍帝は席を立った

セラ「劍帝君、何処行くの？」

劍帝「飲み物を淹れに行つて来ます」

セラ「なら、私の分も淹れて来て、何時ものを」

劍帝「はい、畏まりました」

劍帝はそう言いながらキツチンに向かいコーヒートカフエオレをカップに淹れた

劍帝「はい、セラ様、何時ものカフエオレです」

セラ「有り難う、劍帝君」

劍帝「いえいえ、従者として当然の事ですし」

劍帝はそう言うのと席に戻り作業を再開し始めた

セラ（あー、劍帝君が淹れてくれたカフエオレ…いつも美味しいなあ）

セラフォルーはそう思いながら作業を続けた

劍帝「はい、終わりつと」

劍帝は自分の前にあつた書類の山を片付けて席を立とうとした

セラ「待つて、劍帝君！」

劍帝「何でしょうか？セラ様」

セラ「あのね…偶には劍帝君と冥界の街を歩きたいなあつて思つただけ…駄目

？」

劍帝「……（口、口）ハア…：そういうことは先に言っておいて下さい」

セラ「劍帝君何か用事有るの？」

劍帝「ええ、有りますよ」

セラ「そ、それならそつちを優先しよ」

セラフォルーが喋っている途中でセラフォルーの前にあつた書類の山が消えた

劍帝「セラ様と冥界の街を散策するっていう大切な用事がね」

書類の山が消えたのは劍帝がセラフォルーの書類の山を全て片付けたからだ

劍帝「だから、ほら、行きますよ」

セラ「……………うん！」

そう言つて劍帝とセラフォルーは冥界の町を散策し始めた

セラ（劍帝君とお散歩…フツツ、まるでデートみたい…）

劍帝（あつ、そういうや、アレ《三話参照》から夜鴉様に会つてないけど、夜鴉様何してるかなあ）

劍帝「痛っ」

劍帝は夜鴉様の事を考えたのでダメージが入つたが顔などには出さないようにしながらセラフォルーは嬉しそうな表情をしながら、散策しているとセラフォルーがとある店の前で立ち止まつた

セラ「綺麗…」

セラ「フオルーが立ち止まったのはショーウィンドー内に有ったウエディングドレス  
を見ているからだ

剣帝「ふむ、ウエディングドレスですか…：きつとセラ様にも良くお似合いですよ。  
きつとね」

セラ「えっ!? そ、そうかなあ?」

剣帝「ええ、勿論」

セラ「そ、それなら、もしも私がこれ着てたら剣帝君は私を奥さんにしてくれる!」

剣帝「んー、7：3、いや、8：2つてところですかね」

セラ「7か8がしない…?」

剣帝「いえ、7か8がするで3もしくは2がしないですかね」

セラ「本当に!」

剣帝「ええ、本当にです」

剣帝はニツコリと微笑んでそう答えた

セラ「やったあー!! それじゃあ、もうちよつと押したら…」

剣帝「さてと、何処に行きますか?」

セラ「うんつと、彼処なんてどお?」

セラフオールが指刺したのはお化け屋敷だった

劍帝「お化け屋敷ですか：了解しました」

劍帝（はつきり言って冥界にお化け屋敷が有るのは驚いたなあ、まあ、幻想郷でお化けとか飽きるほど見た事あるし別にいつか）

セラ（やった！これで劍帝君に抱き着いても違和感が無い！）

劍帝とセラフオールは各々そう考えながら一緒に「お化け屋敷」に入って行った



## 第十二話 「甘い月と二人の太陽」

あらずじ

何時もの様に二人一緒に仕事をしていたセラフオルーと剣帝、案の定剣帝の方が早く終わったがセラフオルーの提案により一緒に冥界を散策する事になった、その際発見したお化け屋敷に二人で入っていくのだった

剣帝 「さてと、行きますか、セラ様」

セラ 「うん！」

剣帝 「ああ、そういうええ忘れちゃいけないな」

剣帝はそう言つてセラフオルーの方を向いた

剣帝 「中はきつと暗いでしょうし、一応手を繋いどきましよう」

セラ 「えっ!?!良いの!?!」

剣帝 「?別に構いませんよ?」

セラ (やったあー!!剣帝君から手を繋ごうって言ってくれた!)

剣帝 「セラ様ー?如何なされましたか?ポーツつとしたりなさつて」

セラ「えっ？な、何でも無いよ!？」

劍帝「それなら良いのですが。取り敢えず、行きますよ」

セラ「うん!」

そう言つて二人は手を繋ぎながらお化け屋敷の中に入って行つた

セラ「〜♪」

劍帝「あのお、セラ様?」

セラ「なあに? 劍帝君」

劍帝「そんなに引つ付かれては歩き難いのですが…」

セラ「フオルーは劍帝の腕に引つ付くように抱き着きながら歩いている

セラ「だつて怖いんだもくん、でも、劍帝君の近くなら怖くなくなるんだもくん」

劍帝「そ、そうですか…」

劍帝（まあ、良いか、歩けない訳じゃないし）

セラ（劍帝君の腕つてやっぱりガツシリしてるなあ）

各々がそんな事を考えながらお化け屋敷をゆつたりと歩いていて、その最中劍帝に向けて嫉妬の様な視線が向けられ続けていたのは本人達は知りもしない

劍帝（ウーム、まだ出口は先っぽいなあ…）

そんな事を劍帝が考えてる矢先に劍帝達の近くの物陰から何者かが飛び出して来た

セラ「キヤ〜！」

セラフォルーは剣帝に抱き着くふりをしながら剣帝の腕に胸を押し当てた

剣帝「大丈夫ですよ。セラ様」

剣帝はそう言いながらセラフォルーを撫でつつ前に進んだ

セラ（あれ？剣帝君の反応薄いなあ…）

剣帝（あー、いきなり強めに引っ付くから吃驚した、まあ、セラ様の何時もの悪ふざけだろう）

セラフォルーの作戦は剣帝には特に効果が無かったようだ

—十分後—

その先もセラフォルーと剣帝は様々な驚かしに遭った、その度にセラフォルーは怖がるふりをしたが剣帝は何時も通りの反応しかなかった

剣帝「セラ様、出口が見えてきましたよ…あれ？何でそんなに退屈そうな顔をしていらっしゃるのです？」

セラ「べつつにいく？」

セラフォルーは剣帝の反応の薄さに多少膨れていた

剣帝「ふむ……」

剣帝は少し時計を見た

劍帝「セラ様、そろそろお昼ですし。お腹が空いたでしょう。彼処にクレープ屋がありますし。買いに行つてきますので彼処の椅子で待つて下さいな」

セラ「……………うん」

劍帝（機嫌治らないなあ…ん？あれ？このクレープ屋のメインメニューのSクレープってなんだろう…）

劍帝「スミマセン、店主」

店主「はい、何でしょう？」

劍帝「このSクレープつての二つ下さい」

店主「味は何にします？」

劍帝「それじゃあ、苺とバナナ下さい」

店主「はいよ、お待ち」

そう言つて店主は苺タップリのクレープとバナナ盛り沢山のクレープを出した

劍帝「どうも、幾らです？」

店主「2500円になります」

劍帝「はい」

劍帝は2500円びつたり置いた

店主「毎度有難う御座います。またのご来店を」

劍帝はクレープを受け取りセラフオルーの方に

劍帝（そういえば、このSクレープのSってどんな意味なんだろう…スモールでは無  
さそうだし…まあ、いっか）

劍帝「セラ様ー、あのクレープ屋のメインメニューらしきSクレープってのを買って  
来ましたよー」

それを聞いた瞬間セラフオルーは全身一瞬ビクツとした

セラ「け、劍帝君!?それって本当に!?本当に私に買ってきてくれたの!？」

劍帝「え、ええ、他に誰に買って来るんですか？」

セラ（やったあー!!劍帝君が恋人で食べるって噂のSクレープを買ってきてくれた  
よおー!!）

劍帝「食べないんですか？」

セラ「勿論食べるよ!!」

劍帝「そ、そうですか」

劍帝（相当お腹空いてたんだらうなあ）

劍帝とセラフオルーはお互いに思い違いをしたままクレープを食べ始めた

セラ「あく、美味しいなあ」

劍帝「此方も美味しいですよ」

セラ「そうなんだ…私もそっちも食べてみたいなあ」

剣帝「なら、食べてみます?」

セラ「えっ!?!良いの?」

剣帝「構いませんよ、はい」

剣帝はそう言うのとセラフォルーの口にクレープを近付けた

セラ「こ、これって…はい、あくんつてのだよね!?!本当に良いのかなあ…いや、良いんだよね!」

セラフォルーはそう考えながら剣帝のバナナクレープを食べた

セラ「あつ、此方も美味しい」

剣帝「出来ればそちらのクレープも食べみたいです…宜しいですか?」

セラ「う、うん! 勿論良いよ!」

剣帝「それじゃあ、頂きます」

セラ「それじゃあ、はい、あくん」

剣帝は口に近付けられた苺のクレープを食べた

剣帝「ふむ…:そちらも中々美味しいですね」

セラ「でしよ?」

剣帝とセラフォルーはそんな会話をしながらお互いに食べ比べをしたりしてクレー

プを食べ終えた

劍帝「さつてつと、食べ終わりましたし。次は何処に行きます?」

セラ「んゝつとねえ、劍帝君が決めて?」

劍帝「……………なら、少しブラブラしますか」

そう言つた劍帝はフラリと何処かへと向かつた

セラ「あつ、待つてよ、劍帝君」

セラフオールも後から付いて行つた

劍帝「確かこの辺に……おつ、有つた有つた」

劍帝はとある建物の中に入つて行つた

セラ「此処つて……図書館だね」

劍帝「ええ、歩くの疲れたでしょう? 此処で少しゆっくりして行きましようや」

セラ「あつ、うん」

劍帝「うゝむ、セラ様はこれを読んでみてはどうです?」

劍帝は一冊の本を手渡した

セラ（昔読んだ事あるけど……劍帝君の好意を無下にしちや駄目だよな）

セラ「うん、そうする」

劍帝「さてと、俺も読みますかね」

そう言つて二人は読み始め……二時間ほど経過した

劍帝「終ゝわりつと」

劍帝の前には十冊以上の小説が置かれていた

セラ「劍帝君、読み終わつた？」

劍帝「ええ……スミマセン！読むのに熱中してお待たせしてしまいました！」

セラ「良いよ、私が劍帝君に待たされる事つて初めてだから何だか新鮮な感じがするし……」

セラ（それに読書中の劍帝君眺めてたら……フツツ、劍帝君可愛かつたなあ……）

劍帝「外は……もう夜みたいですね……本日は外食にしますか」

セラ「うん、そうしよつか」

そう言つた二人は並んで歩いていたら劍帝が不意に上を見上げると満月が見えた

劍帝「……月が……綺麗ですね……」

セラ（そ、それつてもしかして……えーつと……何て答えれば……そうだ！）

セラ「でも、太陽が無いと月は輝けないよ」

劍帝「……そうですね……」

セラ（あれ？反応が薄いけど……脈無しかなあ）

劍帝「……ずっと前から月は綺麗でしたよ……」



セラ「えっ!?それって…」

ボソボソと剣帝は言ったがセラフオルーは何とか聞き取ったようだ

剣帝「／／は、早く行きますよ!」

セラ「……………うん!」

剣帝は足早に道を歩きセラフオルーはそれを追い掛けて腕に抱き着いた

## 聖夜特別編 「愛する者の為の聖夜」

剣帝は自室で何かを編んでいた

剣帝「よし！完成っと」

剣帝が編んでいたのは赤い帽子と赤い服だった

剣帝「今日はクリスマスだからね、サンタに扮してセラを驚かせよーっと」

剣帝はそう言いながらとある紙をポケットから取り出した

剣帝「いやー、前もってセラにサンタに貰いたい物書いといて貰ったからなあ……

何だこの内容は……」

紙にはミルフィのアニメ全巻とコスプレグッズのほぼ全てと書かれていた

剣帝「普通なら投げ出すレベルですよ……これ……」

剣帝は少し呆れたような顔をしたが

剣帝「まあ、可愛い主の為ですからね。頑張りますかね」

剣帝はそう言うのと魔法陣を展開し、こんな事を考えながらすぐに転移した

剣帝（今日中に集められるかなあ……）

——駒王町：グッズ売り場——

劍帝「うーむ、取り敢えずDVD全巻は揃ったけど…限定品がマジで無い…」

劍帝は頭を少し抱えていた

劍帝（畜生ー、限定品とかこんな場所にあるわけ無いとは思ってたけど…マジでどうしよう…）

劍帝が頭を抱えていると

一誠「アンタ、劍帝さんだよな？どうしたんだ？」

劍帝「ああ、一誠君か、いやー、セラ様にプレゼントを用意したいのだが…これが見

つからなくてね…」

劍帝はそう言いながら一誠に紙を見せた

一誠「えーつと、どれですか…これなら俺のお得意さんが持つてますよ？」

劍帝「何!?それは本当かい!？」

一誠「は、はい、自慢気に見せられましたし…」

劍帝「よし!それならその人のところに連れて行ってくれるか？」

一誠「あつ、はい、分かりました…」

劍帝は嬉しそうに、一誠君は少し面倒そうに歩いて行った

劍帝「…一誠君、此処か？」

一誠「あつ、はい」

劍帝と一誠はとあるアパートの一室の前に居る

劍帝「それなら一誠君：呼んでくれないかな？」

一誠「分かりました：」

一誠がインターホンを鳴らすと誰か出て来た

??「誰ミル？ああ、一誠君また来てくれたのミルね：隣の人は誰ミル？」

劍帝達の前にはツインテールのムキムキとした男性（？）が居た

劍帝「ど、どうも、妖悪劍帝と言います。一応、一誠君同様に悪魔です」

??「!!それならミルタンに魔法を教えてミル！」

そう言いながらミルタンと自分を呼ぶ男性（？）は劍帝に迫った

劍帝「あつ、はい、分かりました」

一誠（えっ?!人間でも使える魔法とかあるのか!?)

ミルタン「それじゃあ、速く教えてミル！」

劍帝「但し、教える代わりと言ってはなんですが。これくたさいませんか？」

劍帝はそう言いながらミルタンに紙を見せた

ミルタン「んー……ああ、これなら良いミルよ」

劍帝「交渉成立ですね。それでは今から見せます。そして、今からする事は貴方も練

習すればきつと出来るようになります」

劍帝はそう言いながら一誠に向けて拳を振るつたが一誠自体には当てなかった、だが、一誠は勢い良く飛んで行った

劍帝「ハンス・ウインドってね」

一誠「それただの殴りだろうがアアア!!」

一誠はそう叫びながら飛んでいったが、それは誰の耳にも聞き取れなかった

ミルタン「凄いミル!もつと教えて欲しいミル!」

劍帝「それでは、一誠君が帰って来たらもう一つ教えますのでそれで約束の物頂けますか?」

ミルタン「それで良いミルよ!」

劍帝「では、待つとしましょうか」

——10分後——

一誠「ハア…ハア…やつと帰ってこれた…」

劍帝「お帰りー、それじゃ、もうひとつだけ魔法を受けてみようか」

劍帝はそう言いながらおもむろにに一誠の手を握った

一誠「えっ!?!はっ!?!えっ!?!」

劍帝「アームブレイク!」

劍帝がそう言いながら手を握るとゴキゴキと音を立てながら一誠の手の骨が折れる

一誠「イデデデデデ!!!」

劍帝「ほら、これだけで簡単に相手の行動が封じられた」

ミルタン「凄いミル！凄い魔法ミル！」

劍帝「それでは、これからはこの魔法が習得できるよう頑張つて下さいね、後、約束の物を下さい」

ミルタン「分かったミル！これあげるミル！」

ミルタンは劍帝にそう言いながらグッツの入ったビニール袋を手渡した

劍帝「はい、有り難う御座います。それでは、さようなら」

ミルタン「さようならミル」

劍帝は一誠を引っぱりながら帰つて行つた

一誠「手が……」

劍帝「ああ、悪かつたね、今治すよ」

劍帝がぼそぼそと何かを言う和一誠の手が治つた

一誠「あー、手が治つた……てか！何するんですか！劍帝さん……何でそんなに汗かいてんだ！」

劍帝「（……）フウ……少しだけ無理したから疲れたただだよ、気にしなくても良いさ」

劍帝は体を引き摺るように歩き魔法陣を展開した

劍帝「それじゃあね、今日は有り難うね、一誠君」

—冥界：劍帝の自室—

劍帝「ふう：あとはこれを袋に詰め込んでつと：」

劍帝は疲れた体に鞭打ちながら変装をし始めた

劍帝「これでセラ様を驚かせられる、喜ばせられる：」

劍帝はそんな事を呟きながらセラフォールの部屋に向かった

—セラフォールの部屋の前—

扉をそつと開けた

劍帝「セラ様は……よし、寝てるな：」

劍帝はさつきまでよりはある程度回復した顔になっていた

劍帝「さて、枕元にプレゼントを置いてつと：」

劍帝はセラフォールの枕元にプレゼントをゴトゴトと置き始めた

劍帝「ふう……ふう……速く自分の部屋に戻らないと：」

劍帝はいそいそとセラフォールの部屋から退室して自分の部屋に戻ろうとしたが

セラ「んん？だあれ？」

劍帝「!!」

劍帝（起きたか……こういう時は…）

劍帝「フォッフオッフオッフ、儂はサンタじゃよ」

劍帝は顔と声を変えて振り返った

セラ「えっ？サンタさんが何で私の部屋に？」

劍帝「君は仕事をよく頑張っておるからの、プレゼントじゃよ、それではまだ後が居るでな、これにてさらばじゃ！」

劍帝はそう言いながら空に飛んで行った

セラ「あつ！……行っちゃった」

セラフォールは劍帝が飛んで行った空を見上げたが劍帝の姿は既に見えなかった

セラ「……有り難う、サンタさん」

セラフォールはそう言うどベツトでまた寝た

劍帝「ハアー……ハアー……何とか保ったな…ゲホッ！ゲホッ！」

劍帝はそう言いながら血を多少吐いた

劍帝「（・ム・）チツ、多少無茶しただけでこのざまとは、俺の体も弱ったもんだ……

まあ、眠れば多少は和らぐかな」

劍帝はそう言い倒れるように眠りについた



## 第十三話「暴走の恋心と信じる心」

あらずじ

一緒にお化け屋敷に入った二人、其処でセラフオルーは一生懸命に剣帝に怖がるふりをして構ってもらおうとしたが、剣帝は余り大きな反応は起こさなかった、それで不貞腐れたセラフオルーの機嫌をどうにか治そうと剣帝はセラフオルーとクレープを食べたり一緒に読書をしたりした：そして、最後に一緒に夜食を食べようと街を散策していると月を見てお互いの気持ちを知った二人であった

剣帝とセラフオルーが街を散策した翌日

剣帝（前にも増してセラ様が何だかスキんシップをしてくるんだが）

剣帝「あ、あのお、セラ様？」

セラ「なあに？ 剣帝君」

剣帝「何と言いますか……近いです……」

セラフオルーは剣帝に寄り掛かるように剣帝の右隣に座りながら仕事をしている

セラ「だって、剣帝君の近くの方が仕事し易いんだもん」

劍帝「そ、そうですか…」

劍帝（こうはなるだろうとは予測はしていたが…まさか此処まで積極化するとは…どうすつかなあ…：そうだ！）

セラ（劍帝君にもつと構って欲しいなあ…）

劍帝「せ、セラ様！」

セラ「なあに？ 劍帝君」

劍帝「お飲み物を淹れて来ますので少々離れて頂けますか？」

セラ「嫌！」

劍帝「えーつとそれではお飲み物が淹れに行けないのですが…」

セラ「やだやだやだあ!! 劍帝君から離れたくないなあい！」

劍帝「そ、そんなワガママを言われても…困ります…」

セラ「劍帝君が離れるんだったらもう私、魔王のお仕事辞めちゃうー!!」

劍帝（… ㊦、） ハア…分かりましたよ。俺は此処に居ますよ」

セラ「やったあー!!」

劍帝「但し！セラ様もキチンと仕事して下さいね？ 宜しいですか？」

セラ「はーい」

こうして二人は仕事を進めていった

劍帝「ふう、一段落ついたあ」

セラ「大丈夫？ 劍帝君疲れてない？」

劍帝「大丈夫ですよ。これ位」

そういう劍帝の前にはセラフォルーの3倍の量の書類が山の様に置いてある、だが、これは全てやり終えた物である

劍帝「さつてつと、後一踏ん張り！」

劍帝はそう言つて書類に向き直つた

セラ（劍帝君の為に何かを思い付いたように突然席を立ち部屋を退室した）

セラフォルーは何かを思い付いたように突然席を立ち部屋を退室した

劍帝「……………セラ様？」

セラフォルーは退室してからキツチンへ向かつた

メイド，s「セラフォルー様、何故キツチンへ!?!」

セラ「劍帝君にコーヒーを作つてあげるの」

セラフォルーは慣れない手付きでコーヒーを作つていく、メイドに度々聞きながら

セラ「出来たー、それじゃあねえ」

セラフォルーはそう言うのと部屋に戻つた、すると、其処には書類を片付けてから椅子に眠つてしまつている劍帝が居た

セラ（アレ？ 剣帝君寝てる？ 珍しいなあ…）

セラ フォルーがそう思ったのは基本剣帝はセラフォルーが寝たのを確認してからしか寝ないからである

剣帝 「……………ZZZZ」

剣帝 「フフツ、かくわいい」

セラ フォルーは剣帝の頭を魔力で浮かせてから剣帝の頭のある椅子に座り膝枕をした

セラ（起こさないように… 起こさないように…）

セラ フォルーがそんな事を考えていると剣帝が目を開けた

剣帝 「……………俺が寝てる最中に何してるんですか？ セラ様」

セラ 「え、えーつとお……………」

剣帝 「まあ、寝心地が良かったのもう少しやって頂けますか？」

セラ 「えっ!？」

剣帝 「駄目ですか？」

セラ 「ううん！ 大丈夫だよ！」

剣帝 「それと、此処だと身体が安定しませんので…」

セラ 「……………それなら此方で寝たら？」

そう言つてセラフォルルは寝ぼけてる劍帝の手を引いてベットに行つた

劍帝「では、失礼して……ZZZ」

セラ「……やっぱり劍帝君の寝顔つて可愛いなあ……ベットに来たからかな……私もちよつとだけ眠くなつちやつた……」

セラフォルルと劍帝はそのまま二時間ほど眠つた

――2時間後――

劍帝「ふあーあ、良く寝た……何でセラ様も寝てんだろ？」

セラ「……ス……ス……ス……」

劍帝「それにしても……もう九時か……大分と寝てしまつたなあ……」

劍帝がそう言いながら起きようとしたらセラフォルルも目を覚ました

セラ「ムニヤムニヤ……おはよく、劍帝君」

劍帝「お早う御座います。セラ様」

セラ「今何時？」

劍帝「21時46分です。お食事のお時間ですよ」

セラ「それなら呼びに来るんじゃないかな？」

劍帝「……まあ、それもそうですね……」

セラ「だから、一緒に寝よ？ 劍帝君」

劍帝「さ、流石に男女が同じベットで横になるといのは……」

セラ「……………何で……………何で劍帝君は私の気持ちに気付いてくれないの?……」

劍帝「へっ?……………スミマセン…セラ様……」

振り返るとセラフォルーは涙を流していた

セラ「私が頑張つて振り向いて貰おうとしているのに…劍帝君は何時も何時も別の方を向いてる…昨日はあんな事言ってくれたのに…今日は私が寄り掛かつてる時にそんな素振りは一切見せないし」

セラ「……………劍帝君は私の事本当はどうでも良いんじゃないの?」

劍帝「!!そんな事は無い!」

セラ「それならそれを行動で示してよ!じゃないと…私心配なの…劍帝君が他の娘に盗られちゃうんじゃないかって……」

劍帝「……………」

劍帝は無言でセラフォルーを抱き締めた

劍帝「……………ゴメン…俺が鈍感なばかりに……」

セラ「言葉だけじゃなくて行動で示して……………ね?」

劍帝「ああ、分かったよ」

劍帝はそう言うのとセラフォルーをベットに押し倒し、服を丁寧に脱がせ唇を重ね舌を

絡め、ゆっくりと…ゆっくりと愛を確かめあった、そして、その間の剣帝の髪色は影の  
せいか黒く見えていた

## 第十四話 「バレる本心と今後の心境」

あらすじ

デートの後、仕事に追われる剣帝とセラフオルー、何時もとは違いセラフオルーが先に終わったので剣帝へコーヒーを差し入れようとしたが、コーヒーを作っている間に剣帝は睡眠していた、其処でセラフオルーは膝枕をした：数時間が経過し夜となって剣帝は何時も通り夜食を食べに向かおうとするが気持ちをおんてくれない剣帝に対してセラフオルーが泣き始め、その後は互いに抱き合い愛を確かめた

—翌日：セラフオルーの部屋—

剣帝が目覚めると剣帝とセラフオルーは抱き合う様に裸で眠っていた

剣帝「……………昨日は余り寝た記憶が無いな…」

剣帝がそう言いながら少し頭を抱えているとセラフオルーも目を覚ました

セラ「んん……………お早う、剣帝君」

剣帝「お早う御座います。セラさま」

剣帝が喋っている途中で唇に指を当てられた



セラ「2人つきりの時だけで良いからセラって呼んで欲しいなあ…駄目？」

劍帝「仕方無いですねえ、セラ」

セラ「敬語も出来れば辞めて欲しい…」

劍帝「(っ 皿、) ハア…:セラはワガママが多いなあ」

セラ「有り難う劍帝君！」

セラ「フオルーはそう言う」と劍帝に抱き着いた

劍帝「セラ、抱き着く前に服着ような」

セラ「えへへ、だって、嬉しかったんだもん」

劍帝「全く、セラは可愛いなあ！」

劍帝はそう言うのとセラ「フオルー」を押し倒した

セラ「まだするの？ 劍帝君」

劍帝「嫌かな？」

セラ「嫌じゃないけど、バレたらどうするの？」

劍帝「別に？ それならそれで構わないさ…:セラは嫌なのかい？」

セラ「ううん、私もバレても良い」

劍帝「それなら続きをしようか」

セラ「うん！」

劍帝とセラフオールはそう言つて昼過ぎまで愛を確かめ合つて居た……

——昼過ぎ：セラフオールの部屋——

劍帝（流石に昼過ぎまでやるのはマズツたかなあ、身体の疲労が明日に響きそうだ……）  
何時もとは違いボサボサに乱れた頭を掻きながら劍帝は自分の服を着た

セラ「劍帝君」

劍帝「何だい？セラ」

セラ「また今度、しよう？ねっ？」

セラフオールはそう言つて笑顔を浮かべている

劍帝「ああ、分かったよ……さてと、もうお昼だし昼食を食べに行こつか」

セラ「うん！」

劍帝とセラフオールは昼食を食べに下へ降りた

セラ「ねえ、劍帝君」

劍帝「何でしょうか？セラ様」

セラフオールはそう呼ばれて一瞬不貞腐れた顔になつたが

劍帝「……………ふたりっきりの時つて約束だろ……」

劍帝に耳元でそう囁かれて仕方無さそうに何時も通りの顔をした

劍帝（……………仕方無いなあ）

劍帝「……隣に座って食べましようか」

セラ「!うん!!」

セラフオールは劍帝にそう言われて御満悦な表情で歩いて行った

セラ「劍帝君、早く早くー」

劍帝「はい、分かりました」

劍帝は少し早足で歩いて追い付いた後、二人は並んで歩いて行った

―食事後―

劍帝「ご馳走様でした」

セラ「ご馳走様」

メイドA「セラフオール様、ご両親より一度帰って来いとのこと連絡が……」

セラ「えっ!?!お父様達から!?!何の用だろ……」

劍帝「取り敢えず、行ってみましようよ」

セラ「そうだね、それじゃあ、劍帝君、魔法陣お願い出来る?」

劍帝「お安い御用です」

劍帝はそう言って素早く転移用魔法陣を展開した

劍帝「終わりました」

セラ「それじゃ、行こっか、劍帝君」

劍帝「はい」

二人は一緒に魔法陣に入り転移した

—シトリー邸—

劍帝「到着致しましたよ。セラ様」

セラ「お母様！お父様！どの様なご用件で私を呼んだの？」

ジェラード「来たか、二人共」

上の廊下にジェラードとフォルストウが立っていた

劍帝「お久しぶりです。ジェラードさん、フォルストウさん」

フォルストウ「あらあら、劍帝君はそんな他人行儀な呼び方せず私のお義母

様って呼んで良いのよ？」

劍帝「は、はいっ!？」

ジェラード「そうだと、劍帝君、君は私の事を遠慮無くお義父様と呼んで構わないん

だぞ」

劍帝「えっ!?!はいっ!?!えっ!?!」

セラ「ちよつ、ちよつと待って!?!二人がそんな事言うから劍帝君が混乱してます!」

ジェラード「おつと、スマナイ、メイド達からセラ達が夜枷をしていたと聞いたので

な」

セラ「よ、よかつ…／＼／＼」

そう言ってるセラフオルーは顔が真っ赤になってる

劍帝（………あー…防音対策忘れてなあ…それでか…）

ジェラード「さて！劍帝君！」

劍帝「は！はい！」

ジェラード「君はシトリー家に婿入りしてくれるのだね？ そうなのだよね!!」

劍帝「ま、まあ、そうなるだろうとは思ってました…」

劍帝（もう少し後だろうと思ってたけど…）

ジェラード「それを聞いて安心したよ、いやはや、そういうのはセラよりもソーナに

期待していたが…まさか…運命とは分からないものだね！」

劍帝「は、ハア…」

フオルストウ「アナタ、一方的に喋られ過ぎて劍帝君が困ってますよ」

ジェラード「おっと、スマナカツタね、私はどうにも気分が良くなると饒舌になりや

すいようなんだ」

劍帝「そ、そうなんですか…」

ジェラード「とにかく、今晚はウチに泊まっていきなさい」

セラ「えっ!? そんな事言われても明日はお仕事が…」

劍帝「……………セラ様…お忘れですか？数日休みが欲しいからって俺が一気にやったじゃないですか。その反動で寝ちやいましたけど…」

セラ「あつ…そういえばそうだったね…」

フォルストウ「まあ、それなら大丈夫ね！さつ、今晚は劍帝君がどんな風にしてくれたか、聞かせてね？セラ」

セラ「は、はい…分かりました。御母様」

ジェラード「さあ！今晚は飲もうではないか、劍帝君！」

劍帝「は、はい、畏まりました」

こうして夜は更けていくのであった

## 閑話「鴉は烏に優しいかも？」

とあるマンションの一室で一人の男が酒を呑みながら呟いていた。

?? 「はあー、仕事したくねえ。こうやってサボって酒を呑み続けてたい。」

男はなんとも最低な事を話していると部屋のドアが三回ノックされているのに男が気付いた。

?? 「誰だよこんな時間に。面倒だから居留守しようか。うんそうしよう。」

夜鴉 「折角来てあげたのにクズにも程があるだろう。アザゼル君。」

アザゼルは自分の後ろから声が聞こえて振り替えると同時に光の槍を突きつけたが彼には届かなかつた。

それと同時にアザゼルは彼の顔を見て悟ったような顔をして光の槍を消してその後彼に話し掛けた。

アザゼル 「！あんたは・・・そうか俺もここまでか。ほら、殺れよ」

夜鴉 「なあにを言ってるのか解らねえけど俺は君に提案をしにきただけだぜ？」

彼はアザゼルにソファアに座るよう手で指示をしつつ笑顔で自分もアザゼルの反対側に座った。

アザゼル「あんた程の御方が墮天使にんの用だ。」

夜鴉「いや、なんだね。墮天使というか墮天使の総督であり独身総督とか閃光と暗黒の龍絶劍総督とか幹部に呼ばれている君にとても良い提案をしに来たんだ。まずはこれを見てくれ。」

アザゼル「はあ!? 誰だよそんな事言ってる奴は!？」

夜鴉「バラキエげふんげふん。取り敢えずこれを読みたまえ。」

彼はアザゼルに一つの紙束を渡した。そこには『おみうあいよの書類』とクレヨンで適当に書いたであろう文字を見てアザゼルは思わず先程までの怒りが消えた。

夜鴉「さあさあ読みたまえ。」

アザゼル「・・・内容は読める物だと良いんだがな」

アザゼルがおそるおそる一枚捲ると中には恐らくパソコンで書いたであろう文字と紅い髪の美しい女性の写真が写っていた。

アザゼル「おつ! なんだこの美人な姉ちゃんは! ふむふむ。えっ? 俺に興味が有ってお話したいですだってえ? こいつは最高だ! 俺の時代が来たんだ!」

夜鴉「良かったねえ、アザゼル君。と言うかここまで喜ばれるとは思ってなかったんだがねえ?」

アザゼル「ありがとう! あんたがこんなに良い奴だったなんて。」



アザゼルは彼の手を握り頭を下げた。

夜鴉「あはは。言っておくけどそれはお見合いのお誘いだから行かないと解ってるよね？」

アザゼル「おっおう。聖書の神みたくなぶり殺しにされたくはないからな」

アザゼルは聖書の神が鞭でなぶり殺しにされていたのを思いだし顔を青くした。

夜鴉「大紅竜ちゃんって言うんだけどアザゼル君は気に入ってくれたかい？」

アザゼル「おう！是非ともお話ししたいものだぜ！」

夜鴉「今から呼べるけどどうする？」

アザゼル「マジか！用意良いな！是非お願いするぜ！！」

後にアザゼルはその時の事を後悔する事になるとは今はまだ知らなかったのである。

## 第十五話 「劍帝の苦難の末の力」

あらずじ

セラフオルーと寝た劍帝、その後は一時的に目を覚ましたがまた昼まで寝始める、その後昼食の時間となり昼食を食べた後シトリー邸に呼ばれ、其処でセラフオルーの両親から祝われ宴会に参加した劍帝なのだった

—宴会の翌日：シトリー邸—

劍帝が目を覚ますと服がかなり乱れ寝ていたベットもかなり乱れていた、その後すぐに劍帝は頭を抱えた

劍帝（あー、やつちまつた：幻想郷に居る時のノリで飲むんじやなかつた：めっちゃ頭痛い、何か記憶も曖昧だし：何したか覚えが…）

そんな事を考えながら劍帝は自分の服を整えた

劍帝「取り敢えず、セラ様起きてるかな？見に行くか」

そう言い劍帝が自分の部屋の扉を開けると部屋の前に一人のメイドが立っていた

メイドα「お早う御座います。劍帝様」

劍帝「……………僕に何か御用でしょうか？」

メイドα「セラフオール様より伝言を預かっております」

劍帝「……………如何様な内容で？」

メイドα『急にサーゼクスちゃんから会議に呼ばれたので行つて来ます。劍帝君はお休みね』だそうです」

劍帝「了解しました。伝言お疲れ様です」

メイドα「では、私は仕事に戻ります」

劍帝「あつ、はい、頑張つて下さいね」

劍帝はそう言いながら部屋に戻つた

劍帝（さあて……………休みを貰つたのは良いが……………何をしようかな……………そうだ！”彼処”に遊びに行こーっと）

劍帝が何か思い付いたように指を鳴らすと床に転移用魔法陣が展開される

劍帝「ふふつ、どんな反応するかなあ……………」

劍帝はそう言いながら魔法陣に消えた

—人間界：駒王学園—

劍帝「はい、到着……………何この状況……………」

劍帝が転移した先は駒王学園、オカルト研究部の部室だった

?? 「……コイツもお前の眷属の一人か？」

青髪の少女が剣帝を見てから前に座っている紅髪の少女、リアスに聞いた  
リアス「いいえ、彼は現魔王の一人の眷属よ」

?? 「ほお？ つまり、お前よりも権力が有りそうだな」

剣帝「えっ？ まさか…有りませんよ。権力なんて」

リアス「良くおっしゃいますね。セラフォル様の唯一の眷属なのに」

剣帝「まあ、そうですね。改めて名乗りますかね…セラフォル・レヴィアタンの眷属、女王（クイーン）の妖悪剣帝です。以後、お見知りおきを…何だ天使側か」

?? 「ああ、私達は聖剣を任された者だ」

青髪の少女と金髪の少女は誇らしそうに胸を張った

剣帝「……聖剣を任されたねえ…天使は相当人手不足みたいだなあ…こんな年端も行かない少女に聖剣なんて物騒な物を持たせるなんて」

剣帝がそう言うのと金髪の少女が立ち上がった

?? 「何よ！ 私達じゃ役割不足みたいな口振りして！」

剣帝「そうは言つて無いが…何と言うか…」

?? 「そんな風に言うんだったら私達の実力見せてあげるわよ！ ねえ、ゼノヴィア！」

青髪の少女に向けて金髪の少女は言った

ゼノヴィア「ああ！私もそろそろ限界なのだったからな！イリナに同意だ！」

剣帝「……………ハア…仕方無いなあ…場所の提供お願ひできますか？リアスさん」

リアス「はい、そう言う事ならば此処の施設の前が調度良いかと…」

剣帝「そんじや、そこでやりますかね」

剣帝がそう言うのと剣帝達は移動した

剣帝「さあ、何処でもどうぞ？」

剣帝は片手に木刀を一本だけ持つて立っている

ゼノヴィア「木刀だど!?舐めるんじゃない!ちゃんとした武器を使え！」

剣帝「いや、君等を傷つける気は無いから…これで良いと思つてね」

二人「墮天使の前に貴様（アナタ）を殺す！」

そう言つて二人が同時に剣帝に襲い掛かった

イリナ「やあああああ!!」

ゼノヴィア「はアアアアア!!」

二人が剣を振り抜いたが剣帝には当たらなかつた

剣帝「甘い上に鈍い！」

理由は簡単、剣帝が紙一重で回避しているからだ

イリナ「何でかすりもしないのよ！」

剣帝「そんなの簡単だ、お前達の振りが鈍いからだよ」

剣帝はそう言った後イリナの脇腹目掛けて木刀を振るった

ゼノヴィア「クッ…」

だが、それに反応してかゼノヴィアがイリナに当たる前に木刀を受け止めた

剣帝「へえ、防御は速いなあ」

イリナ「貰ったわ！」

剣帝「（ハ、ハ）ハア…甘いつてば」

剣帝は剣の横（峰）の部分で蹴って弾いた

イリナ「キヤア！」

ゼノヴィア「イリナ！大丈夫か!？」

イリナ「私は平気だから前に集中して！」

ゼノヴィア「ああ！分かっている！」

剣帝「…仕方無いなあ」

剣帝はそう言いながら木刀をなおした

ゼノヴィア「どうした？勝てないと悟ったか？」

剣帝「ん…どうだろうね？」

剣帝はマントの下から木刀をもう一本取り出した

ゼノヴィア「何っ!？」

イリナ「どうやってそんな物なおしてたのよ！」

剣帝「二対一だからね、これぐらいは許してね、後、どうやって隠してたかは秘密だよ」

剣帝はそう言うと二本の長さの違う木刀を構えた

ゼノヴィア（さつきまでとは雰囲気が変わった…）

剣帝「行くぜ…」

そういった次の瞬間剣帝の姿が消えた

ゼノヴィア「なっ!?!何処に行った!」

イリナ「隠れてないで出て来なさい!!」

剣帝「隠れてないよ、何処にもね」

剣帝は二人の後ろに回り込んでいた

ゼノヴィア「何時の間に周り込んだかは知らないがそんな場所に居るなんて自殺行為だな！」

イリナ「私達の攻撃を受けなさい！」

再度剣帝に向けて剣を突き立て切り裂こうとしたが

剣帝「危ないなあ」

劍帝にはやはり当たらなかつた

ゼノヴィア「ふっ、そう来るだろうと思つたよ！」

ゼノヴィアはそう言うのと突き立てようとした劍を振り抜いた

劍帝「いっつ…油断したか…」

劍帝の腕に軽い切り込みが入つた

ゼノヴィア「良しっ！このまま押し切るぞ！」

イリナ「ええ！分かつたわ!!」

劍帝「…………調子に…………乗るな!!」

劍帝は翼を広げ木刀に魔力を纏わせた

ゼノヴィア「何だ!?この気迫は…」

イリナ「近くに居るだけで…押し潰されそう…」

ゼノヴィア「私はまだ動けるから、私が相手だ！」

劍帝「ふんっ！」

ゼノヴィアの聖劍に劍帝の木刀が当たるとその部分が爆発した

ゼノヴィア「な、何が起きた!?!」

劍帝「はあ！」

ゼノヴィアに腹に一撃撃ち込んだ！



ゼノヴィア「グフツ……」

イリナ「ゼノヴィア!!」

剣帝「テメエも寝てな！」

剣帝はそう言うといリナの首に手刀を撃ち込んで気絶させた

イリナ「うつ……」

剣帝「あーもー……セラ様に心配されるなあ……」

剣帝は戦闘終了後に腕の傷を見ながらそう呟いた

夜鴉「カーツカツカツカツお前らしくねえなあ? まあそんだけ力が封印されてたら当たり前か」

剣帝「封印かけてる本人……いや、本神がそれ言いますか?」

夜鴉「カツカツカツそれもそうだな。あーあ、そんな事を言うから少しだけなら解放できそうだからしに來てやったのにやる気失せるなあ?」

剣帝「えっ!? そうだったんですか!? ゴメンナサイ!」

夜鴉「謝ったから許してやろう。俺は寛大だからな!!」

剣帝「有り難う御座います!」

夜鴉「で、解放前に聞きたいのだがね。そこで震えてるクズほどの力しか持っていないカス達は誰だい?」

夜鴉はリアス達を指差す

劍帝「んー……ああ、リアスさん達ですか…」

夜鴉に言われてから劍帝もリアス達の方を少し見た

劍帝「まあ、クズカスって言ってあげないで下さいな、彼等はまだ成長途中なんですから」

夜鴉「ふーんそうかい。あ、やべつあの黒猫ちゃんに怒られるわあマジベーわー時間ねえわあベーわー」

劍帝「黒猫……ああ、あの例の黒歌ちゃん……でしたっけ？」

夜鴉「そうそう。と言う事で早く頭出せ。じゃないと俺が搾り取られる性的に」

劍帝「あつ、はい、了解しました」

劍帝はそう言い頭を差し出す

「じゃあいくぜえ？セーのー！」

夜鴉の掛け声と共に轟音が鳴り響き劍帝の頭頂部にデコピンが叩き込まれた

劍帝「いったあ!!」

夜鴉「カーツカツカツカツこれで全盛期の一割は出せるだろうな」

劍帝「やつと一割ですか……（ ㄩ、 ）ハア……先は長そうだ…」

夜鴉「ここからは早いとは思いますがねえ？まつ、そろそろ行かんと本当にヤバイから行

くわ」

劍帝「了解しました。では、またお会いしましょう」

夜鴉「じゃあな！レッド！バイビー！」

空間に穴を開けて走っていく

劍帝「……………さつてつと、俺も帰るかな」

リアス「さつきの彼は誰ですか!?!」

木場「さつきの劍術は何ですか!?!」

小猫「さつき姉さんの名前を言ってみました。さつきの方と姉さんはどういった関係ですか!?!」

……………

それから夜になるまでリアス達の質問は続いた

## 第十六話 「愛ゆえに」

あらずじ

セラフオルーより休暇を言い渡された剣帝、なので、人間界の駒王学園に出向いた。丁度その時駒王学園には聖剣使いが二人来ていた剣帝と聖剣使いは偶々鉢合わせしてしまい剣帝が無意識の内に挑発をしてしまい二人の聖剣使いに戦いを挑まれる、戦闘には勝ったが切り傷を負わされてしまった剣帝……

質問攻めから開放された後

—冥界：セラフオルー邸—

剣帝（あー、やつと質問攻めから開放されたあ……中々治らねえなあ、セラ様に見つかる前に隠すか治すかしないとなあ）

剣帝が考え事をしていると扉が開かれた

セラ「剣帝くん、居る〜？」

剣帝「セ、セラ?!いきなり入ってこないでくれよ!驚くだろ!」

剣帝は即座に腕を後ろに隠した

セラ「あつ、ゴメン…ナサイ…朝は私が会議に行つてたし…帰つて来たたら劍帝君外出してたし…劍帝君やつと帰つて来たから構つて貰えるつて思つたから…」

劍帝「…俺こそスマン…いきなり怒鳴つたりして…」

セラ「ううん、良いの、私がいきなり入つたのが悪いんだし…」

劍帝「それで…何の用かな？」

セラ「え…つとね…構つて？」

劍帝「仕方無いなあ、おいで」

劍帝は傷を付けられていない右腕で手招きをした

セラ「は…い」

劍帝「よしよし、ゴメンよ、寂しい思いをさせたな」

劍帝はそう言いながら右腕でセラフォールの頭を撫でた

セラ「有り難う劍帝君、だあい好き！」

セラフォールが劍帝に抱き着くとセラフォールの左手に何かが付いた

劍帝（痛っ）

セラ「ん？何だろう…何で…何で劍帝君血が！」

劍帝「いやー、ちよつとドジ踏んじやつてね、腕を切られちゃつたんだよね」

劍帝はそう言いながら左の腕をヒラヒラと動かした

セラ「大丈夫なの!? 剣帝君にそんな傷を負わせた相手って誰!? 私が殺して来r」  
セラ「フルーがそう言っていると不意に口を防がれた、剣帝がキスをしたのだ」

剣帝「セラ、俺は平気だから…落ち着いて…ね?」

セラ「……………分かった…でも…」

剣帝「でも、何ですか」

セラ「速く傷治して、ね?」

剣帝「ああ、分かっているよ、というか、もうすぐ治るよ」

セラ「えっ? どういう事?」

剣帝の腕を見るとみるみる内に傷が消えるように治っていく

セラ「えっ!? どうなってるの? それ」

剣帝「こういう身体なんですよ。ひきましたか?」

セラ「ううん、ひかないよ、私は剣帝君のそういう所も好きになる!」

剣帝「……………有り難う御座います…」

剣帝は少しだけ泣いていた

セラ「…よしよし…良い子良い子…」

剣帝「…スイマセンが今夜は甘えて良いですか?」

セラ「良いよ、おいで…」

劍帝は泣き終わると同時に髪が黒くなっていく、そして、髪が黒い劍帝とセラフオルーはそのまま夜にまた交わっていくのだった

—その頃の夜鴉は—

夜鴉「カツカツカツ！ どうだいアザゼル君。君達もこのような恋をしなさい。」

アザゼル「出来るかあ！ あれはまだ対等な存在だから出来る訳であつてだな。俺とこいつじゃ強さとか諸々違いすぎるんだよ！」

アザゼルは一人の女性に抱き付かれながら叫んだ。

??「そんな事を言わないで下さいよ。貴方とは対等ですよ？ 例え対等でなくとも私達の愛の前には関係ない物ですよあなた。」

アザゼル「ちよつと強いくらいの墮天使とグレートレッドじゃ釣り合わないっていつてんだよ！ 解れよ！」

紅竜「そうですね。対等の存在になるために努力します!!」

紅竜は笑顔でガッツポーズをしたがアザゼルは頭を抑え溜め息を吐いた。

アザゼル「・・・これ以上強くなる気かよ。はあ。」

そんなアザゼルの姿を見て夜鴉は笑顔で指を指した。

夜鴉「このリア充め☆」

アザゼル「うつせえええ!! この状態みて何処が充実してるように見えるんだよ！ 朝は

布団の中にいてそれからずっと追い掛けられてんだよ！トイレも風呂もおまけに夜に布団のまできついついて来やがるんだぞ！おちおち趣味も出来やしねえ！」

アザゼルは捲し立てるように早口で愚痴を叫んだが夜鴉はにつこり笑っていた。

夜鴉「そのくらいで愚痴愚痴いつてんじやねえよ。俺は24時間365日同じことが起きてんだからよう。カツカツカツ」

アザゼル「は？ちよつとまで、それって今もなのか？」

夜鴉「おう。勿論だ。俺の後ろにほら、居るだろ？」

アザゼルは夜鴉の指差した方向に集中していると、うつすら人影が見える事に解るが集中が切れると人影も見えなくなった。

アザゼル「それ、本当にいるのか？」

夜鴉「おう居るぜ。姿を現しやがれペタン。」

その声に反応し、人影はくつきりと見え、やがて女性の姿になった。

アザゼル「おつおう。てか、本当にずっと一緒にいるのか？」

ペタン「勿論です。愛する者の傍に常に居たいと思うのは間違ってますか？」

紅竜「合ってると思います!!」

アザゼル「お前はちよつと黙ってる。うくん相手が良いならそれでも良いんじゃないか？相手が良いならな!!」



アザゼルは最後の一言を強調させ紅竜に気付かせようとするが紅竜はにっこり微笑んでアザゼルを見つめるだけだった。

アザゼル「いや、気付けよ!!」

アザゼルの嘆きは夜の闇へと消えていくのであった。

## 第十七話 「ペットと悪魔と神様と」

あらずじ

剣帝がセラフオルーにバレないように腕の傷をどうしようか悩んでいると扉を開けてセラフオルーが入って来る、剣帝は隠そうとしたがバレてしまい腕の傷を見られ激昂し始めたセラフオルーを宥めていた

その後すぐに腕の傷が治る瞬間を見られひかれないかと剣帝が心配しているとそれは杞憂だった、剣帝はひかれなかった事よりもその心配で泣き始めてしまい、セラフオルーに甘えるように夜に愛を確かめ合った

—セラフオルー邸：セラフオルーの部屋—

セラフオルーのベットにセラフオルーと黒い髪の男が横たわっている

??「Zooo…Zooo…ムニヤツ？」

黒い髪の男が起きると男の髪がみるみるうちに白くなっていく

剣帝（あー…：…ヤツちやったあ、しかも、途中から記憶全部無いし…）

剣帝が横に目をやると裸のセラフオルーがスヤスヤと寝息を立てて眠っている

劍帝「……………出掛けよ…仕事終わらせれるし…」

劍帝はそう言いながら歩いて行き、机の前で1分だけ止まって自分の分の仕事を終わらせた

劍帝「さてとお…何か面白い事あるかなあ…つと、グツスリと休んでくれよ…セラ」

劍帝はそう言いながら布団を掛けた

劍帝「あー、頭痛いなあ……………」

劍帝はそう言つて頭を掻きながら退室した

劍帝（取り敢えず何処に行こうかなあ…うん、遊びに行く前に適当に食べ歩きでもするか）

劍帝「行つて来まーす」

メイド，s「行つてらっしやいませ、旦那様」

劍帝「まだ結婚してませんよ！」

劍帝はメイド達にそう言つてから冥界の街に向かった

劍帝（あーもー、皆ああ言う事言うもんなあ……………）

劍帝がそんな事を考えていると腹がなつた

劍帝（うん、真面目に探そう、腹がかなり減つてきた）

—10分後—

劍帝「うん、中々やはり冥界の食べ物も旨いな」

劍帝は両手に食べ物を抱えながら歩いて行く

劍帝「うーん…セラ様にお小遣い増やして貰えるように相談しよつかなあ…」

劍帝はそう言いながら財布の中を見る

劍帝「まあ、まだ大丈夫かな、あー、旨っ」

劍帝はそんな事を言いながら歩いているとふとある事を思った

劍帝（そーいや最近ソーナ様が冥界に来てるって聞いた事無いな…うん、適当にお

菓子でも買って持って行くか）

劍帝はそう思いながら饅頭を買って転移用魔法陣を展開した

劍帝「どんな反応するかなあ…驚くかなあ…フフツ」

劍帝はそんな事を呟きながら魔法陣に消えた

― 駒王町：駒王学園前 ―

劍帝「はい、到着、さあて生徒会室に行くk…何だこの結界…」

駒王学園を覆い尽くす様に結界が張られていた

劍帝「えーっ…何これ…」

劍帝がそう言っただけで周りを見回すと上空に人影を見付けた

劍帝「あれは…ソーナ様か」

劍帝はそう言って飛んだ

劍帝「何してるんですか？ソーナ様」

ソーナ「け、劍帝さん!?何故此処に？」

劍帝「いやなんと言いますか。ソーナ様に冥界の食べ物差し上げようかと来たら学園がこうなってるって驚きました……何かあったんですか？」

ソーナ「それが墮天使と人間が結託しまして……聖劍エクスカリバーを作り直そうとしていまして……そのエクスカリバーを治す際に起こる余波で街に被害が出ないようにしておりました……」

劍帝「ふむふむ、なるほどなるほど……」

ソーナ「それでリアス達の中で戦闘をしているのですが……どうやら相手の墮天使の幹部が手強いらしくて……」

ソーナはそういうと少し不安そうに俯いた

劍帝「……結果を一部開けて貰えますか？俺が入って倒してきます」

ソーナ「えっ!?で、でも劍帝さんには関係は……」

劍帝「有りますよ。俺の主の大切な妹さんが不安そうな顔をしている……それだけで俺にとつては戦闘する理由になるんですから」

ソーナ「えっ!?……」

ソーナの顔が真っ赤になった

ソーナ「い、今、剣帝さんが大切って、私の事を大切って言うってくれた…」

剣帝「ソーナ様？」

ソーナ「は、はい？何でしょうか？」

剣帝「早く開けて下さい」

ソーナ「……どうしても行くんですか？」

剣帝「はい、行きます」

ソーナ（この顔は何を言っても曲げそうにないですね…）

ソーナ「分かりました。少しだけ結界に穴を開けますので其処から入って下さい」

ソーナがそう言った少し後に結界に一人一人分の穴が空いた

剣帝「有り難う御座います！それでは、行って来ます」

剣帝はそう言い残して結界の中に走って入って行った

— 結界内：グラウンド —

剣帝（戦ってるっぽい気配がしてるのはこの辺りだな）

木場「同志達の思いと共に僕は居るんだ！」

??「折れたああ!？」

剣帝が草むらから見たのは木場が白髪の子の剣を叩き折った瞬間だった

木場「これで君に戦う術は無くなったね」

??「ああ、確かにそうだ、だから、はい、バイにやらく」

木場の前に居た男の目の前から激しい光が放たれた

劍帝「うおっ、眩しいなあ」

劍帝が眼を開けると白髪の男は公然と消えていた

劍帝（逃げた…か）

??「ハツハツハ、聖剣は折れてしまったか」

劍帝（ん？誰だ？笑ってるのは）

劍帝が声のする方を見ると其処には空中に浮く椅子に座っている黒髪の男が居た

劍帝（あつれえく？彼奴どつかで見覚えがあるんだけどなあ）

??「オイツ、其処の草むらに隠れている奴、出て来い」

黒髪の男は劍帝に向けてそう言った

劍帝「別に隠れてなんか無かったけどな」

リアス「劍帝様!?何故此処に？」

劍帝「いやー、皆が大変そうだからね、手伝いに来た」

劍帝がそんな事を言っていると劍帝の前に木場が来て頭を下げ傅いた

木場「先日は魔王様の眷属とは知らずあの様な無礼をしてしまい申し訳有りません

！」

劍帝「良いですから。気にしない気にしない、それよりも…今は戦闘相手に集中しますよ」

??「ハツハツハツハツハツ、魔王の眷属とはこれは丁度良いお前を殺して大戦の火蓋を切つて落としてやろう」

劍帝「うつせえよ、テメエなんぞにやられるか、えーつとお…お前の名前は…前に資料で見たんだよなあ…：…そうだ！コカトリスだ！」

劍帝は思い出したように指を立てたがコカトリスと言われた相手は震えている

コカトリス「誰がコカトリスだ!!!俺の名はコカビエルだ！」

劍帝「五月蠅いぞー？コカバクア君」

コカバクア「誰だそれは!!俺はコカビエルだ！」

劍帝「あーもー、キャンキャン喧しいよ？コカイン君」

コカイン「コ・カ・ビ・エ・ルだ！」

劍帝「はいはい、分かったよ、コカ・コーラ君」

コカ・コーラ「お前…俺の話聞く気無いだろ？」

劍帝「勿論だろ、一々墮天使の話なんぞ聞くとと思うな」

コカビエル「良いだろう、ならばお前は俺のペットの餌にしてやる」



コカビエルがそう言うのと地面に穴が開けられ其処から三首の大きな犬が出て来た  
リアス「ケルベロス!?!地獄の門に居る番犬を現界させるだなんて!」

劍帝「わあい!ワン子だあ!」

劍帝はそう言ってケルベロスに向かって走って行った

リアス「け、劍帝様!?!危ないですよ!?!」

リアスがそう言ったが聞こえていないのかケルベロスに向かう劍帝

コカビエル「ハッハッハ!わざわざ自分から餌になりに行くとはな!」

劍帝「ワン子ちゃん」

劍帝がケルベロスに抱き着くと

ケルベロスA「クウーン」

ケルベロスが腹を見せてゴロゴロと転がってる

コカビエル「何!?!」

劍帝「おー、よしよし、良い子だねー」

劍帝はそう言いながらケルベロスの腹を撫で始めてる

コカビエル(一体どういう事だ、ケルベロスが一瞬で手懐けられる等…だが!今なら

ば一匹で手一杯の筈だ)

コカビエルはそう考えもう一匹出した

劍帝「あつ、もう一匹居たんだ！」

劍帝は新しく出て来たもう一匹にも抱き着いて撫で始めた  
ケルベロスB「ゴロゴゴゴロ」

ケルベロスは喉を鳴らしてる

劍帝「よーしよーし、良い子だなあ、二匹共」

劍帝はケルベロス二匹を可愛がっている

コカビエル「お前はケルベロス達に何をした!？」

コカビエルがそう叫ぶと劍帝はこう答えた

劍帝「可愛がっているだけだ、それ以外は何もしていない」

コカビエル「チツ、ケルベロス達が使い物にならないのならば俺が直々に殺してやる  
とするか」

コカビエルはそう言つて椅子から降りてきた

劍帝「あー、コカトリス君が降りてきた……ほら、ケルベロスちゃん達、向こうで遊  
んで来なさい」

劍帝がそう言うのとケルベロス達はグラウンドの端に向かった

劍帝「コレで良し……さあ、来いよ、コカビエル」

コカビエル「ようやく俺の名を呼んだか、良いだろう！」

コカビエルはそう言うのと巨大な光の槍を出した

剣帝（あー、これは…木刀じゃ無理だな…仕方無いなあ、やるぞ、ドライグ）

ドライグ 《漸くか、待ちわびたぞ！相棒！！》

剣帝 「一誠君、良く見ておきなさい、これが君の持つブーステッドギアの本当の使い方だよ」

剣帝がそう言うのと剣帝の左手に紅い籠手が現れた

コカビエル 「何っ!?何故赤龍帝の籠手（ブーステッドギア）が2つも有る!?!」

剣帝 「ブーステッドギア！バランスブレイク！」

《Boo th gear Balance breaker!!!》

剣帝の左手の籠手からそんな声がしたかと思うと剣帝の全身が赤い鎧で覆われた

剣帝 「さあ、行くぜ、手始めに三回だ」

《Boo th! Boo th! Boo th!》

剣帝の力が膨れ上がった

剣帝 「そして、これが本当の龍の息吹だ!!」

《Dragon Bless!!》

剣帝が左手を前に突き出すと其処から赤い光線が放たれた

コカビエル 「何だこの力の量は!?!」

コカビエルは光の槍を投擲したがまるで何も無かったかのようにかき消されドラゴンブレスがコカビエルに激突した

コカビエル「グフツ……」

コカビエルは血を吐いて倒れた

剣帝（終わったかな？）

剣帝がそう考えていると

コカビエル「ま、まだだ！まだ終わらん！」

コカビエルは全身傷だらけになりながらも立ち上がった

剣帝（アレ受けても立ち上がるって根性あるなあ…）

剣帝がそんな事を考えていると結界を突き破って白い何かが入り込んで来た

剣帝「ん？誰だ？」

??「ふっ、無様だなコカビエル」

ドライグ『気を付けろよ一誠、白いのが来たぞ』

一誠「白いの？」

剣帝「ああ、白龍皇か」

『この声はまさか!?ヴァーリ！気を付けろ！』

白い何者の翼から声がした

ヴァーリ「どうした？アルビオン」

白い鎧に包まれた者が反応した

アルビオン『奴は俺とドライグが共闘しても勝てなかつた者だ』

ヴァーリ「ほお？そうか…」

剣帝「んー…君等が弱いからだろ？」

アルビオン&ドライグ『『貴様（お前）が強過ぎるだけだ!!』』

剣帝「だつてさ、どう思う？ドライグ」

剣帝は自分の左手の籠手に話し掛けた

ドライグ《確かに相棒は強いな》

剣帝「そつかあ…ふうーん」

ヴァーリ「そんな事よりもだ、オイツ、お前」

剣帝「ん？俺？」

ヴァーリ「俺と勝負しろ」

剣帝「……………はい？」

ヴァーリ「お前に勝てば二天龍よりも強い事が証明される…つまり彼奴に勝つ可能性が増える」

剣帝「えー、面倒だなあ……………ん？」

劍帝はヴァーリの後ろから飛んで来ている赤髪の女性を見付けた

?? 「餓鬼、アザゼルが待つてるから喧嘩するなら用事が終わってからにしろ」  
そう言つて赤髪の女性はヴァーリに対して怒る

ヴァーリ 「しかし少しくらいは」

?? 「帰るぞ。アザゼルが待つてる」

ヴァーリ 「い、いやしかしだな」

?? 「帰るぞ。アザゼルが待つてる」

ヴァーリ 「・・・ああ、解つた」

ヴァーリは赤髪の女性にそう言われ続けて渋々帰り始める

劍帝 「…………グレートレッド…」

劍帝 (多分あの方の仕業だろうな、というか、それ以外あり得ないし)

劍帝がそう呟きながらそう考えているとそれから声がした

夜鴉 「カーツカツカツカッ！」

夜鴉が空からゆつたりと降りて来た

劍帝 「やはり、貴方の仕業ですか。夜鴉様」

夜鴉 「おっ？解つてた？」

劍帝 「分かりますよ。グレートレッドをああいいう姿に出来るのは貴方位ですし」

夜鴉「カツカツカツ！だろーな！あいつはアザゼルに一目惚れしたらしいからな！だから手伝ってやったのさ」

劍帝「……そうですか……でもあの娘……いや、何でも無いです」

劍帝はそう言いながら遠くを見た

夜鴉「命長し、恋せよ乙女つてな！」

劍帝「そうですか……さてと……俺は帰りますかねえ。可愛い手土産出来ましたし。おいで！」

劍帝は二匹に向けて手招きしたすると二匹が勢い良く劍帝に突っ込んで来た

夜鴉「おっ？ケルベロスかあ？」

劍帝「はいな、コカビエルが出したのを手懐けまして」

夜鴉「いいなあ、ロツキーを脅しげぶんげぶん。説得して俺も貰いに行こうかな？」

劍帝「可哀想に……まあ、良いか、それじゃ俺はこれで……良く考えたら家入れないじゃん二匹が……」

劍帝が困り果てていると

夜鴉「小さくしてやろうか？」

夜鴉がそう提案した

劍帝「あつ、はい、お願いします」

夜鴉「でもなく、何もしないでっつてのはなあ〜」

夜鴉はそう言っただけで考え始めた

剣帝「何をしろと？」

夜鴉「う〜ん、よし！今度アザゼルに会ったら全力で弄れ!!」

剣帝「はい」

夜鴉「ここをこうしてこうやって〜、はい、終わり〜」

夜鴉がそう言っただけでケルベロスを見るとケルベロス二匹が小さくなった

剣帝「有り難う御座います」

夜鴉「んじや、アザゼルを弄ってくるわ〜じやあねえ〜」

剣帝「あつ、はい」

夜鴉「ジユワ!!」

夜鴉はそう言っただけで夜の闇に飛んで消えた

剣帝（ウル○トラ○ン……）

剣帝がそんな事を考えているとケルベロスが剣帝の手を舐めた

剣帝「おー、よしよし、帰ろうねー、良い子良い娘」

剣帝はそう言っただけで転移用魔法陣を展開した

剣帝「じゃあ、またね〜」



劍帝達はそう言っ  
て魔法陣に消えた

リアス「劍帝様は相  
変わらず嵐の様な  
方ね…」

オカ研一同「…」  
「確かにそうです  
ね…」

オカ研一同は呆然  
と立っていた…

## 第十八話 「神の遣い（パシリ）」

あらすじ

暇を持て余した剣帝が冥界の街を散策後、ソーナに土産を持って行き、その際にココカビエルを倒しケルベロス二匹をペットにして冥界へと剣帝は帰った

—ココカビエルの起こした戦闘より3日—

剣帝「：Z z z z：Z z z z：」

剣帝が自分の部屋で寝ていると剣帝に向かって走って行き飛び掛る2つの影が：剣帝の腹の上にダイビング

剣帝「ゲホオ!!な、何だあ!?!敵襲か……何だお前達か」

剣帝に飛び掛かった先日剣帝が飼いだめたケルベロス達だった

剣帝「ふう…全くわんぱくな子達だなあ、犬菜（けんな）と狗丸（いぬまる）は」

剣帝がそう言いながら撫で始めた、するとケルベロス達が剣帝の手を舐めたり転がって腹を見せたりし始めた

剣帝「どうしたんだ？何か用があつて俺を起こしたんじゃないのか？それともこれが

目的だったのか？」

劍帝がそう言いながら両手を使い二匹を撫でていると二匹は何かを思い出したかのようになり立ち、劍帝の袖を一齐に引っ張りはじめた

劍帝「うわわつと、何だ？散歩に行きたいのか？」

狗丸「ウオン！」

そうだと云わんばかりに狗丸が吠えた

劍帝「そうかそうか、それじゃあ、行くとしようか」

劍帝は昨日手に入れておいた犬の散歩セットを手に持ち二匹にリードを付け、引き連れて街への向かった

劍帝「いやー、動物の散歩なんて久々だからなあ、楽しみだ」

そう言つて劍帝は冥界の街へと向かった

劍帝「ふんふーん♪」

劍帝は上機嫌で二匹と散歩をしていると

??「だからよお、何時迄アザゼルの所に居るつもりだ？ヴァーリ」

ヴァーリ「アザゼルの元にはグレートレッドが居るからな、奴は俺が倒す」

ヴァーリと呼ばれた白髪の男とそう呼んだ黒髪の男が並んで歩いてた

狗丸「ガルルルル」

犬菜「グルルル」

劍帝「コラコラ、唸るんじや有りません」

劍帝はそう言つて二匹を抱きかかえて物陰に身を隠した

劍帝（とつとと通り過ぎてくれよ、面倒はゴメンなんだ）

劍帝はそう願つたが、その願いを裏切るように2匹が唸り続け：

ヴァーリ「何だ？この唸り声h……………」

劍帝「あつ……」

ヴァーリと劍帝は目を合わせてしまった

ヴァーリ「貴様は先日のもう一人の赤龍帝！」

ヴァーリはそう言いながら後ろに少し飛び、距離をとつた

劍帝「あーもー、面倒な事になつたなあ」

劍帝はボリボリと後頭部をかきながら隠れていた物陰から出て来た

ヴァーリ「何故隠れていた？」

劍帝「お前が喧嘩吹っかけてきそうだから、俺は面倒が嫌いだ」

劍帝がそんな事を言っていると劍帝の後ろから声がした

黒歌「やつほー、劍帝君だっけ？何してるの？」

劍帝「おや、こんにちは、黒歌さん、いやはや、この前軽く会つただけのヴァーリに

絡まれてます…（ハ、ハ）ハア…」

黒歌「彼が呼んでたよ？きやつ！彼とかいっちゃった！」

黒歌はそう言つて恥ずかしそうにしているが剣帝は謎だと言う顔をしている

剣帝「彼？……」

剣帝（黒歌さんがあんな事言いそうな相手……ああ、夜鴉様か）

剣帝「了解しました……あつ、場所分かんねえ…」

黒歌「教会でぼーつとしてるってさ」

剣帝「教会……ああ、彼処かな」

剣帝はそう言いながら飛ぼうとしたが、狗丸達が鳴いたので屋敷に飛んで行つた

剣帝「それじゃ、大人しくしてろよ？狗丸、犬菜」

狗丸「ウオン！」

犬菜「ワン！」

剣帝「良い子だ」

剣帝はそう言つて二匹を撫でてから飛んで行つた

——駒王町：教会——

剣帝「夜鴉様——？」

夜鴉「ふわあ」

劍帝「寝てました？」

夜鴉「お前が遅いからね」

劍帝「スイマセン、ところで、何の御用でしょうか？」

劍帝はそう言つて謝つた

夜鴉「いや、ちよつとこの手紙をサーゼクス君に届けてほしいんだよ」

夜鴉は劍帝に手紙を手渡した

劍帝「あつ、はい、了解しました」

夜鴉「あつ、ちよいまち、ハーデスへこの箱を渡して」

夜鴉は追加で劍帝に箱を手渡した

劍帝「これもですか…」

夜鴉「いやー、あいつがまさかマスターボール欲しがるとはね」

劍帝（何捕まえる気だろう…）

劍帝「こ、これでお終いでしょか？」

夜鴉「そうそう。あとこれね。ミカエル君にこの箱を送つてね」

劍帝「ミカエルつて…：…天使じゃないですか…」

劍帝は少し嫌そうな顔をした

夜鴉「そうだぜ」

劍帝「天使に届けるのかあ……」

劍帝（まだ敵だからなあ……調停結ぶ前だしなあ……）

夜鴉「何？嫌なの？あのヴァーリ君との喧嘩を止めてあげた俺のお願いを断るの？」

劍帝「行きますよ。夜鴉様からの頼まれ事ですし」

夜鴉「じゃあ頑張つてねえ」

黒歌「頑張つてねえ♪」

劍帝「分かりました」

劍帝はそう言いながら魔法陣を展開し、其処に消えた

## 第十九話 「廻る神の遣い」

あらすじ

コカビエルからケルベロスを貰った（奪った）剣帝、その二匹と散歩中にヴァーリに見つかり絡まれるが黒歌に助けて貰う

その後夜鴉に呼び出された剣帝は夜に出された場所に向かう、其処で夜鴉に届け物を頼まれる

剣帝は自分の部屋で少し頭を抱えていた

剣帝（面倒さで考えると一番はミカエルさんだよなあ…でも、距離的にはハーデスさんかなあ…となると、最初は軽く終わらせられそうなサーゼクス様かなあ……うん、サーゼクスさまにしよう）

剣帝「さつてつと、行くか…その前にちよいと武装強化しよ」

剣帝はそう言いながらまた考えはじめた

剣帝（投擲用のナイフは用意してるし…近接のもある…後はあ…バレ難い暗器系が欲しいところだが…うーむ……そうだ！アレにしよう）



劍帝はそう言いながら何かを魔力で創造し、その後足下に転移用魔法陣を展開しすぐに消えた

—サーゼクス邸前—

劍帝「はい、到着…どうやって入るっかなあ」

夜鴉「派手に行けよ？」

夜鴉はトランペットのような銃を持ち出し劍帝の後頭部に突きつけた

劍帝「何で居るんですか？しかも、ぴったり俺が来たタイミングに……」

夜鴉「だって面白いだろ？このタイミングで現れて脅してるとてさ？」

さらに強く押し付けた

劍帝「……………（ハ、ハ）ハア…了解しました。よっ！」

扉を蹴り飛ばした

夜鴉「…良かった。もしも、行かないって言うならこいつを使わないといけない

所だったぜ。」

夜鴉はトランペットの姿の銃とある鍵を見つめて言った

劍帝「夜鴉様の持つてる物には警戒するのが普通ですからね…」

夜鴉「まあ、もしも派手にしなかったらセラフオール領にこいつらを呼び出していたからね」

沢山の鍵を劍帝に見せてにこりと夜鴉は笑った

劍帝「おー、怖や怖や、そんじやら、行って来ます」

そう言つてサーゼクス邸に劍帝は入つて行つた

夜鴉「ふふふ。行つてらつしやい。さあてこいつで黄昏とか言つてる奴等をぼこしに行くかね♪」

夜鴉は劍帝が入るのを見届けると空間に穴を開けて鼻歌混じりに歩いて行つた

劍帝「あー…サーゼクス様にどう言い訳しよう…」

溜め息混じりで劍帝は進んで行く

サーゼクス「今の大きな音はなんだい!？」

サーゼクスが屋敷から出て来た

劍帝「おや、どうも、サーゼクス様」

サーゼクス「ああ、劍帝君か、丁度良い今の音をさせた犯人誰か分かるかい？」

サーゼクスがそう問いかけると劍帝はこう答えた

劍帝「スミマセン、友人に脅されて俺がやりました」

サーゼクス「えっ?」

劍帝「友人に音も無く後ろに付かれまして頭に銃を突きつけられました…それで致し

方無く…ゴメンナサイ!!」

サーゼクス「そ、そうだったのか…うん！脅されたのだったら仕方が無いね」  
劍帝「という事は…」

サーゼクス「扉を元通りにしてくれたら許してあげよう」

劍帝「有難う御座います！後はいこれ、お届け物です」

劍帝はそう言いサーゼクスに手紙を渡した

サーゼクス「ん？ああ、手紙か、有難う」

劍帝「いえいえ、それでは私はこれで」

劍帝は扉を3分で修復してから飛んで行った

サーゼクス「セラに聞いた通り仕事が速い…」

劍帝（次は…：…ハーデスさんかあ…：面識無いなあ）

劍帝はそう考えながら冥界を通り過ぎ冥府へ飛んで行った

劍帝「確か聞いた話ではこの辺りに…：…アレか？」

劍帝の視線の先には大きな神殿のような建物があった

劍帝「ものは試しだ行ってみるか」

劍帝はそう言うのと神殿に向かって飛んで行った

劍帝「うーん…誰か居るかなあ」

?? 『フォツフォツフォツ、何者じゃ？お主は』

神殿内に声が響く

劍帝「俺は悪魔の者だが、ちよいとハーデスさん宛に届け物を預かつてる…中身は…  
確かあ…『マスターボール』だったかな？」

??『ほほお、つまりはお主が夜鴉様の使いという訳じやな』

その声が出た後に神殿の奥から一人の骸骨のような人物(?)が現れた

劍帝「貴方が、ハーデスさんですか？」

ハーデス『うむ、如何にも、儂がハーデスじや』

劍帝「それじやあ、はい、これが届け物です。では！」

ハーデス『ああ、ご苦労じやったな』

劍帝は荷物を渡すとそそくさと神殿から飛び去った

ハーデス『悪魔…だけじやないのお、アヤツは色々と”混ぜって”おるな』

劍帝「(、)ハア…神様系と会うのは面倒が起きないか心配になる…さてはて、最  
後だな…」

劍帝は面倒そうに飛んで行く

劍帝(あー、ミカエルとかクツソダルい…会うのも今はまだ嫌なんだけど…まだ敵  
じやん、会いたくない相手にも程がある……けどまあ、夜鴉様からの頼みじや仕方無い  
か、とつとと終わらせてセラ様の居る屋敷にかーえろつと)

劍帝「という訳で、速度：音！加速：爆！」

劍帝は音速で飛びながら爆破を自分の後ろで起こして加速し始めた

劍帝「着くまで1分つて所かな」

—1分後：天界—

劍帝「はい、到着つと」

劍帝は着いてから即座に周りを見回した

劍帝（天界だからなあ、天使だらけだからなあ：警戒は必要だもんな）

劍帝は多少警戒しながら飛んでいたが

天使A「何故悪魔が天界に来ている！」

アツサリ見つかつた

劍帝「な、何でバレた!?!」

天使A「バレない訳がないだろう！そんな人間界に有りそうな作り物の雲で」

劍帝はモコモコとした雲のハリボテに隠れながら飛んでいた

劍帝（バレないと思つたんだがなあ）

劍帝がそんな事を考えていると天使がこんな事をぼやき始めた

天使A「くっ！見知らぬ妙な格好をした奴等を相手した後には悪魔も来るだど！」

劍帝（は？妙な格好した連中？）

劍帝がその言葉を聞いて疑問に思いながら周りを見回すと所々壊れていた

劍帝（あー、あの壊した形跡は……あの方達か…）

劍帝の頭に夜鴉の姿がよぎった

劍帝（コイツ等も災難だったなあ、同情しないけど…）

劍帝がそんな事を思っていると天使は

天使A「いや！ 奴等より悪魔一匹の方がましだ！ ごみ収集車で吸い込まれたり妙な剣からディスクを飛ばしてこないだけ安心だ！」

と言いながら劍帝に顔と意識を向けた

天使A「悪魔一人とはいえ警戒は必要だからな……」

天使Aはそう言い笛のような物を吹いた

劍帝「……なあんか嫌な予感が」

劍帝がそんな事を言ったのも束の間、天使Aの後ろから10人以上の天使達がやって来た

天使B「どうした!?! 敵か？」

天使A「ああ、悪魔が一匹でやって来ていてな」

天使C「さっきの仲間かもしれないから、警戒にといい訳か」

天使A「そう言うわけだ！ 行くぞ！」

天使達 「「「「「「おぉー!!」「」」」」」

劍帝「（ハ、ハ）ハア……うっせえなあ、ワラワラワラワラと集まってギャーギャー騒ぎやがってよ」

劍帝（まあ、此処で殺すと後々の調停とかに響きそうだからな、気絶送りにするか）  
劍帝はそんな事を考えながら敵の方を向いた

天使A「死ねえ！」

天使Aが光の槍を持って飛び込んできたが

劍帝「うっせえ！」

光の槍を難なく躲して天使Aの顎に一撃を加えた

天使A「ガッ……」

かなり速度が乗ったのか、天使Aは顎の一撃で気絶してしまった

天使B「Aがやすやすと倒された！お前達！個々では掛からず多人数で抑えるぞ！」

天使達 「「「「了解!!」「」」」」

天使達はそう言つて三人同時や四人同時に光の槍を突き立てようと飛び込んできた  
り光の槍を投げたりしたが

劍帝「うぜえって」

劍帝は飛び込んで来た天使の内一人の頭を掴んで他の天使の顔に蹴りを打ち込んだ

り天使の首を足挟み地面に叩き付けたり飛んできた光の槍を手で弾き飛ばしたりした

天使G「我々を素手で倒す事はおろか光の槍を手で弾くだなんて…ば、化物…」

剣帝「ああ？俺が化物だあ？今更かよ」

剣帝がそんな事を言いながら天使Gの方を向くと剣帝達の頭上にまばゆい光が

??「貴方はあの時二天龍を相手とり大立ち回りを行った方ですね」

剣帝に声を掛けたのは金色の翼を持つ天使だった

剣帝「…やっとお出ましか…つと、口調は戻しといた方が良いかな」

剣帝「ええ、その通りです。貴方はミカエルさんで間違いはないでしょうか？」

そう剣帝が尋ねると

ミカエル「はい、確かに私がミカエルです」

剣帝「ふむ…では先に謝っておきます。申し訳御座いません」

ミカエル「はい？それはどういう事です。かっ!？」

剣帝は素早くミカエルに近付くと鳩尾に一撃殴りを撃ち込んだ

ミカエル「な、何故この様な事を…」

剣帝「ふう…スミマセン、知り合いにパシられた上に届け物を持って来ただけで天使

にあんな仕打ちをされましたので少々頭に来まして…」

ミカエル「そ、そうでしたか…それは申し訳有りません」



ミカエルは腹部を抑えながら劍帝に謝った

劍帝「いえいえ、それとはい、これがお届け物です」

劍帝はミカエルの前に木箱を置いた

ミカエル「あ、有難う御座いました……」

劍帝「それでは僕はこれで……」

劍帝はそう言うのと天界から飛び降り冥界へ帰った

天使G「ミ、ミカエル様、先程の悪魔は何者なのですか？」

ミカエル「先程の彼は大戦の時、二天龍の争いに割って入り、二天龍を斃した張本人だよ」

天使達「……え、ええー!? そ、そんな相手なのに我々は一人大りとも命を奪われて居ません!」

ミカエル「恐らく彼が死なないように加減をして下さったのでしよう」

天使G「そ、そうだったんですか……」

—冥界：街—

劍帝「あー、マジで疲れたあ……早う帰って寝よう……」

劍帝はそう呟きながら街を歩いて屋敷に帰った

## 第二十話 「切り札」

あらずじ

神（夜鴉）にパシられた劍帝は口ではうだうだと言いながらキチンと運ぶ物を運んでいた、だが、3つ目宅配先の天界にて下つ端の天使達に攻撃を受け、殺さないように加減をしているとミカエルが上から降りてきたので腹いせ代わりに一発腹部に叩き込んでから帰宅した劍帝

劍帝が天界より帰還してから一日後

—セラフオール邸：劍帝の自室—

劍帝「あー、昨日少し暴れたからかなあ、ふあーあ、ちよいと眠い…」

劍帝はそんな事をボヤきつつ目を擦りながら書類を片付けて居た、すると

セラ「劍帝君！駒王町に行くよ！」

劍帝「えっ!?はいっ!?えっ!?し、私用ですか?それとも仕事ですか?」

セラ「仕事で行くの、墮天使総督と天使のリーダーとの会談なんだって、眷属を連れて行っても良いらしいから劍帝君も行こっ!」

劍帝「で、でも、書類が……」

セラ「うっ……うっ……劍帝君が行かないなら休んじやうく!!! 会談なんて知らない! 天使も墮天使も私が全部滅ぼしてやるんだからあ!!」

劍帝「………ハア……分かりましたよ。行きますよ」

劍帝は呆れながら書類を全て片付けて立ち上がりセラフォルーに近付いた

セラ「やつた! それじゃ、行こっか、劍帝君」

劍帝「………はい」

劍帝が魔法陣を展開し、劍帝とセラフォルーは一緒に中に入った、セラフォルーは劍帝の腕に引っ付きながら

劍帝「そういや、会談の場所を聞いてませんでしたね」

セラ「駒王学園だつて」

劍帝「また彼処ですか」

劍帝達はそんな会話をしながら轉移した

— 駒王町：駒王学園前 —

劍帝「はい、着きましたよ。セラ様」

セラ「有り難く、劍帝君」

劍帝「あのお……スミマセンが目立つので少しだけ離れて頂けませんか?」

セラ「えっ…剣帝君に嫌われたあ〜…」

剣帝「……………代わりにと言ってはなんですが。手を繋ぎますから…」

セラ「それなら良いよ！」

剣帝とセラフォルーは仲良く手を繋ぎ学園に入って行った、そして、剣帝の案じていた通りに目立った

男子A「お、お名前を聞かせて頂けませんか？」

女子A「スイマセーン、一緒に写真撮らせて貰っても良いですか？」

セラフォルーの周りに男子が、剣帝の周りに女子が集まった

剣帝「あの、写真はちよつと」

セラ「私はセラフォルー・レヴィアタンだよ！レヴィアたんって」

剣帝「とつとと行きますよ！」

剣帝が半ば強引にセラフォルーを引つ張って行く

セラ「も〜、何で引つ張るの？名乗ってる途中だったのに」

セラフォルーがそうやって話し掛けると剣帝はこう返した

剣帝「セラ様？今目立つと後々での会談が面倒になります。それに…アイツ等の態度が…気に入らなかつんです。セラにちよつかい出してらようで…」

剣帝は伏目気味にそう答えた

セラ「もく、劍帝君つて結構ヤキモチ妬きなんだね」

劍帝「……………／＼／＼」

劍帝は執事服の内側から狐面を出すと顔に被った

セラ「ちよつと待って!?!それどうやって其処に隠してたの!?!」

劍帝「別に良いじゃないですか。ほら、急ぎますよ」

劍帝は逃げるように足早に歩いて行く

セラ「待って! 劍帝君、ねく、答えてよく、ねく、劍帝君つてばく」

(数分後にはキッチンと狐面を外して服の内側におおしました)

劍帝「会谈場所は此処みたいですね」

セラ「えっ? うん、そうみたいだね」

劍帝「おや? どうしました? セラ様」

セラ「な、何でも無いよく?」

劍帝「そうですか」

セラ(やっぱり劍帝君の服の中がどうなってるか気になる…: どういう構造になってるんだろう…)

セラフオルーがそんな事を考えて居るが、そんなのお構い無しに劍帝は部屋の扉を開けた

——一方その頃三種会谈襲撃予定の待機中カオスブリゲードは——  
夜鴉「やつほーカテレアちゃん♪」

カテレア「ひい！なっなんで貴方が此処に！」

カテレアと呼ばれたメガネの女性は怯えたような反応をした

夜鴉「いやー、面白そうな事をしてるなあつてね」

カテレア「貴方も手伝つてくれるのですか？」

期待を含むようにそう尋ねたが

夜鴉「そんなわけないじゃん。でも面白い事を伝えに来たよ。」

カテレア「えっ？」

夜鴉「もしもこの作戦に失敗して逃げて帰ってくるような事があれば君の○○○を  
してあげるから覚悟するようにね」  
×××

夜鴉は笑顔でそう告げた

カテレア「ひい！」

驚くように、いや、怯えるように後ろに下がった

夜鴉「じゃあね〜♪」

夜鴉は鼻歌交じりに何処かへ消えた

カテレア「まっ！待って！ねえ！ちよつと！行っちゃった。」

―場面は駒王学園へ戻る―

劍帝（あーもー、かなりヴァーリに見られてるよ…）

セラフォルの後ろに立っている劍帝をヴァーリがずっと見ている

?? 「どした、ヴァーリ、アイツが気になるのか？」

茶髪の中年男性がヴァーリにそう尋ねた

ヴァーリ「ああ、奴はアルビオン曰く、二天龍よりも強いからな」

?? 「何？二天龍よりも強いだと…」

ヴァーリ「お前がそこまで驚く必要はないだろう、アザゼル、お前の側にはグレート・レッド」

アザゼル「あー、待て待て！その名を呼んだら恐らく来るから」

アザゼルと呼ばれた男性は驚きながらヴァーリの声を遮った

劍帝（あつ、何か向こう（幻想郷）に居る時の俺と同じ感じがするなあ…夜鴉様の犠牲者か…）

劍帝がそう考えると少し頭痛がした

サーゼクス「では、これからは三種族協力関係を結ぶという事で宜しいかな？」

アザゼル「ああ、俺は構わねえぜ」

ミカエル「私もそれで構いません」

三人がそんな会話をしているとヴァーリが窓に近付いて  
ヴァーリ「フツ、遂に天使や悪魔と手を組んだか」

アザゼル「何してんだ？ヴァーリ」

剣帝「……!!セラ！ソーナ様！」

剣帝は室内に居たセラフォルとソーナを翼で近くにまで引き寄せた

セラ「えっ!?えっ!?きゅ、急にどうしたの？剣帝君」

ソーナ「い、いきなりどうしました!?剣帝さん」

剣帝「良いからジツとして下さいね」

剣帝はそう言いながら魔力で作られたバリアを目に見えるレベルで展開した、その次の瞬間周りに居た力の弱い悪魔や天使の動きが止まった

セラ&ソーナ「えっ!?これどういう事なの（ですか）？剣帝君（さん）」

剣帝「要するに彼が裏切ったって事です。そうだろう？ヴァーリ君よお」

ヴァーリは白龍皇の翼（デイベインデイベイディング）を展開し窓から外に出て行つた

ヴァーリ「そういう事だ、俺は禍の団（カオス・ブリゲード）に所属する」

その時に空に見えた魔法陣から次々と魔術師らしき者達が現れて来た

剣帝「ふうん…セラ様達は此処で待って下さいね」



剣帝は二人に向けてそう言った

ソーナ「えっ、でも、それじゃあ、剣帝さんは…」

剣帝「俺は大丈夫ですよ。ね？セラ様」

剣帝は笑顔で二人にそう言っただけで空に向かって飛んで行った

セラ「あっ…：…頑張ってね…」

剣帝の背中を魔力の盾の内側から見送った

剣帝「さつてつと、数が多いな…：…いっちょ吹き飛ばすか」

そう言った剣帝の周りに小さな炎の玉が出て来た

剣帝「行け」

その炎の玉が魔術師達に向かって飛んで行き

剣帝「弾けろ」

高温と共に爆発を起こした

魔術師「グッ…：…」

剣帝「ふうん、それを耐えるんだったら！」

剣帝は大きな火炎弾を凝縮した

剣帝「ゾンネ・エクスプロージョン!!」

セラ「剣帝君！それは…」

劍帝「ver弱火！」

劍帝がそう言いながら凝縮した火炎弾を敵に向けて投げ飛ばすと…敵に当たる寸前で周りを巻き込んで大爆発を起こした

劍帝「ふう…ざつとこんなもんか」

魔法陣から出て来ていた魔術師は一人残らずその一撃で消し飛んでいた

ヴァーリ「やはりお前は強いな！」

ヴァーリはそう言いながら全身に白い鎧を纏った状態で劍帝に向かって行った

劍帝「ふうん、来るんだ、ヴァーリ君、それなら此方も相応の対応をしよう、Ba

anceBreak」

劍帝がそう言うのと左腕に赤い籠手が現れ、其処から声がした

ドライグ《ブーステッド・ギア、balancebreakerz!!!》

その声のすぐ後に劍帝は赤い鎧に包まれた

劍帝「さあ、来いよ」

ヴァーリ「はあ！」

ヴァーリが殴り掛かると劍帝は右腕で対応した

アルビオン・ドライグ《Divide》

ヴァーリ「何!?何故お前がデイバインデイバイディングを使える！」

劍帝「理由は…教えないよ」

ヴァーリ「ならば無理矢理聞き出してやろう!」

そう言った二人は空中で周りへの被害を考えずに飛び回りながら戦闘し赤と白の光の様に遠くからは見えた

— 駒王学園：三種会谈現場 —

セラ「綺麗…」

セラフォルーはヴァーリと劍帝の戦闘を遠くから見てもう眩いた

??「では、それが遺言ということで宜しいですね?セラフォルー」

セラ「えっ?…:…あ、貴女h」

セラフォルーが何かを言い掛けてると??が爆発を起こした

— グラウンド：上空 —

それを見た劍帝は

劍帝「セラ!!!」

全力で爆発が起きた地点に飛んで行こうとしたが

ヴァーリ「戦闘中には余所見とは余裕だな」

それを遮る様にヴァーリが劍帝の前方に現れた

劍帝「邪魔だ、退けえ!!」

ヴァーリ「ならば無理矢理退けてみる！」

劍帝「だったら、お望み通りそうしてやるよ!!」

劍帝とヴァーリは拳を同時に突き出し拳をぶつけ合った

— 駒王学園：三種会谈跡地 —

爆発が起きた地点には魔力で構成された防御結界が張られていた

??「三種族のトップ共同で防御結界、何と見苦しい」

サーゼクス「どういうつもりだ、カテレア」

サーゼクス達の視線の先には褐色の肌の眼鏡を掛けた女性が立って居た

カテレア「単にこの会谈のまさに逆の考えに至っただけです。神と魔王が居ないのな

らば神と魔王が居ないのならば、この世界を変革すべきだと」

セラ「カテレアちゃん！辞めて！どうして…こんな…」

カテレア「セラフォルー、私からレヴィアタンの座を奪ってにおいて良くもぬけぬけと

…」

セラ「私は…」

カテレア「安心なさい、今日この場で貴女を殺して私が魔王レヴィアタンを名乗りま

す」

劍帝「させるかよ、そんな事を」

剣帝が一直線に魔王達とカテレアの間に落ちてきた

カテレア「貴様は誰だ！」

剣帝に向けてそう問いかけた

剣帝「俺は妖悪剣帝、セラフォル・レヴィアタンのクイーンだ」

アザゼル「オイッ、赤龍帝」

剣帝「何だ、アザゼル」

アザゼル「ヴァーリはどうした？」

剣帝「奴なら俺の魔法で数十キロ先を飛んでる最中だ」

—少し時を遡り—

ヴァーリ「ハハハッ！どうした！俺を退けるんじゃないのか！」

ヴァーリはそんな軽口を叩きながら剣帝と戦闘していた

剣帝「良い加減：調子に：乗るな！」

ヴァーリ「おお、また力が上がったぞ、アルビオン」

アルビオンへ余り挑発するな、ヴァーリ、奴の真の力はまだ計り知れない

ヴァーリ「フッ、この程度なら幾ら赤龍帝で強化されようが何とも無いさ」

ヴァーリはそう言つて一瞬、瞬きをした、それが命取りになった、その一瞬の内に剣

帝はヴァーリの至近距離にまで近付き

劍帝「遙か彼方へ飛んで行くが良い、イグニッション・エクスプレス（爆豪炎華）！」  
ヴァーリ「しまっ……」

零距离で魔法を放ち、大爆発を起こしながら進む光弾がヴァーリに引っ付きながら  
ヴァーリを遠く彼方に吹き飛ばした

ヴァーリ「グフツ……」

劍帝「ふう、障害の排除を終了、セラ！」

ヴァーリを吹き飛ばした後直ぐにセラフォールの元へと飛んで行った

——回想終了——

劍帝「つて、訳だ」

アザゼル（あのヴァーリを一撃で……何もんだ？コイツ）

アザゼルがそんな事を考えていると突然校内放送が流れ始めた

夜鴉「ピーンポーンポーンポーン！ねえ！聞こえてる？聞こえてるよね？僕だよモノ  
クm夜鴉だよ！カテレアちゃん。きちんと見ててあげるからねえ」

その放送を聞き劍帝がアザゼル達の方からカテレアの方に向き直るとカテレアは震  
えていた

劍帝（ふうん、夜鴉様の犠牲者か……まつ、今回は同情も何もしないがな）

カテレア（勝たないと……またあんな目に……）

カテレアはそんなふうな事を考えながら剣帝を睨み付けた

剣帝「さあ、来いよ旧魔王」

カテレア「負けれられない：負ける訳にはいかないのよ！」

カテレアはそう言いながら自分の周りに複数の魔法陣を展開し其処から蛇の様な攻撃を仕掛けた

剣帝「ウザイ！」

剣帝は手を袖の中に入れ、代わりに糸の付いたクナイの様な物を袖口から伸ばしそれで蛇の様な攻撃に対応した

カテレア「もうあんなお仕置きは嫌なの!!」

カテレアは更に魔法陣を展開し攻撃した

剣帝「ふうん、それなら」

ズボンの裾からも袖口から出ている物と同じものを出しまた攻撃に対応した

剣帝（・ユ・）チツ、防ぐ事なら難なく出来るが：決定打が足りないな：どうにか：ん？）

剣帝はカテレアの後ろにとある人物を見つけた

夜鴉「剣帝君、プレゼントだ。それを使ったまえ」

そう言つて夜鴉は剣帝に向けて特殊なベルトと黒いメモリの様な物を投げ渡した

劍帝「おっと…これは！…有り難う御座います。これでようやくコイツを…」

劍帝は渡されたベルトを腰に付けた、そのベルトの形はバツクルの部分が片側だけ上に突出しており其処に何かを差し込めそうな形をしていた

劍帝「カテレアよ」

カテレア「何かしら？」

劍帝「どうやら切り札は常に俺の元へ来るようだぜ」

カテレア「はっ？それはどういう…」

劍帝「こういう事だ、行くぜ、むみよ…いけね何時もの癖が…」

そう言った劍帝は自分の手の内に有るメモリの差し込む部分のような場所の付近を押し、すると

メモリ《《ジョーカー!!》》

劍帝「変身！」

劍帝はそう言ってベルトに黒いメモリを差し込み、出っ張り部分をメモリごと弾いた、すると、出っ張り部分が斜めに倒れ

ベルトへ《ジョーカー!!》

という音声がベルトから鳴り響いた、すると、劍帝の全身が黒いライダー姿に変わった



剣帝「さあ、お前の罪を数えろ」

剣帝はカテレアの方を指差すようにしてそう言い放った

カテレア「フンツ、私が数えるべき罪なんて、そんな物は有りはしな*i*…」

カテレアがそう言っている途中からカテレアに怒気が向けられた

剣帝「数えるべき罪は無い？ テメエは何をほざいてやがる…テメエは今の所俺の眼の

前で3つ、罪を犯しているぞ」

その怒気は剣帝から放たれているものだった

剣帝「まず一つ目は俺と敵対した事だ」

剣帝はそう言いながらカテレアに向かって歩みを進める

剣帝「そして、ふたつ目は三種会談現場を襲撃した事だ」

カテレア「ひっ…」

カテレアは近付いて来る剣帝の怒気に気圧され動けなくなってしまった

剣帝「そして、3つ目は…」

黒い姿に変わった剣帝の左手のみ赤い籠手が再度現れた

ドライブ《BoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBooth

BoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBoothBooth

Booth》

劍帝「俺の前で俺の大切なセラを殺すと公言した事だ!!」

ベルト「ジョーカー!! マキシマムドライブ!!」

劍帝「ライダーパンチ」

ドライブ《トランスファー!!》

劍帝は右手でカテレアにボディブローを叩き込んだ

カテレア「ガッハッ!!」

そして、カテレアはそのまま数十メートル吹っ飛んで行った

劍帝「ハア…雑魚が…」

劍帝はそう言いながら変身を解除しセラフォルー達に向かって歩いて行くと、セラ

フォルーが走って近付いていった

セラ「劍帝君! カテレアちゃんを何で殺したりしたん」

セラフォルーはそう言って劍帝の胸を叩いた、が

劍帝「殺しちやいませんよ、セラ様は助けようとしたでしょう? だから、殺しちやいませんよ。まあ、かなりの重症ですし。動けないとは思いますがね」

セラ「えっ…劍帝君、良いの? あんなに怒ってたのに…」

劍帝「俺の感情より主の願い、主の思いが優先ですから」

セラ「有り難う! 劍帝君!!」

セラフオールはそう言いながら剣帝に抱き着いた

剣帝「おっととつと、危ないですねえ」

その後問題も無く会談は終わり、三種族は和平を結んだ

## 第二十一話 「力の代償とオシオキ」

あらすじ

事務作業中セラフォルーに呼ばれ三種会談に参加した剣帝、其処で起きたヴァーリの裏切りとカオスブリゲートの襲撃を受ける、そして、剣帝はカオスブリゲートの魔術師狩りへ、その際ヴァーリに勝負を挑まれ難なく相手を始める、一方セラフォルー達は会談現場に残っていた、其処へカトレアが襲撃を仕掛けて来たが魔王達の防御結界に護られ事なきを得た、そして、カトレアのその行動は剣帝の逆鱗に触れてしまい、カトレアは殴り飛ばされたのだった

—三種会談終了後—

セラ「剣帝君、何処迄吹っ飛ばしたの？」

剣帝「んー…取りあえず怒りの半分ですから…壁にめり込んでるんじゃないですかね？」

会談終了後、セラフォルーの提案によりカトレアの保護に向かっている二人

夜鴉「ふんふん♪」

カテレア「痛い痛いもつと優しく外して下さい！お願いします！」

その二人が見たのはカテレアが壁にめり込んでるのを頭だけ挿んで引っ張ってる夜鴉だった

劍帝（ん？あれは…）

劍帝「セラ、ちよつと待って」

セラ「なあに？劍帝君」

劍帝「ちよいと友人が見えるから待っててくれないかな？」

セラ「友達つてもしかして…」

劍帝「そういう事だから、待っててね」

劍帝はそう言いながら数十m先から夜鴉の居る場所に向かって走った

カテレア「ああああ!!」

夜鴉「あつはつはつはっ！」

カテレアは壁から出たのは良いものの夜鴉にアイアンクローをされていた

劍帝「楽しそうっすね、夜鴉様」

劍帝（やっぱりセラ様連れて来なくて良かった、この場面は見せられない）

夜鴉「おお！劍帝君！」

カテレア「ぐべらっ！」

夜鴉は劍帝を目視するとカテレアを地面に投げ付けてその上に乗った

劍帝「あのお、夜鴉様？その女性はその後どうするおつもりで？」

劍帝は恐る恐る尋ねた

夜鴉「この子と約束してたからね。ちよつとお仕置きするのさ」

劍帝「あー、そういやそんな事を校内放送で言つてましたね」

夜鴉「この子の負け姿すっかり見たからねえ。お仕置きは少し辛いのをあげないかね」

劍帝「お仕置きの内容は……いえ、やっぱり聞かずに居ます。内容が怖いので」

夜鴉「ふむ。されたいかね？」

劍帝「結構です！」

劍帝はそう言いながら震える右腕を左手で抑えていた

夜鴉「カツカツカツ！だろうねえ！」

劍帝「まあ、あんまり重くしてあげないで下さいね？セラが悲しむので」

夜鴉「じゃあ負け犬ちゃんもといカテレアちゃん連れて帰るよ。」

劍帝「あつ、はい、さようなら」

夜鴉は気絶しているカテレアの頭を掴んだ。そして空間に穴を明け劍帝に微笑みこ  
う言った。

夜鴉「カテレアちゃんは文ちゃんより酷い目にあつてもらうぜ」

それを聞いた剣帝の顔は真つ青になった

剣帝「……………マジすか」

夜鴉「マジマジ大マジだよ♪」

剣帝「……………精神壊れますよ?」

夜鴉「知つてるよ。じゃあねえ♪後、この子は幸せになるよ。いづれね」

それだけ言つて夜鴉は空間の穴に入つていった。

剣帝「それなら……………報われる…かな」

セラ「剣帝君、文ちゃんつて子誰なの?」

剣帝「えつ?せ、セラ!?待つてねつて言つたじゃん!」

声が後ろからしたので剣帝が振り向くと其処にはセラフオルーが居た

セラ「そんな事より。ねえ答えて?もしかして元カノ?まだ気があるとかじゃないよ

ね?ねえねえ?」

剣帝「違うよ、単なる俺の友人だよ、元カノでも何でも無い」

剣帝が弁解してるとき空から剣帝君へと書かれた一枚の手紙が降つてきた

剣帝「ん?何だこれ」

平然とキヤツチして読み始めた

夜鴉へ劍帝君へ、プレゼントの代価としてセラフォルーちゃんにヤンデレモードにしてみました。ww後、一日でもすれば治るとはおもうよ。♪

と手紙には書かれていた

劍帝（……マジかよ）

劍帝の顔がまた青ざめた

セラ「ねえ？劍帝君？私以外を見てどうしたの？もしかして私以外の女を見たいの？じゃあ私だけに興味を持たすために首を固定するけど良いよね？愛ゆえにだもんね？ふふふ。」

劍帝（……ヤバイ向こう（幻想郷）のあの娘達と同じ気配がする……）

劍帝「い、いや、それだどご飯食べたりに仕事したりするの大変だから、駄目だよ？セラ」

背中に冷や汗をかきながら劍帝はそう言った

セラ「ふふふ。大丈夫、劍帝君には食べさせてあげるし仕事だって劍帝君ならそれでも出来るよと解ってる。あつ！それとも仕事を直ぐに終わらすから待ってて欲しいって事ね！もう、そこまでして私だけを見たいだなんて劍帝君ってば大胆ね！」

劍帝「そ、そういう事だよ、ハハハッ」

劍帝（ヤバイ方面への変換が速い……）





オーフィスがバン！と扉を開けてカテレアへとテトテと近付いて行く。

カテレア「オーフィス？その手の物はまさか・・・」

オーフィス「これは、ナイフとフォーク、カテレア、知らない？」

カテレア「知ってますがそれをどう使うのかを聞いているんです！」

オーフィスはこてんと首を傾げてカテレアに近付きながらニヤリと笑って質問に答えた。

オーフィス「ふふん。ナイフとフォークはご飯のときに使う物、王から聞いた。」

カテレア「えっ？まさか私を？」

オーフィス「カテレア、ご飯。」

カテレアはオーフィスの言葉の真意はあなたを食べると言う事を察してカタカタと震え出した。

そこに夜鴉がカテレアにとつてのとどめの一言を言い放った。

夜鴉「大丈夫だよカテレアちゃん。この部屋では傷は十秒程度で完治するからね。」

オーフィス「我、食べ放題。」

カテレア「ひい！オーフィス！こっちに来ないで！」

夜鴉はニヤニヤしながら扉を開けて後ろのオーフィスに大声で話し掛けた。

夜鴉「お腹ある程度膨れたら解放してあげろよ」

オーフィス「我、食欲も無限。」

カテレア「いぎやああ!!」

その後その部屋に近付いた者は呪われるとの噂が立った。

## 二十二話 「地獄の始まり」

あらずじ

カテレアを殺さずに居たので回収に向かうと其処には夜鴉様が居た、その後カテレアは夜鴉様に回収され拷問まがいのお仕置きを受けた、その間剣帝は力を貰った代償に一日だけヤンデレになったセラフォルの対応をしていた

—三種会談より三日後—

剣帝は自室に居た

剣帝「さつてつと、そろそろ沸いたかな？」

剣帝は自分の魔力で空中にヤカンを浮かせてお湯を沸かせていた

剣帝「さあてとお、今日のお昼はカッププラーメン」

浮かせていたヤカンを手に取りお湯をカッププラーメンに注いだ

剣帝「はい、タイマーもセットしたし、出来る迄に仕事終わらせるか」

そう言った剣帝の前には少し前の数倍の量の書類が山のように置かれていた

剣帝「さあてと、始めるかな」

劍帝は書類一枚一枚に素早く目を通していった

—三分後—

劍帝「はい！お終い！」

劍帝は最後の一枚の書類に目を通し、隣にある書類の山に片付けたと同時にタイマーが鳴った

劍帝「はい、出来上がりつと、頂きまーす」

劍帝はズルズルと拉麺を食べ始めた

—五分後—

劍帝「ご馳走様でしたつと」

劍帝は食べ終えたカツプラーメンの残りを軽い炎で焼き、焼失させた

劍帝「さつてつと、腹も膨れたし、行くか」

劍帝は窓を開け勢い良く外に飛んで行った

—冥界：セラフオール所有の山—

山の各所で岩が破壊されていた

劍帝「この程度じゃ駄目だ！もつと力を、大切な人を護れる力を！」

と言いながら岩を粉碎してる

夜鴉「馬鹿だろお前w」

と言つて夜鴉が劍帝の後ろにいる

劍帝「ああ、夜鴉様」

劍帝の髪は地味に黒くなつてる

夜鴉「そんなので強くなれる訳が無かろうて」

劍帝「仕方無いじゃないですか。この付近で俺並みの強さじゃないんですし。こうでもしないとやつてられないんですよ」

夜鴉「仕方ないなあ。ペタン！こいつ連れてけ！」

ペタン「はっ！全ては我が主の為に」

ペタンと呼ばれた女性が劍帝を飲み込んだ

劍帝「えっ？えっ？」

劍帝は驚いては居たが直ぐに状況を飲み込んだ

劍帝（あー、夜鴉様の部下か何かか修業相手かなあ）

劍帝は暗い空間を通りすぎ開けた草原に降り立った

劍帝「此処は…草原か、相手は何処だろう」

劍帝は周りを見回す

???「久し振りだなあお前。久々の出合いに染みるわあ」

劍帝「……………なあんか嫌な予感が…」

劍帝は恐る恐る後ろを振り返ったすると其処には青色のブリキの人形のような存在が立っていた

劍帝「ゲツ……」

少し劍帝は嫌そうな顔になった

アイガロン「げっ！ ってなんだよこのアイガロン様を見てなんでその反応なんだよう？」

劍帝「いやー、だっってお前滅茶強いじゃん、俺に圧勝できるじゃん」

劍帝は指差しながらそう言った

アイガロン「まあ俺様、何万の構成員の部隊長だしなあ」

劍帝「（ハ、ハ）ハア……流石は夜鴉様の部下」

劍帝は呆れ半分にそう言った

アイガロン「お前さあ？ 何しに來たわけ？ 俺様何も知らないんだけど？」

劍帝「多分俺の修業相手に選ばれたんだろうさ」

アイガロン「修行？ はっ！ 俺様自身でやる必要無さそうだな。今のお前ならな」

劍帝「夜鴉様の意思を無視すると？」

アイガロン「んな事ねえよ。事前に念話とかで何も聞かされてないって事は俺様自身でやれって事じゃねえ」

劍帝「あー、そうなるのか、まあ、今の俺ならそうだろうなあ、元からしたら1000倍弱いからな」

アイガロン「そのくらいならなあ誰が良いかなあ？」

劍帝「さあなあ？俺ランクならゴロゴロ居るだろ？」

アイガロン「そうだ！オイ！ウイルスン！こいつの相手をしてやれ」

アイガロンが言う草の中からドロドロした物が人形になっていく

劍帝（やつぱりこういうの多いなあ、夜鴉様の配下つて…）

ウイルスン「デーボウイルスンここに参上しました。で、アイガロン様何をご所望で

？」

アイガロン「こいつを苛めてやれ。」

劍帝「苛めてやれっておいおい」

ウイルスン「はい。畏まりました。おい！お前。ちよつと歯を見せて笑ってみろ！」

劍帝「ん？こうか？」

ニツコリと笑った

ウイルスンはニヤリと笑いその歯に向けてビームを当てた

劍帝「うおっ！何だ？」

そうすると劍帝の歯は少しずつ虫歯になっていった



劍帝「普通に痛い…」

ウイルスン「ちっ！効きが悪いな」

劍帝「毒かよ…あっちでの俺なら効かねえのに…やっぱり此方だと弱いなあ」

そう言いながら項垂れた

ウイルスン「本来なら一瞬で全て歯が虫歯になるはずなのに」

劍帝「そんなもん撃つなよな、面倒臭い」

劍帝は項垂れながらそう言った

ウイルスン「まあ良い。俺のすることは終わった。じゃあ！捕まえてみなあ！」

ウイルスンはドロドロ口になって草の中に隠れていった

劍帝「はあ？何それ、何処のドラ○ンボ○ルのポ○ゲーム？」

劍帝は軽く地面を殴って辺りに爆発を起こした

ウイルスン「俺を倒さない限りその虫歯は治らないし悪化するぜえ！」

ウイルスンの声はあらゆる所から聞こえた

劍帝「はあ!?!余計質が悪かったよ！コンチクシヨウ！」

劍帝（あー、境界使いたい、でも今の俺が使うと確実に死ぬし…）

ウイルスン「おいおい。そんなに悠長にしても良いのか？もう数本は完全に虫歯になつてるんだぜ」

劍帝「だつてよお、今の俺の弱さをより痛感してやる気が起きねえんだよ」

ウイルスン「じゃあ守りたい物も守れないなあ？俺を倒した女の子は無理だと知つても諦めなかつたぜえ？」

ウイルスンの声は劍帝を嘲笑うように続けて言った

劍帝「……………」

劍帝は依然暗い顔のままだ

劍帝（しようがねえじゃん、今の俺そんなに強くないもん）

ウイルスン「色々考えるだけで俺はひどいやられ方で殺られたんだがな。本来の俺なら勝てるはずなのにな」

劍帝「知らねえよ、俺にや関係ねえだろ、（ㄥ ㄩ、）ハア……」

ウイルスン「お前はそうやって何も考えない状況のまままで良いと思つてるのかよ？」

劍帝「思つちや居ねえけどよ、仕方ねえじゃねえか、現状俺弱いんだし……」

ウイルスン「本来なら今のお前でも俺は一瞬で殺せるはずだぜ？」

劍帝「ふーん、そーなのかー」

劍帝は項垂れ過ぎてやる気がほぼ無くなつてる状態になつている

ウイルスン「お前に今足りないのは力じゃない。考える頭だ」

劍帝「と、言われてもなあ：俺基本ゴリ押し型だし……」

ウイルスス 「その女の子もガッツリごり押し形だったぞ？」

剣帝 「そんなの言われても俺は知らねえって言ってんだろが！」

剣帝はさっきの数倍の威力で辺り一面を消し飛ばした

ウイルスス 「俺が言いたいのは何でお前は力を周りしか使えないんだ？ って事だよ」

剣帝 「自分に使うより周りに回した方が良いかと思うからだな」

ウイルスス 「逆転の発想を試してみろよ？ 大きなヒントをやったんだからな」

剣帝 「俺基本ドーピングしないし、した後の反動が面倒そうだから…そういう事で俺は自己強化基本しないんだよねえ、緊急時以外はさ」

ウイルスス 「その元の力の使い方の修行が俺の修行なんだよ」

剣帝 「ふうーん、そーなのかー」

やっぱりやる気がほとほと無くなってる

ウイルスス 「仕方ないなあ」

ウイルススはその姿を剣帝の目の前に現した

剣帝 「……………ダメ元だ」

剣帝は自分の足元からゾンネ・エクスパロージョンを発生させた

? ゾンネ・エクスパロージョンは使用者にもダメージが通る面倒な技なのだ！ 以上、う p 主より？

ウイルスンの姿は無くなったが声は未だ聞こえる

ウイルスン「まあそうすると思つてたぜ？」

剣帝「あーあ、外れたか」

剣帝の全身は真つ黒に焼け焦げていた

ウイルスン「まず、標的が可笑しいからなあ」

剣帝「そうかねえ？俺は単に自爆ついでに吹き飛ばそうとしただけだが？」

ウイルスン「なんで姿が無いのと同じ声量で聞こえるかわかるか？」

剣帝「脳筋の俺にそんなの聞くな」

ウイルスン「じゃあ答えを教えてやるよお前の一番近くに居るからさ。俺は名前道理

ウイルス。さて、馬鹿のお前に質問だ。俺がお前に接触したのはどんなときだ？」

剣帝「ビームの時だろ？」

ウイルスン「じゃあ何処に当たって俺は何処に居ると思う？」

剣帝「歯だろ」

ウイルスン「正解だ」

剣帝「なら、仕方無いか、あんまりやりたかねえけども……」

ウイルスン「じゃあ俺を攻撃してみな？何処に居るかはわかつただろ？」

カチツ、と言う音が口内に響く

劍帝「ホイ、ガチ自爆用爆弾起動」

ウイルスン「ほうほう。ならこう言うのはどうだ？」

ウイルスンがそう言うのと劍帝の爆弾は止まってしまった

劍帝「へえ、それならこれは？」

劍帝はそう言うのと爆破性の籠もった自作ナイフを口内に入れて起爆

ウイルスン「おわっ！アブねえ事するなあ？」

ウイルスは劍帝の口から飛び出てきた

劍帝「うん、やつと出てきたな、ホイッと」

何時の間にか傷が全て治っている劍帝が軽く腕を引くとウイルソンの足元からクナ

イ状の刃物が出て来た、そのクナイ状の刃物からは細い糸が伸びてる

??? 「腹立たしいぜ!!」

突然雷が落ちてウイルスンごとクナイにおちた

劍帝「あーもー、ダル」

クナイから伸びてる糸を切った

??? 「何時まで待たせる気だ！時間の無駄だろうが！腹立たしいぜ！」

劍帝「まあ、嫌な予感が…」

劍帝は面倒臭そうにしながら声のした方向を見た

ドゴルド「俺様はドゴルドだ！お前に剣術を教える為に来てやったのにおせえんだよ！腹立たい！」

剣帝「剣術ねえ…」

剣帝の眼から軽く涙が落ちた

剣帝「師匠……」

ドゴルド「剣術を教えるとは言ったが俺は教えるつもりは更々ない！見て盗みやがれ！」

剣帝「んー、無理」

ドゴルドは雷を模したような刀をゆっくりとあげて雷を纏わせた

剣帝「無理だつて言ってるだろうが…」

ドゴルド「良いから食らつとけ！雷電斬光!!」

ドゴルドは遠い場所に居たにも関わらず刀から雷を出して飛ばしてきた  
更に雷を出して剣劇を飛ばしてきた

剣帝「範囲に入ったな」

剣帝の近くに雷が来た瞬間に雷が来た位置で爆発が起きた

剣帝「爆壁結界つと」

ドゴルド「ちっ！腹立たいぜ！」

劍帝「当たるつもりなんて毛頭無いからな」

ドゴルド「お前の修行はこれがただの木刀でも出来るようになる事だ！普通の人間にも出来た技だ悪魔が出来なくてどうするよ」

劍帝「あー…確かに」今の”俺には無理だな、それとそれって雷斬持ってた偉人だろ？やったの”

ドゴルド「違うな、これをただの木刀でやった人間の剣道家が居るんだぜ。腹立たしい」

劍帝「へえ、そうかい、まあ、今の俺にや、出来んだろうな」

ドゴルド「そうやってウジウジしてやがるのが腹立たしいぜ！」

ドゴルドは劍帝に斬りかかってきた

劍帝「知らんな、俺は元々こういう性格なんだよ、(っ 兀、) ハア…」

ドゴルドは劍帝に当てる寸前で止めた

劍帝「斬らないのか？」

ドゴルド「やめだ！今のお前は切るに値しねえ」

劍帝「あーそーかい！」

劍帝が唐突にナイフでドゴルドに切りかかった

ドゴルドは指ひとつで止めた

劍帝？「（・ロ・）チツ、止められたか」

そう言った劍帝の髪は一本残らず真っ黒に染まっている

劍帝？「そーかそーか、そりゃ悪かったなあ」

そう言うのと劍帝の髪は元の銀混じりの白に戻った

劍帝「（ロ、ロ）ハア…今の俺じゃ無理だったの」



## 第二十三話「言葉巧みな罫」

あらずじ

夜鴉様に連れられ夜鴉様の配下と修行を始め、自分の弱さを再度痛感しやる気の一部が無くなってしまった剣帝、剣帝はやる気と強さを得られるのだろうか

剣帝（ああー…何で俺ってこんなに弱いんだろ…）

剣帝「……………（…旦那…）ハア…」

剣帝は草原に寝転びながら溜息をついた

ドゴルド「てめえの態度が気に入らねえな。仕方ねえな俺を倒せたらてめえの能力封印緩和をあの方に俺から進言しておいてやる」

剣帝「えっ!?!マジで!?!」

ドゴルド「まあ進言だがな。確定じゃないから」

剣帝「それだとしても構わんさ、さて、そうと分かればやる気だそうかねっつと!」

草原に転がって横になるのを辞めすぐに飛び上がった立った

ドゴルド「おい!カンブリマ沢山用意しておけ!さあやるか?」

劍帝「おうよお！」

ドゴルド「おら！喰らいやがれ！」

ドゴルドは雷を劍帝に絶え間無く降り注がせた

劍帝「食らうかよ！」

劍帝に近くに雷が来た瞬間に爆発が続き続けた

ドゴルド「腹立たしいぜ」

ドゴルドは劍帝の腹に剣を突き立てた

劍帝「ゴフツ……いってえなあ……お返しだ」

劍帝は服の下から数本のナイフを出してドゴルドに突き立てた

ドゴルド「ふん！俺の特技を見せてやろう！」

ドゴルドはその体をバラバラにして周りにいたカンブリマと呼ばれた怪物にまとわりついた。

そしてカンブリマはドゴルドに成っていった。

劍帝「ドゴルド……もしかして、怪獣だったかな？」

ドゴルド「あんな化物達と一緒にすんじやねえ腹立たしい、俺は怪人系統の幹部クラスだぞ」

劍帝「おっと、そりゃ、悪かったな！」

指をぱちんと鳴らすとドゴルドの身体に爆発が起きた

ドゴルドはバラバラになったがカンブリマにまわりついて復活した

ドゴルド「ふははは！どうだ？倒してみろよ！」

剣帝「……ゾネ…エクスウ………プロージョン!!」

剣帝がそう言い放つとドゴルドを中心に大爆発が起きた

ドゴルドは剣帝の周りにバラバラになった

剣帝「………ヤベツ」

ドゴルドの仮面から声が聞こえてくる

ドゴルド「貰ったあ!!」

剣帝「残念、外れだ」

剣帝の周りに細い糸が伸びてる

ドゴルドの鎧が剣帝に高速で細くなりながら糸の隙間を通過してまわりついた

剣帝「ゲツ、ミスったかなあ……」

剣帝は顔を残して鎧がまわりつき最後にドゴルドの仮面の部分が顔にせまる

剣帝「残念でした」

剣帝の口から一本だけクナイが出て来た

剣帝「爆ぜろ」

クナイが赤みを帯び、大爆発を起こした

ドゴルド「ちっ！エンドルフはいえねえのか！」

エンドルフ「うるせえな鎧。頭がイテエ。」

ドゴルド「お前の体を借りるぜえ!!」

突然現れた怪人の体にドゴルドの鎧がまとわりついてドゴルドが復活した

剣帝「面倒だなあ……まあ、良いか」

ドゴルド「ふはははは！これで腹立たいお前に反撃出来るぜえ！楽勝過ぎて頭がイテエ！」

剣帝「ところがぎゅちゅん!!」

剣帝がまたパチンと指を鳴らすとドゴルドの各場所が爆発した

ドゴルド「ふははは！何かしたか？」

爆煙の中から無傷でドゴルドが出て来た

ドゴルド「ふははは！お得意の爆発は聞かないぜえ！」

剣帝「それなら仕方無い、焼き殺すか」

剣帝はドゴルドの近くに炎を発生させたがドゴルドはそれを無視するように蠟燭型の銃で発砲しながら雷を模した剣を振り上げて近付いてきた

剣帝「あーもー、ダツルイなあ……ドライグ」

劍帝の左手に赤い籠手が現れた

劍帝「Balance Break」

ドライブ《ブーステッド・ギア、Balance Breaker》

劍帝の全身が赤い鎧で包まれた

ドゴルド「へえ？少しは殺れそうじゃねえか」

劍帝「どうだろうな！」

劍帝は音速で移動しドゴルドの腹に殴り込んだ

ドゴルド「おおっと、殺気が丸見えで攻撃の軌道が読み易すぎるぜ!!」

劍帝「なら、こうだ！」

首に回し蹴りを放った

ドゴルド「隙がデカイんだよ！腹立たしい！」

劍帝の攻撃の軌道に剣を降り下ろした

劍帝「おっとと！」

剣がぶつかった瞬間に爆発が起きた

劍帝「あー、びつくりしたあ。まあ、大振りがすぎたな」

爆発に乗じて体制を整えた

ドゴルド「ふははは！空蟬丸との決闘ほどじゃねえが血がたぎるぜ！」

劍帝「（・ム・）チツ、無傷かよー、かってえなあ」

ドゴルド「腹立たしいか？腹立たしいよなあ！ほら！俺を恨んでみるよ！」

劍帝「いいや、足りないね、俺の怒りはこれでは引き出せやしないぜ」

ドゴルド「ちっ！仕方ねえ全力で行かせてもらうぜ!!」

劍帝「ああ、来い！」

劍帝は身構えた

ドゴルドは全身に雷を纏い劍帝に向かって走った。

が突然ドゴルドの目の前に金色の盾が現れドゴルドを静止させた

ドゴルド「ちっ！どういう事だ！キング！」

劍帝「キング？………夜鴉様？」

キング「ボスから連絡があつてね。ドゴルド、もういいそうだよ？」

キングと呼ばれた金髪の少年はドゴルドに宥めるように言い聞かせた

劍帝（あつ…違つた）

キング「やあ、初めましてだね？僕は第一部隊大隊長のコーカサスアンデット。キン

グって呼んでね」

劍帝「ああ、俺は…名乗らなくても知ってるだろうが一応名乗るか、妖悪劍帝だ」

キング「うん、知ってるよ僕の部隊の下っぱレベル君？」

劍帝の胸に何かしらが刺さるような音がした

劍帝「やっぱ俺って雑魚なのなー」

キング「ボスが言うには僕の部隊が強すぎるだけらしいけどね」

劍帝「……………うがああ!!まだ終われるかあ!もつと強くなるんじやああ!!」

劍帝は二人と離れた方向に向かって走って行った

キング「はあ、これから案内しないといけないのに」

キングは劍帝に手を向けた

劍帝がピタッと止まった

劍帝「案内って何処に?」

キング「次の修行場だよ」

劍帝「おっしゃー、行くぞー」

二人の方向に向かって歩いてきた

ドゴルド「おう、さっさと行ってこい」

劍帝「あいよー、そんじやなー」

## 第二十四話 「怪獣娘と剣の帝」

あらずじ

ドゴルドのとある言葉によつてやる気を取り戻した剣帝、だが、取り戻したのも束の間、剣帝は次の修行場に移動する事に

キング「着いたよ。ここが神王のお膝元。超越死殿だよ」

キングに剣帝が連れて来られた場所は全てが黄金に輝く場所だった

剣帝「……何か空気が重い……ついでに眼も痛い」

キング「ここは生物には辛いと思うよ。生物はこの空気が辛いつてみんな言うからね」

剣帝「そりゃ俺でも辛いわけだ」

キング「ここは生物には常に過重を掛けられてるからねえ」

剣帝「ああー、だから重いんだ」

キング「まあ僕らみたいに死ぬと言う概念を逸脱した者達用の場所だからね」

剣帝「アレ？それつまり俺もだよな……まあ、生物だから仕方無いか」



キング「君のは呪いのせいだろ？ 僕らは種族的な理由だからね」

剣帝「ああ、そこで違いが……」

キング「そうだよ、さてそろそろ彼が来るはずなんだが」

剣帝「彼？」

キング「君の指導教官なんだけど」

剣帝（誰だろう……）

キング「あつ、来た来たおーい！」

???「やあキング久しぶり、相変わらずだね」

青色のドレスを身に纏い、キングの身長ほどより大きなハサミを二つ背負った少女が

フラフラと現れた

剣帝（………でっけえ鋏……）

バルタン「やあ！ 剣帝君。私はバルタン星人だよ。バルタンって呼んでね！」

剣帝「………あつ、はい」

剣帝（ノリがセラに似てる……）

バルタン「……えっとこれで良かったよね。うん。合ってる。」

バルタンは後ろを向いて紙のような物を見ながらブツブツと何かを言っていた

剣帝「………台本読んでますよね？」

バルタン「いやいやいや！そんな事無いよ！私は完璧で幸福だからね！」  
劍帝「パラノイアかよ」

バルタン「・・・まあ私の世界はパラノイアより酷い世界ではあったよね」  
バルタンは俯いてしよんぼりしてしまった

劍帝「ああ、ゴメンよ？俯かせたりする気は無かったんだ」

劍帝はアタフタしながらそう言った

劍帝（駄目だ、セラの感じが強いからどうにもなあ……）

バルタン「もういいよ、そうだよ！主も言つてたじゃない！あいつらより私は強いんだから！」

劍帝「……………」

劍帝（イカンな精一杯頑張ってるって感じがして可愛い）

バルタン「そうだ、ごめんね。ボーツときせちやってじゃあ行こうか！」

劍帝「了解しました」

バルタンは大きなハサミを使って空間に裂け目を作った

劍帝「……………わーお」

劍帝は軽く驚いた反応をした

バルタン「おいで、私達の世界に連れて行ってあげる」

剣帝「了解しました」

剣帝は裂け目に入って行った、その後、剣帝が空間を通り抜けて出てきた場所は空には絶えず光線が飛び交い怪獣の叫び声が常に聞こえている世界だった

剣帝「何このウル○ラ○ンの怪獣○場感……」

バルタン「みんな、ちよつと良い〜?」

バルタンがそう言うのと直ぐに剣帝の周りに巨大な怪獣が取り囲んでいた

剣帝（威圧感パネエ）

バルタン「この子を虐めぬいてほしいからみんな一斉に攻撃だー!」

剣帝「フアツ!」

剣帝に明らかにヤバイ量の光線が襲った

剣帝「うっはぁー、危ねえ……マジ痛え」

当たる前に赤い鎧を身に付けたが大ダメージを負った

バルタン「あれれ?みんな手加減し過ぎだよ」

???「そうは言っても全力でやってしまっただけは面白くないでしょう?」

バルタン「あはは、そうだけどさあ」

剣帝「マジで痛いです」

剣帝の周りの怪獣は全員少女の姿になり一人の黒髪の少女がバルタンに近付いた。

劍帝は見た目の可愛さと明らかな強者の風格が混じった少女に違和感を感じ取った  
劍帝（何か…変な感じがする…）

バルタン「でもでもゼットンちゃん。主も全力を期待してるでしょ？」

ゼットン「ふう、今回は特訓でしょう？あれを彼に着けましょう」

バルタンは軽くゼットンに引いたのが劍帝からも見てとれた

バルタン「いや、あれは駄目でしょ？駄目だよ」

劍帝（うーん、アレって何だろ、明らかにバルタンちゃんの反応からキツそうだけど  
気になるなあ）

ゼットン「大丈夫です。見た目はパワードーマーですしね」

バルタン「実際は逆の効果なのね」

劍帝「弱める気満々かよ！」

ゼットン「ありました。テクターギアです。さあ着けなさい」

劍帝「……………」

劍帝（俺ここで何回死ねば良いんだろ…）

ゼットン「は赤い鎧のような物を劍帝に渡してきた」

劍帝「……………」

劍帝は一切動かなくなった

バルタン「剣帝君、無理しないで良いんだよ。しかも教官は私達じゃないから手加減しないし」

剣帝「それ死刑宣告ですよね!？」

ゼットン「レオさんは誰にでも手加減しませんよ?」

剣帝「しかもウル○ラ○ンかよ!!」

???「わはははく捕まえたぞく装着く」

剣帝に一人の怪獣の少女が引つ付いた

剣帝「ゲゲツ!？」

「そうすると周りに居た怪獣が殆どいなくなりもういるのはバルタンとゼットンのみになってしまった」

剣帝「俺死ぬんだよな? そうだよな?」

バルタン「あはは、ごめんね。私たちも離れないとヤバイから私達のも離れるよ」

ゼットン「御武運を・・・ぶぶぶ」

剣帝「もうヤダ確実に死ぬ」

ゼットン「は笑っていたのを止めて真面目な顔になって剣帝に近付いた」

ゼットン「本当に気を付けて下さいね。レオさんは手加減と言う物を知りませんから

私もどうなるかわかりません。御武運を祈ってます」

それだけ言うとゼットンは瞬間移動をした  
剣帝「はい…（ハ、ハ）ハア…死ぬな…」

## 第二十五話「拳の言葉の重み」

あらずじ

次なる修行場に移動した剣帝、其処に居たのは多数の怪獣だった、そして、其処でセクターギアを着せられ次の修行相手を待つ事となった

剣帝「あーもー、このアーマークツソ動きづらい…怠い！更にこの状態で戦えとか鬼畜だわ！」

剣帝はそう言いながら地団駄を踏んでる

レオ「ゼロもそれを着けて戦っていた。お前もそれくらい出来るようにしてみろ」

剣帝「アンタ等と一緒にすんなあ!!」

レオ「大して変わらんだろう」

剣帝「変わるわ!!そっちは光の戦士！此方は大して強くもない悪魔！大分変わるわ!!」

レオ「生きているなら変わらんだろう」

剣帝「なんて大雑把な…」

レオ「精進し強くなれる。それで良いだろう？それとも守りたい物を守れずに負けたのか？」

剣帝「それは嫌だ」

レオ「・・・守りたいのに己の力不足で守れない時もある。後悔しても遅いんだぞ。」

レオは少し暗い顔になった

剣帝「……………ああ、分かったよ、始めよう」

剣帝もそれを見て何かを察したのかそう言った

レオ「その前に、今回は近接戦闘のみだ。」

剣帝「つまり、武装は無しと？」

レオ「ああ、爆発、光線もなしだ」

剣帝「了解した、さあ、早く始めよう」

剣帝（セラ様が寂しがつてるかもしれないからな）

レオ「ああ、来い！」

剣帝「おらよつと！」

レオの頭に向けて蹴りを放つ

レオ「ふん。この程度か！」

レオは片腕で止めて弾いた



劍帝「まだまだあ！」

即座に別の足をレオの頭に巻き付けて絞め始めた

レオ「その手は悪手だぞ」

劍帝の足を折って投げ捨てた

劍帝「いつつあ!!」

即座にレオから離れて足を治した

レオ「隙が出来ているぞ！」

劍帝の頭を蹴っ飛ばした

劍帝「ゴフツ……いつてえなあ！オイツ!!」

蹴り飛ばされたがすぐに体勢を立て直し音速でレオを殴った

レオ「軟弱な攻撃は隙を生むぞ！」

レオはあえて攻撃を受け、劍帝を殴り吹っ飛ばした

劍帝「忠告と攻撃痛み入る！」

殴られた瞬間にレオの腕を掴み腕十字をした

レオ「時に柔より剛を極めれば柔を超える！」

劍帝の拘束を無理矢理外し地面に叩き付けた

劍帝「ガフツ……痛えって言ってるんだろうが!!」

レオの顔に向けて真つ直ぐ蹴りを放つ

レオ「蹴りをする時は隙を減らせ！」

レオは剣帝の足を掴み膝を逆方向に曲げた

剣帝「あー、はいはい！」

今度は音速で放った

レオ「ぐつ、だが相手もカウンターをしてくる者も居る！」

レオは攻撃を受けていたが反撃で剣帝を空高く蹴り飛ばした

剣帝「ゲホツ!!……まあ、確かにそういうのも居るだろね！」

蹴られた勢いを利用してレオを投げ飛ばした

レオ「反撃は時として攻撃に転じられる事もある！」

レオは飛ばされた勢いを生かして剣帝より高所に飛んだ

剣帝「だろいな!!」

そのままの勢いでレオを振り下ろした

剣帝「上に行つたのが仇だったな！」

レオ「相手の特性を理解しろ！」

レオは地面スレスレで飛び剣帝の頭を付かんで地面にたたきつけた

剣帝「あー……盲点だったわ、有り難うよ」

音も無くレオを顔を殴り飛ばした

剣帝「てか、離しやがれ!!」

更に腹に蹴りを二発連続で叩き込んだ

レオ「そして、これが人にもつとも効率的な攻撃方法だ」

レオは攻撃を無視し剣帝の首を締め上げた

剣帝「グエ……ウグツ……」

剣帝はある程度抵抗すると気を失ったように首から力が抜けた

レオ「そしてこう気絶した際には胸をこう殴れば起きる」

首に一方の手をかけた状態から胸にもう一方の手を使い抉り込むようなパンチを繰

り出した

剣帝? 「おっと、危ねえなあ」

さつきまでグツタリしていたがレオの殴りを受け止めた

レオ「貴様は」

レオは攻撃を受け止めた剣帝を睨み付けた

剣帝? 「ヒヒヤヒヤ、そんなに怖い顔すんなよ」

レオの拳を捻って手首の骨を折った

レオ「ふん。手加減は要らぬようだな」

レオは折れたはずの手で相手を殴り付けた

剣帝？「そくでもないんだよなあ、俺が出れるのは此処までだし」

レオの殴りを受け止められず体に受けた

レオ「ふん。全力で殴らなくて正解だったと言うわけか」

レオは剣帝を放り投げ近くの岩に座った

剣帝「ゲホツ、ゲホツ……あー、痛い……」

そう言いながら平然と起き上がった

レオ「起きるのが遅い」

レオは空を見上げながら剣帝に駄目だしした

剣帝「スイマセンねえ、今のこの身体はこれが精々なんですよ」

レオ「教えた事は覚えているか？」

剣帝「まあ、はい」

レオ「ならば良い、テクターギアを外してやる」

プシューウと言う空気の抜ける音と共にテクターギアが外れた

剣帝「あー、軽っ、身体がかなり軽い」

剣帝は肩を動かしながらそう言った

レオ「あそここの穴から帰れ。帰りたいのだろうか？」

レオが空を指差した先にはワームホールが出来ていた  
劍帝「それでは、有り難う御座いました」  
ワームホールに走っていった

## 恋菓子特別話 「茶色い菓子と恋の模様」

2月14日、その日は女子が思い人に茶色い菓子と共に自分の気持ちを伝えるバレンタインのある日、女性にとっては大切な日です。

さて、そんな日ですので早速自分の恋の気持ちに正直な少女たちの様子を覗いてみましょう

ーバレンタイン前日：セラフォルー邸ー

セラ「明日はバレンタインく、剣帝君に私が初めて作る手作りチョコを贈る大切な日、だから、頑張らなきゃ！」

と言いながらセラフォルーはキッチンに立っていた

リオート「セラフォルー様、それでしたらもう少しですので集中なさって下さい」

そして、その隣にはメイド長のリオートが立っていた

セラ「あつ、ゴメンねリオートちゃん、折角手作りチョコの作り方教えてくれてるのに」

リオート「いえ、メイドである私に出来る事であればやるのが常識ですので…ですが私に教わるので宜しかったのですか？」

二人はコトコトとチョコの入った鍋を見ていたがリオートが疑問を投げかけた  
セラ「えっ？何が？」

その疑問にセラフォルーが首を傾げた

リオート「剣帝様に教えてと頼めば二つ返事でOKして下さいよ…剣帝様が時折料理をしているのは見かけますが…とても上手ですよ？」

リオートがそう言い終わるとセラフォルーはこう返した

セラ「駄目だよ、剣帝君を驚かせたいからこつそり教えて貰って作ってるのに、剣帝君に教わったらその意味無くなっちゃうでしょ？」

リオート「さ、さようですか。でしたら私は何も言えませんので…と話している内に終わりましたね。さつ、チョコを型に流して下さい」

セラ「は〜い」

そうやって現魔王たる主（セラフォルー）と従者（リオート）はチョコを作っていた  
—カオスブリゲイドの基地—

此処にもまた想い人の為にチョコを作っている一人の女性の姿が

黒歌「ふんふふ〜ん♪」

キツチンに一人の黒い化け猫の少女、黒歌が立っていた

オーフィス「黒歌、何をしている？」

その後ろに黒髪の少女、オーフィスが近付き問い掛けた

黒歌「オーフィスはバレンタインって知ってる？」

と黒歌が逆に尋ねると

オーフィス「聖バレンティヌスの死んだ日、バレンタインは本来男が女の子にチョコレットなるカロリーの塊を渡す残酷な日。日本人は逆になっている。」

黒歌「よく知ってるみたいで良かったにや。」

オーフィス「ふふん、私も日々進歩する」

黒歌「そうだね。つまり私は彼にあげる為にチョコを作ってる訳だにやん」

オーフィス「なるほど、我も何か手伝う？」

黒歌「うくん、特には無いかにやう。と言うか私一人で作りたいにやん」

とオーフィスに言った

オーフィス「何故？」

黒歌「そっちの方が気持ちとか色々込めれるからにやん」

オーフィス「色々って？」

黒歌「色々は色々にやん♪」

と黒歌は楽しげにチョコを作り続けている

オーフィス「ふむ。では、黒歌頑張れ」



そう言いながらオーフィスは去っていった

黒歌「激励ありがとうにゃん♪」

こうやって神王の下に居る黒猫もチョコを作っていた

——???

カテレア「バレンタインに合わせて彼に会えば良いのですが……いえ！きつと会えますね。そして、その時にこれを渡して……」

カテレアは一人でじっくりゆっくりとチョコを作りながら独り言を言っていた

カテレア「しかし……彼の好みを聞いていないので苦いのが好みなのか、甘いのが好みなのか分からないので困りました……まあ、チョコは基本甘い物ですからね。甘くしていても問題は無いでしょう」

そう言いながらカテレアはちやくちやくとチョコレートを作っていく

カテレア「彼は喜んでくれるでしょうね！セラフォルも恐らく作ってるでしょうが……彼女には負ける気はしませんね」

こうして褐色の女性が愛しの歩兵に贈るチョコを作るのだった

——駒王学園：家庭科室——

此処では駒王学園の生徒会の会長と副会長が揃ってチョコを作っていた

ソーナ「椿、そちらのハートの型を貸して下さい」

椿「少々お待ち下さい、会長：どうぞ」

椿はそう言ってソーナにハート型の他の型を手渡し、ソーナはそれを受け取った

ソーナ「あの二人はまだ婚姻は結んでません、なのでまだ私にもチャンスはあります。

そうでしょう？椿」

ソーナがそう問いかけると

椿「あり得るかも知れませんね。ですが、あのお二方の仲の宜しさを見ると剣帝さんを奪うのは難しいのでは？」

ソーナ「そうかも知れませんが、可能性が少しは残っている筈です。その可能性に私は掛け今回のバレンタインを利用し剣帝さんの心を奪ってみせます！」

椿「御頑張り下さい、会長」

ソーナ「ところで椿、それは誰に贈る予定のチョコですか？」

椿「……………スミマセン会長、それは秘密です」

ソーナ「秘密にするという事は：なるほど：お互い頑張りましょうね。椿」

椿「了解しました」

こうして恋の想いの込められたチョコは贈り主の手によって作られ、受け取り主にある人は手渡しで、またある人は手紙を添えて、またある人は郵便で贈るのだった

## 第二十六話「会合の剣」

あらずじ

テクターギアを付けられた剣帝、次なる修行の相手は光の戦士、ウルトラマンレオだった、そして、その際にレオから格闘戦でのアドバイスを貰い、自宅に帰る剣帝だった

—セラフオル邸：剣帝の部屋—

剣帝「あーもー、クツタクタだよ」

剣帝はワームホールから疲れきった様子で出ると即座にそう言いながらベッドに横たわった

剣帝「はあーあ、やった内容は殆ど物理の殴り合いだったなあ……まあいつか」

剣帝がそんな事を言っていると部屋の扉が開いた

セラ「アレ？ 剣帝君何時の間に帰って来てたの？」

剣帝「ああ、ついさっき帰ってきたんですよ。そういえば、今何時ですか？」

セラ「んーつとねえ、午前11時15分かな」

劍帝「ふむ、そうですね」

劍帝（一時間15分しか時間経過してないな…夜鴉様のお陰かな？）

劍帝がそんな事を考えていると

セラ「ところで劍帝君」

劍帝「はいはい、何でしょうか？」

セラ「何でそんなに服が汚れてるの？」

劍帝の服は修行の際に汚れた状態だった

劍帝「おっとっと、これはー…そう！修行して来ましたので…」

セラ「それなら汗流したら？」

劍帝「そうですね。そうします」

劍帝はトランクを開けて下着等の衣類を取り出して一階の浴室に移動した

劍帝「……………あのお、セラ様？」

セラ「なあに？劍帝君」

劍帝「何でずつと付いてくるんですか!!」

セラ「だって……………最近劍帝君がまた構ってくれないから…………」

セラフオルーは今にも泣きそうな顔をした

劍帝「……………あーもー、分かりましたよ！ほら、行きますよ」

セラ「わあーい！」

剣帝はいそいそと脱衣所に向かって歩いて行きセラフオルーもその後ろを付いて行き、そして、剣帝は脱衣所前に付くと後ろを振り返り

剣帝「此処までです！此処以上は、流石に……」

と、剣帝が言う

セラ「……私の事襲った癖に……」

とセラフオルーはボソリと呟いた

剣帝「ウグツ……其れでも駄目なものは駄目です！」

剣帝は冷や汗をダラダラとかきながらそう言った

セラ「えー、何で？」

剣帝「お風呂では一人ゆったりしたいので……申し訳ありませんが……」

セラ「……分かった……但し！上がったら構ってね！」

剣帝「了解しました。それではまた」

剣帝はそう言って脱衣所に入り浴室に入った、一枚の写真を持つて

剣帝「完全防水仕様にして良かった……何時かは帰るからね……」

剣帝は風呂に入りそう言いながらニコニコとした笑顔で写真を見ていた

（30分後）

劍帝は入浴を終了し部屋に戻った

劍帝「ああー、さっぱりした」

劍帝はタオルで頭を拭きながら部屋に戻った、戻っている最中周りから驚いた目で見られ、それを不思議がりながら、部屋にはセラフオルーが居た

セラ「あつ、お帰り劍帝君!?!何で上半身裸なの!?!」

劍帝「ん?ああ、忘れてた」

セラ「そ、そーなんだ、へえ」

セラ（眼福だなあ、ああ、劍帝君って本当に良い身体してるなあ）

劍帝の身体は筋骨隆々としており所々に傷跡がある

劍帝「いやあ、メイドさん達が驚いてたのはこれが理由か」

劍帝はそう言いながら執事服を着た

セラ「いつも思うけど、劍帝君ってすっごく着痩せするよね」

服を着る前に比べると一回り程細身に感じるような姿になった

劍帝「まあ、確かにそうかもしれませぬ。良く言われますし」

最後に髪を整えた

劍帝「さて…この後予定って有りましたかね?」

セラ「うん、有るね、北欧の主神のオーデインさんとの会談が」

劍帝「それでは、すぐに向かうとしましょう」

劍帝はそう言った次の瞬間自分とセラフォルの足元に転移用魔法陣を展開した

―北歐との会談場―

会場には様々な上級悪魔が集まっていた

劍帝「はい、到着いたしました」

セラ「有り難う、劍帝君、まだオーデイン様はいらっしゃってないみたいだし自由に  
して来て良いよ」

劍帝「ですが。クイーンがこういう場で離れているというのは宜しくありませんし。

お近くに居ります」

セラ「もお、劍帝君、頭堅いよ？」

劍帝「それに：遠くに行つてはセラ様に構つてあげられないですし」

セラフォルの耳元で劍帝はそう言った

セラ「そ、そういう事なら：近くに居て」

セラフォルは顔を赤くしながらそう言った

劍帝「畏まりました」

劍帝はニコニコしながらそう言った

セラ「それじゃ、劍帝君、オーデイン様が来るまでは一緒に歩き回つとこつか」

劍帝「はい、了解しました……ん？アレは……」

劍帝の視線の先には眼鏡をした見覚えのある少女が居た

劍帝「セラ様、ソーナ様を発見しました」

セラ「えっ!?何処何処？」

劍帝「ほら、彼処に」

劍帝はソーナの居る方向を指さした

セラ「えっ?あつ、本当だ、いらっしやうい、ソーナちゃん」

セラフォルーはそう言いながらソーナに向かって走っていった

ソーナ「お、お姉様!」

リアス「セラフォルー様、お久しぶりです」

ソーナの近くには紅髪の少女、リアスが居た

セラ「うん、リアスちゃん達も、久し振り」

劍帝「セラ様、いきなり走られては周りの方に迷惑が掛かりますよ」

セラ「もく、劍帝君はそういう所がちよつとだけ口煩いよね」

劍帝「貴女の身を案じて言っているのです」

セラ「そつか……有り難う劍帝君」

劍帝「いえいえ、クイーンとして当然の勤めですから」



セラフオルーは剣帝がそうやって話していると

ソーナ「ご、ゴホン…」

剣帝「おっと、御挨拶が遅れてすみません、ソーナ様、リアス様、それと眷属御一行方」

剣帝はそう言つて頭を軽く下げた

ソーナ「別に謝つて欲しかった訳ではありません。ただ、こういう場では二人だけの空間を装うのは周りからの注目を集めますし」

剣帝「御忠告、有り難う御座います。ソーナ様」

剣帝はそう言つてソーナに微笑みかけた

ソーナ「い、いえ…別に感謝されたくて止めた訳ではありませんし…モゴモゴ…」

ソーナは剣帝の顔を見てすぐに顔を赤くした

匙「オイツ、剣帝さんよお」

剣帝「どうしました？匙君」

匙「前にアンタにやられた時から俺はアンタを倒す為に修行をしてたんだ、どれ位アンタに通用するか試させてくれよ」

ソーナ「匙！何を言つて」

剣帝「俺は構いませんが、宜しいですか？セラ様」

セラ「ううくん、あんまり暴れないでね？」

ソーナ「なっ!? お姉様!？」

劍帝「了解しました。では、早急に片を付けます」

劍帝はそう言つて後ろに腕を組みながら匙に近付いた

劍帝「まさか君も修行をしていたとはね、試してあげるよ、君の力を」

匙「ああ！存分に試してくれ、よっ!？」

劍帝は匙に近付くと匙の腹部に容赦無く殴りを一撃叩き込んだ

劍帝「どうした？神具を出さないのか？」

匙は腹部を抑えた状態で座りこんだ、劍帝はそれを見下ろしている、その眼は先程ま

でとは違い何処か冷たい

匙「ゲホツッ：ゴホツッ：何だ：前より拳の威力が強くなってる…」

劍帝「当然でしょう？アレから色々有りましたし」

劍帝は匙の近くでそう言いながら立つて居ると

ソーナ「け、劍帝さん！」

劍帝「何ですか？」

ソーナ「周りからの注目を集めてますよ」

劍帝「おっと、これは良ろしく無い、ほら、匙君、立ち上がって下さい」

剣帝はポケットから赤い液体が入った小さな小瓶を取り出して、中身を匙に飲ませた匙「な…何だこりや…アレ？痛みが引いていく」

剣帝「中身は言えませんが…まあ、治療薬とも思つて下さい」

ソーナ「一瞬で痛みを引かせ傷を治すなんて、そんな液体…フェニツクスの涙くらいしか聞いた事は…でもアレはフェニツクスの涙とは…」

剣帝「さて…皆様はこの後は如何なされるので？」

ソーナがそんな事を考えていると剣帝はソーナ達に向けてそう質問した

リアス「この後は若手悪魔の集まる控室に行くつもりです。ねえ、ソーナ？」

ソーナ「えっ？ええ、そのつもりです」

セラ「えっ!?彼処は危ないんじゃない？」

ソーナ「例年通りならそうでしょうね。でも、匙が居ますし。行かなければ」

セラ「そ、それなら…」

剣帝「俺が護衛で行きましょうか？」

セラ「えっ？でもこの後は会談が…それに…」

剣帝「セラ様が嫌なら行けませんし。まあ、セラ様が呼びさえすれば俺は何時でも即座に来ますがね」

セラ「それなら…お願い出来る？剣帝君」

劍帝「畏まりました。では、行きましようか。皆様」

劍帝はそう言つてセラフォルに微笑みかけてからソーナ達と控室に向かつた

一誠「そーいや、部長、セラフォルさん危ないんじゃないやつて言つてたけど、どう危ないんです？」

リアス「着いたら分かるわよ、否が応でもね」

劍帝「見えてきましたよ」

劍帝がそう言つて先導をしていると部屋の扉が勢い良く廊下の壁に向かつて飛んで行く

??「どうしても死にたいのね、ゼファードル」

??「処女臭えつて本当の事を言っただけだろ、このクソアマ」

部屋の中では褐色の肌をした虎柄の服を着た男と眼鏡をかけた金髪の女性が向かい合つて居た

ゼノヴィア「何だ？」

匙「喧嘩か？」

リアス「やっぱり…」

劍帝「（ハ、ハ）資料で読んでたりしたから知つてたけどやっぱりか、仕方無い、皆様はちよつとお待ちを」

劍帝はそう言って部屋の中に入って行った

―若手悪魔控室内―

劍帝「さつてつと、其処の喧嘩当事者のアガレス家の姫シーグヴァイラ！グラシヤラ

ボラス家の問題児ゼファードル！」

ゼファードル「誰が問題児だ！てか、テメエ誰だ！」

劍帝「俺はセラフォル・レヴィアタンの眷属の者だ」

シーグヴァイラ「現魔王様の眷属ですつて……」

劍帝「さつてつと、最初で最後の通告となるが、今すぐ喧嘩を辞めろ」

シーグヴァイラ「……」

ゼファードル「……現魔王の眷属だからって俺に命令してんじやねえ!!」

劍帝に向かって走って行き、顔を殴ろうとしている

劍帝「まあ、五月蠅い奴だ」

ソーナ「劍帝さん！危ない！」

室内にゴンツつと何かが当たった鈍い音が響いた

劍帝「大丈夫ですよ。ソーナ様」

劍帝は無傷でソーナの方を振り向いている、何故無傷なのかというと

ゼファードル「なっ……」

劍帝は片手で構えた木刀でゼファードルの拳を受け止めていたからだ

劍帝「（ハ、ハ）ハア：俺がかわしてたらソーナ様に当たってたじゃねえか：加減と力の差を見定める目を養え、若造」

劍帝がそう言った瞬間にゼファードルの腹部に一撃叩き込んだ

ゼファードル「グッ……まだまだあ!!」

ゼファードルは劍帝に懲りずに殴り掛かった

劍帝「一発では理解しないか……ならば仕方が無い」

劍帝はそう喋りながらゼファードルの拳を意図も容易く避けきり着実に連打を叩き込んでいる

ゼファードル（畜生：上級悪魔でもねえ奴に何で俺が…）

劍帝「テメエじゃ力不足だ、失せろ」

数十の殴打を叩き込んだ後、廊下の壁に向けて劍帝がゼファードルを木刀で殴り飛ばした

劍帝「あの方の迷惑となるなら俺は容赦はしない」

劍帝はそう言い放つてからソーナ達の元へ戻った

??「噂には聞いていたが、それ以上だな」

ソーナ達の近くには黒髪の体格の良い男が居た

剣帝「若手最強と言われるサイラオーグさんにそう言っただけで頂けるとは、恐悦至極ですね」

サイラオーグ「若手最強はまだ俺とは決まってるまいだろう、剣帝殿に勝てるか分からんのだから」

剣帝「さあ？ どうでしょうかねえ？」

夜鴉『ナニイッテンダ、フジャケルナ!!』

剣帝（ああ、また夜鴉様の念話か：スルーしよつと）

剣帝とサイラオーグは二人とも笑っていた、すると、唐突に剣帝の電話が鳴りはじめた

剣帝「おっと、セラ様からの呼び出しだ、それじゃ、俺は先に」

剣帝はそう言って走って主の元へ向かった

サイラオーグ「風の様な御仁だな、彼は」

リアス「ええ、確かにそうね」

——北欧神話会談会場——

剣帝は会場内に入ると即座にセラフォルーを見つけて合流した

剣帝「お呼びでしょうか？ セラ様」

セラ「うん、オーデイン様がいらっしやったから」

劍帝「了解しました。それでは行きましようか」

セラフオルーの三步後ろに劍帝が付いて歩いて行った

―三分後―

体格の良い男性に連れられて長い髭をした老人と白髪の女性がやって来た

アザゼル「久し振りじゃねえか、北の田舎のクソジジイ」

オーデイン「フンツ、久しいのお、悪ガキ墮天使」

サーゼクス「お久しゆう御座います。北の主神、オーデイン殿」

劍帝（アレがオーデインか…）

オーデイン「サーゼクスか、何か嫌な予感がするが、招きに応じて来てやったぞい」

オーデイン達がそうやって会話していると、セラフオルーもオーデインに近付いて行

き

セラ「ようこそおいで下さりました。オーデイン様」

そうやって挨拶をしたセラフオルーを見たオーデインはこう呟いた

オーデイン「ぬう、イカんなセラフオルー」

セラ「はい？」

セラフオルーはオーデインの言ったことに対して疑問を浮かべた、そして、オーデイン

はこう続けた



オーデイン「折角の宴だと言うのに若い娘がそんな色気の無い服でどうする」

劍帝（こんのエロジジイ）

劍帝は殺気を放ちながらセラフォルの後ろに立って居る

セラ「……君……帝君……劍帝君……」

劍帝「はい？何でしょうか？セラ様」

セラ「劍帝君は見たい？私の魔法少女姿……」

劍帝「ん……まあ……はい」

セラ「それでは……」

セラフォルがなにやら魔法詠唱を始めるとセラフォルの姿が魔法少女のコスプレに変わった

劍帝「……可愛いなあ」

劍帝がそう呟くと

セラ「有り難う、劍帝君」

セラフォルが劍帝の方を振り向いてニコニコと笑った

オーデイン「ほおほお、セラフォル」

セラ「はい、何でしょうか？オーデイン様」

オーデイン「ソヤツはお前さんのこれかの？」

オーデインは小指を立てた

セラ「えつと…それは：／／／」

セラフォルーは顔を赤くして俯けた

オーデイン「ふむふむ、なるほどのお」

オーデインがセラフォルーの様子を伺っていると視界に黒い服が入った

剣帝「あのお、俺の大切な主をあんまり虐めないであげて頂けませんかね？」

剣帝がセラフォルーとオーデインの間に立ったからだった

オーデイン「別に虐めてなどおらんよ、それにしても、お主の身体…中々面白い事になつとるのお」

剣帝「…：…やっぱり貴方ランクだと分かるんですね」

オーデイン「まあのお」

剣帝とオーデインがそんな会話をしていると入り口から音がし始め

夜鴉「呼ばれず飛び出てジャジャジャーン！みんなの邪神こと夜鴉様だぜ！グレモリー君！遊びに来たぜ！」

夜鴉が扉を蹴破って飛び込んでキリツとした顔でポーズを決めていた

## 第二十七回「邪龍晚餐会」

あらずじ

修行から帰った劍帝、その後直ぐに北欧の主神との会談となった、そして、その際に若手悪魔の集まる場所へソーナ達を案内し、其処で起きた喧嘩を難なく処理して帰って来て、オーデインに苛つきながらもセラフォルの後ろに居ると、入り口から夜鴉が会谈場に突撃して来て

—北欧神との会談現場—

劍帝「……………」

劍帝以外は突然の来訪者に驚いていたが、劍帝だけは

劍帝（何してんだろ、夜鴉様……………調度いいや、夜鴉様にちよつとあの娘達の様子とか聞きたいなあ、でも、セラに聞かれるとなあ…そうだ！あの言語ならバレない筈）

劍帝はそう考えた次の瞬間には夜鴉の近くに居た

劍帝「夜鴉様、ちよつと聞きたい事があるのですが」

夜鴉「それはリントの言葉で話すな。あれで話すぞ」

劍帝「了解しました。それでは」

劍帝は息を吸い、呼吸を整えた

劍帝「ギログドデビバギラゾグギデラグバ？」

夜鴉「ビビダギボバ？」

劍帝「ザギ」

夜鴉「ガンボパギラギソギソダギゼンバボドビバデデスベゾザギジヨグツザジヨ」

劍帝「ギソギソダギゼンバボドパ？」

夜鴉「ラアビビグスゾゾンボドジャバギガ。ダザバゲダダドビビギドシドサセスバブ

ゴゾギデゴビバガギ。」

劍帝「……シヨグバギギラギダ。」

話していた劍帝は（ハ、）ハア……とため息を軽くついた

劍帝「ゴ、ルグレダチパゾグギデラグ？」

夜鴉「ゲンビザダダ。ゴラゲビガギダガデデギダジヨ。」

劍帝「ジャガ、ゴセンザギバダチパゾグギデラグ？」

夜鴉「ゴセンザギダゲルゾブシガギデダサツジサゼ」

劍帝「ジヨバダダ……ガシガダグゴザギラグ。ログキラパビビダギボドパガシラゲン」

夜鴉「ゴグバ、バサダグギソンザンビヤンバゴンジヨレガンゾバンドバグスボグゲン

ベツジヤバギバ？」

劍帝「はえ？」

劍帝は恐る恐る後ろに振り返った

セラ「ねえ、何の話してたの？ねえ？ねえねえねえ？」

眼が座った無表情のセラフォルーが居た

劍帝「え、えーつとお……」

劍帝が一瞬だけ目線を逸らすと

セラ「何で目を逸らすの？そんなに言いたくないの？ねえ？何で？」

劍帝「い、いやあ、単なる世間話してただけだよ」

セラ「本当に？単なる世間話で変な言葉使ったりする？内容全く聞き取れなかったよ？」

劍帝「そ、そうなんだあ、へえ……」

セラ「ねえ、愛してると言ってくれたりしたのに何で隠し事するの？ねえ？私に隠してる事って何？ねえ？ねえねえねえ？」

劍帝（ヤバイ……あれがバレたら殺される……）

劍帝「いやいや、隠し事なんてしてないよ？」

セラ「本当に？」

劍帝「本当本当」

劍帝の目は未だに多少泳いでる

夜鴉「そうだよなあ劍帝君は分かりやすいから嘘をついたら目線を逸らすんだぜえ」

劍帝「なっ！何を言ってるんですか!？」

劍帝は慌てたようになった

夜鴉「事実だろ？彼女の目の前でも良くやってたしな、おっとこれは言っではいけないことかね？」

夜鴉は劍帝を見据えにやにやと笑っていた

劍帝「ヒヤアアアア」

劍帝の顔が青ざめて、劍帝は全速力で逃げ始めた

夜鴉「＜動くな＞ってね」

劍帝「ウグツ……」

夜鴉がそう言うのと劍帝の動きが止まった

夜鴉「さあてとお前はこれで動けないし本題に入ろう」

劍帝（また絞られるのは勘弁!!）

劍帝はガタガタと少し震えている

夜鴉「その老害どもに用事があつてね」

夜鴉は劍帝の方から反対にいる悪魔の老人に向かつて歩いて行った

劍帝（……………あつ…老害つて…また死亡者増えるのか……………俺は何も見てない俺は何も聞いてない）

夜鴉「先日はこの俺の悪口で盛り上がったみたいで結構結構。だがケジメは付けてもらおうよ」

劍帝（聞こえない聞こえない…）

劍帝は記憶を見返し始め、声を聞かなくなった

夜鴉「アジ・ダハーカ、ヤマタノオロチ、ニーズヘッグ来い」

三種類の姿の龍が現れた

劍帝「邪龍じゃないですか!!（。D。）ハッ！」

劍帝は反射的にツツコミをした

夜鴉「逃げられないようにこうしてやろうく全員動くな」

夜鴉がそう言う与会場内の全ての者の動きが止まった

劍帝「邪龍の群れにプラスで縛りつて…それ確定的な死刑宣告ですよん」

劍帝はそうツツコミをした

ニーズヘッグ『身体はおでがもらうど』

アジ・ダハーカ『心は俺が貰う』

ヤマタノオロチ『では魂は我の物だな』

劍帝「うわあ、食べる物がそれぞれ完全に違う…」

夜鴉「じゃあお前ら手を合わせて」

邪龍『『いただきます』』

老人の悪魔達をぐちやりぐちやりとニーズヘッグが食べてそれから出た魂をアジ・ダ  
ハーカが捕らえ心を奪いヤマタノオロチが魂を喰らった

劍帝「……………」

劍帝（此方に来られたら困るなあ…）

劍帝は食べてる様を見ながらそう考えた

ニーズヘッグ「おで食べたらない」

ニーズヘッグがそう言う

劍帝「……………」

劍帝（此方見んなよ…此方来んなよ…）

劍帝はそう考えた

夜鴉「仕方ないなあ外にいた警備の悪魔を食べてこい」

ニーズヘッグ「あいつは？美味しそうだど？」

ニーズヘッグは劍帝を指差した



劍帝「……………」

劍帝（いやぁアア!!）

劍帝は冷や汗をかきはじめた

夜鴉「駄目だ、魂に戻すぞ」

ニーズヘッグ「おで、理解した。外の悪魔食ってくる」

劍帝「助かった…」

劍帝はホツとした

劍帝「あのお、そろそろ動けるようにしてくれませんか？」

夜鴉「動けば？」

劍帝「貴方が解除してくれなきゃ”今”の俺にや無理なんですよ!!」

夜鴉「そうだったな！カツカツカツ！」

夜鴉は劍帝に腕をグルグルと回しながら近付いて行つた

劍帝「なので、早く解除して下さい…って、何です？その動作」

夜鴉「そりや、殴る為に準備運動だよ」

劍帝「ファツ!? ナンデデイスカ!!」

劍帝は驚いた様子でそう尋ねた

夜鴉「アアン？ ホイホイチャーハン？」

劍帝「ナニイツテンダ！フザケルナ!!」

夜鴉「俺に対してその口調ムツコロされても言い訳出来ないよな」

劍帝「うわアアア、ゴメンナサイ!!」

夜鴉「良い台詞だ。感動的だな。だが無意味だ!」

劍帝「申し訳御座いません!!」

夜鴉「ゆゑるゝさゝん」

劍帝「ウゾダドンドコドーン!!」

夜鴉は劍帝に腹パンを食らわせた

夜鴉「殴ったのに意味は特に無い。だが私は謝らない」

劍帝「ゲホツ、酷え」

劍帝は血を吐き、その後救護室に運ばれた

## 閑話「神のハーフでの戯れ」

ヴァーリ「くっ、俺は・・・負けたのか。」

アルビオン『ああ、あの剣帝とやらが顔色を変えた直ぐ後にな』

ヴァーリはカオスブリゲード基地の医務室で目を覚ました。

夜鴉「やあ、目を覚ましたかい？ヴァーリ君。」

ヴァーリ「貴方か、俺を鍛えてくれ」

夜鴉「おいおい。起きて直ぐにそれかよ？」

ヴァーリ「俺は強くなりたんだ。誰よりも貴方よりもね」

夜鴉は呆れたようにヴァーリに話し掛けた。

夜鴉「俺を越えても無駄なんだよ？俺は直ぐにさらに強い力を得てしまうからね。」

ヴァーリ「それでも！俺は強くなりたい！あいつを殺す為に！」

夜鴉「・・・力が欲しいね。少し彼と重なってしまったよ。仕方ない手伝ってあげよう。」

ヴァーリ「本当か!？」

夜鴉「近い!!キモい!!男は趣味じゃないんだよ!!」

ヴァーリは夜鴉が手伝ってくれると聞いた瞬間、離れていた夜鴉の顔に息が掛かるほど近付き真偽を確かめた。

ペタン「私の主から離れなさい！」

ヴァーリ「グフウ!!」

ペタンは夜鴉の後ろから姿を現し、当て身をしてヴァーリを吹き飛ばした。

夜鴉「全く、調子に乗るからこうなるんだよ。ペタン、彼を引っ張って彼処へ行こうか。」

ペタン「はっ！全ては我が主の為に」

夜鴉は空間に歪みを発生させ、その歪みの中に入って行った。それに続きペタンも歪みにヴァーリを放り投げてから入って行った。

ヴァーリ「グフウ！」

アルビオン『ヴァーリ、大丈夫か？』

ヴァーリ「ああ、しかしここは何処だ？動物の気配すらしないのだが？」

ヴァーリは目を覚まし周囲を見回し何も無い草原に着いた事は解った。しかし、ヴァーリは直ぐに違和感に包まれた

ヴァーリ「しかし、本当に何も無いな、地面の凹凸すら無いな。」

夜鴉「あはは、その事に気が付いたんだね？ここは俺が創った植物以外が存在しない

惑星だからね。」

ヴァーリ「なるほど、植物だけか」

夜鴉「そうだよ。あるのは中心の微量の土と水だ。それ以外は植物だよ。」

ヴァーリは何故か納得した顔になり白龍皇の光翼を出現させ、夜鴉へ向かって笑いかけた。

ヴァーリ「さあ！やろうか！」

夜鴉「精々楽しませてくれよ？じゃあ頼んだぜ、相棒達？」

???'『応!!』』

夜鴉は赤を基調に白のラインが入った龍の仮面を出現させ装着した。

ヴァーリ「それは？」

夜鴉「二天龍の仮面<ブーステッドデイバインマジエスティー>って言うてね。二天龍の能力が1つに纏まった存在だよ」

アルビオン『そんな事は有り得ん！我等二天龍は相反する物だ！それを1つに纏まるなど冗談も程々にしておけよ』

夜鴉「ハツハツハツ！可能性としては有るんだよ。俺は可能性の神だぞ？その可能性を探すくらい雑作も無い！」

夜鴉は仮面の下の瞳を黒く濁らしてヴァーリの背中の白翼を睨み付けた。

夜鴉「まあ良いよ、さあ殺ろうか。行くぜ相棒達」

Booted Diviin Majesty Balance breaker

夜鴉「これが二天龍の混沌鎧くブーステッドデイバインマジエスティー・スケイルメイル>だ」

夜鴉は紅の鎧にまるで木の枝の様に全身に白色のラインが入った鎧を身に着けていた。

夜鴉「さあこいよ中途半端君」

ヴァーリ「俺は人間だ！」

夜鴉「駄目だよ。挑発に乗って攻撃が単純になってる」

ヴァーリはバランスブレイクして夜鴉に高速で近付いて殴りかかったがそれは夜鴉が体を少し反らして避けられさらに腹部へ強烈な蹴りを叩き込まれた

ヴァーリ「グハッ！クソッ！」

夜鴉「睨む暇があれば攻撃に転じようね」

ヴァーリは反撃の為に夜鴉を見ようとするがそこには足を振りかぶった夜鴉の姿があった。

ヴァーリ「なっ！グフッ！」

夜鴉「ほらほら、もっと逃げなくても良いのかい？」

ヴァーリ「動けない、いや体から力が抜けていくだと」

夜鴉「無音ブーストと無音ディバイドこれがこれの効果さ。まあ本当は言ってるんだが君たち生物には聞こえないほどの高次元な音が出るんだけどね」

ヴァーリ「まさかこれは十秒毎ではなく毎秒か！」

夜鴉「正解だね。折角だから音声を君の頭の中に響かせてあげよ」

ヴァーリ「グツ！なんだ・・・これは・・・頭が、割れる！」

ヴァーリの頭の中では毎秒二十回のブーストとディバイドの音声が響きヴァーリは頭を抑えた。

夜鴉「最低このレベルになってもらわないとねえ？」

ヴァーリ「なん・・・だと？これが、最低だと？」

夜鴉「じゃあ続けようか！俺に修行なんてものを頼んだ事を後悔させてやるぜ!!」

ヴァーリ「地獄の始まりとは・・・こう言う事を言うのだろうか・・・」

アルビオン『ヴァーリ！気をしっかり持て！』

ヴァーリは青い顔をしているのと対照に夜鴉は悦びに満ち溢れたような笑顔でヴァーリに向けて笑い続けていた。

## 第二十八話 「灰色の苦痛の末に」

あらすじ

突如として来訪した夜鴉へと即座に近付き特殊な言語で聞きたいことを聞いた剣帝、その後夜鴉は三匹の邪龍を呼び出し悪魔を食べさせ始めた、そして、最後には剣帝の腹部を殴り、剣帝の意識を飛ばした

—  
???

暗い闇の中で赤髪の少年と黒髪の男が相對している

?? 「イカンな、今のテメエじゃあの娘を護るには弱い、弱過ぎる」

黒髪の男は黒い服で身を包み、白い槍の様な物を手に持っている

剣帝 「五月蠅え！今更テメエに指図されなくとも分かっただよ！そんな事はよ！」

?? 「自覚はしている、それなのにも関わらずテメエは弱いまんまだ、そんな事だここれから先も大切だと思っ物を失い続けるぞ」

剣帝 「黙れえ！」

剣帝は黒髪の男性に殴りかかったが、黒髪の男はそれを難なく受け止めた



?? 「やつぱり今のテメエは弱いな、攻撃とはこうやるんだよ！」

そういうった黒髪の男は剣帝の胸に槍を突きたてた

剣帝 「ゲフツ……畜……生……」

?? 「じゃあな、弱き剣の帝よ、もつと強くなりやがれ、未来永劫あの娘を護り続けるためにもな」

— 救護室 —

剣帝 「うーん……うーん……はっ……」

剣帝が目覚ますと其処はベットの上だった

剣帝 「此処は……何処だ……」

?? 「此処は救護室ですよ」

剣帝にそう言ったのはナースだった

剣帝 「俺は……そうか……腹を殴られて……」

ナース 「驚きましたよ。運び込まれてきた時は血を吐いてたのに少し経つ間にみるみる回復したんですから」

剣帝 「ふむ……俺が運び込まれてからどれ程経ちましたか？」

ナース 「えーつと確か……」

ナースは目線を動かして時計を見た

ナース「一分程ですね」

劍帝「……1分か……まだまだ遅いな……」

劍帝はそう言つて自分の体に触れた、すると胸に違和感を感じた

劍帝（ん？何だこれ）

劍帝はそう思い

劍帝「スイマセン、俺が寝てる間に誰か訪ねてきましたか？」

とナースに尋ねた

ナース「えーつとお……ええ、一人だけ訪ねてきましたね」

そう言つて居るナースの手に手紙が有るのに気が付いた

劍帝「その手紙は何ですか？」

ナース「ああ、そう言えばあなた宛に先程の話の人があなたが起きたらこれを渡して

くれと」

劍帝「俺宛ですか。では、下さい」

そう言つて劍帝はナースから手紙を受け取り読みはじめた

夜鴉『やつほー☆劍帝君。流石に脆くなりすぎだろ？鍛練してるのかな（；・ω・）

取り合えずそれは置いておいて君の心臓にはとある羽が刺さっているだよ。セラ

フォルーの魔力が近付くと発動する物だよ。どんな効果か知りたいよね（・▽・）ニヤ

ニヤ

ならば教えてあげよう！セラフォルーが君に触れると君はオルフェノクになるか灰になるかのどちらかになるんだよ。適合したら良いねwじゃあ頑張つてね♪」

と手紙には書かれていた

劍帝（夜鴉様…）

劍帝は手紙を読み終わるとベットから出て、救護室から退室した

劍帝「さて、運試しだな」

そう言つて劍帝は会談会場に戻つた、すると其処には白髪の方が飛んでいた

劍帝（……悪神ロキ、もうそんな時か！）

劍帝はそう考えた次の瞬間にはセラフォルーの元へと走つていた

セラ「け、劍帝君!?!怪我はどうしたの!?!」

劍帝「そんなもん既に治つてますよ！さて、北欧の主神さん…コイツはどうすりや良いです…?!?!グッ」

劍帝は突然胸を抑えて苦しみ始めた

劍帝（しまった…さっきの手紙の内容忘れてた…）

ロキ「フツ、助っ人かと思つたが、何て事は無いな、単に足手まといが増えただけか…」

ロキはそう言つて攻撃態勢を取つたが直ぐに魔法陣に消えた、何故ならば

夜鴉「ロキ君にも困つた物だね。強制送還しなきや駄目だったよ。もし、今剣帝君が異形になるか灰になるかの瀬戸際なんだから邪魔しないで欲しい物だね」

夜鴉が転送したからだ

剣帝「ハア…ハア…うっ…」

苦しむ剣帝の体が徐々に変質し始めた

夜鴉「おっ？死ぬ？それとも異形になる？確変タイムだね！」

剣帝「アグツ…ガハツ、ゲホツ…」

剣帝は血を吐き、体は白くなりはじめた

夜鴉「セラフォルーちゃんに触れるとこうなるって教えてたのにねえ？どうして触れちゃつたんだろうねえ？あつはつはつはつ！」

夜鴉はセラフォルーを横目で見ながら大声で周囲の者達を嘲笑つた

剣帝「ハア…そんなの簡単ですよ…ハアハア…主の…大切な人の…グフツ…危機を感じれば…ゲホツ…即座に近くに行くのが従者の勤め…ゴフツ…」

剣帝は血を吐きつつそう言つた、そして、その体は少しづつだが、灰のようになりはじめる

夜鴉「ふーん。つままない台詞だね。オーイ、おでん俺帰るから報告よろしく。もし

詳細じゃなかったら俺の仕事全部押し付けるからねえ」

夜鴉は剣帝から目を背けめんどくさそうに魔方陣を開き、消えていった

剣帝「楽しみを直では見ないのでか……フウ……」

そう言った剣帝の手や足は既に灰となっている

セラ「剣帝君！死なないで!!」

セラフォルーは涙を流しながらそう言った

剣帝「大丈夫……俺は死なないよ……まだまだやりたい事有るし……まだまだ護り続けな

きやいけないからね……ゴホッ……」

そう言った剣帝の身体は半分以上灰となっていた

セラ「剣帝君！もう喋らないで、身体が!!」

泣いているセラフォルーの頬に剣帝は残った腕を伸ばした

剣帝「泣か……ない……で、セラ……泣いてる顔は……君には……似合わ……ない」

剣帝はセラフォルーの涙を拭うとその後すぐに全身が灰となった

セラ「あつ………剣帝君が……剣帝君………嫌あああ!!!」

セラフォルーは剣帝の遺灰を握り締め泣きじやくった

——  
???

黒い空間の真ん中で赤髪の青年が眠っていると近くに黒髪の男が歩いて近づいてい

く

??「全く、あの程度でテメエは死にやしねえだろ、オラ、とつとと起きろ、それで、自分の大切と思うもんを護れ」

そう言つて黒髪の男は赤髪の腹部に一振りの短剣を突き立てた

―会場：会談後―

剣帝の遺灰は棺桶の中に収められていた

セラ「剣帝君：何で：私に触れたら死ぬつて分かつてたなら：何で触れたの：何で私に：近付いたの：」

セラフオルーはそう言いながら棺桶に縋る様に居た

サーゼクス「セラ、そんな風にしては彼も安心して冥府に逝けないだろう、さあ、さあ早く泣き止もうじゃないか」

サーゼクスはそう言つてセラフオルーの腕を掴んで引つ張つたが、セラは一向に棺桶から離れようとしな

セラ「嫌！剣帝君から離れたくない！剣帝君はきつと生き返る：彼ならきつと：」

そんなセラフオルーの様を見ていたサーゼクスはセラフオルーを思いつきり引つ張り

サーゼクス「フェニックスの一族ではない彼が蘇る筈が無いだろう！良い加減現実を

見るんだ！」

サーゼクスはそう言つてセラフオルーの頬を叩こうと平手を振るつたが?? 「俺の大切な人に手をあげるとは…貴方を殺しますよ？」

黒い鎧の様な姿をした何者かに受け止められていた

サーゼクス「…何者だ？君は」

サーゼクスはそう鎧の姿を者に問い掛けた

?? 「俺は…」

セラ「もしかして…剣帝…君？」

セラフオルーがそう問いかけると鎧の様な姿をした者が振り返り

剣帝「ええ、俺ですよ。生き返りました」

そう剣帝は優しげに言つた

セラ「お帰りなさい！剣帝君!!」

セラフオルーは剣帝に抱き着いた

剣帝「ええ、只今戻りました」

剣帝は倒れる事も無くセラフオルーの頭を撫でていた、だが、その身は元々人とは思えない、異形と呼ぶに相応しい姿だつた

セラ「ところで、剣帝君」

劍帝「何ですか？セラ様」

セラ「前の…人の姿にはなれないの？」

劍帝「…怖いですか？今の俺は」

セラ「ううん！格好良いとは思うけど、前迄の姿が見たいなあって思つて…」

劍帝「畏まりました。では」

そう言つた劍帝の姿は変質し始め、前と同様の白髪の執事服の姿へと変わった

劍帝「これで宜しいですか？」

セラ「うん！」

そうやって二人は仲良しげに話していた、そして、それを見ていたサーゼクスは

サーゼクス（彼はフェニックス家では無い筈、それに…あの姿は一体…）

そういう疑問を頭に浮かべていた

劍帝「さて、戻つたのは良いのですが…少しだけ疲れてしまいました」

セラ「それなら一回帰る？」

劍帝「はい、申し訳御座いませんが…そうして頂けますか？」

セラ「分かつた！それじゃちよつと待つてね」

セラ「フオルーはそう言つて直ぐに魔法陣を展開した

セラ「さつ、帰ろ？劍帝君」



セラフオルーはそう言つて劍帝の腕を引つ張つた

劍帝「はい、分かりました」

そう言つても魔法陣に入り二人は転移しその場から消えた

## 第二十九話 「愛とは本能のままに」

あらずじ

腹部への暴行から目覚めた剣帝、最初に胸部、心臓のあたりに違和感を感じた、その理由は夜鴉からの手紙により直ぐに分かった、その後剣帝は即座に主の元へと向かった、だが、それを引き金に剣帝は灰化を始め、最後には完全に灰となって消えた、だが、その数分後、蘇るのだった

—セラフォル邸：剣帝の部屋—

剣帝「……あのお……セラ？」

セラ「なあに？剣帝君」

剣帝「帰って来てから何ですつと引っ付いてるんです？」

セラは剣帝の腕に引っ付いて一緒にベットに座っていた

セラ「だって……剣帝君……ちよつと前からずつとこういうスキンシップさせてくれなかったし……それに……」

剣帝「……ゴメンね、寂しかったね」

剣帝はそう言つてセラフォルーを抱き締めて撫でた

セラ「大丈夫…今構つてくれてるから許す…」

そう言つてセラフォルーは抱き締めていた腕を剣帝の腕から剣帝の身体に移動させて抱き締めた

剣帝「それはそうと…ねえ…セラ？」

セラ「なあに？剣帝君」

剣帝「…ボソボソ…が当たつてるんだけど」

セラ「えっ？何？」

剣帝「だから…ボソボソ…が当たつてるんだって」

セラ「えっ？えっ？聞こえないよ？何が当たつてるって？」

剣帝「ですから！胸が当たつてるんですって！」

セラ「うん、知ってるよ、だって、当たつてるんじゃないやなくて当ててるんだもん」

剣帝「…：…あのお、それ俺が困るので…離れて頂けません？」

セラフォルーは剣帝が言い終わつた次の瞬間に

セラ「嫌」

と言いつつ放つた

剣帝「即答ですか…因みに理由は？」

セラ「だって、劍帝君が疲れてる時位しかスキンシップ出来ないんだもん」  
劍帝「……まあ、御最もちや御最もですが……」

セラ「でしょ？だから、離れないもん」

劍帝「……そういえば買物とかは」

セラ「腕に捕まったら大丈夫でしょ？」

劍帝「会議は……」

セラ「今夜と明日は無いと思うから大丈夫」

劍帝「じゃあ、お手洗いは」

セラ「ドアの外で待つて？」

劍帝「お風呂は……」

セラ「一緒に入れば大丈夫でしょ？」

劍帝（駄目だ……抜け目が無い……）

劍帝がそう考えていると

セラ「劍帝君、私と居るの嫌？」

劍帝「いえ？そんな事は有り得ませんよ？」

セラ「じゃあ何でさつきから一人になるような事聞くの？」

劍帝「そ、それはあ……」

セラ「ねえ、何で？ねえねえねえねえ、ねえつてば」

そう言い続けるセラフォルーの眼は何処か光が無い

剣帝「いやあ…色々ね事情が有りまして……」

剣帝はその眼を見た瞬間に目線を逸らした

剣帝（……何でヤンデレ化してんだよ…）

セラ「ねえ、ちゃんと私の眼を見てよ、何で見てくれないの？ねえ、何で？ねえ」

セラはそう言いながら剣帝に顔を近付けて行く

剣帝「そ、それはですねえー」

剣帝はその眼をから必死に目線を逸し続けた

セラ「やっぱり剣帝君私の事嫌いなんでしょう？だから、目線を逸らすんでしょ？」

剣帝「いやいや、それは誤解だよ!」

剣帝がセラフォルーの方向を向くと

セラ「剣帝君、私と一緒に凍って？そしたらずっとずっと一緒にだから、ね？」

剣帝「待って待って待てえ!!それは宜しかねえだろ!!」

そう言う剣帝の腕を掴み、自分ごと剣帝を氷漬けにし始めた

剣帝「待ってつてば!!俺の話を聞いてくれ!」

セラ「剣帝君に嫌われる位なら……ブツブツ」

セラフオルーの耳には剣帝の声は届いていない様子だった

剣帝「聞こえてないか…だったら！」

剣帝はセラフオルーの顔に自分の顔を近付けて

剣帝「セラ！」

セラ「なあに、剣帝くんっ?!」

セラフオルーにキスをした

剣帝「ふう…落ち着いたか？」

セラ「……うん」

剣帝「なら、一回氷を解いてくれか?そんで俺の話聞いてくれるか?」

セラ「……逃げない?」

剣帝「逃げないから早く解いてくれ、というか、この体制じゃ逃げられやしねえよ」

剣帝達の今の体制はセラフオルーが剣帝に馬乗りになっている

セラ「それもそっか」

セラフオルーは剣帝の手首の氷を解いた

剣帝「やあと、自由になった……さて、最初に話すのは…やっぱりコレに関してかな」

剣帝は開放された手を自分の口に伸ばし口の端を引っ張り口の中にあるとある物を

見せた

劍帝「これ、見えるか？」

セラ「ええつとお……牙？」

劍帝の口の中には一対の鋭い牙が生えていた

劍帝「そう……満月の夜だけ出て来るんだよね……血の関係で」

セラ「血？もしかして、劍帝君って……」

劍帝「ああ、吸血鬼だよ、今は力が抑えられてるから満月の夜しか牙が出ないけどね」

セラ「もしかして……劍帝君が離れてって言ったのは」

劍帝「………セラの匂いは良い匂いだから血が吸いたくなるからね……／＼／＼」

劍帝は頬を赤くしながらそう言った

セラ「へえ、そうなんだ」

それを聞いたセラフォルーは首周りだけ服をはだけさせた

劍帝「ちよっ！セラ!？」

セラ「良いよ、私の血を吸っても」

劍帝「い、いやいや、良くないよ！」

セラ「良いの！ほら」

セラフォルーは劍帝の上に寝そべり劍帝の口の近くに首を近付けた

セラ「ほら、目の前にあるんだから、ね？」

劍帝「ううう……」

セラ「大丈夫だから、ね？ 劍帝君の好きにして良いんだよ」

劍帝「……………分かった……」

そう言つて劍帝はセラフォルーの首筋に噛み付き血を吸つた

セラ「んっ／＼／美味しい？」

劍帝「ああ、美味しいよ、セラ」

セラ「そっか、それなら良かったあ」

セラフォルーはそう言つて笑顔を浮かべた、すると

劍帝「……………マジ無理だわ」

セラ「えっ？ キヤツ！」

劍帝はセラフォルーを押し倒した、その背には一本の白色の尻尾が生えていた

劍帝「抑えるのはもう無理だ」

セラ「フフフツ、劍帝君の後ろに尻尾が見えてワンちゃんみたい」

劍帝「なら、獸欲的に襲つてやるよ」

セラ「うん、来て」

そう言つて二人は獸のように交わつた



## 第三十話「秘めた思いの交錯」

あらずじ

劍帝の部屋にて一緒に休んでいた劍帝とセラフオルー、そして、その際に劍帝が離れるように促すとセラフオルーが病んだように劍帝に近付き、果てには一緒に氷漬けになろうとしたが、劍帝にそれは防がれた、そして、劍帝が離れるように言つた理由を明かし、二人の仲は更に深く良くなつた

—満月の夜から数日後—

劍帝「あー、この数日は楽しかったが疲れたなあ、まさか、あの次の日から人間界連れ回されるとは、遊園地やら海外やら行つたし」

劍帝はベットで起きてからそう言いつつ体を軽く動かしポキポキと体を鳴らしていた、すると、コンコンと部屋の扉がノックされる音がして

劍帝「ん？はいはい」

劍帝が部屋の扉を開けると其処には

メイドα「お早う御座います。劍帝様」

剣帝「あつ、お早う御座います」

何時も御世話になっているメイドが居た

剣帝「で、何の御用でしょうか？えーつとお…」

リオート「リオートです」

剣帝「ああ、リオートさん」

リオート「剣帝様宛の手紙を預かっておりますので御届けに参りました」

そう言ったメイドα事リオートの手には一通の封筒があつた

剣帝「ああ、こりやどうも…」

リオート「それでは、私は仕事に戻ります」

剣帝「あつ、はい、お疲れ様です」

リオートが頭を下げ、下に降りて行くのを確認すると剣帝は扉を閉め、封筒を開き中身を読み始めた

『拝啓、糞野郎様。てめえが転生者なのは解つて居ます。なのでオリ主であるこの俺様が鉄槌を食らわせようと思えますので指定の場所まで来ていただこう。来ないとなめえの大事な人が痛い目を見るから其処は御理解の上で判断していただきたい』

剣帝「はっ？」

剣帝は手紙を読みながら首を傾げた

劍帝「何だこの痛い手紙は：俺の大切な人：此方側で……………セラ！」

劍帝は読み終えた後即座にセラフォルに電話を掛けたが一向に繋がらない

劍帝「（・ム・）チツ！俺とした事が油断してた！てか、指定の場所つて何処だよ！」

劍帝は手紙や封筒を探り始めた、すると封筒から一枚の紙が落ちた

劍帝「何だこれ……………」

それは駒王町の地図だった、そして、とある場所にバツ印がついていた

劍帝「なるほど…此処か…」

劍帝地図を確認すると冷静になり魔法陣を展開し、転移した

—駒王町：廃屋—

劍帝「さつてつと、此処が相手さんの指定してきた場所だな…オイコラア！来てやつたぞ！」

劍帝がそう叫ぶと

男「フフフツ、来たなモブ転生者」

奥から声がした、声がした方向を見ると一人の男が居た

劍帝「……………ハイハイ、戯れ言は良いからとつと掛かって来い」

と劍帝が返すと

男「あ？なんだその口の聞き方は。俺はオリ主なんだぞひれ伏せよ。」

と、奥に居た男が叫んだ

劍帝「（ハ、ハ、ハ）ハア……夢見るのも良いが、別の場所でやれよ、夜鴉様に怒られるぞ、転生者君」

と劍帝が呆れると

転生者「うるせえ！てめえなんて雑魚直ぐに殺してやる！」

〈シユートベント〉

という音が聞こえると転生者の手元に銃が現れ劍帝に向かって弾丸を放った

転生者「吹き飛ばや！」

劍帝「ほお、面白い物を持つてるな」

劍帝はそう言いながら黒いメモリを取り出し

《《ジョーカー!!》》

劍帝「変身」

ベルトに差し込み変身した

転生者「ちっ！特撮でこの展開は攻撃が通ってないパターンだな。ならばもう一発!!

弾ける!!」

そう言つて転生者は再度劍帝に向けて弾丸を放った

劍帝「残念、攻撃はかわされてしまった」

劍帝はジャンプして攻撃を回避した

転生者「あー！もうめんどくせえ！これで決める!!」

転生者は一枚のカードを取り出し、手に持っている銃のカートリッジに入れた、すると

〈フアイナルベント〉

と音声が出たかと思いきや転生者の前に一体の巨大な機械の様な牛の様な何者かが現れた

転生者「集中砲火だ！死に去らせ!!」

転生者がそう叫ぶと劍帝に向かって雨霰のように弾丸やミサイル等が飛んで行く

劍帝「あー、これはダルいわ…」

劍帝はメモリを取り出しベルトの横に刺し軽く叩いた

《マキシマムドライブ!!》

劍帝はジャンプして全弾回避して蹴りを放った

転生者「グハアツ!!」

転生者は蹴られた衝撃で変身が解除されバックルを落としてしまった

劍帝「さて、これは俺が有効活用する為に貫って行くぜ」

劍帝はバックルを拾い帰ろうと身を反転させた

転生者「糞が！俺が負ける筈がないんだ！てめえなんて怖かねえ！ライダーキック  
!!」

劍帝の背中に目掛けて転生者のキックが決まって劍帝は不意の一撃で少し吹き飛ばされてしまった

劍帝「ゲホツ……しくった……油断した……」

転生者「フツフツ、俺はライダーに変身するだけじゃなく生身なら一号の身体能力を使えるのさ。形勢逆転だな！いい気見だぜ！」

と、転生者は偉そうに笑っている

転生者「これで止めだ。ライダーパンチ！」

劍帝に転生者がパンチを当てようとしたがそれは届かなかった

劍帝（アレ？当たらなかった？）

劍帝が殴られなかったのを不思議に思い転生者の方を見ると、なんと転生者が氷漬けになっていた

夜鴉「プトティラはやっぱり使えるねえ。こうやって相手を氷付けに出来るんだから」

劍帝「あー、スイマセン、夜鴉様、助けて貰っちゃって」

夜鴉「良いよ。だけど今度代償は貰うからねえ」

劍帝（代償が怖い…）

夜鴉はオーズの変身を解き転生者に近付いた

夜鴉「貴様は下級神を脅し能力を得た後に逃亡し我の手を煩わせる罪を犯した。よつて死刑である」

転生者「糞が！雑魚神のせいで俺がこんな目に有つてるじゃねえか！今度会つたらただじゃおかねえ！」

劍帝（何だ、ただの罪人が逃げてきてたのか）

夜鴉「安心せよ、貴様がもう二度と生きれぬのだ。もう奴とは会うことは無からう。さあ、終わりの時だ。」

夜鴉は翼をはためかせ空高く飛び上がった。そして何時の間に手に持っていた一振りの劍の切っ先を転生者に向けた

劍帝「ヤベツ、俺此処に居たら巻き込まれる」

劍帝は即座に体を起こし、音速で逃げた

夜鴉「魂を消滅せよ、ハルマゲドンデイストラクシオン。」

そう夜鴉が言うのと氷漬けの転生者に向けて光線が放たれる

転生者「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ死にたくない死にたくない嫌だー!!」

夜鴉の放った光線は触れた空気すら消滅させながら転生者に向かい飛んで言った。

そして転生者は魂すら消え去った。

剣帝「うわあ、コレはマジで受けたくねえ、俺でも死ぬわコレは」

夜鴉「ふう、疲れた」

剣帝「お疲れ様です」

夜鴉「じゃあ俺は寝るわ。ペタン、後始末宜しく」

ペタン「はっ！全ては我が主の為に」

そう言いながら夜鴉の後ろから素肌を必要最低限しか隠していない、隠している部分が機械の少女が現れた

剣帝「お久しぶりですね。ペタンさん」

夜鴉は空間を開けて自分の所へ帰って行った後ペタンが剣帝に、にこりと黒い笑顔を向けた

ペタン「手伝いますよね？」

剣帝「あつ、はい」

ペタンは光線が当たり消え去った大穴をシヨベルカーを使い元に戻し出したが剣帝にはシヤベル一つを投げて渡した

剣帝「これで整えろと？」

ペタン「勿論ですよ、修行だとも思いなさい」



劍帝「……………3秒有れば足りえますよ？この量なら」

ペタン「そうそう。地面の土は全く別の場所から持ってくるように」

劍帝「……………了解」

劍帝はそう言った次の瞬間には姿を消した

劍帝「あー、疲れた」

そう言つて劍帝は山盛りの土を積んだ手押し車を押してやつて来た

劍帝「さて、ペタンコにするか」

劍帝はそう言いながら土を整え始めた

ペタン「残りは任せましたよ」

劍帝「ウイーっす」

劍帝はそう答えるとせつせと土を直し…気が付けば時刻は夜になっていた

劍帝「もうこんな時間か…セラ様が心配するかも…知れないし、終わったから帰ろ…」

劍帝はそう言いながら足下に魔法陣を展開し、転移した、手にバックルを持ったまま

## 第三十一話 「煙の意味と永久の契約」

あらすじ

朝、部屋で着替えを済ませ自室でゆっくりとしていた剣帝に一通の手紙が届く、その内容は剣帝の秘密を知っているという者からの手紙だった、その手紙に呼び出された剣帝はししぶ呼び出された場所へと向かった、そして、其処には自分こそが主人公だと言っている一人の男が居た、その男は剣帝へと勝負を仕掛けたが、結果は剣帝の勝ちとなったが勝利して油断した剣帝を男は襲い勝ちをもぎ取ろうとした、だが、その時夜鴉が現れ、男を跡形も無く消し飛ばした、その後剣帝は何事も無かったかのように自宅へと帰宅した

—セラフオール—邸：入口前—

剣帝（このままじゃ入りにくいなあ、屋敷に汚れが付いちまう…）

剣帝は土が付いた自分の服を見てそう思っていた

剣帝「替え全部中だしなあ…どうしようっかなあ…」

剣帝はそうやって困っていると

セラ「お帰り！ 剣帝君」

セラ「フオルーが扉を勢い良く開けて剣帝に飛び付こうとしたが

剣帝「セラ様、今は飛び付かないで下さい、俺の服とか汚れてるんで」

そう言つて剣帝が静止させた

セラ「わっ！ 本当に汚れてるね、何処で何してたの？」

剣帝「まあ、色々とあります……」

セラ「ふうーん、それじゃ早くお風呂に入つたら？」

剣帝「でも、それだとお屋敷に汚れが……」

セラ「大丈夫だよお、リオールちゃんとかが綺麗にしてくれるだろうから、だから、ほら」

剣帝「主の命なら……まあ、そうしますかね」

剣帝はそう言うのと土が落ちないように急いで移動しつつ風呂場へと移動した、そして、脱衣所に剣帝が入ろうとしていると

セラ「ねえ、剣帝君」

後ろからセラ「フオルー」が声を掛けた

剣帝「何ですか？ セラ様」

セラ「一緒に入っちゃ、駄目？」

セラフォルーが剣帝にそう問い掛けると

剣帝「……………スミマセンが、今回も俺は一人で入らせて頂きます」

セラ「何で？何で一緒に入っちゃ駄目なの？」

剣帝「…色々と事情が有るんでね…後で構ってあげるから俺の部屋で待っていてくれるか？セラ」

そう言つて剣帝は土の付いていない右手でセラフォルーを撫でた

セラ「……………分かった、絶対構つてね？」

剣帝「はいはい」

そう言つて剣帝は脱衣所に入つて行つた

剣帝「ふう、風呂ではゆっくりしたいからねえ、フフフフフフーン」

剣帝は上機嫌で風呂場に入り湯船に浸かつた

剣帝「ああ、良い湯だなあ…妹紅…何時かは帰るから待つててね」

そう言つて剣帝が写真を眺めながら湯船に浸かつていると

〈ヴモ、オオオオオ!!〉

風呂場全体に牛の様な鳴き声が響きわたつた

剣帝「……………この声…もしや…」

剣帝がそう言いながら戦闘態勢を軽く取ると

??「へヴモ、オオオオオ！」

水面から緑色の機械的な牛の様な頭をした何かが出て来た

剣帝「やつぱりお前か、マグナギガ」

剣帝はそう言いながら浴槽から上がった

剣帝「そーらよつと！」

剣帝はマグナギガに一瞬で近付き蹴り飛ばしその後即座に脱衣所に移動した

剣帝「あー、吃驚したあ、まつ、セラ様に心配掛けないようにとつとと片付けたいけ

ど……そうだ！」

剣帝はそう言うのと脱いだ服の中から奪ったバックルを取り出し、それから一枚のカ-

ドを抜き、風呂場へ戻った

剣帝「さあ、来いよマグナギガ！」

風呂場に戻ると体制を元に戻していたマグナギガが腕を剣帝の方向に伸ばして居た

剣帝「……もーしーかーしーてー……」

剣帝がマズそうな顔をするるとマグナギガは伸ばした両腕から砲弾を放った

剣帝「うおつと！」

剣帝は飛んで来た砲弾を避ける事無く魔法弾をぶつけて相殺した

剣帝「あつぶねえ、修理すんの面倒なんだぞ!!」

劍帝はそう文句を言い放つてから再度マグナギガの懐に滑り込み

劍帝「喰らえボケエ！」

掌底を繰り出しマグナギガを再度吹き飛ばした、そして、壁にマグナギガが当たる前にマグナギガの背後で軽く爆発が起こりマグナギガは壁に当たらず倒れた

劍帝「ふう…大人しくしてろ」

劍帝はそう言いながらマグナギガに向けてカードを一枚投げた、そして、マグナギガにカードが当たると

《CONTRACT》

という音声と共にマグナギガはカードに吸い込まれ、カードは劍帝の手に帰って行った

劍帝「はい、契約終了つと、さて、少し壊しちゃったし、其処直したらゆっくり浸かり直すか」

劍帝はそう言いながら壁を直し、浴槽に再度浸かりゆっくりと休んだ

—20分後—

劍帝「あー、良い湯だったあ」

劍帝は一部に龍の柄の入った黒い浴衣に身を包み脱衣所から出て来た、そして、ゆっくりと自分の部屋へと向かった

劍帝「ただいま戻りました。セラ様」

劍帝がそう言つて部屋扉を開き部屋の中に入るとセラフオルーが飛び付いてきた

セラ「お帰り！劍帝君！」

劍帝「おっとっと、危ないですねえ」

劍帝は多少倒れかけたが体制を立て直し受け止めた

セラ「だって、朝から劍帝君居なかつたんだもん」

劍帝「ああ、スミマセンね、ちよいと用事がありましたね」

劍帝はそう言いながらセラフオルーの頭を撫でている

セラ「そっか、それなら仕方無いね」

劍帝「さてと、少々月でも見たいので、離れて頂けます？」

セラ「うん、分かった」

セラフオルーはそう言つて劍帝に抱き着くのを辞め腕に抱き着いた

劍帝「あのお、ちよいとトランクの中から取り出したい物あるので離して貰えます？」

少しの間だけで良いので」

セラ「え〜！」

劍帝「少しだけですから。お願いします」

セラ「……………分かった…少しだけね？」

セラフォルーはそう言つて劍帝から離れた

劍帝「有難う御座います」

劍帝は離されると自分の持ち物が入っているトランクを開け、中から龍を模した様な煙管を取り出しトランクを閉めた

劍帝「終わりました。セラ様」

セラ「それじゃあ、また抱き着くね」

セラフォルーはそう言つて劍帝の左腕に抱き着いた

劍帝「本人の了承の有無聞いてませんよね」

セラ「劍帝君なら許してくれるでしょ？」

劍帝「まあ、はい」

そういう会話をしながら二人は部屋に付いているベランダに出た

劍帝「いやあ、月は何時も綺麗ですねえ。フウー（。∩。）y┘┘」

セラ「そうだね：それはそうと劍帝君」

劍帝「何ですか？セラ様」

セラ「今日は珍しく浴衣来てるんだね、それに煙管何て持ちだして」

劍帝「駄目ですかね？」

セラ「ううん、すつごく似合ってる、格好良いよ劍帝君」



劍帝「そりやどうも、有難う御座います」

劍帝は煙管を吸いながらお礼を言った

劍帝（うーむ……アレを試してみようかなあ）

劍帝は何かを考えつきセラフオルーの方向を向いた

セラ「どうしたの？ 劍帝く、うわっ」

劍帝はセラフオルーの顔に煙を吹き掛けた

セラ「もお！ 何するの、劍帝君！」

劍帝「スイマセン、セラ様、ちよつとした悪戯心ご働きまして」

セラ「悪戯でもやって良い事と悪い事があるよ！」

劍帝「スママセン、セラ様が可愛かったのでつい……それはそうとセラ様は御存知ですか？」

セラ「何を？」

劍帝「人間界では顔に煙草や煙管の煙を吹き掛けるのは」

劍帝は煙管を素早く浴衣の懐になおすとセラフオルーの顎に指を掛けて、クイツと自分の方向を向かせ自分の顔を近付け

劍帝「今夜お前を抱くぞって意味が有るらしいぜ」

と言いながら少し笑み浮かべるような顔付きになった

セラ「えっ、それって…つまり…」

劍帝「今晚は一緒に寝ような」

劍帝はそう言いながら不敵な笑みを浮かべていた、そして、その髪は黒くなっていた

## 第三十二話「真実とは知らぬが仏」

あらずじ

泥だらけになりながらセラフオール邸の前に戻った剣帝、そして、其処で屋敷を汚したくないからという理由で入るかどうかを迷っていた、だが、それを無駄な事に終わる、悩んでいるとセラフオールが屋敷の中から出て来て剣帝に風呂に入れと命じる、その後剣帝が入浴中に突然な侵入者が入ったが、剣帝は何事も無いかのように侵入者を片付けたのだった

—翌日：セラフオール邸：剣帝の部屋—

上半身が裸の黒髪の男とセラフオールがベットに横たわっていた、そして、黒髪の男の髪が徐々に白くなり

剣帝「……まあた記憶が曖昧だ……（ハ、）ハア……」

剣帝は眠りから覚めるとそう言って溜息をつきながらベットに座っていた

剣帝「取り敢えず、服だ服」

剣帝はそう言ってベットから出て何時も通りの執事服に身を包み、そして

劍帝「さてと、ちよいと取りに行くか」

劍帝は部屋から退室した

—10分後—

劍帝は静かに入室してから

セラ「んんん、朝あ？」

劍帝「はい、朝ですので起きて下さい、セラ様」

セラフォルーを揺すって起こし始めた

劍帝「ご洋服は用意しましたので、起きて下さい」

セラ「んん、嫌々」

劍帝「はっ？」

セラ「キスしてくれないと起きないもくん」

セラフォルーはそう言いながら仰向けになった

劍帝「……………」

劍帝はセラフォルーから顔を背けている

セラ「どうしたの？ 劍帝君」

劍帝「あのお、そのお、見えてます。セラ様／＼／」

仰向けになったセラフォルーは胸部が見えていた

セラ「劍帝君なら見ても気にしないよ？」

劍帝「いやあの、俺が気にするんで、早く服着て下さい」

劍帝は顔を背けながらセラフオールに服を渡そうと腕を伸ばしていると

セラ「もく、劍帝君つてそういう所意気地無しだよね」

セラフオールはそう言いながら服を受け取り着始めた

劍帝「ふう、これでやつと見れる!？」

劍帝がセラフオールの方向を向き直ると其処には、服のボタンを止めずにベツトに

座っていたセラフオールが居た

セラ「どうしたの？ 劍帝君」

セラフオールは意地悪そうな表情を浮かべている

劍帝「セラ様！ ちゃんと着て下さい！」

セラ「劍帝君がキスしてくれたらちゃんと着る」

劍帝「ああ言えば……こう言う……」

劍帝は顔に出さないように内面でイライラして居たが悪戯に成功して嬉しそう笑って居るセラフオールを見てイライラが消え、そして

劍帝「……（ハ、ハ）ハア……仕方無いですねえ。分かりましたよ」

劍帝はそう言いながらセラフオールに近付き

劍帝「お望み通りしてあげますよ」

セラ「やったあ、有難う劍帝君」

劍帝「但し、それで終わりですからね？」

セラ「分かってるもん」

劍帝「それじゃ、行きますよ」

劍帝はそう言いながらセラフォルーの唇に自分の唇を重ねた

劍帝「はい、終わり」

セラ「えー、短い！」

劍帝「これ以上我儘を言わないで下さい」

セラ「短い短い短い！」

セラフォルーはそう言いながら劍帝のベットで転がり始めた

劍帝「（ハ、ハ）ハア…朝ご飯に遅れますよ」

セラ「劍帝君がもう一回ちゃんとやってくれないと、行かない！」

とセラフォルーが駄々をこねると

劍帝「あーもー……」

劍帝は頭を抱えた

セラ「それとも劍帝君は私の事嫌い？」

劍帝「はっ？何を根拠にそんな事を仰るの？」

セラ「だって、お風呂一緒に入らせてくれないし、最近はデートにも誘ってくれないし、さつきだってキスとか私から誘わないとやってくれないし、しかも、やってくれるの短いし」

セラ「二人っきりの時はセラって呼んでって言ったのに時々しか呼んでくれないし、敬語も時々しか辞めないし」

劍帝「……………」

劍帝はセラフォルーにそう言われて沈黙を始めた

セラ「ねえ、やっぱり劍帝君は私の事嫌いなんでしょ、ん!？」

セラフォルーがそう言って劍帝の方向を見直ると再度キスされた

劍帝「……俺がセラを嫌いなんて言ったか？」

セラ「言っていないけど……でも、行動が……」

劍帝「二人っきりの時にセラって呼び捨てにしないのは自分を律するためだ、敬語を辞めないのも同じ理由だ、で、デートに誘わないのはセラが忙しいだろうと思ったからだし、お風呂は俺は一人で入るのが好きなんだよ悪い、で、さつきのキスはだな、長くとすると俺の理性が消えて襲つちまいそうだからな、だからだ」

セラ「そうなんだ……」

劍帝「さて、そういう事だから了解してくれるか？」

セラ「う、うん…」

劍帝「でも、ゴメンな、そんな風に思ってたなんて知らずに…」

セラ「ううん、良いの、劍帝君はいつも私の我儘聞いてくれてるんだし…」

劍帝「セラ…」

セラ「劍帝君…」

二人がそう言って抱き合い、再度キスをしようとしていると

リオール「ゴホン！」

劍帝「（。D。）ハッ！い、何時から居たんですか？リオールさん」

リオール「少し前からです。サーゼクス様より急ぎと言われた伝言がありますが。また後に致しましょうか？」

セラ「う、ううん、大丈夫、今聞く」

リオール「了解しました。では、お伝えいたします。伝言は此方です」

サーゼクス『ううーん、北欧の悪神ロキが再度攻め込んでくるようだ、なので一度会議を開きロキを迎え撃つ者を集おうと思う、なので、急ぎ来てくれないだろうか』

PS：最近リアスに避けられてる気がするのだが、何故だと思う？』

リオール「以上が伝言の内容です」



劍帝（最後の一文絶対要らない気がする、さてと、そんな事よりセラ様にどうするかを聞かないと）

劍帝がそう思いセラフォルーの方向を向くと

セラ「ふっふーん、サーゼクスちゃんがリアスちゃんにうざったく思われてる証拠だね！その点私のソーナちゃんは絶対そんな事しないもーん。そうだよね！劍帝君！」

劍帝「は、はあ、そうでしょうね…」

劍帝がそう返答すると

セラ「やつぱり！それじゃあ速く行つてサーゼクスちゃんに自慢しないと、だから劍帝君、早く魔法陣出して！」

劍帝「あつ、はい、了解しました」

劍帝（何だか趣旨がズレてる気がするなあ）

劍帝はそう考えながら魔法陣を展開した

—対ロキ会谈場—

劍帝「着きましたよ。セラ様」

セラ「何時も有難う、劍帝君」

劍帝「いえ、これ位は当然ですから」

そう言いながら劍帝はセラフォルーの少し後ろを付いて行く

アザゼル「相変わらずテメエ等は仲が良いみてえだな」

アザゼルが椅子に腰掛けながら言った、すると

サーゼクス「この二人にとってはアレ位が当然なのだろう」

サーゼクスがそう言った

劍帝「まあ、俺にとつてはこれくらいは普通だと思つてますよ」

劍帝はセラフオルーの後ろを歩き付いていきながらそう言った、そして、その前を歩いているセラフオルーはサーゼクスに近付き

セラ「サーゼクスちゃんリアスちゃんにうざったく思われてるんだよ、きつとね」

と言った

サーゼクス「なっ…何を言っているんだセラフオルー！ウチのリーアたんに限つてそんな事が有り得る訳が無いだろう！」

劍帝（そう呼ばれる事が避けられる原因になつてるとなぜ気付かない…）

セラ「その点私のソーたんはそんな事しないもーんと、セラフオルーは自慢を始めた

劍帝（ああ、ウチの主もそつち側だったか…）

劍帝はそう言つて頭を軽く抱えた、すると後ろから

アザゼル「お前さんも苦労してるみたいだな」

アザゼルが近付いて来て肩を叩いた

劍帝「い、いえ、この程度日常茶飯事ですから」

劍帝がアザゼルの方向を向いている後ろではセラフォルとサーゼクスが互いに自分の妹自慢の言い合いをしている

劍帝「……………（ハ、ハ）ハア：セラ様！サーゼクス様！会議をしないんですか!!」

劍帝がそう言い放つと

サーゼクス「おっと、リーアたんのことだからつつい脱線してしまった」

セラ「ゴメンね？ 劍帝君」

劍帝「いえいえ、これ普通な事ですから。して、ロキは今は何処に？」

サーゼクス「ああ、その事なんだが、どうにもロキ以外にもう一人神が居るようなんだよ」

劍帝「はっ？」

セラ「えっ？」

劍帝とセラフォルが驚いた様子で居るとサーゼクスはこう続けた

サーゼクス「なのでだ、すまないのだが劍帝君、君には是非悪神ロキとの戦いに加わって欲しいのだが」

セラ「えっ、それは…」

劍帝「俺は良いですよ。セラ様からお許しが頂ければ、ですがね」

劍帝はセラフオルーを横目で見ながらそう言った

サーゼクス「そうか……ならセラフオルー、劍帝君を貸してはくれないだろうか？」

セラ「うう、劍帝君は良いって言ってるし……良いよ」

サーゼクス「有難う、それじゃあ、劍帝君だけでは難しいだろうし、もう少し希望者が集まるまで待つとしようか」

劍帝「ええ、その方が成功率が上がりますし。時間はまだ有りそうですし。宜しいかと」

そう言つて劍帝達は対悪神ロキとの戦闘の準備を進めた

## 第三十三話「死なぬドMはとても怖い」

あらすじ

悪神ロキの足止めの為一足先に出発した剣帝、その転移先に居たのは悪神ロキ、そして、その娘のヘルだった

そして、戦闘が開始されると先に攻撃してきたのは娘のヘルだった、そして、剣帝を吹き飛ばしたが剣帝にはあまり通じてはいないようでそのまま剣と鎌で戦闘は続行された、その後悪神ロキの不意打ちにより剣帝は一時的に戦闘不能に落ちいった、だが、その時夜鴉が降臨し、ヘルを連れて変えるのだった

く剣帝がロキの足止めに向かった後：対悪神ロキ会議現場く

其処には互いに向かい合うように机に向かつて椅子に座り会議をしていたサーゼクス達とオーデイン、それとリアス、その後方の壁にもたれ掛かっているアザゼルが居たサーゼクス「足止め役を志願したいというのか？」

ベルゼブブ「ロキを現在剣帝君が足止めをしてくれている現場に転送出来るのは10名程度、時間を置いてもあと一人か二人が限界だ、厳しい任務になるが」

サーゼクスとベルゼブブはリアスの方を向きそう問いかけた

リアス「危険な事は承知の上です」

リアスは真剣な顔つきでそう言った

セラ「ウフツツ：志願者は、貴女達だけじゃなかったみたいね」

セラフォルーはそう言いながら自分の後方に見える扉の方向を向いた、そして、その扉が開くとその先から三人の人物が出てきた

リアス「あっ…」

リアスは少し驚いたような反応をした

セラ「ソーナちゃん」

扉の先に居たのはセラフォルーの妹のソーナ、そして、その女王（クイーン）の椿、更にソーナの歩兵の匙だった

リアス「ソーナ！」

ソーナ「私達シトリー眷属より三名、志願致します」

そう言いながら三人は机の近くに向かって歩いて行く

セラ「どーしてもって聞かなくて」

セラフォルーは少し困っているような手をしながらそう言った

セラ「まあ、今回の件は私達の失態でも有るし、リアスちゃんもこの娘も魔王の身内

だから、納得の出来る人選とも言えるんだけど、ねえ」

そうサーゼクスの方を向きながらセラフオーは言った

アザゼル「既に二人は決まってるんだ、人選に時間を使う余裕はねえぞ」

アザゼルがそう言うのとリアスが不思議そうに

リアス「二人？」

と言った、するとミカエルが答えるように喋り始め

ミカエル「ええ、此方からは…」

そう喋っているミカエルの後方の影にとある人物が見える

リアス「イリナさん！」

リアスがまた驚いていたがミカエルは話を続けるように喋りだし

ミカエル「今の彼女は、戦力として申し分有りません」

ミカエルがそう言うのとイリナはそれに応えるように

イリナ「お任せを」

と呟いた

???「相手はアースガルズの神、私も参ります」

次にオーデインの後ろに居た白髪の女性がそう言った

サーゼクス「オーデイン殿がミヨルニルを転送するまでの間、時間を稼いでくれ」

サーゼクスがそう言った

〈会議場施設前〉

リアス「一緒じゃないのは心残りだけど、貴方達は防衛部隊に任せてあるから」

リアスはそう眷属のアーシアとギヤスパーに向けて言った

アーシア「は、はい…」

アーシアは少し怖がっているような声で言った、そして

アーシア「一誠さん、必ず帰って来て下さいね」

と続けた、すると一誠はそれに返すように

一誠「心配すんなって、アーシアも他の悪魔達と仲良くな」

と言った、するとアーシアは少し元気が出たのか

アーシア「はい…」

と返答した

その近くに居るイリナは隣りに居るゼノヴィアにこう話し掛けた

イリナ「また一緒ね、ゼノヴィア」

ゼノヴィア「ああ…しかしイリナ…悪魔になった私が言うのも何だが」

ゼノヴィアが心配そうにそう言っているとイリナが言葉を遮るように喋り始めた

イリナ「危険過ぎるって言いたいんでしょ？」



と言った

そして、そのロキ足止め部隊に近づく鎧姿の人物が1名

??? 「御挨拶が遅れました」

声が出た方向を何人かが見ると其処には先程オーデインの後ろに居た白髪の女性が鎧姿で立っていた

ロスヴァイセ「主神オーデイン様のお付きで参りました。ロスヴァイセです」

白髪の女性、ロスヴァイセはそう名乗った

そして、その鎧姿を見て邪な反応を起こしているのが二名…

匙「見ろ、兵藤」

匙がそう言うと、一誠は

一誠「前に見掛けた時はスーツ姿だったが…これはなんと言う素晴らしき御姿あ」と言った…そして、その後は当然とも言えるが

一誠「いつででででで」

匙「あででででで」

二人は各々主たるリアスとソーナに耳をつままれ引つ張られた

ソーナ「そろそろ時間です」

リアス「行くわよ」

引つ張っている本人達はこう言った

アザゼル「悪いなあ、若いもんにはやらせてよ」

とアザゼルは言った

サーゼクス「グレイファイア」

グレイファイア「はっ！」

サーゼクスがそう言うとその目線の先に居たメイド服の女性が応答しながら足止め部隊にとあるポーチを近付けた

グレイファイア「フェニックスの涙です。緊急時でこれしか集められませんでしたが」  
ポーチの中には赤い小瓶が三本並べてある

サーゼクス「回復役のビショップを加える余裕が無い為せめてもの安全策だ」

とサーゼクスが説明した

リアス「有難う御座います」

とリアスが謝礼を言った

サーゼクス「だが、決して無理はするな」

サーゼクスはそう心配気に言った

リアス「はい」

リアスはそれに返答した

そのリアスを見つめる小猫は少しとある記憶を思い出していた

く塔城小猫の記憶く

小猫「私も連れて行って下さい」

小猫はリアスに頼み込んだ

リアス「小猫…でも貴女は…」

リアスは腕を組みながら応答した

小猫「もう迷いません…」

そう小猫が言うどリアスと小猫は少しの間見つめ合い：

リアス「…分かったわ」

と微笑みながら言った

く場面は元に戻りく

小猫は一誠の服の袖に手を伸ばし、袖を軽く摘み引つ張り声を掛けた

小猫「一誠先輩…」

その声に反応するように一誠は小猫の方向を向き

一誠「ん？」

と不思議そうな顔をした

小猫「私に…勇気を下さい…」

と頬を赤らめながら言った、すると

一誠「大丈夫、小猫ちゃんに何があっても、体を張って俺が守ってやるよ」と肩を掴みながら一誠は笑顔でそう言った

そして、その言葉を聞いた小猫はまた顔を赤らめた、そして、それを見た朱乃が朱乃「あらあら、一誠君、ついに小猫ちゃんの心まで掴んでしまいましたのねえ」と茶化した。すると朱乃の方に一誠が近付き

一誠「あ、朱乃さん……」

と狼狽えながら言った

朱乃「私も……一誠君に勇気を頂きたいですわ……」

とそう言うで一誠の居る方向とは別の方向を向いた

一誠「朱乃さん……?」

一誠は心配そうにその背中を見つめている

ベルゼブブ「では、転送を始める」

ベルゼブブがそう言うのと魔法陣は光りながら足止め部隊を呑み込んだ

く紫色空の荒野く

足止め部隊は無事に荒野に転送され、初めに見た光景は

剣帝「ハアハアハッハッハッ！まだまだあ！」

ロキ「我と殴り合いで引けを取らない者が神以外で居ようとはな！」  
互いに殴り合って戦っている二人の姿だった

## 第三十四話 「見える世界の裏側に続く表」

あらすじ

悪神ロキの足止めの為一足先に出発した剣帝、その転移先に居たのは悪神ロキ、そして、その娘のヘルだった

そして、戦闘が開始されると先に攻撃してきたのは娘のヘルだった、そして、剣帝を吹き飛ばしたが剣帝にはあまり通じてはいないようでそのまま剣と鎌で戦闘は続行された、その後悪神ロキの不意打ちにより剣帝は一時的に戦闘不能に落ちいった、だが、その時夜鴉が降臨し、ヘルを連れて変えるのだった

く 剣帝がロキの足止めに向かった後：対悪神ロキ会議現場く

其処には互いに向かい合うように机に向かつて椅子に座り会議をしていたサーゼクス達とオーデイン、それとリアス、その後方の壁にもたれ掛かっているアザゼルが居たサーゼクス「足止め役を志願したいというのか？」

ベルゼブブ「ロキを現在剣帝君が足止めをしてくれている現場に転送出来るのは10名程度、時間を置いてもあと一人か二人が限界だ、厳しい任務になるが」

サーゼクスとベルゼブブはリアスの方を向きそう問いかけた

リアス「危険な事は承知の上です」

リアスは真剣な顔つきでそう言った

セラ「ウフツツ：志願者は、貴女達だけじゃなかったみたいね」

セラフォルーはそう言いながら自分の後方に見える扉の方向を向いた、そして、その扉が開くとその先から三人の人物が出てきた

リアス「あつ…」

リアスは少し驚いたような反応をした

セラ「ソーナちゃん」

扉の先に居たのはセラフォルーの妹のソーナ、そして、その女王（クイーン）の椿、更にソーナの歩兵の匙だった

リアス「ソーナ！」

ソーナ「私達シトリー眷属より三名、志願致します」

そう言いながら三人は机の近くに向かって歩いて行く

セラ「どーしてもって聞かなくて」

セラフォルーは少し困っているような手をしながらそう言った

セラ「まあ、今回の件は私達の失態でも有るし、リアスちゃんもこの娘も魔王の身内

だから、納得の出来る人選とも言えるんだけど、ねえ」

そうサーゼクスの方向を向きながらセラフォルは言った

アザゼル「既に二人は決まってるんだ、人選に時間を使う余裕はねえぞ」

アザゼルがそう言うのとリアスが不思議そうに

リアス「二人？」

と言った、するとミカエルが答えるように喋り始め

ミカエル「ええ、此方からは：」

そう喋っているミカエルの後方の影にとある人物が見える

リアス「イリナさん！」

リアスがまた驚いていたがミカエルは話を続けるように喋りだし

ミカエル「今の彼女は、戦力として申し分有りません」

ミカエルがそう言うのとイリナはそれに応えるように

イリナ「お任せを」

と呟いた

???「相手はアースガルズの神、私も参ります」

次にオーデインの後ろに居た白髪の女性がそう言った

サーゼクス「オーデイン殿がミョルニルを転送するまでの間、時間を稼いでくれ」



サーゼクスがそう言った

「会議場施設前」

リアス「一緒じゃないのは心残りだけど、貴方達は防衛部隊に任せてあるから」

リアスはそう眷属のアーシアとギヤスパーに向けて言った

アーシア「は、はい…」

アーシアは少し怖がっているような声で言った、そして

アーシア「一誠さん、必ず帰って来て下さいね」

と続けた、すると一誠はそれに返すように

一誠「心配すんなって、アーシアも他の悪魔達と仲良くな」

と言った、するとアーシアは少し元気が出たのか

アーシア「はい…」

と返答した

その近くに居るイリナは隣りに居るゼノヴィアにこう話し掛けた

イリナ「また一緒ね、ゼノヴィア」

ゼノヴィア「ああ…しかしイリナ…悪魔になった私が言うのも何だが」

ゼノヴィアが心配そうにそう言っているとイリナが言葉を遮るように喋り始めた

イリナ「危険過ぎるって言いたいんでしょ？」

と言った

そして、そのロキ足止め部隊に近づく鎧姿の人物が1名

???「御挨拶が遅れました」

声が出た方向を何人かが見ると其処には先程オーデインの後ろに居た白髪の女性が鎧姿で立っていた

ロスヴァイセ「主神オーデイン様のお付きで参りました。ロスヴァイセです」

白髪の女性、ロスヴァイセはそう名乗った

そして、その鎧姿を見て邪な反応を起こしているのが二名…

匙「見ろ、兵藤」

匙がそう言うと、一誠は

一誠「前に見掛けた時はスーツ姿だったが…これはなんと言う素晴らしき御姿あ」と言った…そして、その後は当然とも言えるが

一誠「いっででででで」

匙「あででででで」

二人は各々主たるリアスとソーナに耳をつままれ引つ張られた

ソーナ「そろそろ時間です」

リアス「行くわよ」

引っ張っている本人達はこう言った

アザゼル「悪いなあ、若いもんにやらせてよ」

とアザゼルは言った

サーゼクス「グレイファイア」

グレイファイア「はっ！」

サーゼクスがそう言うとその目線の先に居たメイド服の女性が応答しながら足止め部隊にとあるポーチを近付けた

グレイファイア「フェニックスの涙です。緊急時でこれしか集められませんでした」  
ポーチの中には赤い小瓶が三本並べてある

サーゼクス「回復役のビシヨップを加える余裕が無い為せめてもの安全策だ」

とサーゼクスが説明した

リアス「有難う御座います」

とリアスが謝礼を言った

サーゼクス「だが、決して無理はするな」

サーゼクスはそう心配気に言った

リアス「はい」

リアスはそれに返答した

そのリアスを見つめる小猫は少しとある記憶を思い出していた

く塔城小猫の記憶く

小猫「私も連れて行って下さい」

小猫はリアスに頼み込んだ

リアス「小猫…でも貴女は…」

リアスは腕を組みながら応答した

小猫「もう迷いません…」

そう小猫が言うとなリアスと小猫は少しの間見つめ合い…

リアス「…分かったわ」

と微笑みながら言った

く場面は元に戻りく

小猫は一誠の服の袖に手を伸ばし、袖を軽く摘み引つ張り声を掛けた

小猫「一誠先輩…」

その声に反応するように一誠は小猫の方向を向き

一誠「ん？」

と不思議そうな顔をした

小猫「私に…勇気を下さい…」

と頬を赤らめながら言った、すると

一誠「大丈夫、小猫ちゃんに何があっても、体を張って俺が守ってやるよ」

と肩を掴みながら一誠は笑顔でそう言った

そして、その言葉を聞いた小猫はまた顔を赤らめた、そして、それを見た朱乃が朱乃「あらあら、一誠君、ついに小猫ちゃんの心まで掴んでしまいましたのねえ」と茶化した。すると朱乃の方に一誠が近付き

一誠「あ、朱乃さん……」

と狼狽えながら言った

朱乃「私も……一誠君に勇気を頂きたいですわ……」

とそう言うで一誠の居る方向とは別の方向を向いた

一誠「朱乃さん……?」

一誠は心配そうにその背中を見つめている

ベルゼブブ「では、転送を始める」

ベルゼブブがそう言うのと魔法陣は光りながら足止め部隊を呑み込んだ

く紫色空の荒野く

足止め部隊は無事に荒野に転送され、初めに見た光景は

剣帝「ハアアハッハッハ！まだまだあ！」

ロキ「我と殴り合いで引けを取らない者が神以外で居ようとはな！」  
互いに殴り合つて戦っている二人の姿だつた

## 第三十五話「悪神の悪心」

あらずじ

ロキの足止めとしてリアスとその眷属達が名乗り出た、そして、その前に名乗り出ていたソーナとその眷属と共にロキの足止めに向かったリアス達が目にしたものはロキと殴り合いながら、高笑いをする剣帝だった

く紫天の荒野く

剣帝「どうしたあ？この程度かあ？」

剣帝はロキを殴り続けている

ロキ「フツ、貴様こそこの程度で我を倒せると思っているのか？」

ロキは剣帝に殴られているのを気にも止めずに剣帝を殴り続けている

剣帝（チツ、オイツ、魔力残量はどれ位だ、ドライグ！）

剣帝が体内に居るドライグにそう語り掛けると

ドライグへマジな、俺の力だけでなく多くの魔力を消費して魔力の壁を作ったせいで殆ど無いぞ、このまま近距離で戦い続けるならばともかく、距離を開けられれば敗北

は免れられないぞ」

と返答が帰って来た

劍帝（やつぱりか…）

その返答を聞いてそう思いながら劍帝はロキを殴り続けていたが

ロキ「どうした？ 殴打の威力がさつきまでより落ちてきているぞ！ それにどうやら息が上がつているようだな…フンツ！」

ロキはそう言い劍帝を殴り飛ばした

劍帝「しまっ！ ぐはっ!!」

劍帝はロキはの殴打に対応出来ず、岩壁へ叩き付けられた

ロキ「あの方に創られたにしては貴様は随分と弱いな」

劍帝「ハア…ハア…黙り…やがれ…まだまだ…俺はやれる！」

劍帝はロキの発言に対して瓦礫から出て来ながらそう言い放った

ロキ「フンツ、その威勢が何処まで続くものか見物だな」

そう言いながらロキは大量の魔法弾を展開し、劍帝に向けて掃射した

劍帝「グフツ…ガツ…ウグツ…グアア！ ち…畜生…」

劍帝は魔法弾に体を撃ち抜かれる度にうめき声を上げた

劍帝「ウグツ…ハア…ハア…」



ロキの魔法弾が止んだ、剣帝はそれに合わせて残った魔力を手に集め爆炎の魔法弾を作り出した

ロキ「フツ、これだけ撃ち込んでもまだそんな事が出来る力が残っているとはな、ならばもう少し撃ち込むとするか」

ロキは剣帝が魔法弾を作っているのを確認すると再度魔法弾を大量に撃ち込み始める、そして、その内の一発が偶々剣帝の服の内側に仕込まれていた爆発性を有した武器に当たり、誘爆を引き起こした。その衝撃で剣帝の作った魔法弾は弾けた

剣帝「しまった！グアツ！」

ロキ「フツ、フツ、フハハハハッ！弱い！やはり如何にあの方に創られたとはいえ所詮は元人間か、弱過ぎるぞ！」

ロキはそう笑いながら言いつつ、剣帝に近付いた

ロキ「どうした？近付いてやったぞ？殴りかかってはどうだ？」

ロキはそう言ったが、剣帝は殴れなかった、否、殴る事が不可能となっていた、何故ならば

ロキ「殴れる訳が無いか、両腕ともが吹き飛んでいるからな」

剣帝の腕はおろか肩から先が全て無くなっていた

剣帝「ウツ…ガツ…グツ…」

ロキ「まだ息はあるようだな、それにしても、この焼け跡からも見て取れるが己の武器の誘爆で腕が消し飛んだ様だな、これは傑作だ！己の武器で消し飛ばすようなハマをやる様な輩が居ようとはな！」

ロキはそう言いながら剣帝を見下ろしつつ更に笑い始める

剣帝「まだ…終わってない…：…ぞ」

剣帝はロキの方を見据えながら魔法弾を再度生成しはじめた

ロキ「ほお？」

ドライブ「辞めろ剣帝！死ぬ気か！」

剣帝（ロキを倒せるなら死のうが問題はない！）

ロキ「撃たせると思ったか？雑魚が」

ロキは剣帝の行動を見て一瞬笑みを浮かべ、剣帝の胸、心臓付近を小さな魔力弾で撃

ち抜いた

剣帝「グフツ…：…：…」

剣帝は打ちぬかれた瞬間に口から血を吐きながら、絶命した

ロキ「フツ、所詮は雑魚、私の敵ではなかったな」

ロキはそう言いながら剣帝に背を向け、後から来たソーナ達の方向を向いた

ロキ「さあ、掛かって来るが良い雑魚ども、さつき殺した男のようにお前達も一人残

らず殺してくれる」

リアス達は戦闘態勢に入った、とある一命を除いて

リアス「ソーナ！早く身構えなさい！ロキが来るわ！」

リアスがそうソーナに向けて言い放ったが

ソーナ「嫌……剣帝様が死ぬだなんて……嫌……嫌……嫌アアア!! 剣帝様ああ!!」

ソーナは泣き叫びリアスの声は届いていない様子だった

リアス（今のソーナの精神状況では戦闘は無理そうね、なら……）

リアス「ロキは私と私の下僕達でやるから貴方達はソーナを守っていてあげなさい  
！」

リアスは匙と椿にそう言ったが

ソーナ「私は貴方を許さない！剣帝様の仇！貴方は私が倒す!!」

ソーナはロキに向かって行ってしまった

リアス「あつ！待ちなさいソーナ！」

リアスはソーナを追いかけ止めようとしたが、相打ち覚悟で向かって行ったソーナに  
追い付けはしなかった

ロキ「ほお？次は貴様が我に向かってくるか、さっきの雑魚よりは楽しませよ？」

ロキはそう言いながら不敵な笑みを浮かべていた

## 第三十六話 「白き翼を与える黒き欲望」

あらずじ

ロキと殴り合っていた剣帝、だが、自力の違いにより徐々にスタミナが無くなつていく、それを見逃さずロキは遠距離から剣帝を滅多撃ちにして、更に剣帝の服に仕込まれた武器を利用し剣帝の両腕を消し飛ばし、果てには剣帝を殺害したのだった

く??  
く

とある場所に剣帝は目を瞑り浮かんでいた

剣帝「……………ハッ、ここは…」

その場所は真つ暗闇で地面も空も全てが見えない

剣帝「……………なるほど、俺は死んでるのか…となると…オイツ！ドライグ！」

剣帝は暗闇に向けて叫んだ、すると闇の中から炎が剣帝の方へ走って来て辺り一面が

火の海と化した

ドライグへ俺の忠告を忘れて距離を取られてしまったな、剣帝

炎の中に真紅の龍、赤龍帝ドライグが居た

劍帝「うるっせえなあ、で？俺が目覚めるまでどれ位掛かる？」

劍帝がドライブグにそう問い掛けると

ドライブグへおおよそで傷を治すのに一時間、目を覚ますのには2時間、合計で三時間だな

と問への返答を返した

劍帝「三時間か…なら、起きたら即効でロキを殴りに行くとするかな！」

劍帝がそう意気込んでいると

ドライブグへ辞めておけ、今のお前の実力では本気を出した所で奴には勝てない  
とドライブグは冷たく言った

劍帝「なら、無茶をするしかない…か」

と劍帝が言う

ドライブグへ無茶をするならば体に戻ってからにしろ、ここで何をしようが無意味だ  
とドライブグが言った

劍帝「ふむ…確かにそうだな…なら、身体が治るまではここで作戦でも考えるか…  
そう言つてまた劍帝は目を閉じた

く紫天の荒野く

その上空では一柱の神へ一人の少女が挑んでいた

ソーナ「劍帝様を！私の大好きなあの方を返して！」

ソーナはそう泣き叫びながらロキに向けて氷の魔法弾を連射していた、だが

ロキ「フンッ、そんなに大切ならば何処かしらに隠しておけば良かったではないか」

ロキは自身の前に魔法陣を展開して氷を全て防いでいた、そして

ロキ「そら、お返しだ」

高出力の魔法弾を一撃だけ放った、それをソーナは魔法陣を展開し防ごうとしたが

ソーナ「キヤアアア!!」

魔法陣が飛んで来た魔法弾の威力に耐え切れず、壊れてしまい真正面から魔法弾を受けてしまった

ソーナ（もつと私に力があれば…劍帝様の仇を討てたのに…もつと…彼の役に立てるような強い力が欲しい!）

ソーナが地に倒れそんな事を考えていたすると、大きな鉄の塊が擦れるような音とともにソーナの後ろに黒髪のメイド服の少女が突如現れた

その瞬間に周囲に居た者達は精神を黒いナニカに浸食されるような不快感と今すぐこの場から背中を見せて逃げ出したい程の恐怖に襲われた、そして、少女はソーナの近くに歩み寄り

少女「はいどーぞ、力が欲しいんでしょ？」

ソーナに白い白鳥のの絵が描かれたカードバックルを差し出した

ソーナ「……………えっ?？」

ソーナはその事柄に驚き一瞬声が出なかった、だが、少女はソーナがそんな事になっていることなど無視するかのよう

少女「これでも邪神の端くれだからねえ、悪魔の願いの一つや二つ叶えないとそろそろノルマが迫ってるのだから、協力してくれるよね?」

と目に絶望と希望が入り雑じり世界を嘲笑ったかのような笑顔で言った

ソーナ「えっ……………あの……………えっと…」

ソーナが突然の事に動揺して決断を決めかねていると

少女「早く決めてくれない? これでも私忙しい身なのよねえ?」

とメイド服の少女がソーナを急かした

ソーナ「えっ!? く、下さい!」

急かされて驚いてそうソーナが返答した。そして、ソーナは少女からカードバックルを受け取った

すると、それを見ていたロキが

ロキ「何故! このような雑魚に貴女様のような御方がこの様な真似を為さるのです

!」

と少女に問いを投げかけたが

少女「嗚呼！主！ノルマはもうクリア致しましたので貴方の元へ帰りますわ！御待ち下さいませ！」

少女はロキの言葉が聞こえていないように喜んでゐる

ロキ「クツ！御答え下さい！何故この様な真似を！」

ロキがそうやって再度少女に問いかけると

少女「五月蠅いですよ！この雑魚が！私と主の愛を阻む者は全て消し飛ばしますよ！解ったならその汚い口を閉じなさい！」

と少女はロキに対して激昂した。その姿に気圧されロキは少し後ろに後ずさりした  
それを見た少女はソーナの方を振り替えて

少女「我が主は言いました。この愛の為に頑張る者助けると言う事を千人達成すれば頭を撫でてくれると！そして私はこれで千人目達成なのです！嗚呼！主！全ては我が主の為に存在します！主の為にこの黒冥神これからも貴方様の為に働きますわ！ウフフフフ♪」

黒冥神と名乗った少女は嬉しそうにしていたが、何かを思い出したようにソーナへボソボソと耳打ちで言った、それを聞いたソーナは

ソーナ「えっ!!そ、それは本当ですか!？」



ソーナはそう黒冥神へと聞いたが、黒冥神は嬉しそうに彼方へと帰って行った、それを見ていたリアスはソーナの近くへと近づき

リアス「ソーナ、さっき何て言われたの？」

とソーナに聞くと

ソーナ「私が頑張れば彼が：剣帝様が生き返るって：」

ソーナがそう返答するとリアスは

リアス「えっ！剣帝様が生き返るですって!?!」

と驚いた

ソーナ「私の努力次第で剣帝様が生き返るのならば：私は必ず勝ちます！」

ソーナはそう意気込んでカードバツクルを握り締めた

## 第三十七話 「力の開放はウサミミと共に」

あらずじ

ロキによつて殺害された剣帝、それに激昂してロキに向かつていくソーナに一つの力が授けられた、それは仮面ライダーに変身するための道具だった、それを受け取りその力を使い剣帝を復活させる為に頑張ろうと意気込むのだった

ソーナ（新しい力と言われてこの白い物を頂きましたが…どう使えば良いのでしょうか…）

ソーナがそんな事を考えて下を見ていると足下に自分が写った水溜まりが見えたかと思えばその写った自分の腰にベルトが装着され、そのベルトは自分の体自体にも装着された

ソーナ「これは一体……もしかして！」

ソーナはベルトの全面部分にあるへこんだ部分に持っている白いカードバックルを差し込んだ、するとソーナの姿が白い聖騎士のような姿へと変わった

ソーナ「これがさっきの方が言っていた新しい力」

ソーナがそう呟きながら自分の姿を見ていると

ロキ「何時まで我を待たせるつもりだ！」

ロキが魔法弾を放った、が

ソーナ「ハア！」

白鳥の翼のような薙刀で魔法弾を斬った

ロキ「ほお、やはりあの方から力を貰っただけあってこの程度では当たりはせんか、ならば、これならどうだ？」

ロキは自分の背後に魔法弾を大量に用意し、一斉に発射した

ソーナ（流石にこんな数は弾ききれない！）

ソーナがそう考えるとソーナの目の前に機械的なフォルムではあるが丸さの残る大きな白鳥が現れソーナを庇った

ソーナ「私を…庇った？」

ロキ「やはりあの方からの贈り物というだけあって硬いな、ならば！」

ロキはそう言うのと魔力弾を収束して大きな魔法弾を作り出した、だが

白鳥「プエエン！」

白鳥が翼をはばたかせて突風を起こした

ロキ「クツ、鳥風情が我の邪魔するな！」

ロキは白鳥に向けて魔法弾を放った

ソーナ「やらせはしません！」

だが、今度はソーナによって魔法弾は斬られて攻撃を防がれてしまった

ロキ「雑魚風情が………」

ロキは怒りで歯軋りをした

ソーナ（この力を使えば、悪神ロキに勝てる！）

ソーナ「悪神ロキ、覚悟！」

ソーナがそんな事を考え攻撃しようと薙刀を振るうと

ロキ「調子に乗るなあ！」

ロキが衝撃波混じりの魔力を身体から発してソーナを吹き飛ばした

ソーナ「キヤア！」

ソーナは軽く8 m程後ろに飛ばされてしまった

ロキ「こちらが加減をして相手をしてやれば調子に乗るとは、雑魚風情が我に勝てる  
とでも思ったか！」

ロキは先程まで放っていた魔法弾の数段魔力のこもった魔法弾を大量に出現させ  
ソーナに向けて一斉発射した

ロキ「神々の黄昏（ラグナロク）が始まる前の死亡者となるが良い、フハハハハッ」

ロキはそう言つて高笑いをした

ソーナ「ゴメンナサイ、劍帝様……」

魔法弾はソーナに向かつて行き爆発して煙が起こつた

劍帝「オイゴラ、ロキ、俺の大切な主の妹君たるソーナ様を傷付けようとするなよ」

だが、魔法弾は一発足りともソーナには当たつておらずソーナの前方には劍帝が立つていた

ロキ「何？ 貴様は確かに我がこの手で葬つた筈だが、何故生きている？ それにその身体は」

とロキは劍帝の身体を不思議そうに眺めた、何故ならば

劍帝「俺がそう簡単にくたばるかよ」

劍帝の身体は傷一つ無く、消し飛んだ筈の両腕も有り、手をゴキゴキと鳴らした

ロキ「……やはりあの方の創り出した者、だという事か」

と言いながら再度魔法弾を出現させた

劍帝「そういうこつた、それと悪いが此処からは俺も本気でやらせてもらう」

劍帝はそう言うのと懐から緑色の銃とカードバツクルを取り出した。そして、それを持つて腕を前に突き出した。その後、何時の間にか劍帝の腰に巻かれていたベルトにカードバツクルをはめ、劍帝が

劍帝「変身！」

と叫ぶと劍帝の姿が緑の重戦士の様な姿に変わった

ロキ「ほお、やはり貴様もあの方から力を授かっていたか」

劍帝「まあな、そらこれはオマケだ」

劍帝はそう言いながらカードバツクルからカードを二枚抜き、更にベルトの横に付いていた緑色の銃のようなものを手に持ち、その銃のカートリッジを開きカードを入れた、すると

《シユートベント》

と銃から音声がすると劍帝の両腕にも見えるライフルが出現した

劍帝「ついでにコイツもだ」

劍帝はそう言つて再度カードを銃に入れた、するとまた

《シユートベント》

と音声して、劍帝の肩に先程劍帝の腕に出現した大砲とは別の大砲が出現した

劍帝「そーらよつとお！」

劍帝は両腕と両肩に装備されている大砲を同時に放つた

ロキ「フンツ！こんな物は我には効かん！」

飛んで来た砲弾をロキは魔法弾で相殺した

劍帝「オイオイ、アレ防ぐのかよ…だったら！」

劍帝は急速下降して地に降り立つと一枚のカードを取り出して銃に入れた、すると

《ファイナルベント》

という音と共に劍帝の目の前の地面に急に鏡が出現し、其処から緑の機械のような牛が現れた

劍帝「さつてつと、これならイケるだろ」

牛の背面にある窪みに持っている銃を差し込むと牛はロキの居る方向めがけて腕を伸ばし胸部を開いた

劍帝「当たつてくれよお…ファイアー!!」

劍帝が引き金を引くと牛の腕や頭から砲弾なビームが放たれ開いた胸部からミサイルが放たれた

ロキ「ほお…」

そして、その攻撃は見事にロキに命中した

劍帝「オシツ！これなら流石に倒れただろ…」

ロキが居た場所は劍帝の攻撃により爆炎が起きていたが、徐々に晴れていった  
劍帝「あー、これで終わり、か…な…？」

爆炎が晴れていくにつれて一人の人影が見えた

ロキ「フハハハツ！この程度か？」

其処にはロキが無傷で飛んでいた

劍帝「チツ、アレでも倒せねえのかよ…チクシヨウ！」

劍帝は落ち込むように倒れながら地面を叩いた

ロキ「フンツ、雑魚の中では中々やる方だったが、我には及ば…：…ん？」

ロキが見下ろしていると劍帝の後ろに一人の少女が居た

ウサリア「教えろですびよん！ふん！」

そう言いながら少女は劍帝に向けて手に持っていた大きな杵を勢い良く振り下ろし

た

劍帝「いつて！誰だ！」

劍帝は大きな杵で叩かれ即座に叩いた本人の居る後ろを振り返った、すると其処には

黄色いうさ耳を付けた少女が居た

劍帝「え、えーつとお、君は確かあ」

と劍帝が思い出そうとしていると

ウサリア「神王軍十番隊大隊長悪魔総統のウサリア。私は今、主を求めて三千里なん

ですびよん！」

とうさ耳を付けた少女、ウサリアが返答した



劍帝「そーですかそーですか。いきなり叩かんで下さい！痛いです！」

劍帝はウサリアに向けてそう言った、するとウサリアは

ウサリア「我等が王は言いました。『無視する雑魚は殴れば言う事を聞く』と言いましたですぴょん！」

と言り返した

劍帝「（ハ、ハ）ハア…流石だなあ、あの方は真面目にブレないなあ」

劍帝は溜息を軽く付き

劍帝「夜鴉様なら少し前にここに来てヘルつて娘に乗つて帰りましたよ」と返答した

ウサリア「さっさと答えれば良かった物をふん！」

ウサリアは再度劍帝に向けて大きな杵を勢い良く振り下ろした

劍帝「二回も叩かんで下さい！痛いです！」

劍帝は叩かれる直前にガードした

劍帝（あれ？何でかちよつと前より力が漲るぞ？しかも、さつき殴られて更に湧いたような……）

と劍帝が考えていると

ウサリア「我等が王！いま参りますですぴょん！」

と言つてウサリアは去つていった

劍帝「やつと帰つた……さて、待たせたなあ、ロキ」

劍帝はロキの居る方向に向き直つた

ロキ「さつきあの方の配下に殴られていたようだが？その体で我に勝てると思つてい  
るのか？」

劍帝「さあなあ？それはやつてみないと分からん、ただなあ」

劍帝の姿が瞬時に消えた

劍帝「さつきまでより数段力が漲つてるからな」

次の瞬間にはロキの近くに移動してロキを蹴り落とした

ロキ「何っ!?!くっ…」

ロキは対応してガードはしたが地面に向けて蹴り落とされた

劍帝「取り敢えず、今日はもう疲れたから早く帰りたいんだ、とつととくたばれ」

劍帝はそう言いながら4つの小さな火球をロキの墜落位置に追撃に落とした

劍帝「四爆天（ファイアー・ゾーン・プラッツェン）」

火球が地面に落ちた瞬間に直径5kmはあろうかと言わんばかりの大きな爆発を起  
こした

ロキ「グッ！」

爆発に巻き込まれてロキが更に地面に押し込まれた

劍帝「さてと…やつと来たか」

劍帝がチラリと後ろを見ると天から光が地面に向かって伸びて来てその光の中に大きなハンマーが見えた

劍帝「さてと、あのままじゃアイツはアレで殴れねえなつと、おらよつとお！」

劍帝がまた瞬時に消えてその次の瞬間にロキの墜落位置のガレキが吹き飛ばされた

劍帝「オイオイ、どうしたロキ、お前が雑魚と嘲笑った相手に圧倒されてるぞ？」

ガレキが吹き飛ばされた位置には全身にダメージの痕跡があるロキの首を持って持ち上げている劍帝が居た

ロキ「貴様は…何者だ」

とロキが尋ねると

劍帝「んー、敢えて答えるならば、此の世ならざる物…だな」

と小声で劍帝は返答すると空に向けて投げた

劍帝「ほら、一誠君！早くミヨルニルでロキを殴りな！」

と劍帝が叫ぶとその少し後ろで大きなハンマーを構えた一誠が

一誠「分かった！行くぞドデカイハンマー!!!」

と言いながらその構えたハンマーをロキに向けて振り降ろした。するとロキの周り

に魔法陣が展開された

ロキ「おのれ赤龍帝！おのれオーデイン！」

魔法陣が扉のようになり閉まり始めた

一誠「こんな悪の神より乳の神とかに会いたいもんだぜ」

その次の瞬間に扉のようになった魔法陣が閉じた、そして、足止め部隊はロキを倒したと安心した、とある三人を除いて

ロキ『ただではやられん………呪いあれ……存分に苦しめ』

一誠（何だ今の……）

リアス（空耳？）

剣帝（呪い……か）

リアスと一誠は心の中でそう考え、そして、剣帝は

剣帝「さつてと、俺は疲れましたんで先に戻ってますね」

と言いながら剣帝は自分の足元に魔法陣を展開しようとしていたが

匙「オイッ、剣帝さんよ」

と匙に呼び止められた

剣帝「ん？何かな？匙君」

と剣帝が質問すると

匙「さっきロキを圧倒していたあの速度といい、力は何だったんだ？」

と匙は返答した

劍帝「えっ？あぁ…アレね…アレはあ…うん、秘密かな…」

と劍帝は口籠るように返答した

ソーナ「そうです劍帝様！あの力は一体」

一誠「それと途中でアンタを殴つてたあのウサミミの美少女とはどんな関係なんだよ

！」

そう言った質問攻めを劍帝は一時間ほど受け続けた

## 第三十八話 「飯マズ嫁は報われない」

あらずじ

授かった力の使い方が分からず困っていたソーナ、だが、奇跡的に地面にあつた水溜りに体が反射してベルトが出現し、変身する事に成功し、ロキと互角の戦闘を行えるようになったソーナ、だが、攻撃を防がれ逆に攻撃を喰らわせられ続けたロキが激昂し、本気でソーナを殺しに掛かったが、それは傷が完治し目を覚ました剣帝により防がれてしまった、だが、やはりロキには剣帝の攻撃であろうと防がれてしまい、絶望を味わいかけたかと思うとウサミミの少女が現れ剣帝を二発程手に持っている杵で叩かいたかと思えば、その少女が去った後から剣帝の力が数段上がりロキを圧倒し、無事にロキを撃退することに成功したのだった

—セラフオール邸：剣帝の部屋—

剣帝「（ハ、）ハア…昨日のロキとの戦いは疲れたなあ…」

剣帝は椅子に座りつつ赤い本を右手で開きながら左手を握ったり開いたりしたしな  
がらそう呟いた

劍帝（やつぱりだ、昨日のロキとの戦闘途中でウサリアちゃんに殴られてから封印が緩んでる気がする、封印を10分割にすると、ウサリアちゃんに殴られるまでが1割でウサリアちゃんに殴られてからは3割ってくらいに変わってる…）

そう劍帝は思った

劍帝「……これからは物とか壊さないようにもつと注意しないとな……」

劍帝はそう言いながら左手にペンを持つと目の前にある机に持っていた赤い本を置いてペンを右手に持ち替えて向かった

——一方その頃セラフォルーは——

セラ（劍帝君がロキとの戦いから帰ってきてからよく疲れたって言うてるから疲れが無くなるような事してあげたいなあ…そーだ！料理作ってあげよつと）

と考えつつセラフォルーは厨房へと足を運んだ

セラ「という訳で料理するから味見宜しくね？リオールちゃん」

そう言われたリオールは少し困った顔をしていた

リオール（セラフォルー様の命は断れません…どうしましうかね…セラフォルー様って料理が…）

リオールがはそう心の中で考えながらとある状況を思い出していた

——リオールの回想——

セラ「はい、剣帝君、私が一人で頑張って作ってみたから食べてみて？」

そういつてセラフォルーは剣帝にカレーを食べさせようとしていた

剣帝「あつ、はい、頂きます」

剣帝はそのカレーを受け取り一口食べ

剣帝「美味しいですね」

と笑顔で言った

セラ「えへへ、有難う剣帝君」

剣帝「……………セラ様、鍋の火はちやんと消しましたか？」

と剣帝がセラフォルーに聞くと

セラ「うくん、もしかしたら消し忘れてたかも知れないから、ちょっと見て来るね」

そう言うのとセラフォルーは厨房へと向かい、退室した

剣帝「……………」

セラフォルーの退室を確認した直後に剣帝の顔が急激に青ざめ始めたので、リオール

リオール「どうなさいましたか？剣帝様」

と聞くと

剣帝「食べてみたら……………分かります…ゴフツ」



劍帝は音を立てずに倒れてしまった

リオール「……まさか……」

リオールは恐る恐るセラフォールの作ったカレーを食べてみた

リオール「……こ、これは……」

カレーの味は甘さと辛さが同時にやって来るような味で、更に野菜はゴロゴロと塊状で硬かった……はつきり言う

リオール「……お、美味しくない……」

リオールも劍帝とほぼ同時に倒れ、その後はそこをたまたま通り掛かったメイド達により各自室へと運ばれた

——回想終了——

リオール（あんなふうな物をまた劍帝様に食べさせたりしたら……また倒れられる！）

リオール「セ、セラフォール様」

リオールの頭をその考えが過ぎりリオールは急いでセラフォールを止めようと声を掛けたが

リオール「なあに？リオールちゃん」

セラフォールの前方にある鍋には既に完成済みの味噌汁があった

リオール「あ、味見を致します……」

リオールがそう言うのとセラフォルは鍋の前を横に退いた

リオール（あの時よりは恐らくはマシな筈です…チョコを一緒に作った時はちゃんと作れましたし…なので、セラフォル様には申し訳ありませんが。転けるフリをして鍋の中身を捨ててしましましょう…）

リオールはそう決心すると、唾を飲み込み味噌汁の味をお玉ですくって確認した

リオール「……………」

リオール（カレーの時と同じ様な味がする…）

リオールの頭にそんな思いが出たかと思えば、リオールはその直後に気絶した

セラ「リオールちゃん!？」

その後、リオールが倒れた事に驚いたセラフォルがメイド数名を呼びリオールを部屋へ運ばせ看護をさせたので何事も無かったそうだ

—リオールが倒れた10分後：剣帝の部屋—

剣帝は部屋の外、厨房でメイド長が倒れている事などつゆ知らず、黙々と赤い本に向かつてペンを手に取り文字を書き連ねていたが

剣帝「……………」

ペンを持っている右手に違和感を覚えた、否、力が入りにくいという事実を確認した  
剣帝（……………力が抜けて行く?……………違うな…封印が強まって力が1割に戻されたか）

劍帝はそう思うと

劍帝「ハァー……」

と溜息を付いた

劍帝「折角力が戻ったと思つたんだがな……そんなに甘くないか……」

劍帝がそう言いながら落ち込んでみると、部屋の扉から

セラ「劍帝くん、開けて〜?」

とセラフォールの声がした

劍帝「あつ、はい!了解しましたー」

劍帝は声に反応してすぐに椅子から立ち、扉を開けた、其処には蓋を被つた先程の鍋

を持っているセラフォールが立っていた

劍帝「セラ様、その鍋は一体……」

と劍帝が問うと

セラ「えつとねえ、劍帝君疲れたつていう昨日から言ってるから、疲れが取れるよ

うにつてお料理作つて来たから食べて?」

とセラフォールは笑顔で言つた

劍帝はそれを聞いて、見た瞬間に背中に冷や汗を掻きながら

劍帝「あ、有難う御座います」

笑顔で感謝の言葉を言った

セラ「いーのいーの、剣帝君はいつつも頑張ってくれてるからね〜」

セラフォルーはそう言いながら部屋の中にある机の上には鍋を運んだ、そしてセラ「剣帝君、この本なあに？」

と赤い本を指差して聞いた

剣帝「!!ヤベツ！」

聞かれた瞬間に剣帝は高速で移動して本を閉じ、自分の後ろに隠した

セラ「あ〜！剣帝君何で隠すの〜？」

セラフォルーが少し怒ったような口調でそう言う

剣帝「い、いえ、隠してませんよ？」

と剣帝は顔をセラフォルーの居る方向とは別の方向に向けてしらばっくれた

セラ「さつき、後ろに隠したでしょ！」

セラフォルーがそう言いながら剣帝の後ろに周りこんだが

セラ「アレ？無い」

剣帝の手には何も無かった

剣帝「見間違いだったんじゃないですか？」

と剣帝が誤魔化すと

セラ「ううくん、そうなのかなあ？」

とセラフオルーは考えはじめた

剣帝「そ、そうだ！鍋の中身頂きますね」

と言いながら剣帝は鍋の蓋を開け、一緒に置いてあつたお碗に味噌汁を注いだ

セラ「えっ？あつ、うん、食べて食べて？それで感想きかせてね？」

セラフオルーは近くにあつた椅子に座りながらニコニコとしている

剣帝「……………」

剣帝（嫌な予感がするが：セラ様悲しませたくないし…………ええいままよ！）

剣帝は一気に味噌汁を飲み干した、すると

剣帝（……………なんだろう、渋い上に酸っぱい…その上味噌が溶けきつてないからかなりドロドロしてるし……………何より塩っ辛い…うん、カレーの時より不味い…）

剣帝の頭にそんな考えが浮かぶと剣帝も瞬く間に倒れた

セラ「えっ？えっ？何で倒れるの!？」

セラフオルーが慌てて扉を開けてまたメイド数名を呼んだ

メイドA「それじゃ、せーのでいきますよ！せーの！」

メイド達数名が剣帝を持ち上げて運び始めると、剣帝の服の上着の裾から一冊の本が

落ちた

セラ「アレ？これってさっき見た…」

それは剣帝が机に広げていた赤い本だった

セラ（剣帝君頑なにコレを隠そうとしてたけど、どんな事書いてあるんだろ…もしかして剣帝君の恥ずかしい事とか書いてあるのかなあ…）

メイドA「それでは私達は従来の仕事に戻らせて頂きます」

メイド数名はセラフォルーにお辞儀をしてから部屋を出て行った

セラ「は〜い、急に呼び出しちゃってゴメンね〜」

セラフォルーはメイド達が出て行ったのを確認すると赤い本を開き読み始めた、一頁目、其処には剣帝がセラフォルーと会う少し前、駒王町に来た時の事が書かれていた

く魔王少女黙読中く

剣帝が気絶してから十分程経過した後

剣帝「う…ううーん…」

剣帝はベットで目を覚ました

剣帝（アレ？えーつとお…何で俺寝てたんだ？確か…朝起きて…本を書いて…本を…）

剣帝は自分の身体の各所を触った

剣帝「本が無い！」

劍帝は慌てて上半身を起こして辺りを見回した

劍帝（あの本は此方の世界の人に読まれるとマズイ！本は何処だあ！）

劍帝がキョロキョロと周りを見回していると探していた本はすぐに見付かった、だが

劍帝「……マズイ！」

劍帝は慌てる様子はないが嫌そうな顔で全身をベットから起こして、立ち上がりセラ  
フォルーの近くへと移動した

劍帝「セラ様……」

と劍帝が声をかけると

セラ「えっ？あつ、お早う劍帝君」

劍帝「おはよう御座います……じゃなくて！本返して下さい」

劍帝がそう言う

セラ「嫌！」

とセラフォルーは本を抱き締めてしまった

劍帝「嫌と言われましても……俺の大切な物なのです！返して下さい！」

と劍帝は必死な表情で訴えかけた

セラ「……なら、一つだけ答えて……」

セラフォルーは静かに劍帝の方を見据えてそう言った

劍帝「はい?……何でしょうか?」

劍帝はセラフオルーの目を見るまでは軽く笑い混じりの表情だったがセラフオルーの目を見ると真面目な表情へと変わった

セラ「貴方は……何者なの?」

セラフオルーがそう問い掛けると

劍帝「単なる一人の元人間ですよ。というか、その質問が出るといふ事は二天は読みましたか」

劍帝がそう聞くとセラフオルーはゆっくりと頷いた

劍帝「そうですね……まあ、俺の力が何処かおかしいのは最初から知っていたでしょう?」

と劍帝が聞くと

セラ「まあ、あんな力を見せられればね」と答えた

劍帝「でしょうねえ……それでもそれ程とは思わなかったって所でしよう? あつ、質問には答えたんで早く返して下さい」

劍帝はそう言いながらセラフオルーの方向に手を伸ばした

セラ「うん……何時も何時も強いなあとは思っては居たけど、まさか全盛期の二天龍を



相手にしても圧倒する位強いとは思わなかった」

セラフォルーは大人しく本を手渡した

剣帝「嘘偽り無く答えてくださいね？ひいたでしょう？こんな怪物みたいなんだって知って」

剣帝は本を受け取り懐になおしながらそう言った

セラ「ううん、頼もしいなあって感じちやつた、事実私って立場上良く襲撃されるから強い人が近くに居てくれるのってすつごく頼もしいって思うの」

セラフォルーは笑顔でそう言った

剣帝「……ハア……ポジティブと言いますか……何と言いますか」

剣帝はそう言いながら呆れたように息を付いた

セラ「もー！さっきの溜め息なあにー？」

とセラフォルーは少し怒ったように言った

剣帝「別に何でもありませんよ。単に緊張していた自分が馬鹿らしく感じただけです。ああ、それから言い忘れましたが。俺は今さっきの本に書いてあった時よりは弱くなってますからね。知ってるでしょうけどもね」

剣帝はそう笑顔混じりで答えた

セラ「えー、絶対嘘でしょー！」

セラも剣帝の返答を聞いて笑顔になりながら怒ったような口調で剣帝を追い掛けた  
剣帝「アハハー、本当ですよ」

剣帝はそう言いながら逃げ回っていた

剣帝「ああ、それから……セラ」

剣帝は逃げ回るのを辞めて止まった

セラ「なあに？ 剣帝君」

と止まった剣帝に抱き着きながらセラフオルーは聞いた、すると

剣帝「今度教えるから、練習しような、料理」

味噌汁の入った鍋を持ち上げながらそう言った

セラ「……美味しくなかった？」

セラフオルーが頭を少し上げながら聞くと

剣帝「うん、言っちゃ悪いと思って黙ってたけど、かなり美味しくない……だから、

ちゃんと教えてあげるからな？」

剣帝は顔を笑顔にしていた

セラ（目が笑ってない……）

その時の剣帝は冷淡な目をして居たらしい

## 第三十九話「黒き世界の真実」

—セラフオール邸：剣帝の部屋—

剣帝「…うう…ううーん」

剣帝は自室で悪夢にうなされていた

??「剣帝なら私の事を裏切ったりしないって思ってたんだけどね……」

白髪の少女が涙を流しながら剣帝にそう言った

剣帝「待ってくれ…違うんだ!…誤解なんだ!」

剣帝はその少女に向けて手を伸ばすが一向にその手は届かない

??「さようなら剣帝…セラフオールさんと幸せにね……」

白髪の少女はそうとだけ言う闇の中へと消え行く

剣帝「待ってくれ!頼むから!待って!待ってよ!」

剣帝は悪夢から目を覚ますと同時に手を伸ばしながら飛び起きた

剣帝「妹紅!!」

剣帝は机と椅子とベットとトランクしかない自分の部屋を見回した

剣帝「夢…だったのか…」

その時剣帝の頬を何かがつたい、そして、落ちた、それはその後もポタリポタリと落ち続けていた

剣帝「これは……」

剣帝が雫が伝う、それは涙だった

剣帝「ハハツ……アイツからのかなりな嫌がらせだな……」

剣帝は服の袖で涙を拭うと眼鏡を懐に入れ、ベットから起き上がった

剣帝「今日は……何だか嫌な予感がするな……」

剣帝はそう言いながら服を着終わり、ネクタイを着け、部屋を後にした。己の背に黒い禍々しい紋様が浮かび上がっているとは知らずに

——セラフオルー邸：セラフオルーの部屋——

剣帝はセラフオルーの部屋の前に立つとノックをした

剣帝「セラ様、入っても宜しいですか？」

すると部屋の中から

セラ「良いよく、入って入って」

と声がした。なので剣帝は扉を開けて

剣帝「おはよう御座います。セラ様」

と言いながら入った、すると其処にはベットに下着で横になっているセラフオルーが

居た

劍帝「……………」

劍帝は数分間眼を泳がせつつ考えると

劍帝「失礼致しましたー」

と言いつ頭を下げてから、扉の方へと向き退室しようとした

セラ「ちよつ、ちよつと待つてよ劍帝君、ちよつと驚かせようとしたただけだから逃げようとしないでよ」

そう言いながらセラフォルーは扉を凍らせて開かないようにした

劍帝「……………ハア…悪戯も程々にして下さい、セラ様」

劍帝は扉の氷を溶かしながらそう言った

セラ「だつてえく、劍帝君がなんだか最近ピリピリしてるんだもん」

セラフォルーがそう言う

劍帝「俺が苛々しているの？」

と劍帝は確認を取った

セラ「うん、してるように見えるよ？だから和ませようと思っただけけど……」

とセラフォルーは申し訳無さそうにしつつ言った

劍帝「……………分かりました。確かに最近良く苛々してました。自分の非力さの余り

ね、その辺を汲み取って頂き有難う御座います」

と言いながら剣帝はセラフォルの居る方向へ向き直り頭を下げた

セラ「いくのいくの、私がやりたいからやっただし」

とセラフォルはニコニコしながらそう言った

剣帝「……………ところで、本日のご予定は何かありますか？」

と剣帝が頭を上げ確認を取ると

セラ「え〜つとねえ…」

セラフォルが思い出そうとしていると

リオール「セラフォル様、サーゼクス様より伝言を預かっております」

と部屋の外からリオールの声がした

剣帝（あー、これはもしかして……）

剣帝は何となくで伝言の内容を察した

セラ「サーゼクスちゃんから？どんな伝言？」

とセラフォルが聞くと

リオール「『禍の団（カオス・ブリゲート）の動きが活発になりつつあるので対策を打とうと思うので急ぎ会議を行いたい』との事です」

リオールはそう返答した。そして、それを聞いたセラフォルは

セラ「そっか、伝言有難うリオールちゃん」と言つた

リオール「いえ、これが私の実務ですので、では」

そう言いながらリオールは下の階へと降りて行つた

セラ「会議の連絡もあつた事だし急いで行こつか、剣帝君」

とセラフォルーが言う

剣帝「ええ、急いで行かないといけませんね……ですので速く服を着て下さい」

と剣帝がツツコミを入れた

セラ「あつ……」

そのツツコミを受けてセラフォルーは忘れてたと言わんばかりの表情になつた

く少女着替え中く

剣帝「服は着終わりましたね？セラ様」

剣帝は部屋の外で確認をとつた

セラ「うん、着終わったから入つて来て良いよー」

その返答を聞いて剣帝は部屋の中へと再度入つた

剣帝「それでは急いで行く為にも早速魔法陣作りますね」

剣帝はそう言いながら足下に魔法陣を展開した

セラ「うん、サーゼクスちゃん待たせちゃいけないもんね」

セラフオルーが剣帝の魔法陣に入ると転移が開始され二人の姿は消えた

―対カオス・ブリゲート会議場前―

会議場前に魔法陣が展開され剣帝達が現れた

剣帝「はい、到着しましたよ」

剣帝がそう言うのとセラフオルーが剣帝から離れて

セラ「何時も有難うね、剣帝君」

と笑顔で言った

剣帝「いえ、これも眷属として、貴女のクイーンとして当然の事ですから」

剣帝はそう言いながらセラフオルーの少し後ろを歩き始めた

―対カオス・ブリゲート会議場：会議現場―

剣帝が扉を開けると其処にはサーゼクスとその隣に他の魔王達も並んで座っている

そして、サーゼクスの正面に墮天使の総統のアザゼル、そして、そこから数席開けた隣に上位天使のミカエルが居た

セラ「もう皆来てたんだ：私達が最後みたいだね」

剣帝「遅れてしまったてスミマセン」

剣帝は深々と頭を下げた



サーゼクス「いや、大丈夫だよ、我々も先程集まり終わった所だ」とサーゼクスが言った

ミカエル「そうです。なので、顔を上げて下さい」

続けてミカエルが言った

剣帝「有難う御座います」

剣帝は顔を上げてそう言った

アザゼル（ミカエルのあの態度…ついでにコイツの顔…どつかで見覚えがある気がするんだよなあ）

アザゼルは剣帝の顔を見ながらそう考えていた

剣帝「どうしました？アザゼルさん」

と剣帝は視線に気付きアザゼルに尋ねた

アザゼル「いや、何でもねえよ」

アザゼルはそう返答した

剣帝「そうですか…」

剣帝は何か疑うような眼を向けつつセラフォールの後ろに立った

サーゼクス「では、早速会議を始めるとしよう、まず、現状のカオス・ブリゲートの動向だが…」

## 第四十話 「呪言の切り裂き悪魔」

あらずじ

劍帝は眠りながら悪夢を見てしまっていた夢の内容は大切に思う娘に離れられると言うものだった劍帝はその後悪夢から飛び起き、セラフォルを起こしに行くと言うとサーゼクスから会議の知らせが来た、なので劍帝はセラフォルと対カオスブリ・ゲートとの決戦の為会議へと向かった

く三種頭目会議後く

サーゼクス「最後に、本来なら同族同士の戦闘は避けたい所だが今回は致し方ないからね。みんな全力で奮って貰いたい」

サーゼクスがそう言うと言席に座っていた各々が立ち上がった

セラ「行くよ、劍帝君」

セラフォルはそう言いながら会議場の外へと歩きはじめた

劍帝「了解しました。我が主」

劍帝はそのすぐ後ろを付いて行く

く  
???  
く

紅色の部屋の中で夜鴉が椅子に座っていた

夜鴉「あの餓鬼が調子に乗り出ししてそろそろ始末しないとな」

??「お呼びでしようか？」

夜鴉が居る部屋の中に黒い鹿の角の様な物を付けた割烹着の女性が入って来た

夜鴉「鹿角、お前の旦那はまだ来ないのか？」

と夜鴉が問を投げ掛けると

鹿角「jud. まだ夢の中です。それと忠勝様は私の旦那ではありません」

と返答をしつつ間違っていると思つた部分を否定した

夜鴉「カツカツカツ！もう認めちまえよ。何年このやり取り続けていると思つてんだよ」

その返答を聞いた夜鴉は軽く笑つた

鹿角「jud. 五十六年三ヶ月二十三日です」

鹿角は夜鴉が笑いつつ言つた言葉へ正確な日数を言つた

???「殿はそう言う事を言つてんじやねえと思うぞ。てめえはそう言う所が堅すぎるぞ」

そう言いながら更に更に部屋の中に白神の白ヒゲを生やした武者鎧姿の男性が入って来

た

鹿角「忠勝様、おはようございます随分と遅い起床でございますね」

と鹿角が礼をしてから言う

忠勝「うるせえ！我の睡眠時間増やしたのはてめえだろ！」

と忠勝は怒鳴るように言った

鹿角「余計な物を買ってくるからいけないのです。ただでさえ物価がどんどん高騰していくと言うのに」

と少し怒ったように、かつ問い直すように言った

忠勝「うぐ！でも、娘を焼肉に誘うの禁止とか有り得ねえだろ！」

と忠勝は反論した

鹿角「夜鴉様、この事をどう思われますか？」

しかし、鹿角は夜鴉に自分と忠勝どちらが正しいか聞いた

夜鴉「鹿角が正しいな。年頃の娘を焼肉に誘うとか真面目に無いわあ、スイーツパラダイスとかに誘えよ」

と忠勝に呆れたように言った

忠勝「そ、それは我が恥ずかしいと言うか何と言うか。それより！呼んだ用件は如何か！」

と忠勝は別の話題を切り出した

鹿角「話を反らしましたね」

しかし、その行為に鹿角にツツコミを入れられてしまった

忠勝「うるせえ！殿、今回は何でしょうかい」

と忠勝が夜鴉に尋ねると

夜鴉「とある調子に乗った餓鬼を殺して欲しくてなあ。途中の邪魔者は好きにしろ」

と忠勝が尋ねてきた事柄への答えを出し、命令を下した

忠勝「応！では言つて参りませう」

忠勝はそう言いながら部屋を後にしようとしていると

夜鴉「終わったら酒でも呑もうや」

と夜鴉から誘われた

忠勝「うっし！やる気出てきたあ！」

すると、忠勝はさつきにも増してやる気を出した

鹿角「ほほどほにしてくださいね？誰が介抱するとお思いで？」

だが、鹿角が注意するように言う

忠勝「うっ、わかつてらあ。では本多忠勝出陣する！」

と忠勝は部屋を後にした

夜鴉「鹿角、支えてやってくれ。後、俺の御気に入りは消さないようにな」と夜鴉は鹿角にも命令を下した

鹿角「jud. では私も行って参ります」

鹿角は命令を聞くと部屋を後にした

夜鴉「さあてと二世ちゃんと戯れてきますかね」

そう言つて夜鴉も部屋から消えた

く朱天の荒野く

朱色の空にはカオスブリ・ゲートの所属員であろう、魔術師や悪魔、墮天使や天使と三界同盟の悪魔、墮天使や天使が戦っていた

剣帝「セラ様……」

剣帝がセラフォルーに向けて喋ろうとしていると

セラ「うん、行ってらっしゃい」

喋り始める前にセラフォルーはそう言った

剣帝「……有難う、セラ」

剣帝はそう呟き全身に赤い鎧を纏うと戦闘域に向かつて飛んで行った

く朱色の荒野：戦闘中域く

剣帝「どうした？この程度か？この程度かで俺の主挑もうと思ったのか」

剣帝は呆れたように言いながら魔術師や悪魔や天使や墮天使を薙ぎ倒して行く  
魔術師A「今だ！やれえ!!」

一人の魔術師がそう言い放つと剣帝の近くに魔法陣が展開された

剣帝「これがどうし……」

剣帝が何時も通り爆炎の魔術を使おうとしたが

剣帝（魔術を使えなくなつたか……）

剣帝がそう考えていると

魔術師A「今だ！今ならば奴は魔術を使えない！遠距離から攻めれば倒せるぞ！」

魔術師が周りの魔術師や悪魔や天使と墮天使に言った、すると、周りの魔術師達が魔術師を使って攻撃を仕掛けた

剣帝「……ハア……未知の敵への警戒心が無さ過ぎるだろ」

そう剣帝はボソリと呟いた、そして、剣帝の指から青白い光が放たれ始めた

もと

しようげん

剣帝「求めるは焼原」

くれない

・紅蓮

剣帝がそう言いながら天に向けて指を滑らせると魔法陣が展開され炎が天に撃ちだ

されその炎が砕けて降り注いだ

魔術師A「何っ?!?グアア!」

降り注いだ炎は周りの魔術師達に直撃した

下級悪魔A「何だその魔術は!」

と一人の悪魔が問い掛けると

劍帝「違うんだなあ…これは魔術じゃないんだよなあ……」

劍帝はニヤリと笑いながらボソリと囁き

もと

らいめい

劍帝『求めるは雷鳴』

いずち

稲光』

劍帝がそう言いながら悪魔の居る方向を向きまた指を滑らせると、劍帝の眼前に魔法陣が展開され、魔法陣から雷が放たれた

下級悪魔A「グアアア!!」

雷が当たると下級悪魔は断末魔を上げながら焼け焦げ、炭になった

劍帝「記憶にある魔法ならやっぱり『眼』が無くても使えるみたいだな…でも、魔術は無理か」



劍帝は再度爆炎の魔術を發動しようとしたが、やはり發動出来なかった

劍帝「うーん……魔法と素手だけで片付けるとなると数が多いなあ」

劍帝の目線の先には何百何千の敵勢力の悪魔や天使達が居る

劍帝「仕方無い……使う気は無かったんだがな……」

劍帝はそう言いながら腰に常に帯刀している木刀を抜き、刃に指を這わせ

劍帝「世を呪え……全てを喰らえ……敵を消せ……殺せ……倒せ……壊せ……全て……総て……全てを滅ぼせ」

劍帝がそう言いながら木刀を撫でると、木刀が変化し紅い刃の真劍となった

劍帝「さあ、行こうか！」

劍帝は剣を握り締めながら敵のまっただ中へと飛んで行った

## 第四十一話 「悪意の喪失と善意の悪意」

あらずじ

会議に呼び出された剣帝とセラフォルは会議終了後、すぐに戦争に向かい始める、一方その頃夜鴉は自分の配下を何処へと向かうように命令していた

そして、開戦して少し経つと魔術師の策略により魔術を封じられた剣帝、だが、剣帝は記憶に存在していた魔法と自分の剣を使って敵を倒していくのだった

剣帝「よっ！はっ！せいっ！」

朱色の空で剣帝は悪魔や魔術師達からの魔術師を切り裂き発動者を切り捨てていた

剣帝「はあ…はあ…流石に少し数が多いな…」

剣帝の目線の先には500は超える敵が居る、剣帝がそれを見つめていると

魔術師B「今だあ！」

剣帝の後ろから斬られたはずの魔術師が炎の魔術で攻撃を仕掛けた

剣帝「なっ!?!しまっ！」

魔術は剣帝に直撃し煙が起きた

魔術師B「良しっ！」

魔術師が喜んでいると煙が徐々に晴れていき

劍帝「いつてえ……」

腕が焼けている劍帝の姿が見えた

劍帝（チツ、魔術が使えないってだけでこうもダメージを入れられるのか…あの魔法は速攻性は無いし…）

劍帝はそんな事を考えながら自分の傷付いた腕を見て、動くかどうかを確かめた

劍帝「……無理か、治るまでは30分って所かな」

劍帝がそう呟いていると

??「フンツ、流石に偽物の魔王の眷属と言う訳だな、中々硬いではないか」

と劍帝の後ろから声がした

劍帝「誰だ？お前は」

劍帝が振り返るとそこには茶髪の長髪で軽鎧にマントを付けた恰好をした男が居た

シャルバ「我が名は真の魔王、ベルゼブブの正当なる後継者、シャルバ・ベルゼブブ」

男は腕を組みながらそう答えた

劍帝「シャルバ・ベルゼブブ……」

劍帝は使えない左腕を体の後ろに隠しつつ右腕のみで剣を構えた

シャルバ「フツ、あの程度の魔術師に傷付けられるような雑魚がカテレアに勝つとはな」

シャルバが左手を剣帝にかざすと天から光が剣帝に向けて降り注いだ

剣帝「グウツ……」

光に当たると剣帝は苦しそうにうめき声を出した、その様子を見ていたシャルバはシャルバ「貴様の大切にしている物を全て私が破壊して、貴様の元へ送ってやろう、ゆえに、貴様のような赤い汚物はとく死ぬが良い」

と言い放った、すると剣帝の頭に一人の少女の姿が浮かんだ

??「剣帝」

次の瞬間、その姿が消し飛ばされる情景も思い浮かんだ

剣帝「あ……ああ……」

剣帝が絶望に打ちひしがれた様な声を出していると剣帝の頭に声が響いた

???「お前の大切な物、つまり、あの娘を殺すつてよお……良いのかあ?そんな事を許しちまってもよお……」

その声に呼応するように、剣帝の心にはとある感情が渦巻き始めた

剣帝（嫌だ……嫌だ……あの娘を失いたくない……あの娘は俺の光だ……あの娘を奪われたくない……）

劍帝にそんな思いが渦巻いていると

??（なら、あそこの敵を消さないとな…だがなあ、今のお前じゃ無理だなあ…こりや諦めるしかないなあ）

その声を聞いた劍帝は

劍帝（無理…諦める…あの娘を護れない…嫌だ…そんなの…絶対に…嫌だ！）

劍帝の頭にその考えが浮かんた瞬間に劍帝の髪が朱色に染まり劍帝の動かなくなつた筈の左腕が紅く光り始め、劍帝に降り注いでいた光が弾かれた

シャルバ「何っ!？」

シャルバが驚いていると

劍帝『我、目覚めるは…』

〈始まったよ〉〈始まってしまふね〉

劍帝が言葉を唱え始めると

劍帝『覇の理を神より奪いし二天龍なり—』

〈いつだって、そうでした〉〈そうじゃな、いつだってそうだった〉

言葉を進めるに依じて劍帝の姿が変化し

劍帝『無限を喰い、夢幻を憂い—』

〈世界が求めるのは—〉〈世界が否定するのは—〉

大きく肥大化し始め

劍帝『我、赤き龍の霸王と成りて―』

へいつだつて、力でしたへいつだつて、愛だったへ

元の劍帝の姿では無くなつてしま

ドライブ《何度でもおまえたちは滅びを選択するのだなっ！》

劍帝が言葉を唱え終わると劍帝の姿は紅い蛇のような龍のような顔の巨大な怪物となつてしまつた

シャルバ「何だ…この力は…」

シャルバは変化した劍帝に畏怖を感じ転移魔法陣を展開し逃走した

劍帝『G A A A R U U U!!!』

怪物になった劍帝は鳴き声を上げ辺りの敵味方を関係無く攻撃し始めた

セラ「何…あれ…」

セラフォルーは遠くから劍帝だった怪物の姿を見ていた

く???  
く

黒い空間の中に劍帝は眠つた状態で浮かんで居る

劍帝「うつ…うつん…此処は…」

劍帝は辺りを見回した

劍帝「…俺の精神内か…それにこの色」

劍帝がそんなことをブツブツと言っていると

??「ヒャーハハハハハハッ！起きたかクソ野郎！」

劍帝の頭上から喧しい笑い声がした

劍帝「ハア…お前に唆されるとは俺も落ちたものだ」

劍帝がそう言つて呆れていると

??「んだよ、お前が弱いから俺様が動いてやったんだから感謝しやがれよ」

と男は劍帝の目の前に降りて来ながら言った、その男の容姿は劍帝にそっくりだった、髪色が黒いことを除けば

劍帝「…うるせえなあ、黙つてろよ、黒」

劍帝は苛つきながら降りて来た男、黒を睨んだ

黒「ヒヤハハッ、睨んだところでテメエが無力なのは変わんねえんだからよ、諦めて俺様に完全に身体を寄越せよ」

黒はそう言いながら劍帝を見ている

劍帝「断る、誰がお前に明け渡すかよ」

劍帝は黒の持ち掛けを断つた

黒「…チッ、今までは体が無くなると困るから力を少しやつたりしたが、そういう

んなら仕方ねえ、ボコボコにして精神内に閉じ込めてやる」

黒はそう言うのと剣帝の持っている剣そっくりの黒い剣を取り出した

剣帝「ヤダね、俺の体は俺の物だ」

剣帝も自分の近くに浮遊していた紅い剣を持って構えた、そして、双方同時に切りかかり鏢迫り合いになった

黒「大体！最初からお前がこつちの世界に來たいと言わなきゃこんな面倒な事しないで良かったんだよ！」

黒はそんな文句を言いながら剣を押しした

剣帝「知るかよ！俺が何をしようが俺の勝手だろうが！」

剣帝も剣を押し返した

黒「俺様が体内に居るの知ってた癖にそれを言いやがるか！」

黒は鏢迫り合いを止め剣帝から距離を取った

剣帝「ああ、言うね！」

剣帝も黒から距離を取った

黒「昔からテメエはそうだよな！自分勝手に決めて俺様の事情なんぞ完全無視だもん  
な！」

剣帝と黒は同時に切りかかり刃をぶつけ合った



劍帝「俺の体なんだから俺がどうしようが勝手だろうが！」

劍帝はぶつけ合いの隙を付き黒の鳩尾を蹴り、黒を吹っ飛ばした

黒「ガハツ!! 行ってえなあ」

数百m吹っ飛ぶと体が止まり、劍帝に向かって飛んで行った

劍帝「流石黒だな、力の開放率が5割になつて俺の蹴り受けても数百mだけだもんな」

劍帝の体は身に力に満ちていた

黒「やっぱり開放率が上がったか！道理で俺様も力が湧き出る訳だな…」

黒はニヤリと笑った

黒「さあ！楽しい楽しい争いの続きを始めようぜ！」

劍帝と黒はまた剣と剣の撃ち合いを始めた

く朱天の荒野く

セラ「辞めて劍帝君！」

セラフォルーは必死に怪物と化した劍帝の足を凍らせていたが

劍帝『G A A R U U !!』

劍帝の首と思われる場所から生えている頭の上に存在している角から放たれた紅い

雷に氷は破壊されてしまった

セラフオルー「キヤア！」

セラフオルーは氷が破壊された際に起きた爆風に押されてしまった

サーゼクス「やはり彼はもう戻らないようだ」

サーゼクスはそう言いながら右手に魔力を溜めている

アザゼル「まっ、仕方ねえわな」

アザゼルも巨大な光の槍を出現させた

ミカエル「彼には申し訳ありませんが、コチラの陣営にこれ以上被害を出す訳にはい

きません」

ミカエルもそう言いながら巨大な光の槍を剣帝に向けた

セラ「待って!!」

セラフオルーは三人を止めようとしたが

サーゼクス「フンツ！」

アザゼル「おらよっ!!」

ミカエル「ハアッ!!」

剣帝に向けて攻撃が放たれ爆発が起きた

セラ「嫌アアア!! 剣帝君!!」

セラフオルーが剣帝のち核へと飛んでいこうとしたが

サーゼクス「待つんだセラフオルー！彼はもうさっきの攻撃で」

サーゼクスが腕を掴んでセラフオルーを引っ張ろうとすると、剣帝の居た方向の煙からゴキユツゴキユツ、と何かを飲むような音がした

サーゼクス「この音は一体……」

煙が晴れると其処には変わらぬ怪物と化した剣帝の姿があり、身体の所々に何かが流れているような動きが見える

サーゼクス「あの光の動き……そして、この音……まさか!？」

サーゼクスは一つの結論を導き出した

ミカエル「恐らく貴方の考えの通りでしょう」

とミカエルも何かしらの答えを導き出していたようだ

アザゼル「まっ、それしか有り得ねえわな」

アザゼルも納得したような顔をしている

セラ「えっ?えっ?どういう事?」

セラフオルーがそんな疑問を浮かべていると

サーゼクス「彼は我々の攻撃を受けたのにも関わらず無傷だった」

サーゼクスが説明を始めた

セラ「うんうん」

サーゼクス「そして、攻撃され後に聞こえるあの何かを飲み込むようなこの音」  
セラ「もしかして…」

サーゼクス「先程より強くなった攻撃、つまり、彼は我々の攻撃を」  
サーゼクスが説明していると

剣帝『G A A A R U U !!』

怪物の身体から無数の触手が伸びて空中にいる魔術師を捕まえ

魔術師C「な、何をする!? 離せ化物お!!」

触手ごと口の中へと放り込んだ、その次の瞬間からまた、ゴキュツゴキュツゴキュツ  
ゴキュツ、と言う音が聞こえ始めた

魔術師D「よ、よくも仲間を…死ねえ!!」

魔術師は激昂しながら剣帝の頭部目掛けて魔術を放った、それは剣帝の顔に命中し煙  
がまた起きた

魔術師D「死ねえー!!!」

魔術師は次々と魔術を放ち続ける

サーゼクス（これでまたあの音がしたら確定だ）

全て命中しているかと思った、だが、一発目以降からはゴキュツゴキュツゴキュツゴ  
キュツ、と音がするだけで爆発は一切起こらなくなった

魔術師D「ハア……ハア……どうだ」

魔術師は魔術を放つのに必死で爆発が起ころなくなつた事に気付かなかつた、そして、疲労している魔術師に向かつて触手が容赦無く伸び、また一人が剣帝に食われた

サーゼクス「やはり彼は我々の攻撃を吸収しているようだ」

それを聞いた瞬間に両陣営の部隊員は顔を青ざめさせた

〈剣帝の精神内〉

剣帝「お前との戦いを飽きたからな……そろそろケリを付けてやる」

剣帝は疲労しながらそう言い右手に灰色、左手に赤黒い光球を出現させた

黒「ゲツ……そう来るんだつたら俺はこうだ！」

黒はそう言いながら黒い太陽を作り出した

剣帝&黒「スペルカード宣言突破!!」

剣帝と黒は同時に叫ぶと

剣帝「双蛇龍砲『ダラ・ツイン・バーストオ!!』」

剣帝は黒に向けて灰色と赤黒い色が混ざり合つた極太ビームを放つた

黒「落天『中天から墮つる黒い焰』!!」

黒も剣帝に向けて黒い太陽を数十倍の大きさにして落とした

剣帝「負けるかアアア!!」

黒「死ねえええ!!」

剣帝と黒が放った技はぶつかりあい、互いに押し合い、黒い空間を光で包むような大爆発を起こした

く朱天の荒野く

剣帝『G A A A R U U !!』

剣帝だった怪物は突然唸り声を上げると動きを止めた

セラ「止まっ……た？」

セラフォルーがゆっくりと剣帝に近付くと

剣帝『G A R U U !!』

剣帝はセラフォルーに向かって口を開いて首を伸ばした

サーゼクス「セラフォルー!」

く剣帝の精神内く

剣帝「ふう……俺の勝ちだ」

剣帝は傷だらけの姿で立っていた

黒「チツ……流石に……ゲホツ……体の所有権を……ゴホツゴホツ……元から持つてるテメエにや勝てねえ……か」

黒は剣帝の前に仰向けになって倒れている

劍帝「さて、これで終いだな」

劍帝がそう言いながら黒に近付くと、空間に亀裂が走った

劍帝「なっ!?まさか!」

劍帝が驚いていると

黒「ヒヒッ、現界の身体が俺の敗北に引つ張れて崩壊し始めたか」

黒はニヤニヤとし始めた

劍帝（俺の体が壊れたら俺は無事だ…だが黒が笑っていられるりゆうって……!!）

劍帝は考え、そして、即座にとある事柄を思い出した

ロキ『呪いあれ』

劍帝「……まさかお前、元からアレを狙って!」

劍帝は黒の狙いに気が付いたが

黒「せえいかあい、まあ、もう打つ手なんて無いけどなあ?」

黒がそういつた次の瞬間には空間が碎け散った

く朱天の荒野く

劍帝「………此処は……」

劍帝が目覚ますと元の朱色の荒野に倒れていた

セラ「劍帝君!目が覚めたんだ!」

劍帝が上半身を起こすとセラフオルーが抱き着いた

劍帝「うおっ…セ、セラ様!?! どうしたんですか?」

突然抱き着かれて劍帝が困惑している

セラ「化物の姿から劍帝君元に戻っても全然起きないから心配したんだよ?」

とセラフオルーが説明した

劍帝「そうでしたか…：御心配をお掛けしました」

すると、劍帝はセラフオルーに頭を下げ、謝罪した

セラ「えっ!?! 謝らないでよ、劍帝君は何も悪くないんだし、だから顔を上げて?」

とセラフオルーがそう言うのと劍帝は頭を上げ、立ち上がり戦闘の後始末に行こうとした、が

セラ「そういうえば劍帝君…この写真の娘誰? 劍帝君とどんな関係?」

セラフオルーがそう言つて劍帝に呼び止めた

劍帝「えっ? 誰の…事…：です…：か?」

劍帝が振り返るとセラフオルーが一枚の写真を持っていた、その写真には幸せそうに笑う劍帝とその隣に白髪の少女、そして、その少女に良く似た黒髪の少女と劍帝の頭の上に楽しそうにピースをしながらこれまた劍帝の隣の少女に良く似た猫耳の付いた少女が写っていた



劍帝「えーつとお……それはあ……そのお……」

劍帝が背中に冷や汗をかいていると

黒「その写真の娘達は……ゼエ……劍帝の……ハア……娘さん達と……奥さんだ……」

劍帝が倒れていた位置から少し離れた所から黒が出て来た

セラ「えっ？えっ？劍帝君が二人居る!？」

セラフォルーがそう言つて驚いていると

劍帝「てんめえ……やっぱり出て来てやがったか……」

劍帝はそう言うのと、右手で魔術を使おうとした、だが、その瞬間に立ち眩みが起きた

劍帝（しまった……魔力切れ……）

劍帝がそう考えながら体制を持ち直そうとしていると

魔術師「フハハッ！今が奴を討つ絶好の好機!!死ねえ!!」

劍帝の後ろの瓦礫の中から一人魔術師が魔術を放つた

劍帝「ゲッ……しまっ」

劍帝に向かって飛んで行つた火球は劍帝が驚いている間に劍帝に当たり、爆炎が起きた

た

魔術師「良し！魔王セラフォルーのクイーンを討ち取つた……ぞぞ？」

煙が晴れていくと、其処には変わらず無傷の劍帝とその真後ろに一人の女性が立つて

いた

?? 「妾の大切な主たる剣帝様に牙向こうとは、殺されたいらしいのお」

その女性の見た目は褐色の肌に白髪 of 長髪に着物姿、そして、一番の特徴は髪にまぎれて見える先端の黒い狐耳に八つの狐の尻尾が生えていた

黒 「なっ：俺が出たのに乗じてテメエも出てきたのか？」

黒が驚いていると

剣帝 「八剣！」

と剣帝が狐耳が生えている女性を見ながら言う

八剣 「久方振りじゃのお！妾の愛しき主、剣帝様よく！」

八剣は剣帝の居る方向を向き剣帝に抱き着きキスをした

剣帝 「んぐっ!？」

剣帝が驚いていると

セラ 「あー!!私の剣帝君に何してるのお!!」

セラフォルーが急いで駆け寄り剣帝から八剣を引き剥がそうとし始める、が、八剣の力が思っていたよりも強く引き剥がせない

八剣 「何じゃお主は！妾の愛しき剣帝様との楽しみを邪魔するでない!!」

セラフォルーが引き剥がそうとしている事に腹を立てた八剣がそう文句を言った

セラ「劍帝君は私のだもん！私の眷属だもん!!」

セラフオルーは對抗するかのように言つて怒り始めた

八劍「ほほおー、劍帝様がお主の眷属……のお……つまり、お主は劍帝様より強いのか？」

八劍は黒い笑みを浮かべながらセラフオルーにそう質問した

セラ「それは……：劍帝君は私よりゴニヨゴニヨゴニヨ……」

その質問をされた瞬間にセラフオルーは口籠つた

八劍「おやおや、どうしたのかのお？それでも劍帝様の主かのお？疑わしいのお、カ

カカツ」

八劍がそう言いながら嘲笑うと

セラ「そう言う貴女は劍帝君の何？すつごく仲良さ気だけど」

セラフオルーが反撃とばかりに質問した

八劍「妾か？妾は劍帝様の……妻じゃ……／／」

八劍はそう言いながら頬をポツと赤くした

セラ「なつ……：どういう事なの！劍帝君！さっきの写真の……アレ？劍帝君が居ない」

セラフオルーは辺りを見回したが劍帝の影も形も見当たらなかつた

八劍「それならば、黒様じゃ！黒様！劍帝様は……何処へ行つたのじゃ……黒様も居ら

ぬし……」

黒も姿を消していた

く瓦礫の下く

剣帝「危ねえ……あやうく俺の過去を探り入れられる所だった……」

剣帝は魔術師が出て来た瓦礫の下に隠れていた、実は剣帝は二人が口論を始めた隙にセラフォルから写真を回収し啞然としていた魔術師を倒し、その魔術師が居た場所に隠れたのだ

黒「テメエがそんな写真持ち歩いてるから探られんだろうが……このタコ！」

そして、黒もその時に便乗して動き同じ瓦礫の下に隠れていた

剣帝「うるせえやい、第一写真の事バレたのは元はと言えばお前のせいだろうが！」

剣帝と黒は隠れながら小さな声で口論を始めた、そして、その間に黒は

黒（さて……慌ててたからなあ……ボケの剣帝の近くに一緒に隠れちまった……今やり合う

と俺確実に負けて体内に戻されるだろうなあ……どうするかなあ……困った……）

と逃げる手立てを考えていたが

黒の隠れている場所にどんだん近付いてくる足音が聞こえる

黒（あつ……）

黒が足音に気付くと

剣帝（バレたかな？）

剣帝も気付き、唾を飲んだ

?? 「さあ来なさい」

《Drive typeNEXT!》

黒の首を謎の腕が掴みあげた

黒「うぐつ……」

黒は苦しそうな声を上げ、足をジタバタとバタつかせた

剣帝「ソイツを連れて行かれると困るんですよねえ」

黒が掴み上げられた所を見ていた剣帝はメモリを取り出し

《Joker!!》

とメモリを鳴らし、変身した

?? 「ふむ。だから何だと言うんだ？」

と謎の二人組の片方が構えもせず剣帝を見ていると

少女「あはっ♪ここは僕に任せたまえよ」

ロングの黒髪ストレートの白いワンピース姿の少女が剣帝を蹴り飛ばした

剣帝「グハッ!この力はもしかして……夜鴉様の命令ですか？」

剣帝は蹴り飛ばされ数m吹っ飛ぶとすぐに体制を持ち直した

?? 「貴様、ここがどの場所か解っているのか!」

と現れた謎の二人組の片方がもう片方のワンピースの少女に対して言った

少女「わかつてるよ？でもでもこんな事しないと彼に構って貰えないしね♪それとこいつを殴りたかったのもあるしねえ」

とワンピースの少女は言い返した

??「ふん。勝手にせよ私はこいつを連れていくだけだ」

と謎の二人組の片方は黒を持って去っていった

少女「解っているよ、何だっけ？」

彼女達は剣帝を無視して話をしていた後に少女は剣帝に向き直った

剣帝「……………流石夜鴉様の配下ですね…興味が無いと話をあまり聞かない」

剣帝はそう言いながら変身を解いた

少女「ん、僕は彼の配下でも何でもないよ。どちらかと言うとライバルだもん♪」

と楽しそうに少女は言った

剣帝「……………」

剣帝は絶句して居た、そして、その心の中は

剣帝（あつ、勝つの無理ポ、＼（^o^）／

と完全に諦めていた

古城「僕は古城恵、またの名を本筋の守護者だよ」

と少女は自分の名を名乗った

劍帝「……………何でそんなに強い方が来るんですか。本来の俺でも手も足も出ない相手じゃないですか」

劍帝はそう言いながら小さな白旗を振った

古城「何で来ているかって？簡単な話だよ。君が気に食わないからに決まってるだろ？」

と少しだけ怒気を交えた声で言った、すると

劍帝「何で初対面で気に食わない発言されにやなんのですか!？」

劍帝は理不尽な意見に対して驚きを示した

古城「何で君なんか彼に気に入られているの？彼は僕だけの物の筈なのに死んでも彼は僕の元へ戻ってきたんだよ。つまり彼と僕は繋がっていると言う事だよ。前世でも恋人同士だったからね。ああ、でも喧嘩別れしたときに彼は死んでしまったから本当の意味で別れた訳じゃないだよね彼はその事を忘れているみたいだね。ああ、でも僕は君が気に食わない理由だったね。君なんか彼に色々貰っている事と彼の一部を持つてるからだよ。理由はそれだけさ」

と古城は言い連ねた、そして

劍帝「あ……………え……………あのお……………」

その様を見ていた劍帝は古城恵に気圧されると同時にとある事柄を思い出した

?? 『劍帝様、何故貴方は何時も何時も私達からお逃げになるのです？ 私達の何が気に食わないのですか？ 何処ですか？ お応え下さい、さあ、さあさあさあ！』

劍帝はその記憶を思い出し、顔を青ざめさせた

劍帝「ヤン…デレ…」

と劍帝が呟くと

古城「僕はヤンデレじゃないよ。彼に依存してるだけだよ」

古城恵はそう言つて劍帝の言つた事を否定した

劍帝「依存つて…」

劍帝は更にそう呟いてから余所見をした

古城「さあてと時間稼ぎはそろそろ良いかな」

古城は劍帝を見ながらそう言つた

劍帝「時間稼ぎ…あつ…」

劍帝は黒を持ち逃げされた事を忘れていた

「じゃあ僕は帰るよ。ふふふ、これで彼にまた虐めて貰えるよフフフフフフ」

古城はそう笑いながら去つて行つた

劍帝（どう見てもヤンデレ…いや、DMか…）



劍帝がそう考えていると後ろから八劍とセラフオールーに捕まり、セラフオールーには質問責めをされ、八劍からは襲われかけた

## 第四十二話 「見えぬ壁の先」

あらずじ

剣で敵を切り倒していた剣帝、その剣帝の前に突如として一人の男が現れた、その男の発言により剣帝の姿は巨大な龍へと転じてしまう、その間剣帝は己の内側に住まう別の存在、黒影と戦い無事勝利を納めたのだった

「戦争の翌日」

—セラフオル―邸：剣帝の部屋の前—

セラ（あのあと結局剣帝君が持つてたあの写真の女性については答えて貰えなかったけど…今日こそは聞き出してみせる！）

セラフオル―はそう心に決め、剣帝の部屋の前に立っていた

セラ（剣帝君起きてるかなあ…）

セラフオル―がそう思いながら扉に聞き耳を立てると部屋の中から

八剣「のお、剣帝様、良いじゃろう？久方振りに妾が出ておるんじやし…アレをやつてくれんかのお？」

八劍の声が聞こえた

セラ（アレ？アレって何なんだろう……）

セラ フォールは食い付くように更に更に聞き耳を立てた、すると続きが聞こえて来た

劍帝 「駄目だアレは疲れる……」

八劍 「良いじやろうが別に……どうせあのセラフォールとかいう女子にもヤツたんじやろう？」

劍帝 「ヤツてねえよ！」

八劍 「真かのお？疑わしいのお」

劍帝 「そんなに疑うんだつたらヤツてやるよ！但し！本当だつて分かつたらもう疑うなよ？」

八劍 「良かろう」

八劍がそう返事した後にベットに何か乗る音が聞こえた

劍帝 「そんじや、始めるぞ？」

八劍 「別に構わんぞ……早う初めておくれ」

劍帝 「そんじや、よつこらせ」

そんな風な劍帝の声をした後に布が擦れるような音がし始め

八劍 「んっ／＼／＼……ふふっ、相も変わらず劍帝様は女性を喜ばせるツボを良く知っ

ておるのお」

八劍がそう言うくと布が擦れるような音が止み

劍帝「うるせえ、黙ってお前は俺に突かれてろ」

劍帝がそう言うくと布が擦れるような音が再度し始めた

八劍「んっ／＼あっ／＼そこは……んんっ／＼」

部屋の中からそんな声がし始め

劍帝「どうした？八劍、お前がこんなになるなんて」

八劍「仕方無いじやろうが……んっ／＼久方振りなんじやし」

劍帝「だろうけどなあ、何で他所で処理してねえんだよって俺は言ってるんだよ」

八劍「劍帝様以外にはヤラれたくないのじや……あんっ／＼」

劍帝「あつそ……」

部屋の中からはそんな会話が聞こえて来て

セラ（やっぱりあの二人ってそんな関係だったのおー!?）

セラフォルーは部屋の前で聞き耳を立てながら赤面していた

そして、部屋の中からは続けてこんな会話が聞こえ始め

劍帝「さて、次は下だが……大丈夫か？」

八劍「ああ、問題無いから早う初めておくれ」

劍帝「あいあい」

そんな会話を聞いていたセラフオールは

セラ「だ……駄目えええ!!」

と劍帝の部屋の扉を飛び開けた

セラ「今の劍帝君は私のクイーンなんだから、私以外にそういうことしちや!」

セラフオールが目を閉じながらそう叫んでいると

劍帝「せ、セラ様!?!」

八劍「おやおや、いきなりどうしたのかのお? 自称劍帝様の主とやらは」

と部屋の中に居た二人は驚いていた

セラ「そりや二人は私と知り合う前はそんな関係だったのかもしれないけど今は」

そう言いながらセラフオールがゆっくりと目を開けていくと

セラ「駄目……なんだよ?」

其処には劍帝のベットに寝そべっている八劍にマッサージをしている劍帝が居た

く10分後く

部屋の中には机を挟んでセラフオールと劍帝、そして、劍帝の隣に八劍が座っている

劍帝「それで、いきなり飛び込んで来た御要件は何ですか? セラ様」

と劍帝が訊ねると

セラ「昨日見た剣帝君の持つてるあの写真の人達と剣帝君の関係について聞きたいんだけど……」

セラフオールが珍しく真剣な表情で剣帝に聞き始めた

剣帝「あの写真の人達？……ああ、この写真ですか」

剣帝は思い出したように懐から一枚の写真を取り出した。写真の表が自分の方を向くように

セラ「そう……其処に写ってる娘達って剣帝君の何なの？」

セラフオールがそう言っただけでまた聞こうとすると

剣帝「言えません」

と剣帝は断った

セラ何で！剣帝君は私のクイーンでしょう!？」

とセラフオールが叫ぶと

剣帝「だからといって人の過去や大切な記憶にズカズカと入ろうとするのは違うと思いますか？」

剣帝は冷たくそう言った

セラ「……うぐぐつ……」

セラフオールがそう軽く唸った

八剣「諦めい自称剣帝様の主とやら」

二人の会話に八剣が口を挟んだ

セラ「何なの？今は剣帝君に聞きたい事があるから口を挟まないで！」

とセラフォルーが怒ると

八剣「そうか、ならば、黙らずに言わせて貰おうかのお、お主が幾ら詮索しようとおと剣帝様はその写真の女性については語らんぞ」

八剣はそう言い切った

セラ「何でそう言い切れるの!？」

とセラフォルーが怒鳴るように聞くと

八剣「何故かじやと？フツ、そんな事は簡単な事じや、妾はお主よりも長く永く剣帝様と同じ時を生きてきたからじやよ」

と八剣は馬鹿にするように鼻で笑ってから言った

セラ「長くって何年位？」

とセラフォルーが八剣達に聞くと

剣帝「黙秘します」

八剣「言いたくないので回答はお断りじや」

と二人は冷たく断った、すると

セラ「うう……いいもんいいもん！それならこうするもん！」

セラフオルーはそう言いながら部屋を凍らせ始めた

セラ「剣帝君はこれを溶かせないでしよう？」

とセラフオルーは言いながら辺りを凍らせていくが

剣帝「ハア…八剣」

と剣帝が言うと

八剣「あい分かった」

と八剣が応える様に立ち上がり

八剣「我が主妖悪剣帝の命じに従い妾は、妖狐八剣は狐の為の焰をいざ火炎とせん！」  
と言いながら八剣は狐火を発生させるとそれを急激に巨大化させ、炎を作り出し辺りの氷を溶かし始めた

セラ「何で…剣帝君は無理だったのに…」

とセラフオルーが落胆していると

八剣「それは何割の剣帝様じゃ？お主忘れては居らぬか？剣帝様は今力を削ぎ落とされ」

と八剣が言っている

剣帝「八剣…」



と劍帝が制止した

八劍「……………あい、分かった」

八劍は不貞腐れる様にベツトに横たわった

劍帝「さて……………これで分かったでしょう?」

と劍帝がセラフオールに声を掛けようとする

セラ「うっ……………うう……………劍帝君が……………私の劍帝君が遠くに行っちゃう!!!」

とセラフオールは涙を流しながら泣き始めた

一方その頃

夜鴉「てめえは!何時も!何時も!邪魔しか!出来ねえのか!」

そう怒鳴りながら夜鴉はワンピースの女性にキレていた

恵「あはん!ごめんね!そして!ありがとうございます!」

一方その怒鳴られている女性、恵は嬉しそうな顔でお礼を言っている

夜鴉「ケンダマジック!オラオラ!」

夜鴉はそう言いながらオリハルコン製のけん玉で恵をボコボコに殴り始める

恵「ああん!もつとお!」

だが、その殴られている当人は嬉しそうにしている

ペタン「主、その辺で宜しいかと。そして少々お話が」

そんな風に行っていると夜鴉に話し掛ける一人の少女、ペタンが現れた

夜鴉「ちっ！で、なんだペタン」

夜鴉は舌打ちをしながら殴るのを辞めペタンの居る方向を向いた

ペタン「これを持ってきました」

ペタンはそう言いながら一人の男を、連れ攫われていた黒を投げた

夜鴉「ほう？ならば早速実験しようか。こいつがこの毒性に何処まで耐えられるかな！」

夜鴉はそう言いながら黒に近付いた

ペタン「此方をどうぞ」

ペタンはそう言つて夜鴉に龍の頭の付いたゲームソフトのような物を渡した

夜鴉「さあゲームスタートだ！」

夜鴉が龍の頭の付いたゲームソフトのような物に有る出っ張りを押すとドラゴナイトハンターZの音声が響き渡る

## 第四十三話 「焼き鳥はタレ派か塩派か？」

あらすじ

前々回剣帝の落とした写真について聞き出そうとしたセラフオール、だが、剣帝は一向に答える気配を見せなかった

だが、それで諦めるセラフオールではなく、翌日聞こうとしたが、その時は剣帝の怒りを呼んでしまい、冷たくあしらわれてしまったのだった

—セラフオールの問い掛けの翌日—

剣帝「……………ハア」

剣帝は自室の椅子に座り本へ書き込みをしながら溜息をついていた

八剣「溜息なぞついてどうしたのじゃ？ 剣帝様よ」

そう言いながら剣帝の背後に八剣が現れた

剣帝「いやなあ…昨日セラフ様に冷たく当たっちゃったじゃん？」

八剣「確かにそうじゃな…じゃがそれはあの自称剣帝様の主が剣帝様の…」

剣帝「止めろ、聞き耳立てられてたらマズイ」

と劍帝が八劍の話を止めた

八劍「それもそうじゃな…スマヌ劍帝様」

劍帝「次から気を付けろ、それで良いから……」

劍帝は八劍の謝罪に対してまるで問題の無い様に言った

八劍「あい分かった…」

劍帝「……………書き終わったが……………暇だ」

と劍帝は呟きながら本にペンを挟み込んだ

八劍「ならば劍帝様よ、あの火の鳥小僧があのでかい小僧に倒されて落ち込んだるじゃろうし、おちよくりに行つてはどうじゃ？」

と八劍が巫山戯半分で提案すると

劍帝「そうだな…此処に居るのもちよつと辛いし…行くか」

劍帝がそう言つて悪魔の翼を広げ、窓を開け、窓から外に出て

八劍「ほれ、お前が提案したんだ、付いて来い」

八劍「ああ、了解じゃ」

八劍は自分に向けて劍帝が伸ばした手を掴み、姿を劍帝の八つの尻尾へと変えた

—フェニックス家：門前—

劍帝が軽い飛行で数分間飛び続けると、火柱が門前の柱から上がる豪邸の前に着いた

劍帝「さて…どう入ろうか…」

劍帝がそう言いながら頭を悩ませていると

??「あら、何方ですか？」

と豪邸の扉を金色の髪をした少女が開けていた

劍帝「ええつとお…君はあ……」

と劍帝が首を傾げていると

レイヴェル「フェニックス家のレイヴェル・フェニックスですわ」

と胸を突き出し、威張るような体制で名乗った

劍帝「あ…ライザー君の妹ちゃんか…思い出した」

レイヴェル「御兄様を君付けで呼ぶなんて…貴方何様です!？」

とレイヴェルは劍帝が貴族の兄を君付けで呼ぶことに対して多少の苛立ちを見せな

がら言う

劍帝「ん？魔王セラフォル様のクイーンだけど？」

と惚けた様子で劍帝は返答した

レイヴェル「えっ？そ、そうでしたの？…そうとは知らずとんだご無礼を…」

劍帝「ああ、気にしなくて大丈夫だよ、ところでライザー君は部屋かい？」

レイヴェルが謝ろうとしながら門に近づき門を開け、謝ろうしていると劍帝は謝罪

を止めてから、質問した

レイヴェル「ええ、つい先日一誠様が修行を付けて下さった後に神と名乗る男が現れまして…その男に連れて行かれて帰って来てから何だか怯えるようになってしまつて……」

剣帝（神？…この世界の神は死んだ筈…でも誰に殺された？…殺す要因となる筈の二天龍は俺が気絶させたし…となると誰だ？…神を名乗る俺より強い…あつ…）

レイヴェルはそう言いながら剣帝をライザーの部屋の前まで案内した。そして、案内されている間に剣帝はライザーをボコボコにした相手を察した

レイヴェル「お兄様、剣帝様がお見舞いに来て下さりましたわ」

ライザー「け、けけ、剣帝様だとお!？」

レイヴェルが部屋の扉をノックしてそう言うのとライザーは慌てて扉を開けた

ライザー「ど、何処だ！剣帝様は何処に居る！」

レイヴェル「何を仰っているのです？剣帝様なら私のお隣に居るではありませんか」

ライザーはそう言いながら周りを見回した。

ライザー「何い？セラフォル殿のクイーンがそんな執事みたいな格好をして女が好んで染めそうな髪色をした男な訳がっ!？」

剣帝「テメエ、今俺の頭の色の事何言った！ああ!？」

ライザーが剣帝の姿を見た感想を言っていると、剣帝の髪色について言った瞬間に剣帝に首を掴まれ持ち上げられた

ライザー「ぐっ…がっ…あがっ…」

剣帝「誰の髪の色が女の好きそうなピンクだつてえ？」

剣帝は自分の髪色について悪く言われたと感じ、苛立ち、ライザーの首を掴んだままへし折ろうとし始める

ライザー「あぐあ…がっ…く…苦し…い」

レイヴェル「お辞め下さい！剣帝様!!」

レイヴェルが必死に剣帝の腕を外そうと引つ張り続ける

剣帝「……………ライザーよ…良く出来た妹に感謝しろ」

ライザー「ガハッ!!」

剣帝はレイヴェルの頼みを聞き入れライザーを部屋の中へと投げ飛ばす形で開放した

剣帝「傲るなよ、傲慢に成れば己の身を滅ぼすぞ」

ライザー「ならば…それは貴方にも言えるだろう!」

ライザーは自分に背を向け帰ろうとしている剣帝に向けて炎を放った

剣帝「……………ハア…八剣」

八剣「何じや剣帝様、妾は今虫の居所が悪い」

だが、炎は剣帝には当たらず八剣が全て弾き、かき消し、更にはライザーの首を切り落とそうとしている

ライザー「お、俺は不死身だ：首を切り落とされようとも：」

八剣「ならば、無限に切り続けられるのお」

八剣はライザーが不死身だと改めて聞いてにやりと笑い刀を振り上げる

剣帝「辞めろって言ってるだろうが」

八剣「離せ剣帝様、妾はこの焼き鳥小僧に灸を据えねば腹の虫が治まらん」

剣帝は八剣の振り上げた刀の切っ先をつまみ止めていた

剣帝「良いから、帰るぞ」

八剣「……………チツ、命拾いしたのお、焼き鳥小僧」

剣帝と八剣は二人並んで帰って行った

レイヴェル「何だったのでしょうか：あの二人：」

ライザー「……………不死だからと調子に乗るなど言う事か：」

ライザーは何かを掴んだ様子で部屋の中に戻った

レイヴェル「えっ？えっ？何がどういう事ですか？」

レイヴェルだけは状況も何も掴めずその場でクエスチョンを浮かべていた



その後日、ライザーの元へと剣帝から贈り物が届けられた、その贈り物の中身は大きな20cmほどの鴉の人形だったそうだ、それを見たライザーは絶叫し、また引き籠もったそうなの

## 四十四話 「迫り来る黒きドラゴンの影」

あらずじ

自室でセラフォルに冷たく当たってしまったことを嘆いていた剣帝、そこに八剣が現れライザーをからかいに行く事を進言する、そして、剣帝はその言葉に乗り二人でライザーの元へと向かった、そして、ライザーの家へと着いてからレイヴェルに出迎えられるライザーと対面した剣帝、そこでライザーが剣帝の髪色について悪く言ってしまった半殺しにされ、更にその後日嫌がらせとばかりにトラウマの鴉の人形を送り付けられた

―ライザーの見舞いに行き、贈り物をしてから数日後：剣帝の自室―

剣帝は自分の部屋にある机に向かいながら白いレース状の何かを丹念に編んでいた

八剣「剣帝様よ……その編んでいる物はもしや……」

剣帝「ああ……そうだよ、八剣」

剣帝が何かを編んでいるとまた後ろから突然八剣が現れ、剣帝の行動を覗き込んできた

八剣「それを贈る相手は居るのか？」

剣帝「さあなあ、どうだろうな？」

剣帝がある程度編み終わると部屋の外の廊下から足音が聞こえてくる

剣帝「……………八剣、トランクと窓」

八剣「あい分かった」

八剣は剣帝の命令の内容を瞬時に理解して、剣帝のトランクを開け白い織り物を仕舞い、更に窓を開け放った

八剣「剣帝様！」

剣帝「あいよ、御苦労!!」

剣帝は後ろで開かれた窓から全速力で出て行った、そして、剣帝が出て行った後の部屋にはセラフオールが入って来ていた

セラ「剣帝君……………」

その顔はとても寂しそうな顔つきをしていた

「冥界：上空」

剣帝は白い8つの尻尾をはためかせながら飛んでいた

八剣『良かったのか？あの自称剣帝様の主は寂しそうな顔を浮かべて居ったぞ』

剣帝『良いんだよ、俺の秘密は詮索されると厄介だからな』

剣帝は精神内で八剣と会話をしながら冥界の上空をゆったりと飛び続ける

八劍『して、劍帝様よ、この後は如何なさるお積もりじや?』

劍帝『そうだなあ……冥界に居たら何時か見つかるかも知れんし……人間界に行くか』  
劍帝はそう言うのと悪魔の翼をはばたかせ、自分の上に魔法陣を展開しその中へと飛んで行つた

く人間界：駒王学園く

劍帝は駒王学園の校舎の上に転移し、そのまま校舎の屋上へと降り立つた

劍帝「八劍、Purge」

八劍「あい、分かつた」

劍帝が指を鳴らすと劍帝の周りに煙が起き、八劍が劍帝の後ろに現れた

劍帝「ゲホッ!ゲホッ!無駄に凝つた演出しやがって……ゲホッ!……」

八劍「カカカッ、コチラの方が面白いじやろうと思うてな」

劍帝「面白さより周りへの被害考えろ!」

劍帝はゲホゲホと言いながら翼で風を起こし煙を払つた

八劍「カカカッ、スマンのお劍帝様よ」

劍帝「全く……さて、暇つぶしに来たは良いが……やる事が決まってねえから暇だな

……ん?」

剣帝がそう言い、屋上の外周部に近付き旧校舎の方を見下ろしていると

く駒王学園：旧校舎入り口前く

黒歌「無能の姫は人任せく♪赤龍帝の後ろで乳出してるく♪」

一誠「リアス部長を悪く言うんじやねえ!!」

という、一誠の怒号が黒歌の歌の後に聞こえてきた

黒歌「赤龍帝はヘタレく♪エロい癖に相手に迫られてビビるく♪」

小猫「一誠先輩はビビりなんかじゃありません、撤回して下さい姉さん」

剣帝「……………1人で何してるの？黒歌ちゃん、夜鴉様は？」

黒歌が歌い続けて居ると小猫が怒ったように黒歌に抗議した。そして、それを見てい

た剣帝が上空から降りて来た

黒歌「ん？彼は今現在職務中なのよ。そして私はここにおちよくりに行つてこいつて

言われたからおちよくりに来ただけにやんよ」

剣帝「ハア…：やっぱり夜鴉様からの命令だったか」

八剣「仕方ないじやろう、あの神様は何時もそうじやし、さしずめ妾達も含めて全員

玩具と思われとるじやろうよ」

剣帝が頭を抱えるような仕草をしているとやはり剣帝の後ろから八剣が現れた

一誠「おいつ！剣帝さんよ！」

劍帝「何だい？一誠君」

一誠「アンタの後ろに現れたその巨乳のお姉さんとはどんな関係なんだ!？」

そして、八劍が現れると一誠が劍帝と八劍の関係について聞こうとしてきた

黒歌「じゃ、白音の言つてたから訂正しておくにやん。赤龍帝はハーレム厨♪だけど心はピュア過ぎて手を出せない♪」

劍帝「さつきから聞いてたけどまだ続くのその歌!？」

黒歌が再度歌い始めると劍帝がすかさずツツコミを入れた

八劍「まあ、内容的には大体合つとるじやろ」

劍帝「はい、八劍も此処の子達に喧嘩売るような真似しな〜い」

八劍が嘲笑うような目付きで一誠達を見つめながら言っているのと劍帝がそれを辞めさせた

黒歌「劍帝はチート能力♪本来の力使えば世界壊せる♪はっ！おちよくれなかつた。まあ良いかもにやん」

劍帝「辞めろお!!それを言うなあ!てか、それも夜鴉様からの命令かあ!？」

黒歌の歌を聞いていた劍帝は自分の事を言われた瞬間に焦りながら黒歌の方向を向き怒った

黒歌「わたしはあの神様の配下にやんよ？混沌とかは専売特許だにやん」

劍帝「あー、うん、そうだよね…あの方の配下だもんね…」

劍帝が頭を抱えて顔を覆って涙目になっていると、劍帝達の居る場所の上からビュインビュインと風を斬るような音が聞こえて来て

劍帝「……………この音なんか聞き覚えあるな…」

八劍「奇遇じゃな、妾もじゃ」

劍帝と八劍が顔を合わせてから上を見ると其処には赤髪为天狗の面をはめた男が飛んでいた

??「殿お！漸く見つけましたぞお！」

劍帝「あんのお、馬鹿あ…悩みの種増やしやがって…オイゴラア！とつと降りて来い！天翔！」

天翔「ハッ！只今!!」

劍帝は空を飛んでいた天狗面の男、天翔に叫んだ、すると、天翔は劍帝に向かって飛んで来た、そして、劍帝の腹にクリーンヒット

劍帝「うぐおっ……………」

八劍「コラ！天翔!!何故劍帝様の腹を目掛けて突っ込んできたのじゃ！」

天翔「ややつ、これは申し訳御座らん、殿ならば避けて下さると思っただですが」

劍帝は天翔にぶつかられた衝撃で腹を抑えながら倒れている

劍帝「あー、いつてえ……マジで痛え」

天翔「スミマセヌ…殿…」

劍帝「良いからとつとと黒歌ちゃんの方を向け、夜鴉様の配下の前だ」

天翔「御意に！……殿お！あの女子の衣服がきわどく拙者はアチラを向けませぬ!!」

少し経つて起き上がった劍帝が天翔の頭を掴んで黒歌の方向を向かせた、すると、天

翔は黒歌から即座に顔を背けた

黒歌「何だにやん。この童貞っぽい残念な奴は？説明するにやん」

劍帝「アホがあ！それなら八剣はどうなる！」

天翔「八剣は姉上のような物ですし…BB…」

八剣「阿呆の様なコントをやつてないでとつとと黒歌とやらの方向を向かぬか餓鬼天狗が、周りが皆ポカーンとしとるではないか」

劍帝が天翔に怒鳴つてそれに反論していた天翔の頭を八剣が掴んでそのまま捻ろうとしてゐる

天翔「イダダダダ!!八剣う！拙者はこう見えても3500年間殿の配下として付き従つてる者じゃぞう!!」

八剣「ハンツ、妾よりも500年も劣つておいて良くもそんなに威張れるのお」

と天翔は八剣の拘束を解いてから八剣と面と向かった、そして、二人はそのまま口論



している

劍帝「あー、うん、アイツね…俺の配下の六翼 天翔（むよく てんしょう）君、残念とか言つてあげないで、俺の翼としてずっと頑張つてた子だから…」

劍帝は天翔達を放置して黒歌の方向を向き天翔の説明をした

黒歌「残念は残念にやん。これくらいで動揺しては彼の配下にはもつときわどいのがいっぱいいるにやんよ？」

天翔「ややつ、それはまことで御座るか！イデデデデ!!」

八剣「そんな言葉に反応して動くでないわあ！技が掛け難いじやろうが！」

天翔「出来れば技なぞ掛けないで欲しいので御座るがあ！いったあ!!」

天翔は八剣にコブラツイストを掛けられながら黒歌の言葉に反応した

黒歌「同じ猫とかでは裸エプロン着た奴もいたにやんし常時競泳用水着を着て彷徨いてる声の大きい女もいたにやん」

劍帝「裸エプロン…まさか…」

八剣「どうしたのじゃ？劍帝様」

劍帝「あー、うん、あのお…一人、そんな格好しそうなのに心当たりが…でも彼女は狐だし…」

劍帝はブツブツと言いながら頭を抱えて考え込みはじめた

黒歌「キャットとか自分で名乗ってたしセーフにやん」

劍帝「ああ、予感的中だ……てか！何やってんのあの娘お!!」

劍帝は予想が当たってスッキリしたような顔をした後即座にツツコミを入れた

八劍「何じゃ？誰じゃ？」

劍帝「俺とずっと一緒に居るお前ならこの単語で分かんと思うが…獣、狂戦士、ぶつ

とび狐」

八劍「ああ、アヤツか」

八劍は劍帝の言葉聞くと納得したような顔付きをして頷いた

八劍「というか、劍帝様の元にはアレの元というか、本体というかがおるじゃろ」

劍帝「居るけどさあ…あの娘とはもう別物じゃん…」

一誠「なんの会話をしてるのが全く分からねえ」

小猫「私もです…」

劍帝と八劍は会話をし続ける、周りに居る一誠と小猫を放置したまま

天翔「八劍う…？そろそろ離してくれんかのお？」

八劍「何じゃ、もうギブか？根性の無い奴じゃのお」

天翔はずっと八劍から掛けられ続けていた拘束から開放されてゼーハーと肩で息を  
していた

剣帝「さて……んで、改めて聞きますが黒歌ちゃんは何故ここに？」

黒歌「あー、そう言えば言付けを預かってきたんだっけ。なんだったかにやく確か改造が何とかって」

剣帝「ハア？改造？」

剣帝は黒歌の言葉聞いた直後に顎に手を当て首を傾げた

黒歌「何か玩具が手に入ったからゲームのソフトを物理的に刺してるらしいにゃん」

黒歌「人体実験楽しいって喜んでたにゃん。つと時間になつてきたにゃん。それではまた会う日までバイバイにゃん」

剣帝「最近手に入った玩具？…それに体に指すゲームソフト？……まさか！」

黒歌が魔法陣を展開して闇に消えると剣帝も魔法陣を展開した

剣帝「八剣！天翔！帰るぞ！大至急だ！」

八剣「あい分かった」

天翔「御意に！」

そして、八剣と天翔は剣帝の手に触れ、二人は同時に消滅した、そして、剣帝はその後即座に魔法陣に入って行った

一誠「何だか嵐みたいだったな小猫ちゃん……あれ？小猫ちゃん？」

剣帝達が去った後には一誠一人だけが取り残されていた

## 第四十五話 「ゾンビの竜は剣を折りたい」

あらすじ

セラフオールと相変わらず顔を合わせられないで居た剣帝はセラフオールに見つかりたくない人間界、駒王学園へと向かった、其処で小猫、一誠と黒歌の会話を聞き、その場へと降り立った、そして、その時天を飛んでいた2色の翼を持つ剣帝の配下、天翔と再開を果たし、黒歌の忠告を聞いて急いで冥界へと帰ったのだった

—冥界：セラフオール邸前—

剣帝「うし、到着つと……でさあ、何で小猫ちゃんまで来てるのかな？」

小猫「黒歌姉さんが何故あんなったのか、そして、黒歌姉さんの今の主に一番詳しくそのうなのが貴方だったのです」

剣帝と小猫はセラフオール邸の前に横並びで立っていた

剣帝「ああ、そう……まあ、確かに黒歌さんの今の主様は良く知ってるよ」

小猫「それなら私に知ってることを全て教えて下さ」

剣帝「断る、それは俺の秘密を教える事に同義だ」

剣帝は小猫が夜鴉について聞こうと発言している最中に割り込むように断りを入れた

小猫「……………そんなことを言われてもようやく見つけた姉さんの手掛かりなんです！  
お願いします！」

剣帝「そうは言われてもねえ……………ん？…げっ！」

剣帝が不意に小猫の居る方に目を向けると小猫は涙目になっていた

小猫「お願いします……………姉さんとまた一緒に暮らしたいんです……………」

剣帝「……………あーもー!!分かったよ！」

小猫が涙目ながら懇願すると剣帝は観念したように話そうとし始め

小猫「それじゃあ！」

剣帝「但し、知ってしまえばもう戻れなくなるよ？一誠君達の元へと」

と剣帝が注意勧告をするように言う和小猫の口が閉じ、黙り混んだ

小猫「……………」

剣帝「……………決意が纏まったらまた話し掛けて来なよ」

剣帝は口籠った小猫を門の中へと招き入れてから屋敷の中へと入って行った

剣帝「只今戻りました！」

リオール「あら？もうお戻りになられたのですか？セラフオール様は何処に？」

屋敷に入るとリオールが剣帝を出迎え、すぐに頭を傾げた

剣帝「はい？俺はさつきまでずっと駒王学園の旧校舎前に居ましたよ？」

リオール「えっ？でも先程セラフオール様とご一緒になってお出掛けなさると…」

剣帝がリオールの言葉に頭を傾げ、リオールはまた不思議な事を言い始め

剣帝「……………」

剣帝（何故だ？何かしら話がズレている気がする…というか…何か…忘れている…よ  
うな）

剣帝が顔に手を当て考え込んでいると、剣帝はとある事を思い出した

剣帝（夜鴉様は最近新しい玩具を手に入れた……………あの方が玩具と呼ぶのは俺とかだ  
…だが、最近俺の周りで消えた…のは…黒！黒の能力は『完全模倣（パーフェクトコ  
ピー）！』姿を完全に真似るなんて朝飯前だ！）

剣帝「……………チィ、やってくれたなあ、クソ黒が！」

剣帝は答えが分かり歯ぎしりをする则ち自分の部屋へと走り、自分の部屋の中に変化が  
無いか見た、すると、机の上に一枚の紙が置いてある事に気が付き、それを剣帝は見た、  
そこには

黒『よお、クソ剣帝、セラフオールちゃんも預かってるぜ、返して欲しけりや、駒王  
にある、あの教会に来な、そんじやな』

劍帝「あんの、クソ野郎……ナメやがってえ！」

劍帝は紙を握り締めクシャシャにすると机に叩き付けた

劍帝「八剣！天翔！」

八剣「何じゃ？」

天翔「お呼びで御座るか？殿」

劍帝「ド阿呆退治だ、本気で行くぞ」

劍帝は自身の後ろに現れた二人を怒りの籠もった目で見ながら命令する

八剣「あい分かった」

天翔「殿の御兄弟を手に掛けるのは少々気が引けますが。殿のご命令とあらば！」

八剣と天翔はそう言うのと二振りの刀へと姿を転じた、こうして劍帝の腰には刀が三振り装備された

劍帝「これ羽織るのも久し振りだな」

八剣『おお、劍帝様がその布を羽織るのは久方ぶりに見たのお』

劍帝「布じゃなくてマントな！」

劍帝はドラゴンが刻印されたマントを身に纏い、転移の魔術を発動させた

く 駒王町の外れ：教会く

教会の地下の奥、巨大な十字架のようなものの前の階段に腰掛けて座っている黒髪の

男、黒が居た

黒「ヒヒヒツ、何時頃来るかねえ？なあ、セラア」

セラ「……………」

黒の傍らには虚ろな目をしたセラフオールが座っていた

黒「あー、暇だなあ……………来たか」

黒が階段に寝そべろうとしていると教会の外から魔力を感じ取り、起き上がった

「教会外周」

剣帝「さて、着いたな…黒は何処かな？」

八剣『少々待つて居れ、今探し始めて…必要無かったようじゃな』

剣帝達が魔法陣から現れて教会の外周部の教会の前に立っていると教会の扉が開き、

其処から黒が現れた

黒「よおー、クソ剣帝」

剣帝「よお、よくもまあ、俺の目の前に顔を出せたなボケ黒」

剣帝は黒を見た瞬間に黒を睨み、黒はニヤニヤとした顔で剣帝を見つめる

黒「セラちゃんなら、中で寝てるぜ」

剣帝「あーそー…なら、とつととお前を片付けてセラ様を連れ帰らせて貰うぜ」

黒「出来るかねえ？今の俺相手にとつととなんてよお」



剣帝が二本の刀、天翔と八剣を構えると、黒は胸にある白い機械と首の根元に刺さっている黄色い機械を更に深く押し込んだ

《ドラゴナイトハンター！Z!!》

【デンジャラス・ゾンビイ!!】

音声か鳴り響き、黒の体が腐敗し崩れかけた竜人の様なおぞましい異形に変貌した

天翔『ムムツ、アレは何の術で御座るか？殿』

剣帝「ゲームガシヤット……夜鴉様の仕業か……しかも、ゾンビとドラゴナイト……」

黒「ヒヒツ、せいかあい、流星は剣帝、良く知ってるな」

剣帝が黒の変身する為に使った機械に付いて言うとおぞましい声で黒は笑った

剣帝「さて、下らない会話は終わりにして、お前のお遊びも終わりにしてやるよ」

黒「ヒヤハツ！今回こそお前を倒して俺が身体を頂くとするぜ！」

剣帝と黒は互いに地を蹴り、黒は薙刀の様な武器を、剣帝は二本の刀をぶつけ、鏢迫り合いを始める

剣帝（やはり腕力が馬鹿にならないな……かなり上がってやがる）

黒（やっぱしこのポケ腕力がおかしいんだよなあ、普通なら押し切れるのに持ち堪えられちまったし）

剣帝と黒は互いに思考を巡らせながら、薙刀と刀で切り結ぶ

劍帝「…やっぱりガシヤットの力は馬鹿にならないな、お前にここまでの恩恵を与えるとは」

黒【それならこつち的にはお前の力が馬鹿らしいわ、10分の1の上の力半減でこ  
れって、元が壊れすぎてるだろ】

劍帝と黒は一旦距離を取り、相手の動向を警戒しながらまた考え始める

劍帝（恐らく力の主な部分はドラゴナイト…だが、ゾンビの効果もあるだろうから幾  
ら殴つても無駄になる…それなら先にアレを引きぬかなければ！）

黒（アイツは多分次で俺のガシヤットのどちらかを奪いに来るだろうな…その時を  
狙つて腕を切り飛ばすか）

劍帝と黒は考えが纏まると相手を睨みつけながら攻撃のタイミングを計りながら横  
に移動する

劍帝「……………」

黒【……………】

そして、劍帝が唐突に黒に向かって駆け寄り、黒の胸に手を伸ばす

劍帝「まず先にその厄介な不死性を取り除いてやるよ！」

黒【そうはさせるかよ！】

黒は手に持っている薙刀で劍帝の腕を切り落とそうとした。だが

黒【なっ!?!】

剣帝「炎精爆華（イフリート・ボム）ってな」

薙刀は剣帝の肌近くと爆発が起こり剣帝の腕をガードした

剣帝「さあ、お前のデンジャラスゾンビを頂くとするか…ウググッ！抜けねえー!!!」  
黒【グッ…止めやがれ!!】

剣帝は黒の胸に刺さった白い機械、デンジャラスゾンビを引き抜こうとしたが、デンジャラスゾンビは思っていたよりも強く黒の胸に突き刺さっていたらしく、微動だにしない、更に、抜かれると激痛が走るのか黒は必死に薙刀で剣帝に攻撃を仕掛ける

剣帝「こうなつたら、こうするか！爆豪炎華（イグニツション・エクスプレス）！」  
黒【グッ…ガッ…ガハッ……ギヤアアアアア!!!】

剣帝は引き抜こうとしていた右手を一旦離してガシャットの付いていない黒の胸に当て、爆豪炎華を使い無理引き抜いた

剣帝「ふいー…やつと抜けた」

黒【ガハッ……ゲホッゲホッ…やりやがったなこの野郎…】

黒は少し吹き飛ばされるとゲホゲホと咳き込みながら戻ってきた

剣帝「生きてたか…やはり頑丈だな、黒」

黒【黙れ馬鹿剣帝】

劍帝がニヤニヤとした顔で傷付いた黒を見てながら、そんなことを言い黒がそれに文句を言っている

?? 「双方動くな！」

劍帝 「……………なあ、アレはお前の指図か？」

黒 「チゲえなあ…何してんだよ、テメエ等」

二人に行動を止めるように突然魔術師教会の中から現れ、何時でも魔術が当てられる距離にセラフォルーを連れて来ていた

劍帝 「お前…そんな事をしてただで済むとでも」

魔術師 「おおっと、少しでも動けば貴様の主はただでは済まんぞ？」

劍帝 「……………チツ」

劍帝が魔術師に近付こうとすると、劍帝の方向にセラフォルーを動かし、そのすぐ後ろで攻撃魔術の魔法陣を展開した

黒 「オイッ、俺はそんな事を許可した覚えは」

魔術師 「黙れ！運であの方に拾って貰ったからとお前に命令される筋合いなんてない！」

黒 「コイツ…………」

劍帝と黒がセラフォルーを人質にされて尻込みしていると

剣帝「ん？」

黒「アレは……」

魔術師「これでこの三人を始末すれば……俺も一躍……」

魔術師が三人を倒した後を考え、ニヤニヤと笑みを浮かべ今にも笑い出しそうになっていると

??『アイドルの前に立つんじゃねえ！』

魔術師「ゲフウ!!」

魔術師は後ろから突然と現れたフリフリでピンクのアイドル衣装を身に纏った猿の少女が回り蹴りを放ち魔導師は消し飛んだ

剣帝「……………ハッ！セラ様！」

黒「ヤベツ、吃驚してボウとしちまった！」

剣帝と黒は慌ててセラフォルーに元に向かい……剣帝がセラフォルーを抱き締めた

黒「チツ、一足遅れたか……」

剣帝「さて、これでセラ様の安全は確定されたし……どうする？続きをするか？」

剣帝がセラフォルーを抱き止め、自分の後ろよ少し離れた場所にセラフォルーを寝かせると、黒の前に戻った

黒「ああ！それじゃあ続きを！」

?? 『実験体が逃げ出してんじやねーぞ！私とご主人様の至福の時間を邪魔しやがって！おらこっちに来やがれクソ餓鬼！』

黒【グエツ！】

黒が剣帝に斬りかかろうとすると、アイドル衣装の猿の少女が黒の首を掴んだ

黒【せ、せめて一矢……】

剣帝「グツ……最後の最後に攻撃しやがって……あの野郎……」

黒は猿の少女に引きずられながら剣帝に向けて一本の針を投げつけた、そして、そのまま闇の中へと消えていく

剣帝「まあいい、さてと、帰ろうか、セラ様……」

セラ「……………」

剣帝は眠っているセラフォルーを抱きかかえると魔法陣を展開して、家へと帰った

## 第四十六話「変わる世界観と変わらぬ主人公」

黒歌の言葉をヒントに何かを感付いた剣帝、慌ててセラフオル―邸に戻った、だが、セラフオル―は既に攫われていた、その攫った犯人は剣帝から分かたれたもう一人の剣帝、黒影だった、それを知った剣帝は一人で黒影との戦いを始め、見事に勝利を収めたのだが

―黒との戦いの翌日：セラフオル―邸：剣帝の部屋―

剣帝は自分の部屋のベッドの上で横になっていた

剣帝（アイツが掛けてた催眠が軽いもので助かった…多分間に合わせで作ったものか何かを使っただらう……）

剣帝「でもまあ、心配だし様子でも見に行こうかな……」

剣帝が何時も通り執事服を着ていると、どうにも胸が苦しい

剣帝（アレ？何か胸が窮屈な気がするが……ああ、アレか、きっと数日間避けちゃったからその罪悪感だな、うん）

剣帝「さあ、行こうつと」

劍帝が自分の部屋の扉を開け、廊下に出て、セラフォルの部屋に向かっているとメイドa「ちよつと、貴女！」

劍帝「はい？何でしょうか？」

たまたま後ろに居たメイドに急に呼び止められた

メイドa「何でしょうか？じゃないわよ！貴女一体何処から侵入してきたの!?!というか、貴女誰？」

劍帝（なあにを言ってるんだろう…アレかな？目が悪くなってるのかな？）

劍帝「嫌だなあ、俺ですよ。劍帝ですよ」

劍帝が呆れ半分笑い半分でメイドaの質問に答えると

メイドa「いやいや、劍帝さんは、男性、じゃないのよ」

劍帝「ええ、そうですね。俺は男ですね」

メイドa「いやいや、貴女何処からどう見ても、女性、じゃないの！」

劍帝「ハツ？……………」

劍帝がメイドaから言われた言葉に少し驚いた表情で丁度近くにあつた姿鏡で自分の姿を確認すると、其処には金色の長髪で巨乳なスタイル抜群の女性が映っていた

劍帝（……………どうしてこうなった……………）

メイドa「頭を抱えてないで本場の事を言いなさいよ！」



劍帝「いやいや、本当の事も何も俺にも何故こうなったか………あつ……」  
劍帝が自分の身体に起きた異変の理由を思い出そうとしていると、一つだけ思い当たる物があった

黒「一矢報いる！」

劍帝（まさか………あの時の針かああ!!）

劍帝の頭には昨晚戦い、そして、その際に受けた一本の針の事が浮かんだ

劍帝「そういう事か……」

メイドa「ちよつと！頭を抱えて座つてないで事情を！」

メイドaが劍帝の正体を疑い、聞き出そうとしていると

リオール「ちゃんと魔力を調べなさい、あの方は間違いなく劍帝様ですよ」

メイドa「メ、メイド長」

リオールがメイドaの後ろの階段から上がってきてメイドaを叱り始める

リオール「分かったら早く自分の仕事に戻りなさい」

メイドa「は、はいー！」

メイドaはリオールに怒られると急いで翼を出し、下の階へ降りて行った

劍帝「ああ、リオールさん……助かりました……」

リオール「いえ、セラフオール様のクイーンである貴方を助けるのは当然ですから。

ところで、何故そのようなお姿に？」

劍帝「まあ、これにはちよいと事情が……」

劍帝はリオールにメイドaをどうにかしてくれた礼を行ってから自分が何故女性の体になっているのかを説明した

リオール「なるほど……つまり、先日セラフオール様を攫った賊にそのような作用のある針を刺され、そうなったと？」

劍帝「そういう事です」

リオール「にわかには信じがたいですが……実際に目の前で起きてしまってますからね」

リオールは半信半疑な様子だったが、劍帝の現状を見て呆れた様子で状況を把握した  
リオール「取り敢えず、そのお姿ではセラフオール様が困惑なさるので……お出掛けして下さい」

劍帝「どうしても……ですか？」

リオール「はい、お断りするようならば……」

リオールがニコニコと笑ったような怒ったような表情で言ったの発言に対して劍帝が顔を引き攣らせながら立っているとリオールは魔法陣を展開し始め

劍帝「……………あーもー、分かりましたよ！出掛けますよ」

リオール「ならば良かったです。勝てはしなくとも手傷を負わせる位は私でも出来ませんが…なるべくお互いにこの館を傷付けたくないですからね」

劍帝「ええ、そうですねえ」

劍帝は根負けしたように自分の足元に魔法陣を展開してセラフォル邸の中から怒りで顔を少し歪ませながら消えた

— 駒王町：駒王学園校舎屋上 —

劍帝「……：ハア、どうにもあの顔をする女性には頭が上がらん」

八劍『カカカツ、劍帝様の妹君の狼娘と同じ様な表情を浮かべよるからのお』

劍帝が屋上で項垂れていると劍帝の頭の中に八劍の声が響き

劍帝『うるせえやい、アイツにも手え焼かされるけどリオールさんの場合は普通に怖いからなあ』

八劍『そうかそうか、ところで劍帝様や』

劍帝『何だよ』

劍帝が困った表情で頭を抱えて居るとまた八劍の声が響き

八劍『旧校舎の入り口の辺りからあのエロい小僧がブーストの無駄遣いをしながらコチラを見ておるようじゃぞ』

劍帝「はあ!?!」

劍帝が旧校舎の方向を向くと、確かにブーステッドギアを発動させてコチラを見ている兵藤一誠が居た

劍帝「……………遊んでやるとするかな」

八劍『劍帝様の悪い癖が出たようじゃな…………』

劍帝は悪巧みを思い付いたような笑顔を浮かべながら悪魔の翼を広げ旧校舎の方向へと飛んで行った

— 駒王学園：旧校舎前 —

劍帝「よつと…」

一誠「アンタ、何処の悪魔だ？」

劍帝は一誠の目の前に降り立った、そして、一誠はそんな劍帝を見つつ警戒しながら質問して来る

劍帝「…………ハア…ちゃんと魔力を探りなさいよ、お馬鹿な赤龍帝さん」

一誠「初対面でいきなり馬鹿ってなんだよ！」

劍帝「あら、馬鹿を馬鹿と言って何が悪いのかしら？」

一誠は劍帝の他愛無い挑発めいた発言に苛立ちをあらわにした

一誠「初対面で馬鹿馬鹿言いやがって…………良いおっぱいしてるからって許さねえぞ

！」

劍帝「そんなに頭に來たのなら私に負けと言わせてみなさいな、ほら、私に攻撃を当ててみなさいよ」

一誠が怒りのあまり多少怒鳴り始めるが劍帝は平気な顔をして挑発を繰り返す

一誠「こっの！」

劍帝「ウフフツ、そんな遅い動きじゃ私には当てられないわねえ」

一誠は素早い突きを劍帝に当てようとしたが、劍帝はヒラリと宙返りをしながら回避をし、その突きを放った拳は地面にぶつかり地面を砕いた

劍帝「それが全力かしら？赤龍帝さん」

一誠「んな訳ねえだろお！」

一誠は劍帝の足を払おうとするがやはり劍帝はその行動を先読みして回避する

一誠「ならー！」

《Boost!》

劍帝「あら、ようやく本気を出してくれるのね」

一誠は左手を突き出し赤い籠手、ブーステッドギアを発動した。それを見ていた劍帝は喜々とした表情に変わり

劍帝「さあ、何処からでも掛かってらっしゃい」

一誠「だったら！こうだ!!」

一誠は瞬時に劍帝の真後ろに回り込み劍帝の肩に触れようとしたが、劍帝に手首を掴まれ投げ飛ばされる

劍帝「アラアラ、軽く投げたつもりなのに、随分と軽いのね赤龍帝さんは」

一誠「このお姉さんなんつう力してんだ、小猫ちゃん以上の力してやがる」

一誠はある程度投げ飛ばされると受け身の姿勢を取り、着地をしてから勢いを滑って殺した

劍帝「あら、体術はしつかりと出来るてるのね」

一誠「アンタ、マジで何者だ？」

一誠は滑り終わり体が止まると劍帝の方を見て質問を投げ掛ける

劍帝「それを答えちゃったら面白くないから秘密よ」

一誠「なら、言いたくなるようにしてやるよ！」

劍帝が口に手を当て挑発すると一誠は劍帝に向かってまた左腕を伸びして飛びかかった、すると、また劍帝はその左腕を掴んで投げ飛ばした

劍帝「あらあら、さっきので学ばなかつたのかしら？」

一誠「いいや、これで終わりだ、洋服崩壊（ドレスエ・ブレイク）！」

劍帝に投げ飛ばされる一瞬、一誠は劍帝の肩に触れてから投げ飛ばされ、その一瞬の間に劍帝の衣服に魔力の起点を作り劍帝の衣服を崩壊させた

劍帝「そういえば、赤龍帝さんにはこんな必殺技があったわね」

一誠「うひょー、やっぱり思ってた通り中々なオツパイしてるぜ!……ん?」

衣服がボロボロと壊れていくが劍帝は全く動じる様子も無く左手に紅い籠手を出現させる

劍帝「ブーステッドギア、バランスブレイク」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

一誠「なっ、何でアンタもブーステッドギアを持つてんだよ!」

一誠がブーステッドギアを見て驚いている内に劍帝の全身は紅い鎧に包まれたが、腹部はガーターのようなものでつなぎ合わされ、胸部は豊満なバストを包む為にも多少盛り上がっている

劍帝「ほら、掛かっていらっしやい?」

一誠「あくまでも答えないって訳か……それなら!ブーステッド・ギア・バランスブレイク!!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

劍帝が悠然と立って指を動かし挑発し一誠も全身を紅い鎧で包みだ、拳を構えた

一誠「質問に答えて貰うぞ!」

劍帝「出来るかしらね?ウフフツ」

一誠は剣帝に飛び掛かり、剣帝はまるで罨を張っているように笑みを浮かべながら立っている、そして、一誠の拳が剣帝に当たる寸前

リアス「そこまでよ、一誠！」

一誠「ぶ、部長!?!」

剣帝「あら、バレちゃったのね」

旧校舎の入り口の扉を開き、悠然と立っているリアスとその周りには一誠と小猫以外のリアス・グレモリーの配下がいた



## 第四十七話「女体化の説明と墓穴」

あらずじ

黒影との戦闘に勝った剣帝、その後疲労からかすぐに眠った、そして、目を覚ました剣帝は普段に比べ服がキツイことに違和感を覚えた、その理由は剣帝の姿が女性に変わっていたのだった、そして、その姿ではセラフオールを驚かせてしまうと駒王学園へと向かい、自分を見ていた一誠に勝負を仕掛け、遊んでいた途中でリアスに止められたのだった

↓駒王学園：旧校舎オカルト研究部部室↓

リアス「つまり、セラフオール様を攫った賊のせいでその様な姿になったという訳ですか？」

剣帝「ええ、そうなりますね」

剣帝とリアスは対面する形で机一つ挟み、ソファに座って話し合っている、そして、リアスの眷属は部屋の各場所に立っている

リアス「それで、何者なんですか？その黒影という男は」

劍帝「まあ、言うなれば私の影、私の分身みたいなものよ、この前其処の一誠君の偽者現れたんでしよう？それみたいなものよ」

劍帝は説明をすると同時に一誠が居る後ろをチラリと見た

リアス「……………何故貴女がそれをご存知なんです？」

劍帝「色々とツテがあるのよ、ウフフツ」

劍帝はリアスから投げ掛けられて疑問に対し、口に手を当てながら笑い、軽く濁したリアス「……………」

リアス（前から思っていたけど、この方は謎が多過ぎる、何故あそこまで強いのか、何故ブーステッドギアを持っているのか）

リアスが怪しみを込めているような目で劍帝を見つめていると

劍帝「私の顔に何か付いてます？」

リアス「い、いえ……………」

リアスは劍帝が質問をすると、少し顔と視線を逸らした、逸らした先には一誠が立って居り小さくガッツポーズをしていた

リアス（一誠……………何故ガッツポーズをしてるのかしら？）

一誠（朱野さんや部長に加えて…劍帝さんまであんなナイスオツパイをしてるだなんて、いやー生きてて良かったあ）

一誠がガッツポーズをしなからそんな事を考えていると、何処からともなく何か  
切れるような音が聞こえ

八剣「オイッ、エロガキ」

一誠「へっ？エロガキって俺の事かっ!?」

八剣が剣帝の背後から現れたかと思えば、次の瞬間には一誠に近付き、一誠を殴り飛  
ばした

八剣「貴様以外に誰が居る！妾の愛しい主たる剣帝様をいやらしい目付きで見えない  
わ！」

一誠「ガハッ……」

一誠は壁を壊し貫通して旧校舎の外まで吹き飛んでいた

八剣「一度殺してやろうかのお？そうすれば馬鹿も治ろう」

剣帝「八剣！止めなさい」

八剣が8本の尻尾の先端部分を剣に変えながら一誠に近付こうとしていると、剣帝が  
怒号を飛ばして止めた

八剣「……………仕方が無いのお、剣帝様に免じて許してやるとするか」

剣帝「それで良いのよ、さあ、戻ってらっしゃい」

八剣は剣帝に止められ、しぶしぶという様子で剣帝の近くへと戻って来た、が、剣帝

の目の前に座っているリアスからかなりの殺気が放たれている

リアス「よくも私の可愛い一誠を……私は貴女を許さな」

八剣「黙るが良い、この乳デカ無能娘」

リアスが八剣に文句を言おうとしていると八剣が先にリアスに文句のようなものと言った

リアス「なっ……私が無能？」

八剣「ああ、何時も何時も後手でしか問題を解決せず、更には少し前は敵だった墮天使が街に拠点を放置して、さっき吹き飛ばしたエロガキを一度死なせたり、あのシスター娘を死なせたりと、完全に無能ではないかのお？」

黒歌「そうだにや！無能無駄乳姫にやん」

八剣がリアスを問い詰めていると突然窓の外に黒歌が現れて、リアスへの言葉を言い放ってきた

剣帝「あのお、何故貴女がここに？」

黒歌「ん？剣帝が何か面白い事になつてゐるみたいだから見てこいつて彼からのお達しだからにや〜」

剣帝が疑問を投げ掛けると黒歌はニコニコ笑いながら返答してきた

剣帝「夜鴉様はまたそうやって私を玩具に……まあ、もう慣れましたがね」

黒歌「被害者だにや〜」

劍帝は呆れたように頭を抱えて居ると黒歌はまだ笑い続ける

劍帝「まあ、この命は夜鴉様のお陰で存在してるようなものですし。文句なんて言いませんよ」

黒歌「ここで言うのと面倒になるのにね墓穴だにや」

劍帝のサラリと言った発言に対し、八劍と黒歌以外は驚いた表情や、疑問を浮かべた表情になっている

劍帝「アチャ、やつちやいました」

八劍「ハア、劍帝様はおつちよこちよいじやお」

黒歌「面白い物は見れたし帰るにや〜。ばいにや〜」

劍帝「え、ええ、さようなら」

黒歌は最後までニコニコと笑いながら魔法陣展開して消え、劍帝は少しの間舌を出していたが、黒歌が消えると同時に別れを告げた

八劍「ふむ、面倒になる前に逃げるとするかのお」

劍帝「そうねえー、また質問攻めにされるの嫌だものね」

劍帝もまた魔法陣展開して、八劍と共に消えた

リアス「ハッ、しまった、劍帝様を逃がしてしまったわ」

朱野「夜鴉、様とおっしゃてましたわね。何者なのでしょね？リアス」

残されたオカルト研究部の部員にはまた一つ疑問が増えた

くセラフォル邸：剣帝の部屋く

剣帝「あー、まあたやつちやつたわ」

八剣「全くじゃよ、剣帝様のおつちよこちよいもなかなか面倒を起こす」

剣帝と八剣は並んで魔法陣から出て来た、そして、部屋の中では天翔と小猫が仲良く遊んでいた

天翔「ややつ、お帰りなさいませ、殿」

小猫「剣帝さん：お帰りなさい」

剣帝「ただいま、二人共仲良くしてたみたいね」

小猫は剣帝が戦いから戻ってきててもまだ屋敷の前に居たので部屋の中に招いて居たのだ、そして、今では天翔とある程度仲良くなり一緒に遊んでいたのだった

天翔「いやー、小猫殿中々に強いでござるよ、将棋」

小猫「天翔さんが弱いだけです」

剣帝「言われてるわねえ、天翔」

剣帝は二人の会話を聞きながらフツツと笑みを零しつつベットに腰掛けた

天翔「小猫殿はやはり辛辣で御座るなあ」

劍帝「事実を言ってるだけよ」

天翔がウダウダと言っていると劍帝に否定の言葉を投げかけられる

天翔「グヌヌヌツ」

劍帝「ハア…何だか疲れたし、私は少し寝るわね、そのエロ天狗が何もしないように見張っててね、小猫ちゃん」

小猫「はい……」

劍帝はベットに横になりゆっくりと目を閉じ、スヤスヤと眠りはじめた

## 第四十八話 「暴力を超えた暴力」

あらすじ

旧校舎にてリアスと対面していた剣帝、そして、なぜ自分の体が女性になっているのかを説明した。その後もリアスと話していると剣帝の姿を見ていた一誠は八剣に吹き飛ばされ、八剣は一誠にトドメを刺そうとしたがる、剣帝はそれを止めるために八剣と共にセラフオール邸に帰り、止めて疲れたのかすぐに眠るのだった

く 剣帝の夢の中く

真つ暗闇の空間の中で虚ろな目をした白髪の少女と黒髪の青年、黒影が並んで立っていて、それを鎖に繋がれた剣帝は見せられている

黒 「ヒヤハツ、良い気味だなあ、剣帝」

剣帝 「………黙れよ、ボケ黒」

黒影は剣帝を嘲笑いながら見下し、剣帝はそんな黒影を見上げながら睨み付ける

黒 「ヒヒツ、あー、怖や怖や、なあ、怖いよなー、  
 ■■■ちゃん」

?? 「ああ………」



虚ろな目をした少女は黒影の言葉に反応して頷く

黒「だよなあー……こんな怖い奴は放置して向こうへ行こうぜー？」

???'「……………ああ」

黒影は白髪の少女の肩に手を回し闇の中へと連れて行こうとしている

劍帝「待て!!待ちやがれ!!」

黒影「ヒヒヒッ、返して欲しけりや戦争があつたあの場所に来な」

黒影は劍帝に方を首だけ振り返り、劍帝に向けての言葉を言い放つと闇に消えていった

く劍帝の自室く

劍帝「待ちやがれ！」

天翔「うおう!如何なされたので御座るか?殿」

劍帝はベットから腕を伸ばしながら飛び起きた、そして、そんなことが起きたので近くに居た天翔が驚き

劍帝「……………天翔、八劍、俺が覇龍化した場所覚えてるか?」

八劍「無論じや」

天翔「少し分らないで御座る」

劍帝の言葉に八劍は頷いたが天翔は首を傾げた

劍帝「そうか……まあ良い、取り敢えずボケ黒が遠回しに喧嘩売ってきたから……  
殺しに行くぞ」

八劍「何じゃ、またか」

天翔「あの方も懲りませぬなあ」

劍帝がベットから立ち上がるのと八劍と天翔が劍帝の体と融合して、一人となった

劍帝「さて、行くか」

小猫「待つて下さい、劍帝さん」

劍帝がマントを羽織り窓からまた出て行くこうとしていると小猫が呼び止め

劍帝「何だい？小猫ちゃん」

小猫「私も連れて行って下さい……劍帝さんの戦いに興味があるので」

劍帝「……そういう事なら速く行こうか」

小猫は少し俯いて意見を言うのと劍帝は手を伸ばし小猫を連れて行くこうとする

小猫「有難う御座います……」

劍帝「気にしなくていいから、速く行こうか」

小猫は劍帝の手を掴み、劍帝はその瞬間に冥界の空を高速で飛んで行った

く紫天の荒野く

黒「ヒヒツ、来たか」

剣帝「よお、クソツタレ」

黒影は荒野の真ん中で堂々と剣帝を待ち構えていて、剣帝は黒影の目の前に着地した黒「ん？……何でその娘連れて来たんだ？」

剣帝「本人の意志だ、小猫ちゃんは少し離れた岩の影にでも隠れてな」

剣帝は小猫の手を離し、遠くへ行くように指示したが、小猫は尻尾と耳を出し、臨戦態勢に入り

小猫「私も戦えます！だから」

剣帝「良いから下がってな……天翔」

剣帝は小猫を見下ろしてから天翔を呼び出し、小猫を多少離れた位置に連れて行かせた

黒「ヒヤハツ、足手まといは遠くに避難か？」

剣帝「うるせえよ、一回俺に負けてるくせにいきがりやがって」

無名は懐からロストドライバーとジョーカーのメモリを取り出し、ジョーカーのメモリを押しした

《《ジョーカー!!!》》

剣帝「変身」

そして、剣帝はロストドライバーを腰を付けてからジョーカーメモリを差し込み、変

身した

剣帝「さあ、お前の罪を数えろ」

黒「ヒヒヤヒヤ、最初つからトバすなあ」

黒影は慌てる様子もなく首に刺さったドラゴナイトハンターZのガシヤットを押し込み、体の表面に鱗が生え背中からは黒い龍の羽が生えた存在へと昇華した

黒『これが俺様の新たな力だぜえ!!』

剣帝「ほお、それなら俺も隠し玉を使うかな」

剣帝は黒の姿を見ると剣帝は左手にブーステッドギアを出現させ

剣帝「ブーステッド・ギア、BalanceBREAK!!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

剣帝は変身を解き、全身に赤い鎧を纏った、そして、ジョーカーのメモリをブーステッド・ギアに差し込んだ、すると紅い鎧が黒くなり始め、口の部分が裂け、牙の生えた口のようになった

剣帝「ブーステッド・ギア・スケイルメール・ジョーカー」

《Welsh Dragon Balance Breaker Joker!!!》

黒『ヒヒッ、それで俺様に勝てるかな?』

剣帝と黒は同時に翼を広げ、天高く飛び上がり、戦闘を始めた

黒『ヒヒヤヒヤ！どうしたあ！この程度かあ？』

剣帝「チツ…この前より数段強い…」

剣帝と黒影は上空で激しい殴り合いを繰り広げている

黒『そーらよつと!!』

剣帝「ガハツ!!」

黒影は上手く剣帝の攻撃の隙をつき、剣帝の鳩尾に蹴りを叩き込んだ

剣帝「いつてえじゃねえか!!」

無名『グオツ!』

剣帝は蹴られて吹っ飛ぶと黒影に向けて高密度の光線を口から放った

黒『ヒヒヤヒヤ、危ねえじゃねえか』

剣帝「チツ、弾きやがったか」

黒は剣帝の光線を左手一本で弾き飛ばし、防御した

黒『お返した』

剣帝「!!」

黒影は剣帝に向けて剣帝の放った数倍の大きさの光線を口から放った、そして、それは剣帝に見事に直撃し、剣帝は地面に向かって落下していった

剣帝「グフツ……………」

黒『ヒヒッ！これでフィナーレだ!!』

黒影は左手に黒い機械的な籠手をはめ、その籠手にダイヤルの付いた大きなガシャットを差し込んだ

〈キメエワザア！ガシャット〉

そんな音声がすると、黒影がダイヤルを半回転させて

〈ガツチャーン!!グランドオデイスティニー、クリティカルスマアージュ!!!〉

籠手からそんな音声が響き黒影の全身に力が漲るような様子が現れると、剣帝に向かって黒影が猛スピードで飛んで行き

黒「これで終いだ!!!」

剣帝「くっ……」

剣帝に黒影の拳が当たる刹那、剣帝と黒影の間に黒い羽が舞い

夜鴉「天が呼ぶ、地が呼ぶ、我を呼ぶ。愚者を殺せと我を呼ぶ。強化の恩を忘れ我の創造せし武器を勝手に持ち出し使用した罪、万死に値する」

黒「アイエエエ！夜鴉さん、夜鴉さん、ナンデエエエ!?!」

黒いスーツを身に纏い、大きな漆黒の羽根が24枚羽ばたかせた夜鴉が攻撃を羽根で受け止めた

夜鴉「逃亡だけなら許さん事も無かったが貴様は私の創造せし武器を持ち出し使用し

た事は確認済みだ。よって殲滅する」

黒「……………やっちゃったぜ……………でも良いのか？俺が死ぬとそこに倒れてるアホに確  
実にめちやくちやな悪影響が出るぜ？」

黒影は夜鴉の後ろに倒れている剣帝を指差した

夜鴉「ふむ。ならば九部九割九厘殺しで止めてやろう」

黒「それ瀕死じゃねえか!!」

夜鴉「ならばこれを使ってやろう」

夜鴉は懐からダイアルの付いたガシヤットを取り出しダイアルを右に回した

〈ワールドクラフト〉

〈Let's The Next Craft? Let's The Next Cr  
aft?〉

夜鴉「終焉の時だ」

〈Dual up!〉

〈A new world that breaks and creates!

This is the power of God!

World craft!〉

夜鴉は背中に四枚の天使の羽根が生えた炭坑夫のような姿になった

夜鴉「仮面ライダーワールドレベル90」

黒『ゲエエ、それ俺死ぬだろうが！』

黒影は慌てて逃げようとし始める

剣帝「……にが……すか」

黒『グエツ』

剣帝の袖口から伸びた暗器が黒影の首に巻き付き、黒影を引つ張る

黒『……俺死んだわ』

黒影は夜鴉の姿を見て暗器を引き千切ろうとするが、なかなか切れず、黒影は覚悟を決めた様子で

「ワールドクラフトはゲームエリアの全ての物を自由に作り替える事が出来る。例えばこの沢山のエナジーアイテムを全て自分の好きな物に変える事など造作もない」

夜鴉の周囲にゲームエリアに散らばっていた全てのエナジーアイテムが集まり変化をし始めた。混乱等のエナジーアイテムも全てマッスル化に変わっていった

『マッスル化！』

全てのエナジーアイテムがマッスル化に変わり一斉に夜鴉に付与された

黒「……やべえなあ……」



剣帝「良く分かってるじゃねえか」

黒影が苦虫を噛み潰したような顔をしていると、剣帝が何時の間にか回復しきり、黒影の後ろに回り込んでいた

黒「しまっ!!」

剣帝「コイツは頂く」

剣帝は黒影が反応するまでの瞬時に黒影から黒い機械的な籠手に差し込まれているダイヤルの付いたガシヤットを奪い取った

夜鴉「さあ行くぜ？」

〈キメワザ! World Critical Remake〉

夜鴉は黒を剣帝から引き剥がし上空へ投げてキックを当てた

夜鴉はキックを当てると同時に刺さっていたドラゴナイトハンターZのガシヤットとキメワザ用の武器を回収した

〈Beautiful〉

黒「ゲフェツ……………」

剣帝「流石ですねえ。夜鴉様」

夜鴉「まだまだこれからだぜ？」

倒れた黒に近付いて近くの石を回復のエンジューアイテムに変え黒に与えた

劍帝「うわあ、エゲツねえ」

黒「九割九分九厘死つてそういう事かよ……」

黒影はみるみる内に回復し、また逃げようとし始め

夜鴉はダイアルを左に回した

〈デビルズキングダム〉

〈It's show time! Let's break concept〉

夜鴉「逃がさん」

〈Dual up!〉

〈Being a demon king! himself Destroy eve

rything and go to the top!

Devil's Kingdom!〉

夜鴉は黒い闇に包まれその姿を変えた

頭には黒い悪魔の角が生え、魔王のようなマントを羽織つてはいるが他に鎧は無く体には鎖を巻き付けた姿になった

黒「ヤバイ今度こそ死ぬ……」

劍帝「うーむ……ドライバーさえあれば俺も変身出来るんだがなあ」

劍帝は黒影から少し離れた位置でデュアルガシャットを弄っている

夜鴉「デビルズキングダムは単純にパワーのみを特化させた物だ。さあ破壊の権化の前にひれ伏せ」

黒「面倒は勘弁だ!!」

剣帝「うぐっ………」

黒影は近くにあつた影に触れて、その瞬間に影に消え、影を伝つて剣帝の影に入った  
夜鴉「この力だけで充分だ」

剣帝の影に手を差し込んで力業で黒を引きずり出した

剣帝「かなり痛い!!」

黒「グアツ……」

黒影は影から引っぱり出されるとジタバタと暴れ

夜鴉「万物を力業で攻略するのがこのゲームだ」

黒「ただの脳筋ゲームじゃねえか……」

剣帝「夜鴉様ー、俺もゲームドライバー欲しいです」

夜鴉は黒の言葉を聞くと笑顔になつて黒の首を掴み空中に投げて連続で殴り続けた

夜鴉「ゲームドライバー？仕方ねえなほれやるよ」

夜鴉は黒を殴りながら剣帝へゲームドライバーを投げて渡した

黒「ゲホアツ……」

劍帝「有難う御座います」

黒影は殴られてぐったりとし始め、劍帝はゲームドライバーを貰って喜んでい

夜鴉「さあフィニッシュだ」

〈キメワザ!DevilsCriticalBurst〉

夜鴉は黒を殴り飛ばし即座に後ろに回り込み上空に蹴り上げてそして地面へ叩き落とした

黒「ガハア!!」

劍帝「うわぁ、痛そう」

黒影は叩きつけられた衝撃で血を吐き出し、劍帝はゲームドライバーを腰に付けながら眺めていた

そして地面へめり込んで黒へ上空からキックを当てさらにめり込ませた

〈Excellent〉

黒「……………」

劍帝「……死んではないかな」

黒影はめり込んだ状態でビクビクとしていた

夜鴉「ゲームクリアって所だな。さあて劍帝元々これはお前にやるように創ってた物だ受け取れ」

夜鴉はキメワザ用の武器を剣帝へ振りかぶって投げて渡した

剣帝「あつ、はい、有難う御座います」

剣帝は飛んで来たキメワザ用武器の黒い機械的な籠手を受け取った

夜鴉「じやあな。粛清完了」

夜鴉は変身を解除して次元を力業で破って帰っていった

剣帝「さようならー……さて、回収するかな」

黒「………いつてえええ！」

剣帝が黒影を引き抜くと黒影はバタバタと暴れ始めた

剣帝「全く…悪ふざけも大概にしとけよ？」

黒「ヒヒヤヒヤ、久々に遊べる状態だったからな、遊びたかったんだよ」

引っこ抜かれた黒影は地面に座りケタケタと笑い、剣帝はそんな黒影を見て呆れて頭を押さえている

剣帝「取り敢えず、帰って来い」

黒「あーいよ」

黒影は剣帝の影に入り、剣帝は黒影が影に入ると剣帝は小猫を連れて高速で空を飛びながらセラフォル邸に帰って行った

## 第四十九話 「伝説へ至る英雄伝」

あらすじ

セラフオルー邸に戻ってから眠りについていた剣帝、その夢の中で又もや黒影からの挑戦状が送られてきた、剣帝はその挑戦状に乗り、今度は自分が暴走して大暴れをした場所に飛んで行った、其処には何時も通りの格好をした黒影が待ち構えていた、そして、剣帝と黒影は戦闘を始め、黒影は前回よりもかなり強化されていて剣帝は苦戦していた、だが、其処に夜鴉が現れ、剣帝を守って黒影をボコボコにし倒した、そして、剣帝に様々なアイテムを渡し、剣帝はそれと黒影を回収してセラフオルー邸へと帰ったのだった

↓セラフオルー邸：剣帝の部屋↓

剣帝は椅子に座りながら机の上に置いてあるゲームドライバーとデュアルガシャットゥーを見詰めている

剣帝「これの試運転をしたいが……どうするかなあ……相手が居ねえ」

黒「ヒヒヤヒヤ、悪かったなあ、俺様が弱くて」

劍帝が頭を抱えて居ると劍帝の影からぬるりと黒影が劍帝の後ろに現れて

劍帝「そう思うんだったら、強くなりやがれボケ」

黒「ヒヒヤヒヤ、俺様は楽しんで強くなりたいんでな、お断りだ」

黒影がケタケタと笑っていると頭を抱えていた劍帝が突然何かを思いついたのか頭を上げて

劍帝「そうだ、サイラオーグさんかヴァーリに喧嘩を売ろう」

黒「……相変わらず突拍子もない事言うなお前」

劍帝の発言に黒影は呆れたようにハアと溜息を付いたが劍帝はそれを無視するように動き始め

劍帝「そうと決まれば即行動だ！行くぞ黒!!」

黒「はいはい、勝手にしろ」

劍帝はゲーマドライバーとデュアルガシャットYを持つて窓縁に脚を掛け、黒影はその劍帝の影に溶けるように入り、黒影が入ったことを確認すると劍帝は冥界の空に飛んでいく

く冥界上空く

劍帝「うーむ…飛び出して来たは良いけど、どっちに先に行こうかなあ」

無名『ヴァーリを探したらどうだ？アレからあいつも強くなってるだろうしな』

劍帝が顎に手を当て考えていると頭の中に黒影の音が響き

劍帝「そうだな、ヴァーリ君を探すとしようか」

劍帝は黒影の提案に従い、ヴァーリを飛びながら探し始めて

劍帝「見当たらねえええええ!!!」

黒『そんなに叫ぶなよ、周りに迷惑だろ』

劍帝は岩山に囲まれた岩石場で空に向かって叫んでいた

劍帝「だつてよお、ヴァーリ見付からないんだぞ!? 要らない時には簡単に出会おう癖に必要な時は出会えないってなんだよ!!」

黒『マジギレしかけんなよ、てか、デュアルガシャットの性能実験ならその辺の岩山で試せよ鬱陶しい』

劍帝はイライラしながら黒影の言葉を聞き入れ、腰にゲーマドライバーを付け、銀色のボディのダイヤルの付いたガシャット、デュアルガシャットγのダイヤルを右に回した

《グランド・デイスティニー!》

War on which a hero is fitted

War on which a hero is fitted

ダイヤルを回すと音声が鳴り響き、そして、二回程鳴り響くと劍帝はガシャットを右



手から左手に持ち替えて、ゲームドライバーに差し込んだ

劍帝「第50砲門解放」

《Dual Up!!》

崩れる未来

英雄蔓延る

救うマスター》

ゲームドライバーから変身音声が鳴り響くと、劍帝の姿が代わり、顔には黒い騎士甲冑の様な物を着けて覆い隠し、手には一見顔のような物が見える巨大な爪の付いた籠手が付き、脚には膝部分に鋭い角が付いた鎧を纏い、更にドラゴンの尻尾の様な物が付いた黒い鎧を全身に纏った

劍帝「ふむ、変身するところなのか……ん？」

劍帝が自分の全身を眺めていると右の手首辺りに様々なマークが書かれた細かいルーレットが配置されていて、劍帝が見ると同時にルーレットが回り始め、魔術師のマークの場所で止まった

《Caster!MEFISTOPHERE!!》

劍帝「メフィストフェレス……ああ、アイツか」

劍帝が手にハメられた巨大な真紅の爪を地面に突き立てると地面が爆発した

劍帝「メフィストフェレスの爆弾（ボム）か…」

??「相変わらず凄まじい事をしているようだな、劍帝殿」

劍帝は突然声を掛けられ、少し驚きながら声のした方向を見ると、其処にはサイラオーグが座っていた

劍帝「お久しぶりですね：サイラオーグ様」

サイラ「ああ、俺はこんな場所で劍帝殿に会えるとは思ひもしなかったがな」

劍帝は首だけ振り返り挨拶をし、尻尾で岩に座っているサイラオーグに攻撃を仕掛けた、が、サイラオーグは何事も無く回避をした

サイラ「いきなり何をするんだ、劍帝殿」

劍帝「いえね、単にちよいと力試しに付き合ってほしいなと思ひまして、ね！」

劍帝はサイラオーグの着地点点に向かって劍帝は走り出し、サイラオーグの足下に劍帝が爪を突き刺すとその場所がまた爆発したが、サイラオーグはやはり上手く回避していた

劍帝「良く避けますねえ」

サイラ「フツ、本気を出していない劍帝殿の攻撃には当たってやれないな」

劍帝とサイラオーグはお互いに一定の距離を保って向き合っていた、が、劍帝はデュアルガシャットをゲーマドライバーを抜き、デュアルガシャットノダイヤルをまた右に

回した

劍帝「第50砲門解放」

《Legend monsters!!》

Fight against a monster and get a monster  
Fight against a monster and get a mon  
ster

Fight against a monster and get a mon  
ster

Dual up!!

レジエンドモンスターズ!

世界を廻れ

レジエンドモンスターズ!

頂点目指せ

チャンピオン!》

再度ゲームドライブバーにデュアルガシャットYを差し込むと劍帝の姿が大きな黄色いのリュックに赤い上着、そして、その下には黒いシャツを着て、青いジーパンを履き、頭には全体的に赤いが、つばの部分が白く、更に前面のつばの付け根に半月状の模様が入った帽子を被り、其処から黒い髪の毛がはみ出している姿に変わった

劍帝「さてと…何が出るかなあー」

劍帝が赤と白の半々になっているボールを靴から取り出して空に投げるとボールが割れ、中から首に赤いマフラーのようなものを付け、指が三叉で指と指の間に大きな水掻きがある、二足歩行の青色の蛙が出て来た

劍帝「おー、お前かゲッコウガ」

ゲッコウガ「コウガッ」

劍帝は自分で呼び出した蛙、ゲッコウガの頭を撫でてから辺りを見回し

劍帝「ゲッコウガ、高速移動しながら赤と黄色の丸いアイテムを集めて来い」

劍帝が命令をするとゲッコウガは一度頷いた後に少し鳴き、高速で走り出した

劍帝「よし、それじゃ俺はっつ!!」

劍帝は靴を再度探り中から取り出した竿でサイラオグに殴り掛かった

サイラ「なるほど、先程の蛙は陽動という訳か」

劍帝「さあ、どうでしょうかね！」

サイラオグは余裕で劍帝の振るう竿を拳で受け止め、劍帝はそれでもまだ振り続け、その間もゲッコウガは走り回りエナジーアイテムを取っている

《マッスル化！高速化！高速化！マッスル化！収縮化！マッスル化！マッスル化！マッスル化！高速化！》

剣帝（フフツ、着々と積んでる……）

剣帝が軽くニコニコと笑っているとサイラオーグの拳が眼前に迫り

剣帝「ウオウ！」

サイラ「俺との闘いの最中に余所見とは、剣帝殿は余裕だな」

剣帝は拳が当たる間一髪の所で後ろに大きく飛び拳を避けた、そして、その拳が振られた空間から衝撃波が放たれた

剣帝「おー、危ない危ない」

サイラ（やはり剣帝殿本人は回避能力を向上させているようだな）

サイラオーグが剣帝の能力を考えを巡らせていると、剣帝が溜息を付きながら頭をかいた後、突然地面に靴を起き、靴の中から自転車を取り出し、靴を背負ってから自転車に跨った

剣帝「よっこらせ、さて、行きますよ」

サイラ「剣帝殿の攻撃手段は多彩だな、だが、それは派手なだけでも捉えられる！」

剣帝はサイラオーグに向かって真正面から走って行き、前輪でサイラオーグをはねようとしたが、サイラオーグは難なく前輪を掴み止めた

剣帝「クツソ、やっぱりか」

サイラ「フツ、万策尽きたようだな、では、今度はこちらの」

劍帝「なんちゃって…ゲッコウガ！水手裏剣！」

劍帝が自転車に跨りながら舌を出し、命令をすると二人の周りを走っていた高速のゲッコウガがサイラオーグ目掛けて水で出来た手裏剣を大量に投げつける

サイラ「クツ、先程から走っていた蛙の目的はこういう事か！」

劍帝「フフツ、そういう事ですよ」

サイラオーグは飛んできた手裏剣を弾く為に両手を自転車の前輪から手を離れた、劍帝はその隙にサイラオーグから離れ、また前輪浮かせた状態でサイラオーグをはねようとする

サイラ「クツ、二方向から同時とは厄介だ」

劍帝「厄介で済まず辺りサイラオーグさんは強いですね！」

劍帝は前輪を落とし、走りながら竿を振りエナジーアイテムに釣り針を引っ掛けながら走行し、赤と黄色のエナジーアイテムを取得した

《マッスル化！高速化！》

劍帝の自転車を漕ぐ速度が大幅に速くなり、更に竿を振るいサイラオーグに当たった際の威力が上がった

サイラ「クウ、先程よりも劍帝殿の竿の威力が上がっている…あの落ちている物のせいか」

劍帝（アチャー、気付かれたか、まあ、当然か……それならば！）

劍帝はサイラオーグから少し離れ、ガシヤットを抜き、一度右に回してから元の位置に戻そうと左に回した

《キメエ、ワザア、デュアル・ガシヤット

レジェンド、モンスターズ！！

クリティカル！チョイス！！》

劍帝「来いっ！ゲッコウガ！そして、出て来い！マフオクシー！ブリガロン！」

劍帝は自転車に乗りながら2つの紅白半色のボールを投げると中から魔法使いのような見た目をした、黄色と赤色の毛色をした二足歩行の狐と全身に刺の付いた緑の二足歩行している亀が出て来た

劍帝「さあ、行こうか、華麗に激しく！手始めに、マフオクシー、大文」

黒『劍帝、辞めにしろ』

劍帝がマフオクシーに命令をしている最中に頭の中に黒影の音が響いた

劍帝「何だよ、黒」

黒『ドライグの野郎が面白い事を言ってるな、空の上、つまりは宇宙から強力な白龍皇の力を感じるとな…』

劍帝は黒影の言葉を聞くとニヤリと笑いゲーマドライバーからデュアルガシヤット

γを抜いた

劍帝「まあ、大体の力の仕様は掴めました。有難う御座いますね。サイラオーグさん」  
劍帝はサイラオーグに感謝の言葉を伝えたと髪を銀色に変え、音を超えた速度で上昇して行った

サイラ「……………最後まで遊ばれてしまったようだな…劍帝殿の力は底が見えんな」

サイラオーグは劍帝が飛んで行った空を見つめていた



## 第五十話「半減の頂点と付加の帝」

あらずじ

黒影との戦闘から一日経った後、自室で剣帝は手に入れたデュアルガシャットγを見ながら考え事をしていた、そして、唐突にヴァーリを探して力試しをしようと思い付き、即座に行動を起こした。そして、ヴァーリは見つからなかつたがサイラオーグが見付かり、剣帝はサイラオーグで力試しをした後に宇宙から迫るヴァーリの魔力に惹かれ飛んで行った

く駒王町上空く

剣帝は音速で宇宙に向かって飛んでいた、そんな剣帝の少し後ろに赤い影と白い影が近付いて来る、そして、剣帝はその2つの影に気が付き後ろを振り向いた

剣帝「来たか、二人共」

八剣「何故そんなにも楽しげな顔で飛んで居るのじゃ？剣帝様よ」

天翔「殿のその様な嬉しそうな顔は無名殿と本気で遊んで居られる時以外は見た事無いで御座るな」

劍帝が振り返るとそこには八劍と天翔が並んで飛んできていた

劍帝「久方振りに面白い闘いが出来そうだからな、本気で行くつもりだ、だから二人共俺の体に戻れ」

八劍「了解じゃ」

天翔「御意!!」

劍帝が少し速度を落とすと天翔と八劍が劍帝の体に触れ、二人は姿を消した

劍帝「よっしゃあ!!これで本気で飛べる!」

劍帝はそう言いながら悪魔の翼を体内に戻し、今度は背中から合計四枚の白と黒の天使のような翼を白を右に二枚、黒い翼を左に二枚展開し、先程までよりも速く宇宙に向かって飛び始めて

宇宙空間へ

劍帝「さて：ヴァーリ君は何処：か：な：」

劍帝が宇宙空間に出て辺りを見回すと明らかなまでに異質な程の強い魔力を月から感じ取った

劍帝「オイオイ、ウル○ラマンじゃねえんだからよお!」

劍帝は月まで全力で飛んで近付いて行つた

月：表面へ

劍帝「久し振りだねえ、ヴァーリ君」

ヴァーリ「久しぶりだな、セラフォールのクイーン」

劍帝が月に降り立つとそこにはバランスブレイク済みのヴァーリが待っていた

劍帝「ああ、そういうえば名乗ってなかったね俺の名前は……」

ヴァーリ「名乗る必要は無い、お前の名前を覚えておくつもりがないからな！」

ヴァーリは劍帝が喋っている途中に劍帝に向かって殴り掛かった、だが、劍帝はその攻撃を難なく回避した

ヴァーリ「良く回避したな！流石にあの方のお気に入りなだけはある！」

劍帝「あの方って……もしかして……夜鴉様か？」

ヴァーリが満足気に頷くと劍帝は憐れむような目つきでヴァーリを見て

劍帝「お前が前に戦った時に比べて、妙に素早いなと思ったが……夜鴉様に修行付けられたな？」

ヴァーリ「ああ、死ぬような思いをしながら修行をしていた」

ヴァーリの言葉に反応するように劍帝は同情する様な表情で見るがヴァーリの表情はどこことなく満足気で

ヴァーリ「あんな経験をしたからな、今ではグレート・レッドにも負ける気がしないな」

劍帝「……………」

劍帝は同情する様な表情が呆れた表情に変わり

劍帝「同情するだけ無駄って訳ね……ハア……」

ヴァーリ「さあ、続きを始めるぞ、今度こそ俺が勝つ」

劍帝は溜息を吐いてすぐにヴァーリから距離を取り、ヴァーリは劍帝が距離を取るとすぐに詰めようと走って来て

劍帝「こつち来んな！」

ヴァーリ「近接戦闘ならばお前も得意な筈だろう、何故距離を取るんだ？」

劍帝はヴァーリの脚を払って転ばせようとするが、ヴァーリは足払いを回避した

劍帝「お前に触られると嫌な予感がするからだ!!」

ヴァーリ「フツ、怒りに任せると速度が上がっても動きが大雑把になり、注意力も散漫になっているぞ！」

ヴァーリは劍帝の振った拳を回避し、劍帝に足払いを仕掛け、劍帝はその足払いを回避した、だが、足払いは少しだけ劍帝の身体に掠った

劍帝「チツ、少し掠った……………か」

ヴァーリ「どうした、身体が急激に重くなったか？」

劍帝は喋っている途中で突然体制を少し崩した、その際にヴァーリの翼から悍ましい

程のDividの音声が聞こえた

劍帝「お前…さては…ハア…Dividを強くする…修行を…受けたんだな…ふう…」

劍帝は息を整えると、体制を元に戻しヴァーリに向かって拳を構えたが、やはり弱々しい

ヴァーリ「どうした！お前の力はこの程度か！」

劍帝「ヴっ…ガッ…ガハッ!!」

ヴァーリは劍帝を殴り始め、劍帝は殴られる度に力を奪われて動けなくなっていく

劍帝「……………」

ヴァーリ「フンツ、あの方のお気に入りとはいえ、この程度だったのか…弱いな」

劍帝は力を奪われ過ぎて指一本すら動かせなくなり、月に倒れ込んだ

ヴァーリ「この程度の奴ならば殺す価値すら無いな…いや、そういえばお前はブーステッド・ギアを使っていなかったな…そうだ、俺がこれからお前の本当の妻を殺してきてやろう！」

劍帝「!!」

ヴァーリがそう言い残して立ち去ろうとすると劍帝の身体がゆらゆらと揺れながら立ち上がり

劍帝「テメエ…今すぐ消えるか？」

立ち上がった劍帝からは悍ましい程の殺気が立ち昇り、劍帝の髪は銀色で長髪に伸びていた

ヴァーリ「全て奪いきったと思ったんだがな、まだそんな演出をする程度の力が残っていたのか！」

ヴァーリは立ち上がった劍帝に再度殴り掛かった、だが、劍帝はそのヴァーリの拳を受け止め、握り潰し始める

ヴァーリ「クツ…何処からこんな力が…」

劍帝「不思議か？それなら教えてやるよ、お前は確かに力を付けた」

ヴァーリは完全に潰される前に急いで手を引つ込めた、そして、その潰そうとしていた劍帝の髪は段々と短くなっていき、紅く染まり始める

劍帝「だがな…お前は前に負けた相手から力を奪っただけで命を奪おうともせず、放置しただろう、そして、戦闘を楽しみたいからと煽つただろう、それが今回のような事の引き金になるんだよ、覚えてやがれ！」

短く紅くなった劍帝の髪が今度は段々と分け目から半分黒に染まっていった

ヴァーリ「何だ…さっきまでとは様子も雰囲気も…全く…」

劍帝「余所見してんなよ」

ヴァーリが剣帝を見てから自分の拳を一瞬見て再度剣帝の方を見ると剣帝の姿が消えていて、剣帝はヴァーリの頭を蹴り飛ばした

ヴァーリ「グフツ……何時の間に後ろに……何だその姿は……」

頭を蹴り飛ばされ後ろを振り向いた、其処には八本の狐の様な尻尾を腰から出し、頭からは狐の様な耳を出している剣帝が居た、そして、その尻尾と耳は朱くなっていて、更に剣帝の全身には赤い紋様が刻まれていた

剣帝「さあ、物理を超えた速度を味わいな」

剣帝はそう言ってまた瞬時に姿を消して、今度は真正面からヴァーリに右手で殴り掛かった、そして、その際に剣帝の左手が輝き剣帝もバランスブレイクした

ヴァーリ「舐められたものだな！正面からとは」

剣帝「そらよ！」

剣帝とヴァーリは互いに白い鎧をぶつけ合い、殴り合いを始めた

## 第五十一話 「白翼への英雄の一撃」

あらすじ

宇宙にヴァーリの魔力を感じ取ったと聴いた剣帝は即座に宇宙に向かっていた、そして、ヴァーリの魔力を月から感じ取り月へ向かい、ヴァーリとの戦闘を開始した、序盤は剣帝が優勢だったが、ヴァーリの蹴りが剣帝の足にかすってからは剣帝は力を大幅に吸われヴァーリに言いように殴られていた、だが、ヴァーリのとある一言が剣帝の逆鱗に触れ、剣帝は怒りをあらわにしながらヴァーリに反撃を始めた

宇宙：月の表面

月の表面の空中では何度も目に見えないほどの速度で剣帝とヴァーリが殴り合いを続けていた

剣帝「ハア……流石にこの姿でも何度も吸われるとキツイな……」

剣帝は少し狼狽した様子で膝について居たが少し経過するとその様子も無くなり

ヴァーリ「フツ、激昂して強くなった割には容易く膝をつくものだな」

ヴァーリも一見すると平然と立っているように見えるが、鎧の中では中々倒れない剣



帝に冷や汗をかき続けた

劍帝「だがまあ…大概面倒だからな…本気で行くとするか」

ヴァーリ「ほお？まだ本気は出していなかったというのか」

劍帝「まあな、見せてやるよ俺の力をよ」

劍帝はバランスブレイクを解除し、懐からゲームドライバーを取り出して、腰に付けてそのすぐ後にデュアルガシャットγを取り出してダイヤルを右に回した

《グランドデイスティニー！》

War on which a hero is fitted

War on which a hero is fitted》

待機音声が二回鳴り響くと劍帝がデュアルガシャットγをゲームドライバーに差し込んだ

劍帝「第50砲門開放」

《Dualup!!》

崩れる未来

英雄蔓延る

救うマスター》

すると、変身音声が鳴り響き劍帝の目の前に上方に向かって吠える黒い怪物のような

物が描かれたパネルが現れた、そして、剣帝にそれが被さると、顔は黒い騎士甲冑の様な物が覆い隠し、手には一見顔のような物が見える巨大な爪の付いた籠手が付き、脚には膝部分に鋭い角が付いた鎧を纏い、更にドラゴンの尻尾の様な物が付いた黒い鎧を全身に纏った姿に剣帝の姿が変わった

剣帝「さて、今回は何が来るかな？」

剣帝が右手首を見ると右手首に付けられたルーレットが回り始め、今回は騎乗兵のマークに止まった

《R i d e r r · U s i w a k a !!》

剣帝「今回は牛若丸か……身軽だな」

剣帝は黒い全身鎧を着込んでいるにも関わらず、その重みを一切感じさせないような軽やかな動きを取り始める

ヴァーリ「準備は終わったか？」

剣帝「ああ、待たせたな」

ヴァーリは剣帝が変身し終わるまで律儀に待っていて、変身し終わると同時に構えて殴り掛かった、だが、剣帝には剣帝は拳を掠らせることなく後方に宙返りをしながら回避した

剣帝「うーん、速いがまだダメだな、そんなんじゃ一艘足りとも舟を超えられないよ」

劍帝は着地すると同時に地面に手を付いた、すると、劍帝の着地地点から謎の波紋が周りに放たれ、大量の水が劍帝の手の下から湧き出て来た

ヴァーリ「ウツ…これは、海水か」

劍帝「正解、ちゃんと乗らないと溺れるよ」

劍帝は自分の後ろから大量に出現した木製の船に跳び乗った

劍帝「さあ、白龍の皇よ、この俺を倒せるか挑戦してみな」

劍帝が指を前後にチョイチョイと動かし、ヴァーリを挑発するとヴァーリも劍帝の乗っている舟と同じ舟に飛び乗った

劍帝「いらつしやい…：俺の世界へ」

ヴァーリ「お前の…：世界？」

劍帝「その通り、だ！」

劍帝がガチンと手甲の爪をこすり合わせてハンドスナップをするとすべての舟が揺れ動き始め

ヴァーリ「フツ、この程度の事ならば問題無いな」

劍帝「ほほお、ならこうだな」

ヴァーリは戸惑う事無くまた劍帝に殴り掛ったが、それは劍帝の足元の舟底から現れた赤黒色の槍の束で防がれた



ヴァーリ「それがどうした!」

劍帝「いやあー、ヴァーリ君は気にしなくても構わないよ」

劍帝はベルトからガシャツトを抜き、ガシャツトのダイヤルを一度だけ右に回してから直ぐに今度は左に回して、右手に装備していた穴の開いた出っ張りのある籠手にガシャツトを差し込んだ

《キメエ、ワザアー…デュアルガシャツト…グランドクリティカアルタクティクス!!》  
音声が鳴り響くと劍帝の全身を赤と黒のオーラのようなのが包み、劍帝の体に青色と黄色のエナジーアイテムが取り込まれた

《高速化・ジャンプ強化!》

劍帝はエナジーアイテムを取り込み終わると大きく跳躍し、槍の穂先から穂先へと跳び移りながらヴァーリに向かって行き

劍帝「壇ノ浦八槍飛び!!」

ヴァーリ「ガハッ!…ゴフッ!…ゴフッ!…ゴハッ!」

劍帝はヴァーリの近くにやってくるとうヴァーリを何度も爪で切り刻んでからヴァーリの腹に拳を突き立てた、すると、ヴァーリの身体から無数の槍が飛び出し、ヴァーリは墜落して行った

《Game Clear!!》

今度は音声が鳴り響くと同時にヴァーリが居た位置に Game Clear のロゴが現れ剣帝の姿が変身前の姿に戻った、そして、辺りの風景も元のただの月に戻り

ヴァーリ「クソツ、まだお前に勝つには足りないのか……あれ程の死ぬ思いをしたのに……」

剣帝「死ぬ程の思いか……まだ死んでないんだね」

剣帝はニコニコとした顔でヴァーリの近くに降りてきた

ヴァーリ「当然だろう！フェニックスでもなければ死ぬ様な事は出来ん！」

剣帝「それじゃあ、俺はどうなるのかな？俺は何度も死んだよ？この世界で」

ヴァーリ「何っ？なら、何故お前はここに立てている」

ヴァーリが剣帝の言葉に驚きを顔にしてしていると剣帝はニコニコとした顔で言葉を続ける

剣帝「だって、俺は……神の呪いで死ねないんだよ、永遠にね」

ヴァーリ「神の呪い……まさか……あの方からの呪いを常に受けているのか!？」

剣帝「うん、その通りだよ」

ヴァーリの質問に対して剣帝は頷き、中に羽ばたいた

剣帝「それじゃあね、白龍皇」

剣帝は来るときの3倍の速さで地球へと帰って行った

ヴァーリ「俺よりもずっと前からあの方の玩具な訳か…ならば今はまだ勝てんな」  
ヴァーリも立ち上がりゆっくりと地球へと向かって飛んで行った

## 第五十二話 「忘却の彼方の帝」

く 駒王町：上空く

劍帝「ヴァーリがあんな事言うもんだからあの娘が心配になってきたな…そろそろこの世界でもやれる事やったし帰るかなあ……」

劍帝は一对の白黒の翼で羽ばたきながら頭を抱え始めて

劍帝「うん！帰るとするかな…あーでも記憶消しに行かなきゃなあ…追い掛けて来られても面倒だし…」

劍帝がうーんうーんと頭を抱えて、悩ませていると八劍が劍帝の精神内で喋り始めて  
八劍『そろそろ頃合いじやと思っておったからヴァーリとやらと戦う前に消して回っておいたぞ』

劍帝「でかした！ちゃんとアザゼルとかの記憶も消したんだよな？」

劍帝が嬉しそうな表情で八劍に質問すると八劍は劍帝の精神内で口ごもり

八劍『……じ…実はあ…』

劍帝「……消したんだよな？」

八劍の態度に不信感を覚えた劍帝は疑いをかけるような雰囲気醸し出しつつ八劍



に問い掛けた

八剣『ア：アザゼルとやらの場所からは……トンデモ無い力を感じたらから行って居らぬのじゃ……』

剣帝「ほほおー、そうかそうか……それからもう一つ質問なんだ……：ファムの変身道具回収は？」

剣帝がもう一つ質問を投げ掛けると八剣は剣帝の精神内で気まずそうな顔付きになり

剣帝「回収してないのな……ハア……」

八剣「スマヌ剣帝様！ すっかりアレの存在を忘れて居ったのじゃ！」

八剣は慌てた様子で剣帝の前に現れると必死に頭を下げ、剣帝はそれを怒るかと思いきや頭を撫で始め

剣帝「構わんさ、お前は俺が呼び出しを掛けてからの短時間で俺の行動を先読みし、俺の得となる事をしてくれたんだ、褒める道理はあるが怒る道理なんてないさ」

八剣「うっ……ぬっ……／＼／＼」

剣帝「さあ、そうと決まればまず先に駒王学園へと向かうとするか、戻れ八剣」

八剣は剣帝が撫で終わると嬉しそうな表情で剣帝の体内へと消え、剣帝は八剣が戻り終えると駒王学園へと向かった

く駒王学園：校門前く

剣帝（さて、着いたが……皆記憶が無いからな……どーするかなあ）

一誠「オイッ、アンタ、俺の通う高校に何の用だ？」

剣帝が困った様子で頭を掻いていると後ろから一誠が近づいて来て声を掛けて来た

剣帝（うつわあ、割と面倒なのに見付かった……どうするっかなあ……）

一誠「速く答えろよ、何の用だ？それにアンタからは大量の魔力がって、オイッ、待ちやがれ！」

剣帝は一誠が話している最中に突然と前方に向かって走り始めた

剣帝「面倒だから逃げる！」

一誠「逃がすかよ！ドライブ！脚に譲渡だ!!」

《Trans fer!!》

一誠の左腕に赤い籠手、ブーステッド・ギアが現れると光り輝くと一誠の走る速度が上がり剣帝に追い付いた

一誠「さあ、もう逃さねえぞ」

剣帝「ああ……何とも面倒だ……」

剣帝はハアと溜息をついてから一誠に向けて鬱陶しいという感情を込めた視線を送った

一誠「俺の大切な部長や朱野さん達には手出しさせやしねえ！」

劍帝「なら、死力を尽くして掛かって来い」

一誠「舐めやがって、なら受けてみやがれ！Dragon Shot!!」

劍帝は指をクイツと動かし一誠を挑発した。すると、一誠は劍帝に向かって紅い光弾を撃ち放った、すると劍帝の顔面に光弾は直撃した

一誠「よし！これで倒し……」

劍帝「どうした？この程度か？これがお前の思い描く龍の一撃か」

しかし、劍帝は光弾を生身で受けたにも関わらず平然とした顔で立ち続けていた、そして、その左手には一誠と同じブーステッド・ギアが展開されていてその籠手の先には一誠の光弾よりも濃い朱色の光弾が展開されていた

一誠「何なんだよ……それは……」

劍帝「これが本当の龍の一撃だ：Dragon Bless」

劍帝が光弾を一誠に向けてと一誠の光弾とは違い朱色の光弾からは放射状に光線が放たれた

劍帝「……………防がれたか」

リアス「大丈夫かしら？一誠」

一誠「あ、有難う御座います！部長!!」

劍帝の放った光線は小猫以外のオカルト研究部の部員達の全力の力で防がれてして  
いた

劍帝（相変わらず仲が宜しいですなぁ…）

木場「魔劍創造（ソードバース）！」

一誠の前方に出て来た木場が手に持っていた劍を地面に突き刺して劍帝に向けて劍を地面から出現させたが、その劍山は劍帝に当たる事はなく、劍帝に後ろから現れた八劍によって全て叩き折られた

木場「なっ!? 僕の魔劍創造（ソードバース）を素手で砕くだなんて！」

八劍「この程度の硬さ、劍帝様の物に比べれば豆腐に等しいわ！」

そう言うって両勢力が睨み合いをしつつづけていると校舎の方から数名の生徒が歩いてきた

ソーナ「リアス、一体何の騒ぎですか？」

リアス「丁度いいわソーナ、禍の団（カオスブリゲード）の勢力員と思しき者が攻めて来たわ！」

劍帝（うっわぁ…まあた面倒が濃くなった……）

劍帝がそう考えながら困っているとオカルト研究部との後ろから一人の男が歩いて来た

アザゼル「お前ら止めとけ、お前らじゃその男にや勝てねえよ」

リアス「あの男を知っているの？」

アザゼル「ああ、アイツは何十年も前にあった大戦時に急に現れて二天龍相手を遊びながらボコボコにした怪物だ」

後から現れたアザゼルが生徒会メンバーとオカルト研究部の部員全員を静止した

一誠「本当かよドライブ!？」

ドライブ『ああ、俺は白いのと共に掛かったが…ボロボロにされた』

リアス「何でそんな怪物が禍の団（カオスブリゲード）に…」

リアスやオカルト研究部の部員が困り果てていると剣帝が否定を始めた

剣帝「いやいや、俺等は彼処にや所属してないですよ？」

八剣「そうじゃ、誰が好きこのんであんな烏合の衆に参加するものか」

リアス「なっ、なら、何でこの学園で暴れていたのかしら？」

リアスが剣帝に向けて疑問を投げ掛けると剣帝は一誠を指差しながら答えた

剣帝「だって、一誠君が追い掛け回してきた挙句攻撃して来たんですもん」

一誠「あんなに魔力垂れ流した状態で校門前に立ってたら誰だって疑うぞ！」

剣帝の発言に対して一誠は怒りを交えたように怒鳴った

剣帝（まあ…それもそうかもなあ）

アザゼル「取り敢えず、アンタが何しに来たか聴かせてくれるか？」

劍帝「えっ、あっ、はい、良いですよ」

劍帝が考え事をしているとアザゼルの提案に多少驚きながらも劍帝はその提案を了承し、劍帝とアザゼル含めたオカルト研究部の部員と生徒会メンバーはオカルト研究部の部室へと歩いて行った

## 第五十三話「大紅龍ちゃん大勝利」

あらずじ

自分の関わりのあつた者達の記憶を全て消した剣帝、そして、自分が居た痕跡を完全に消すために駒王学園へと降り立った、その時を一誠に見られ後ろから追い掛けられてしまい、戦闘に入ったがやはり封印が解けた剣帝に勝てる訳も無くズタズタにされかけたところでアザゼルが間に入り剣帝はオカ研の部室へと向かった

く駒王学園：オカルト研究部部室く

アザゼル「で、何で俺以外がアンタの事忘れてんだ？」

剣帝「理由は簡単です。単に俺がそろそろこの辺りから去るから全員の記憶を消させたいんです」

剣帝とアザゼルは机を挟んでソファに座り、アザゼル以外は警戒するように剣帝から少し離れた位置から剣帝を睨み付けている

八剣《周りの連中の視線が不愉快じゃ、剣帝様を睨みよって…殺してくる》

剣帝《止めろ八剣、それを俺は望まない》

八剣が周りに居るメンバー達に斬りかかろうとするが剣帝に静止された事により大人しく止まった

アザゼル「さて：早速だが質問しても良いか？」

剣帝「ええ、答えられる範囲なら」

アザゼル「なら、単刀直入に聴くぜ？お前は何者だ？」

アザゼルが真剣な顔付きで剣帝に質問をすると剣帝の顔付きがヘラヘラとした物から真面目な物に代わった

剣帝「お答え出来ません」

アザゼル「なら、アンタが本来住んでいたのは何処だ？」

剣帝「お答え出来ません」

剣帝が質問に黙秘権を行使していると徐々に場の空気が悪くなって行き

アザゼル「なら、アンタの本当の力はどれ位だ？」

剣帝「お答え出来ません」

一誠「オイッ、テメエ！さつきから答えられないばかり言ってるじゃ……」

剣帝の黙秘に対して痺れを切らした一誠が剣帝に向けて文句を言った次の瞬間、剣帝の体から八剣が現れ一誠の近くに移動し刀を振り、一誠の首を少し切った

八剣「剣帝様の発言に文句を飛ばすで無いわ、小童風情が」



劍帝「八劍、止めろ」

劍帝が八劍に対して睨むような目付きで注意をした。すると、八劍は苛々しながらも刀を消し劍帝の側に戻った

アザゼル「なら、最後の質問だ、何で俺以外の記憶を消した？」

劍帝「それにはお答えしましょう、理由は簡単です。俺がそろそろこの街から居なくなるので皆には俺の存在を忘れて貰うつもりでした」

アザゼル「つまり、って事は予定が変わったのか」

劍帝はアザゼルの質問に対して簡単な答えを言い、そのまま言葉続けた

劍帝「ええ、予定が狂ったんですよ。貴方の所に居る大紅龍のお陰でね」

アザゼル「……なるほどな……」

劍帝がアザゼルを指差しながら問に対しての答えを言うと、アザゼルは納得した面持ちになった

一誠「大紅龍ってなんだよ、アザゼル」

アザゼル「聞くな！というか、その名前を出すな！出したりしたら」

??「呼びましたか？アザゼル」

アザゼルが怯えた様に一誠に文句を言っているとアザゼルの真後ろに真紅の髪をし

た綺麗な女性が現れた

アザゼル「だ…大紅龍…」

大紅龍「はい、何でしょうか？アザゼル」

アザゼルは真紅の髪の女性、大紅龍の声に反応してか後ろを振り向くと口を引きつらせながら大紅龍を見た、そして、アザゼルに見られると大紅龍は嬉しそうな表情でアザゼルを見つめていた

劍帝「いやあ、仲睦まじい夫婦ですねぇ？アザゼルさん」

アザゼル「テメエそれは嫌味か？」

劍帝「いえいえー、単純なまでの見た感想ですよ？」

劍帝はニヤニヤとした表情でアザゼルをおちよくる様に喋り、アザゼルもそれに対して怒りを顕にしたような表情で文句を言った

劍帝「なあ、八劍、天翔、あの二人仲睦まじい夫婦だよな？」

八劍「そうじゃなあ、長年連れ添った夫婦の様じゃ」

天翔「確かにそれで御座るな、あれ程仲睦まじい夫婦はそうそう居ないと思いますぞ」

劍帝が自分の後ろに居る八劍と天翔を見ながら意見を聞くと二人も劍帝の意見に便乗してニヤニヤしながら意見を言った

アザゼル「テメエ等なあ…おちよくる為に残したんならそう言いやがれ！」

劍帝「いやいや、残したのは真面目にわざとじゃない、てか、残された理由はその大紅龍ちゃんが居るからですって、なあ？八劍」

八劍「まあのお、そこに座って居るアザゼルとやらに手出しをすれば妾が殺されかねんからの」

劍帝と八劍は困り果てたような表情を浮かべ手を頭の横で上向きに手を開きながら首を横に振った

アザゼル「マジかよ…」

アザゼルが再度後ろを振り向くとまた大紅龍は嬉しそうに笑顔のアザゼルに向けている

劍帝「ああ、そういえば俺がここに来た理由は二つあります。一つはアザゼルさん、貴方の記憶を消す為…でしたが。どうにも無理そうなので、もう一つの方だけやりますかね」

アザゼル「まあ、俺の記憶が消せない理由はもうわかった、それでもう一つの目的ってのは何なんだ？」

アザゼルがまた劍帝に向けて疑問を投げ掛けると劍帝はソーナを指差して

劍帝「ソーナ様、俺は貴女の持っている仮面ライダーの変身道具の回収が目的です」

ソーナ「嫌です！これは邪神様から頂いた大切な品！絶対に渡しません！」

ソーナは剣帝の発言に驚きを顔にしてから部屋の鏡に自分の体とカードバインダーをかざして白い騎士のような姿に変身した

剣帝「そうなると思つてましたよ……なので」

ソーナが変身した事を確認すると剣帝もカードバインダーを取り出し、剣帝は緑の重戦士のような姿に変身した

剣帝「強奪させて頂きます」

ソーナ「渡しはしません！」

ソーナと剣帝は同時に別々の鏡や窓から鏡世界へと突入し、互いにソードベントとシュートベントを発動して交戦状態に入った

## 第五十四話「鏡の中の大戦闘」

（駒王学園：ミラーワールド）

剣帝とソーナは睨み合いを続けるように武器を構えたまま膠着していた、が、それに耐えられなかったのか剣帝が大砲のトリガーに指を掛け

剣帝「スミマセンが急いでいるのでね……速攻で潰させていただきます」

ソーナ「お姉様の従者だったそうですが。貴方の様な得体の知れない男性に私は負けません」

剣帝とソーナは互いに横方向に向かって走り始め、剣帝は手に持っている大砲の重さを感じさせない程軽快な足取りで走ってソーナと並走し続けながら砲弾を発射していた

ソーナ（何なの……この男は何故あんな武装をしていながら私の互角の速度で走れるの）

剣帝「……面倒だなあ」

剣帝は一旦走ることを辞めて止まり首を左右に傾け、コキコキと鳴らした、そして、その後にまた動き始めたが、今度はさっきまでの数段速く動き始めた

ソーナ「えっ？な、何が起きて、キヤア！」

劍帝「どうしました？鈍いですよ」

劍帝はソーナを背後を取りつつ一切近付く事無く遠距離からひたすらに手に持つて  
いる大砲でソーナを撃ち続ける

ソーナ「私は…負けれないんです!!」

ソーナがカードバックルから白鳥の絵が描かれたカードを取り出すと腰に付けた剣  
の様な物の柄を引つ張り鏢の部分を開き、そこにカードを入れて鏢を閉じた

《アドベント》

音声  
が鳴り響くと窓を突き破つてカードに描かれていた機械的な姿の白鳥が飛び込  
んで来た

劍帝「ふうーん、そう来ますか」

ソーナ「これで貴方を倒しま…え？」

ソーナが白鳥を一旦見てから劍帝の方を向き直ると劍帝はカードバックルに描かれ  
ている牛の模様と同じ模様が描かれたカードを取り出し、それを腰に付けていた小銃の  
カートリッジを開きそこに入れ、カートリッジを閉じた

《ファイナルベント》

音声  
が鳴り響くと今度は劍帝の目の前に機械的な姿の牛のような頭部をした緑色の

巨人が現れた

剣帝「これで終わりです」

剣帝が緑色の巨人の背部にある窪みに持っている小銃を差し込むと緑色の巨人は胸部を開き、両腕を前に向け更に脚部から2本の大砲が現れ頭部にも一本の大砲の様な物が現れた

剣帝「エンド・オブ・ワールド」

剣帝が小銃のトリガーを引くと次の瞬間、緑色の巨人の脚部からはレーザー、胸部からは大量のミサイル、頭部からもレーザー、右手からはガトリング弾、左手からは先程まで剣帝が放っていたものと同じ砲弾が連射された

ソーナ「キャアアア！」

剣帝「フィー」

突如発動したファイナルベントに対してソーナは慌てたのか動作が遅れてしまい、ほぼ全弾命中してしまった

剣帝「これで理解出来ましたか？俺と貴方では力の差と言うものが有るんです」

ソーナ「そうだとっても…私は、キャッ！」

剣帝「グダグダ言っでないで戻りますよ」

剣帝はソーナを軽々と持ち上げ脇に抱えながらミラーワールドから出て来た

く駒王学園：オカルト研究部の部屋く

剣帝「これで俺の勝ちですね」

リアス「ソーナ！」

剣帝がミラーワールドから帰ってくるると同時に変身が解けたソーナを床に寝かせる  
とリアスが急いで駆け寄って来た

剣帝「さてと、これは頂いていきますね……離して下さいませんか？」

リアス「嫌よ、これはソーナが大切にしている物、貴方なんかには」

剣帝「離せよ」

剣帝がソーナが腰に付けている変身ベルトとカードバインダーを手に掴み自分の方  
へ引き戻そうとしているとリアスがその手を横から掴み持ち去られる事を防ごうとし  
ていた、だが、その行為が剣帝の怒りを誘ってしまい、怒気だけで部屋の中か振動し窓  
などのガラスが一齐に割れ始めた

リアス「嫌よ！絶対」

剣帝「離せって言ってるんだろがよお」

剣帝はイライラしながら掴まれていない右手に魔力を集中させて焔の球を創り出し、  
それに力を注ぎながらある程度の大ききさで留めていた

剣帝「離せって言ってるんだよなあ、離せの意味、D o y o u u n d e r s t a



nd?」

劍帝は右手に溜め込んだ炎球を下に落とそうと手を傾け始めた、がその手は突如何者かに掴まれた

?? 「窃盗の現行犯で逮捕だ」

劍帝「誰だ…お前」

劍帝は怒りを込めたような目で腕を掴んだ相手を見据えていた

ドギー「私か…私ほドギー・クルーガー。神王警備部門最高管理者だ」

劍帝「神王…夜鴉様の配下か」

劍帝は神王という単語に反応して怒りを抑え始めた

ドギー「その変身用アイテムは早めに離した方が良いぞ。そろそろ時間になるからな」

劍帝「……了解」

劍帝（時間って何の事だろうか）

劍帝は疑問を抱きつつ渋々ソーナの腰を付けられていた変身道具一式から手を離した

ドギー「それは神の呪いが付いていてな。所有者以外が長時間手にしていると呪われてそこに閉じ込められると言う一品だから危なかったな。カードにならなくて良かった

た良かった」

劍帝「夜鴉様、なんつう面倒な事を」

劍帝はブンブンと手を払いながら手を引いた、その間もリアス等のオカ研メンバーは劍帝を睨んでいた

ドギー「そして現行犯逮捕だ。さあ行くぞ」

劍帝「……………了解」

劍帝は手を引かれながらドギーの後ろを付いて行った  
空間に手が現れてスーツ姿の男性が現れた

ドギー「おや？ 荻野警部どうかしたのか？」

荻野「いえ、あの方がお呼びだから呼びに来ただけです」

劍帝「……………鉄人だアアア」

劍帝はスーツ姿の男、荻野警部を見て多少叫んだ

荻野「鉄人か……………久しく呼ばれてなかったな」

劍帝「あつ、スミマセン」

劍帝は荻野警部に近づき頭を下げた

荻野「いや、良いんだがまあ俺より鉄人が居るから言われてなかったただけなんだろうけどな」

剣帝「そうなんですかー……それで俺はどこに連れて行かれるんですか？」

荻野「我々の主の所に決まってるだろう？」

ドギー「さあ行くぞ」

剣帝「了解しました。行くぞ、八剣」

八剣「了解じゃ、そういうえば忘れるところじゃったな」

八剣が地面に何かしらの小瓶を投げると其処から煙が発生し、反射的に反応した大紅龍と大紅龍が口を塞いだアザゼル以外をその煙を吸い倒れた

剣帝「記憶消しの煙、残ってたのか」

八剣「まあのお、さて、行くのじやろう」

八剣はそう言って剣帝の体内に戻り剣帝は八剣が体内に戻った事を確認すると二人の後ろについて歩いて行った

## 第五十五話 「帝王の帰還」

（神域）

剣帝「それで、俺はこれからどうなるんですか？」

ドギー「審判の間と呼ばれる場所だ、それ以上の事は俺も知らん」

剣帝「審判の間……つまり、俺は裁判に掛けられる訳ですか」

ドギー「そう言う事だな」

剣帝「ふむ……俺はどんな罪になりますかね？」

剣帝はゆつくりとドギーの話を聞きながら前方に伸びている廊下を歩き進めていく

ドギー「さあな。だが最悪極刑も考えておくといい」

剣帝「極刑……あの娘を残しては死ねない……」

剣帝はドギーに極刑と言われた瞬間顔を真っ青にしてから暗くした

ドギー「まあ裁判長の気分一つで決まってしまうからな」

剣帝「そうなんですか……」

ドギー「ああ、主の食べたパンの屑を拾ったと言うだけで極刑になったり主に怪我を負わせたのに無罪放免とかな」

劍帝「ま、マジですか……」

劍帝は困惑した様子を隠せずにいる

ドギー「何がアウトで何がセーフなのかは俺達も解らん」

劍帝「そ、そうなんですか……あつ、そろそろ着く」

ドギー「……グットラック」

劍帝「……はい」

劍帝が暗い顔のまますすぐ進むとそこには大きな裁判所が広がっていた

???「やあやあ。初めまして犯罪者君」

劍帝「……始めまして」

クロウ「私はクロウと呼ばれてる公平な裁判長だよ」

夜鴉と瓜二つの男が高い位置に椅子にふんぞり返っていた

劍帝「あつ……はい……」

劍帝はクロウの様子を見ながら周りの様子を確認した

周囲は壁と天井、床等全て真っ白で構成させた裁判所が創られていた

劍帝「それで、俺の罪はどうなりますかね？」

クロウ「うんうんちよつと待ってね」

劍帝「了解しました」

劍帝はゆつくりと罪の宣告を待っている

劍帝（さて、どうなるかな）

クロウ「もしもし、うん俺俺。そうそう息子のたかしだよ。いや、ちよつと仕事でへましちやつてさあ」

劍帝（ん？誰への電話だろうか）

クロウ「そうそう。至急500万必要なんだよ。かあちゃん息子を助けると思つて振り込んでくれよ」

劍帝（振り込め詐欺!?!）

劍帝はこっそりとクロウの電話が終わる寸前に心の中でツツコミを入れていた

クロウ「うん、うん。ありがとうかあちゃん」

劍帝「終わったみたいですね」

クロウ「よし、詐欺成功したし無罪で！」

劍帝「えつ、あつ、有難う、御座います」

クロウ「いや、成功しなかつたら極刑のつもりだったけどまあ成功したし大丈夫だよ」

劍帝「怖ええ!!あつぶな!それじゃ、俺は俺が元居るべき家に帰ります。宜しいですよね?」

クロウ「ん、一応主に連絡は入れてるから此処で左に曲がつて一光年先に戻れる場所があるから帰った帰った。あ、出てから決して振り返ったり自力でドアを開けたりしたら駄目だからね」

剣帝「了解しました」

クロウの話聞いた剣帝はもと来た道へクルリと体を反転させて歩き始めた

剣帝「道が長い！走ったら一時間も要らない可能性あるけど」

剣帝は屈伸や前屈等の準備運動を始めた

クロウ「早く行ってくれ。私はこれから女の子をナンパしたり色々やらないといけないことがあるんだ」

剣帝「あつ、はい！」

剣帝はクラウチングスタートで走り出し、すぐに姿が見えなくなった

クロウ「……………これで良いんだよね。主様」

夜鴉「あはは。お前にしてはよくやったよじゃ、俺はゴールに居なきやだからバイバイ」

剣帝（ようやく帰れる！あの娘の元へ！俺の愛しい愛する嫁の、妹紅の元へ帰れる！）

剣帝はルンルン気分で全速力で廊下を走り抜けて行った

夜鴉「おつせーよ、次からは三十分で来い」

劍帝「スミマセン、愛する嫁に久し振りに和える気分だったのでつい速度に気がいかずに遅れました」

夜鴉「仕方無いな。んじゃ、入れよ」

目の前の扉を開けて劍帝を押し込んだ

劍帝「はいなつて、んぎゃっ」

劍帝は押し込まれると少しの痛みを感じつつも笑顔で入った

夜鴉「クツクツクツ。お前の嫁達の居る家に帰れよ。あつはつはつは！」

劍帝（ん？嫁達、複数形……ってまさか!?!）

劍帝は一つの疑惑を抱きつつ自分が元々住んでいる本来の自宅へと帰って行った

く劍帝の自宅：劍帝の部屋く

劍帝「……ただいま……」

劍帝は空間に空いた穴からこっそりと自分の部屋の中に入り込んだ

劍帝「えーつとおお……誰も……居な」

??「お帰りなさいませ、劍帝御兄様」

劍帝「シィーッ、静かにしろ劍狼」

劍帝がコソコソと部屋の中に入って行くと、突然劍帝の傍らに紫色の髪色をした長髪

の人狼の少女、妖悪劍狼が現れた



劍狼「静かに……ですか。何故ですか？」

劍帝「いやー、ちよつと妹紅に勘付かれると……さ……」

劍狼「もう手遅れですわね」

劍帝が屈んで劍狼に命令をしていると劍帝が現れた穴が閉じ、穴が空いていた位置に白髪長髪の写真の少女、藤原妹紅が立っていた

妹紅「わたしに勘付かれると……何か問題でもあるのか？ 劍帝」

劍帝「あつ……いや……えつと……ただいま」

妹紅「お帰りなさい、劍帝」

劍帝「……………」

妹紅「……………」

劍帝が背中に大量の冷汗を掻きながら後ろを振り返ると妹紅はニツコリとした恐ろしい程の笑顔を浮かべていた、そして、二人の間にヒヤリとした空気が流れていく

劍帝「……………」

妹紅「い？」

劍帝「ゴメンナサイ、許して下さい！」

妹紅「何を許して欲しいんだ？ 劍帝」

劍帝は屈んだ体制が飛び上がり必死に土下座をして妹紅に謝り始めたが、妹紅はニコ

ニコとした笑顔を浮かべ続けた

劍帝「あつ……えつと……」

妹紅「……はあ、取り敢えずリビングに来てくれるか？ 劍帝」

劍帝「はい……」

劍帝は妹紅に命令されるとモゾリと動いて立ち上がってゆつくりと妹紅の後ろに付いて行き、木造の廊下を軋ませながらリビングに歩いて行った、そして、リビングに着くとそこには黒髪のツイントールの見覚えのある後ろ姿があった

劍帝「……やっぱり」

セラ「あー、やつと来たんだね、劍帝君」

劍帝「何でここに貴方が居るんですか？ セラフオル様」

セラ「えーつとねえ、劍帝君のお友達の様あの人に連れて来て貰ったの」

劍帝「……ああ、あの方の言葉の意味はこういう事か」

劍帝は夜鴉が言っていた言葉を思い出しながら頭痛に悩んでいた

劍帝「それで、何でこつちに来たんです？ セラフオル様」

セラ「えっ？ 何でって劍帝君から離れたくなかったから」

劍帝「……見ての通り俺には奥さんが……」

劍帝はセラフオルーに喋りかけている途中で黙り込み、顔を俯け、リビングから出て

いこうとした

セラ「どこに行くの？ 剣帝君」

剣帝「ちよつと、夜風に当たってきます」

剣帝は暗い顔のままリビングから出て行った、そして、それをセラフオルーが引き留めようと手を伸ばすが、剣帝がリビングから出て行った瞬間に剣帝は家の中から消えていた

セラ「あ、あれ？ 剣帝君は？」

妹紅「剣帝なら外に行つたわ……………」

剣帝が消えた後、妹紅は俯き、セラフオルーは頭に疑問符を浮かべていた

く幻想郷：迷いの竹林く

剣帝「ゴメンな、妹紅……」

剣帝は月が夜空に輝く竹林にある家の縁側に座り込み、涙を流していた

## 第五十六話 「仲睦まじき不死夫婦」

く幻想郷：迷いの竹林く

劍帝「はあ……」

黑影「ヒヒヤヒヤ、どうしたあ？ そんなに落ち込んだりしてよお」

劍帝「……お前なら理由も原因も分かっているだろうが」

黑影「知らねえなあー？」

劍帝が近くの竹にもたれ掛かりつつ下を俯きながら溜息を付いていると劍帝の影から黑影の音が聞こえてきた、そして、劍帝は黑影の言葉に苛立ちを見せている

劍帝「テメエなあ……んっ？」

セラ「劍帝くさん、何処に……あつ、居た！」

劍帝「………何の御用です？ セラフォル様」

セラ「劍帝君が出て行つてから十分以上経つたのに戻つて来ないから迎えに来たの、

帰ろ？ 劍帝君」

劍帝「………いえ、もう少し一人になりたいので俺はまだ帰りません」

セラ「えー！ 何でそんな事言うのく？」

劍帝「いや…何だか気分が落ち込んでいますので…」

セラ「なら、気分転換にワタシと話そう？ねっ？」

劍帝「そういう気分でもないのです…失礼します」

セラ「えっ、あっ、ちよつと、待って、キャツ！」

竹にもたれ掛かって居るとセラフオルーが竹林の中を歩いてやってきて、劍帝を自宅へ連れ戻そうとしたが、劍帝は上空高くにたった一回のジャンプで飛び上がり竹林から出て行った

セラ「何…あの身体能力…」

妹紅「何って、アレが劍帝本来の身体能力だ」

セラ「嘘っ！劍帝君がワタシのクイーンをやつた時はあんな事出来なかつたもん！」

妹紅「そりゃあそうだ、劍帝はそっちの世界に行つた時は身体能力とかガタ落ちだつたらうしな」

セラフオルーが劍帝の飛び抜けた身体能力に驚いていると後ろから妹紅が現れ、淡々と劍帝について話始めた、そんな妹紅の話を聴き続けるにつれてセラフオルーの表情は不貞腐れていき

セラ「随分と劍帝君の事に詳しいんだね」

妹紅「まあ、仮にも剣帝の奥さんだからな」

セラ「わ、ワタシもお嫁さんになるもん！向こうの世界でも何回も好きって言ったし！告白もしてくれたもん！」

妹紅「その時の剣帝の髪色は何色だった？その告白の言葉はどんな言葉だった？」

セラ「えつと…髪色はね…：たしか半分黒色だったかな、それで告白の言葉は…：月が綺麗ですねって…」

妹紅「…：ああ、それは剣帝ではなく剣帝の中に居る黒影が言ってたな」

セラ「何でそんな事が分かるの!？」

妹紅「髪が半分黒色って事は黒影が表に出てきている証拠だし、剣帝の告白の言葉はその言葉とは全く違ったから」

セラ「むう〜！」

妹紅がセラフォルーの聞いた告白の言葉や剣帝の姿を聞くだけで剣帝の状態をはつきりと言いついで、更に、剣帝に告白されたと言う事すらも否定されてセラフォルーは涙目になりながら膨れていた

「その頃の剣帝：謎の森」

剣帝「やつちやつたなあ…」

黒影「ヒヒヤヒヤ、そうだなあ、やつちまつたなあ、まさかセラ相手に逃げたりして

よお」

劍帝「…まつ、やっちやった事は仕方ないし…今居る場所が丁度森だから、やるべき事を片付ける、かつ！」

黒影「うげっ！」

劍帝は天高くジャンプしてから迷いの竹林から少し離れた位置にある森の中に降り立っていた、そして、劍帝は自分の影の中でうだうだ言ってくる黒影に狙いを定めると自分の影に手をつ突っ込み黒影を引っ張り出した

劍帝「テメエのせいで色々面倒な事が起きてんだよ、どうしてくれんだ」

黒影「グフツ…だがよお、元はと言えばお前さんが異世界に行つて、セラにお節介焼いたのが原因じゃあねえのかあ？」

劍帝「まあ、確かにそうだ…だが、セラフオール様とそういう関係を築いたのはテメエだろう？」

黒影「うるせえ…なあ、俺様は単に、お前が妹紅ちゃんから離れて性欲を溜め込んで、それがウゼエから発散してやった、ただだろうが！」

劍帝は引つ張り出した黒影を近くの木に押し付けると、そのまま首を木に押さえ付け、そして、二人はそのまま喋り合う

劍帝「まあ、確かに溜まっている自覚はあった、だが、精々一年程度じゃあ、俺も抑

える事は可能だ」

黒影「そうだろうなあ、テメエは自分の心や感情をある程度抑えたりする事が出来るもんなあ、でも、それはあくまでも表面上だ、心理の部分に居たりする俺からしたら普通に見えるし、ウザかったんだよ！」

剣帝「あーそーかい……まあ、起きちまつてるものは仕方ないし、あんまり遅過ぎるとまづい気もするから帰るとするか」

黒影「ガハツ、ガハツ……ふいー、やつと自由だ」

剣帝「ほれ、帰るぞ」

黒影「あいーあい」

剣帝は黒影が自分の影に溶けて戻ると真正面の空間に黒い穴のようなものを開き、そこに入って行った

く 剣帝の自宅：剣帝の部屋く

剣帝「今度こそ……誰も居ないな」

剣帝は先程自分の目の前に開いた黒い穴のようなものから首だけ出すと部屋の中を確認し、誰も居ない事を確認すると安心して自分の部屋の中に入った

剣帝「さて……今日は疲れたし寝るかな」

黒影「そんじゃ、俺様も俺様の部屋に帰るとするわ、そんじゃな」



劍帝「おう、お休み」

黒影「お休みーっと」

部屋に入り劍帝がベットで横になると黒影はまた実体化して、劍帝が開いていた黒い穴のようなものに入って部屋から出て行った

劍帝「……………さて、寝るか」

劍帝は、掛け布団に包まると死んだように眠り始めていた

く劍帝が寝てから数分後く

劍帝の部屋の扉が静かに開き、何者かが部屋の中に侵入して、劍帝の寝ているベットに潜りこんだ

劍帝「んんっ……………？」

妹紅「劍帝……………」

劍帝「妹紅か…どうした？俺みたいな浮気者の布団に潜り込んだりして」

妹紅「劍帝は浮気なんてしてないでしょう？」

劍帝「……………」

妹紅「だって、劍帝は向こうの世界でもずっと肌身離さずわたしの写真を持っていてくれたでしょう？」

劍帝「……………ああ」

妹紅「それに、劍帝の手の甲に刻まれている証が消えて無いし、それにセラフオルさんを誑かしたのは黒影でしょ？」

妹紅は劍帝の右手を布団の中から引つ張り出すと手の甲に刻まれている尻尾を噛もうとしている翼の生えた蛇とそれに囲まれる様にある六芒星その中にある炎の紋様をみて安心した顔を浮かべた

劍帝「……………」

妹紅「劍帝はいつも言ってるものね、沈黙は是なり、つまり、否定してないのよね」

劍帝「だが、俺の身体が浮気じみたことをしていたのは紛れもない事実だ」

妹紅「大丈夫、劍帝の心は、劍帝自身はそんな事して無いってわたしは知ってるもの」

劍帝「俺を…許してくれるのか？」

妹紅「許す許さないじゃなくて、わたしは元々から怒ってないわ、だから、泣かないで？ 劍帝」

劍帝「ああ…すまない…」

劍帝は手で自分の顔を覆いながら涙を流し始めていた、そして、劍帝が涙を流すと同時に劍帝の体に異変が起き、劍帝の側頭部に左右対称に龍の角が生えた

劍帝（ヤバイ！安心したせいで龍の部分が…今の季節は秋か！ちい、発情期真っ只

中じゃねえか！)

劍帝は涙を流している最中に思考をめぐらせ、カレンダーを確認した、すると、そこには10月と大きく書かれていた

妹紅「どうしたの？ 劍帝、目が怖いわよ？」

劍帝「いや…あの…えつと…」

妹紅「もしかして、発情期？」

劍帝「えつと…うん」

妹紅「そつか…：…良いわよ、わたしで発散しても…」

劍帝「いや、でも…」

妹紅「大丈夫、わたしなら平気だから、ね？」

劍帝「ううつ、ああ、ガアア!!」

劍帝は妹紅に誘われると我慢の限界が来たのか妹紅を襲い始め、自分の内に渦巻く獣欲のままに妹紅と体を重ね、交わった

へそして、忘れられていたのか天翔が二匹の犬を連れて劍帝の自宅に帰ってきたは劍帝が妹紅と交わり始めてから三時間経過した後だったそうだ

## 第五十七話 「小さき王とその秘密」

「劍帝が自分の本来の家に帰った翌日」

劍帝「んう……ふあーあ……昨日はやり過ぎ……た……な……」

劍帝が目を覚ますと自分の体に違和感を覚えた、それもその筈、劍帝の姿が昨日とは違つて赤髪の身長140程の子供の姿になっているからだ

劍帝「……………ヤベエなあ」

妹紅「んんっ……………どうしたの？ 劍帝」

劍帝「ああ、お早う妹紅、今晚はどうやら新月みたいだ」

妹紅「……………みたいね」

劍帝が自分の体の変化に困っていると裸の姿に掛け布団を体に被つた妹紅も目を覚まし、劍帝の姿を見た、すると、妹紅はすぐに劍帝の状態と原因を把握した

劍帝「……………取り敢えず、妹紅……悪いんだが血を……んっ？」

セラ「おっはよー！ 劍帝……君……………アレ？ 劍帝君は？」

劍帝「……………朝っぱらからお元氣ですね。セラフォル様」

セラ「えーっとお……君は誰？」

劍帝が自分の口のの中にある一對の牙を鋭く輝かせながら妹紅に噛み付こうとしていると扉が勢い良く開かれてセラフオルーが入って来た

劍帝「俺は劍帝ですよ」

セラ「へえ、君も劍帝って名前なんだね、ところで、君と同じ名前で君よりもずっと身長の高い赤髪の男の人を知らない？」

劍帝「ですから、俺がその劍帝です。今日は新月ですので元々が人間である俺は新月の時だけは力が著しく弱くなるんです」

セラ「それって……本当？」

劍帝「本当です」

セラフオルーは子供になった劍帝に疑いの目を向けつつ本当に劍帝か確認しようと劍帝に近付いてくる

セラ「何だか嘘っぽい」

劍帝「なら、本来の姿に戻るのだから少々お待ちを……ああ、目を逸らして下さいますか？」

セラ「えっ？何で？」

劍帝「見られていると……少し……」

劍帝はセラフオルーから目を逸らして横に居る妹紅の首筋を見ている

セラ「少し、何？」

劍帝「いいから向こうを見ていてください！」

セラ「仕方無いなあ……」

セラフォルーは渋々劍帝達の居る方向から顔を背けて別の方向を向く、フリをしながら劍帝達の居る方向をコツソリと見ていた

劍帝「妹紅…悪いが」

妹紅「大丈夫だ、速くしろ」

劍帝「ああ、それじゃあちよいと失礼をして」

妹紅「んっ……」

セラフォルーが目を背けているふりをし始めるとすぐに劍帝は妹紅の首に顔を近づけて妹紅の血を吸い始めた、すると、劍帝の身体が徐々に大人の姿に戻っていく

セラ「えっ!?!何をしてるの? 劍帝君」

劍帝「……………俺は目を逸らして下さりますかと言いましたよね?」

セラ「う……………だつて、気になるんだもん!」

劍帝「はあ、見られたのなら仕方が無い……………俺は妹紅の血を飲ませて貰ってたんですよ」

セラ「へ、へえ、そうなんだ……………それってワタシの血じゃ駄目なの?」

劍帝「駄目ではないと思います」

セラ「それじゃあ、はい、吸ってみて？」

セラフォルーは劍帝が妹紅の血を飲んでいたと聞くとセラフォルーは劍帝に自分の首筋を見せた、が、劍帝は興味が無さそうな顔をしている

セラ「……………何で吸おうとしないの？」

劍帝「いや、俺は妹紅の血が吸いたいのでセラ様の血は別に…」

セラ「何でわたしは別にで妹紅ちゃんのは吸いたくなるの!？」

劍帝「だって、妹紅は俺の奥さんですし。まず根本的に俺にとつて口から吸う吸血って結婚のキスとあんまり変わりませんからそんなにホイホイとは出来ませんし」

劍帝が淡々とセラフォルーから血を吸わない理由を話すとセラフォルーの眼には涙が溢れ始め

セラ「劍帝君…こつちに来てからわたしに優しくしてくれなくなつた……………あつちではあんなにたくさん襲つてきたのに」

劍帝「えーつとお……………俺言いませんでしたっけ？それは俺ではなく」

黒影「俺様がやつてた事だぜ」

劍帝が喋っているとベッドに座っている劍帝の影がザワザワと蠢き、その影から劍帝にそっくりの姿で黒髪で右目から体全体に掛けて入れ墨のような黒い文様が入った男、

黒影が出て来た

セラ「剣帝君が……二人？」

黒影「あり？そこだけ記憶が飛んでんのか？それとも自分に有利なように改変でもされてんのかねえ？」

剣帝「その辺りはどうとも言えないな……取り敢えずセラ様の相手宜しくな、黒」

黒影「あーいあい、好きにやらせて貰うとするわ」

黒影はセラフォルーに近付くと片腕で軽々とセラフォルーを持ち上げて剣帝の寝室から出て行った

妹紅「剣帝、さっきのはちよつと冷たかったんじやないの？」

剣帝「そうかも知れんな……だが、妹紅も目の前で浮気紛いの事はされたく無いだろう？」

妹紅「まあ、そうだけど……それでもちよつと可哀想かなって思ったわ」

剣帝「まあ、本来こつちに連れてくる気はなかったしなあ……まっ、元々セラ様の相手は黒影がやってたし、多分どうにかなるだろう」

剣帝が妹紅と並んで座って話していると寝室の扉がノックされた

剣帝「誰だ？」

天翔「拙者で御座る、殿」



劍帝「なんだ、天翔か、何の用だ？」

天翔「殿がこちらの世界で飼われて居た二匹の犬を連れて参りましたので、処遇を聞きに参りました」

劍帝「だからお前だけ遅かったのか……んー、そうだなあ、犬菜は劍狼の所に連れて行け、んで、狗丸は後で俺が店に居るだろう仁君の所に連れて行くから待ってろ」

天翔「御意」

劍帝が命令をすると扉の前にあつた天翔の気配が消え、狗丸の気配だけ残つた

劍帝「という訳で、スマン妹紅、ちよつと行つてくる」

妹紅「ワタシは平気だから速く行つて来てね？」

劍帝「おうさ、行つて来ます」

妹紅「んっ…行つてらっしゃい」

劍帝は妹紅に別れを告げてからキスをして、その後服を瞬時に着て、寢室から出て部屋の扉の前に座つていた狗丸を拾い上げると劍帝は家から出て行つた

く幻想郷：迷いの竹林入り口く

劍帝が迷いの竹林を歩いて出てくると劍帝の目の前に何か白い物と黒い物が跪いた

劍帝「よお、ルー、鼬」

ルー「こんにちは、劍帝様」

馳「御主人がコチラに来られるのは約一週間ぶりですね」

劍帝「一々数えるなよ」

馳「申し訳ありませんが、御主人に会えない期間を数えないと気が立ってしまいました」

ルー「イヤねえ、万年発情期の陰獣は」

馳「何か言いましたか？白蜥蜴」

劍帝の目の前に跪いたのは髪は黒い長髪で白い短めの和服を身に纏った女性、馳と髪は白髪短髪で体を白いビキニのようにも見える鎧に包んだ女性、ルーだった、そして、その二人は劍帝の目の前に跪いている間に互いの視線をぶつけあわせて今にも喧嘩を始めそうな気配を漂わせる

ルー「あーら、この獣畜生は耳まで遠くなつたのかしらねえ？何なら今すぐこのアタシが副店長の座を全部請け負ってあげましょうか？」

馳「いえ、請け負っていただかなくて結構です。第一貴女のような白い蜥蜴に任せては店の経営に関わってしまいます」

ルー「何ですって？」

馳「何か？」

二人は劍帝に跪いた体制から立ち上がると互いに体ごと向き合い視線をぶつけあい

ながら殺気を放ち始め、二人の間からはバチバチと言う音が聞こえてきそうだ

ルー「やっぱり一回龍と獣の格の違いつてのを思い知らせてあげないとわかんないわよね」

鼬「私は獣ではなく妖怪だと何度言えば理解するのでしょうか？この蜥蜴は記憶する力すらないのでしょうか」

ルー「あゝあゝ!?!消し炭にするわよこのピーー」

鼬「やれるものならやってみて下さいな、この○○○○!」

ルー「良い度胸じゃない、ふっ飛ばしてあげるわ!」

鼬「こちらこそバラバラに切り裂いてあげますよ!」

剣帝「両方止めい!」

ルーが両手を合わせてから離すとそこに紅い雷が走り、それと同時に鼬が両腕を振ると鼬の腕から暴風が発生し、その暴風が鼬の腕を包み込んだ、そして、二人が互いの腕をぶつけ合おうとした瞬間に二人から放たれている数倍の殺気が剣帝の身体から放たれて剣帝が二人の腕を掴んで喧嘩を止めた

ルー&鼬『剣帝（御主人）様……』

剣帝「全く……お前等は何時もうそくだよな、何なら今すぐお前等の役職を解雇にしてやろうか?」

馳「お、お辞め下さい！」

ルー「ご、ゴメンナサイ！」

劍帝「分かればいいんだ、そういやルーよ」

ルー「な、何かしら？ 劍帝様」

劍帝「仁君は今は何処に居る？」

ルー「じ、仁君なら多分倉庫だと思っわ」

劍帝「ふむ、有難うな」

劍帝が二人に怒号を飛ばして怒ると二人は震え始めて劍帝に必死に謝った、すると、劍帝の表情がニコニコとした笑顔に変わり、劍帝は竹林の先にある建物に向かって行つた

## 第五十八話「外敵の侵略」

「迷いの竹林入口前」

劍帝は狗丸を両腕でお腹の前に抱きかかえながら大きな平屋のようなお店とその隣にそびえる蔵のような倉庫の前に立っていた

劍帝（そういえば二人に大まかな位置は教えてもらったけど細かな位置は聞いてないな……まあいつか、こうすりゃあさ）

劍帝は喉の調子を確認するように「あー、あー」と言い始め、確認が終わり問題が無いと確認出来ると同時に息を軽く吸い始めて

劍帝「出て来やがれジン!!」

劍帝が短い言葉を喋ると劍帝の前方の空間がビリビリと振動した、そして、その声に呼ばれてか木緑色の作業着に身を包んだ白髪長髪で頭には鉢巻のようなものを巻き、その鉢巻の上に対の角を頭の形に沿わせるように生やし顔の横からは獣のような耳が見える目つきの鋭い男性が倉庫の中から出て来た

ジン「うるせえなあ、何だよクソ店長」

劍帝「オイオイ、店長に向かってクソとはなんだクソとは」

ジン「仕事を良く他人に押し付けてるような店長はクソ店長だろうが、で？何の用だ？」

剣帝「まあ、説教とかは面倒だからしないけどねーつと、まっ、用つてのはこの子に修行付けてやってくれないかって話をしに来た」

木緑色の作業着の男性、ジンと呼ばれた男性は頭をボリボリとかきながら剣帝に悪態をつきつつ近付いて来た、そして、剣帝はそれを気にも止めない様子でジンに向けて腕を伸ばし、狗丸を手渡そうとしている

ジン「ああ？何で俺がこんな犬っころの相手なんざ」

剣帝「やってくれたらタマちゃんもまた今度3日間好きだけデートする権利をやるう、その間は俺がお前の雑務を変わってやる」

ジン「……………チツ、わあーっつたよ、やりやあ良いんだろ、やりやあよ」

剣帝「流石ジン君、話が分かる」

ジンはハアと溜め息をつきながらも狗丸を剣帝の手から受け取った

剣帝「さてと…俺の用事は終了つと」

ジン「用事はつて事は、何かすんのか？」

剣帝「んっ？まあ、ちよつと遊ぼうかなつてね」

剣帝は狗丸をジンに渡すと懐をガサゴソと探り、懐の中からトランプのデッキを一つ

取り出した

ジン「遊ぶって……よりもよってトランプかよ、何だあ？ポーカーでもするのか？」

剣帝「うん、そのつもりだよ、ああ、ジン君は強制参加ね」

ジン「そんなこつたろうと思つてたぜ」

剣帝「さあ、そうと決まれば早速風嵐のおやつさんのところに行こつと」

剣帝はトランプをシャッフルしながら倉庫に向かつて歩いていった

→倉庫内部→

剣帝「よつこらせ」

剣帝が軽く扉を押していくと扉はギギギと重厚感のある音を奏でながらゆつくりと開いていった、そして、扉が開かれた倉庫の中には推定10mは有りそうなスペースが幾つもある鉄製の棚が奥に向かって伸びていき、その最奥には鋼色の作業着に身を包んだ銀髪で髪はオールバックにしている年配の男性が何かの箱を椅子代わりにして腰掛けていた

剣帝「オーイ、風嵐（かざあらし）のおやつさんやーい」

風嵐「おお、殿、今日はどの様なご用件で此方に？」

剣帝「ん？遊びに来た」

風嵐「遊びに、で御座りますか」

劍帝「うん、だから、一緒に遊ぼうぜ？風嵐」

風嵐「御意に」

劍帝はニコニコとした笑顔のまま倉庫の奥までズンズンと進んでいき、劍帝がある程度進むと銀髪の男性、風嵐が箱から立ち上がり劍帝を出迎えた

劍帝「そんじやー、早速ポーカーを始めるのでしょうか」

ジン「三人じゃ少なくてねえか？」

劍帝「……それもそうだな、アイツでも呼ぶか」

劍帝がポーカーを始めようとしているとジンからツツコミが入られた、すると、劍帝はジンの言葉に賛同し、懐から金のようなカラーリングのスマートフォンを取り出し、通話を始めた

劍帝「あー、もしもし？ああ、うん、俺、どうせ今暇だろう？うん、今すぐ倉庫に來い、ああ、ポーカーするんだよ、ああ、そんじや早めに來いよー」

劍帝は通話で話し終えると通話を即座にブツリと切り、カードをシャッフルし始めたジン「誰と通話してたんだ？」

劍帝「ん？無名」

風嵐「無名殿ならば即座に來るじやろうな」

劍帝「まあ、アイツは素早いから……って話してる内に來たし」



無名「オイーっす、暇だから来たぜー」

劍帝達が楽しげに談笑していると倉庫の扉がバンと開かれ、黒髪ロングの男、無名がズカズカと入ってきた

劍帝「相つ変わらず乱雑だな、お前は」

無名「テメエにや言われたかねえな、で？何時始めるんだ？」

劍帝「今からだよ」

無名「んじゃ、さっさと始めようぜ」

劍帝がシャツフルし終えると風嵐がさつきまで自分が腰掛けていた箱を全員の居る場所の真ん中に置いた、そして、劍帝がカードを配り始め、配り終えるとその箱の中央部にカードを置いた

劍帝「さあ、誰が最初に下着になるかな？」

劍帝達は自分の持ち札を確認する為に自分の目の前にあるカードを手を取った  
く十分後く

劍帝「さて、今回は誰が勝つてるかなー？」

劍帝はニヤニヤとした笑みを浮かべながらカードを眺めている、そして、劍帝の周りにはポーカーを始める前と何ら変わらない姿の無名と焦った顔をしている上半身がタックトツプのジン、服装がツナギから和服に変わっている風嵐が座っていた

劍帝「んじゃ、出そうか、せーの」

劍帝「ロイヤルストレートフラッシュ」

無名『ストレートフラッシュ』

ジン【ストレート】

風嵐へフルハウス

無名「……………なあ、オイツ、劍帝」

劍帝「何だ？無名」

無名「お前、確実にイカサマしてるだろ」

劍帝「えー、何の事だか、俺分かんないなあー？」

無名「良く言うぜ、さつきからダメエ、ストレートフラッシュかロイヤルストレートフラッシュかもしくはフォーカードって、完全にイカサマ確定じゃねえか」

劍帝「いやいやー、たまたま運が良かっただけだろー」

無名が劍帝にイカサマの有無を問いつめるが劍帝は余所見をしながら腕を組み口笛を吹いていた、そんな風なやり取りを二人がしていると倉庫の扉が勢い良く開かれた、その扉を開いたのは白いアーマーに身を包んだルーだった

ルー「劍帝様、外界からのお客人よ」

劍帝「……………誰？」

ルー「それが不明なのよねえー、まあただ、この郷にとって良くないものつてのは確かよ」

劍帝「……………マジ？」

ルー「マジよ」

劍帝はルーから謎の敵の襲来を聞くと「マジかー」と言いながら頭を抱え始めた、そして、無名はそんな劍帝の横で嬉しそうにクスクスと笑っている

劍帝「無名テメエ、笑ってんじやねえよ」

無名「これが笑わずに居れるか？ 久し振りにウチの郷に俺等に逆らう阿呆が来たんだぜ？ 殺しても差し支えない連中が来たんだぜ？」

劍帝「その楽しそうな悪どい笑みを浮かべすぎると人里の女性たちから気味悪がられるぞ」

無名「おっと、ソイツはイケねえな、そういや、オイツ、ルーちゃんよ」

無名が呼ぶとルーは店に戻ろうとしていたが倉庫の入り口に戻ってきて

ルー「何かしら？ 無名様」

無名「その阿呆共はどこから来てるんだ？」

ルー「妹達の報告によると、北西らしいのだけど、どうやらこの郷の各有名な場所を攻めるつもりみたいね、バラけてるわ」

無名「ほー、有名な場所ねえ……劍帝、有名な場所って事は迷いの竹林や永遠亭にも当然来るだろうな」

劍帝「……………そんなじゃ、集めるとするかな」

劍帝は腹部に力を込めながら倉庫の外に出て行き倉庫からある程度離れると上空に向かつて声を上げた

劍帝「死帝（してい）！劍狼（けんろう）！双月（そつげつ）！来いっ！」

死帝「なあにく？劍帝兄」

劍狼「お呼びでしようか？劍帝御兄様」

双月「双を呼びましたか？劍帝兄さん」

劍帝「うしつ、全員集まったな、そんなじゃあ、今この郷に来てる外敵の対処の担当区域を割り振るぞー」

劍帝が叫び終わると同時に紫髪の獣耳の少女、劍狼と黒髪サイドテールに外見は小学生のような少女、死帝とメイド服に身を包んだ紫髪で短髪の少女、双月が上空から降りてきた、そして、劍帝は三人が集まった事を確認すると説明を始めた

劍帝「取り敢えず、俺は迷いの竹林担当だ、んで、死帝、お前は紅魔館な、フランちゃんと仲良いだろう？」

死帝「はーい」

劍帝「それで劍狼、お前は妖怪の山だ、椀ちゃんに話をして天魔にでも会わせて貰え、無理そうなら最悪俺の名を出しても構わん」

劍狼「畏まりました」

劍帝「んで、双月、お前は人里及びに博麗神社だ、出来るな？」

双月「勿論です。双にお任せ下さい」

劍帝「んで、無名、テメエは残りだ」

無名「俺だけ重たくね？」

劍帝「ここで奮闘すりゃ神子ちゃんとかあり得るかもな」

無名「うしつ、頑張るとすつかない」

劍帝「んじや、各自持ち場に行け、散っ！」

劍帝が割り振りを言い終わり散の号令と共に劍帝の目の前に居た四人は各自、言われた持ち場に移動していった

## 第五十九話 「各々の対応」

（Side：死帝）

死帝「とーちやーく」

死帝は剣帝から命じられた後すぐに飛び始め、紅魔館の前まで飛び、紅魔館の前に無事に着いた

死帝「えーつとおー…あつ、美鈴さん、おーきーてー!!」

美鈴「うーん……」

死帝はどうやって紅魔館に入ろうかと考えて周りを見回し美鈴を見付けて美鈴の腕を引つ張った

死帝「起きないなあ……そーだー…美鈴さん…美鈴さん」

美鈴「ふあっ？」

死帝「咲夜さんが来てるよー」

美鈴「ふえっ!?ね、寝てませんよ!?って、どうしたんですか?死帝さん」

死帝は美鈴の腕を引つ張り自分の顔の近くに美鈴の顔を近付けると美鈴の耳元で囁いた、その囁きの内容を聞いた美鈴は慌てて起きた

死帝「えつとねー、劍帝兄が外界から侵略者が来てて、紅魔館にも向かってるから紅魔館の方達に手伝って貰って倒して来いって言ってたから来たのー、だからー、通してくれる？」

美鈴「で、ですが。その様な場合であろうと門を通すにはお嬢様許可を頂かないと」  
レミリア「良いわよ、通してあげなさい」

美鈴が死帝の対応でアタフタしていると紅魔館のバルコニーからレミリアの声が聞こえ、その言葉に従って美鈴は門を開けた

死帝「お邪魔しまーす」

レミリア（これで彼女の手助けをして彼女がそれを彼に伝えれば彼に恩が売れるかもしれないわ）

フラン「お姉様、どうしたの？」

レミリア「何でも無いわ、それよりも死帝さんが来てるそうだから遊んできたかどうかしら？フラン」

フラン「えっ!?死帝ちゃんが来てるの？」

レミリア「ええ、来てるわ」

フラン「それじゃあ、遊んでくるねー！」

レミリアは悪巧みをしたような顔でバルコニーから降りてきていた、そんなレミリア

の目の前に金髪の少女、妹のフランドールが偶然通りかかり、死帝が来ていると教えられるとフランドールは嬉しそうな顔で紅魔館の入り口に走っていき、レミリアはその姿を後ろから見送っていた

〔Side: 双月〕

双月「人里は恐らく慧音さんが隠すでしょうし……ここは結界の管理役の所にも行きますかね」

双月はメイド服のスカートをためかせながら博麗神社へと飛んで向かっていた

双月「出て来なさい、当代の博麗の巫女！」

霊夢「何よ……今結界に穴を開けられてその対応に困ってるって時なのに……」

双月「やはり結界に穴が空いているのですね……ふむ、それならば話が早いです」

霊夢「何の話？」

双月が博麗神社に着き、鳥居の下で霊夢の名を呼ぶと奥の居住スペースから霊夢が頭を抱えてやってきた

双月「いえ、ただ単にこれからこの郷にやってきた侵略者を討伐するのでその際に郷が多少壊れる可能性があるので暴れる許可、及びに侵略者を討伐する手伝いを要請に来たのです」

霊夢「剣帝さんも動くのよね？」



双月「ええ、侵略者はこの郷の各有名所に向かっているので剣帝兄さんは迷いの竹林で対応します」

霊夢「なら、わたしが動く必要感じないけど……まあ、剣帝さんには何時もお賽銭貰ってるし………しようがないから働いてあげるわ」

霊夢は双月の話を聞き、うーんと頭を抱え首を傾げ、少しの間悩んでから侵略者への対応を決めたようだ

双月「フフツ、上手く役に立って下されば兄さんに伝えてお賽銭の金額を上げていただけのよう、双が相談してあげますね」

双月は霊夢の返答を聞くと口到手を当てて笑みを浮かべてから双月は体の方向を180°回転させて人里の方向へ向かった

Side: 剣狼

剣狼「にとりさん、いらっしやりますか？」

剣狼は山の麓にある玄武の沢の辺りで膝を折り、水に向かって声を掛けてにとりを呼び始めた、すると、沢の水面にブクブクと泡が現れ、その泡が現れた地点から緑の帽子を被り、髪は水色のツインテールの大きなリユックを背負った少女、河城にとりが現れた

にとり「ワタシに何の御用ですかね？」

劍狼「簡単な用事ですわ。貴女は確か、椀ちゃんと仲が宜しいですわよね？」  
にとり「まあ、それなりには良いですねー」

劍狼「なら、椀ちゃんに伝言を頼みたいのですわ」

にとり「ほおほお……伝言ですか……その位ならお安い御用ですが……幾ら積みます？」  
にとりは劍狼の要件を聞き終えると親指と人差し指を繋げてお金を要求する手つきをし始めた

劍狼「……………貴女にお願いすると、何時もそれ（お金）ですわね」

にとり「当然でしょう。人に何か頼む際にはほお金は必要ですからねー」

劍狼「仕方が有りませんわね……胡瓜を500、お金を五万で如何です？」

にとり「胡瓜を七百、お金を八万に」

劍狼「高過ぎますわ。胡瓜を550でお金を六万にして下さりませんか？」

にとり「こちらも開發を抜けてきてるので、その分割増で、胡瓜を650、金額は7万は如何です？」

劍狼「それなら胡瓜を600、金額は六万五千で勘弁して下さいます？」

にとり「ふむ……………良いですよ。それで手打ちとしましょう。それで伝言の内容は？」

にとりは劍狼と交渉を終えると水にブクブクと沈み始めながら劍狼に質問の内容の

確認を始めた

劍狼「ああ、椀ちゃんに天魔さんに繋いで欲しいのですわ。劍帝御兄様からの言伝があると」

にとり「て、天満様ですか……分かりました」

にとりは一瞬間を青ざめさせてからブクブクと水の中に入っけいき、そのまま滝を登っけいった

劍狼「行きましたわね……さて、ゆっくりと待つと致しませうかね」

劍狼は近くの岩に腰掛けてにとりの帰りを待ち始めた

十五分後

劍狼が岩に腰掛けながら本を読んでいると沢の水面にまたブクブクと泡が現れ始め、劍狼はそれに反応するように岩から立ち上がった

劍狼「随分と時間が掛かりましたわね」

にとり「ええ、まあ、色々とありまして……取り敢えず、呼んできたので報酬のほどを……」

劍狼「分かりましたわ、受け取りなさい」

劍狼は自分の懐をゴソゴソとまさぐり、にとりと交渉した時の分の胡瓜、及びにお金を取り出しにとりに手渡した、すると、にとりは嬉しそうな顔を見せながら報酬をトラ

ンクに詰めて水に潜っていった

劍狼「さつてつと、お待たせ致しましたわ。天魔さん」

天魔「いえいえ、ワタシも今しがた来たばかりですし」

劍狼がにとりを見送ってから顔を上げると其処には緑のロングスカートの装束でロングスカートの横には武者鎧のようなものを付けた長槍を持った黒髪長髪で大きな一對の漆黒の翼を持った女性が飛んでいた

天魔「それで、ワタシに何用ですか？」

劍狼「これから外界からの侵入者と戦うので、その際に手助けが欲しいのと、ここ最近辺を破壊してしまう可能性があるなので許可が欲しいのですわ」

天魔「その程度ならば構いませぬ、どうぞ我が天狗の里に居る白狼天狗や烏天狗を使つて下され」

劍狼「有難う御座いますわ。それでは遠慮なく必要時は呼ばせて頂きますわね」

劍狼は天魔の返答を聞くと嬉しそうに笑顔を見せながらクルリ右方向に回転し、山の麓に降りて行った

side: 劍帝

劍帝「全員、所定の場所に難なく着いたみたいだな……さて、久し振りの戦闘だ、争いだ……虐殺だ、存分に楽しもうじゃないか」

劍帝は自分の背中から六枚の白と黒の翼を出し、大きく広げ、更に10本は軽く超えているであろう白銀の狐のような尻尾を何度も地面に叩きつけながら、口を開き、牙のような物を見せつけるようなあくどい笑顔を浮かべて立っていた

## 第六十話 「偵察の次男」

「時間は少々遡り」

「劍帝達が持ち場に着く前：幻想郷外周：霧の湖付近」

銃やヘルメットで武装した男達はザワザワとした喧騒のある鉄やコンクリートのあの道から急に爽やかな風が吹く野原へと移動した

男 a 「ココがああ男達が言っていた未開の土地か……」

男 B 「ここを手にいれれば新たな我々の土地となるな」

男 C 「だが、ああの男の話ではここには不思議な力を持った女性達が居るそうだが、大丈夫だろうか？」

男 a 「問題無いだろう、我々には銃が有るんだからな、襲ってきたのならば撃ち殺せば良い、それに……あの男が渡してきたこれも有るしな」

男達のリーダー格と見られる男が一発の銃弾を懐から取り出した、その銃弾には封という文字が書かれている

男 a 「あの男が言うには、これを撃ち込めば相手の能力を封じて確実に殺せるそうだが……つまり、不死身だろうが殺せる筈だ」

男B「それでは、部隊編成を決めてくれるか？リーダー」

男a「ああ、A班は俺と来い、B班は湖の先にある館だCとDは神社と人里と呼ばれる場所だ、そして、E班はここから最も離れている山に迎え」

男達「「了解!!」」

男達は緑色の迷彩服に身を包み、周りを警戒しながらバラバラに散開をしながら歩いていく、その肩には上から青い太い線白い細い線赤い太い線白い細い線青い太い線が引かれ、赤い線の中に白い丸がありその中に赤い星が描かれた国旗のマークが付いていた  
 〓時は元の時間まで進み〓

〓無名の丘〓

白い鈴蘭の花が咲き乱れる丘の上に白の反対色である黒色のコートや黒色のスーツで全身に包んだ黒髪の男、無名が立っていた、そして、無名は穴が空いた位置と思われる草原の方向を見据えている

無名「ひい、ふう、みい、よお、…ふむ、軽く見積もっても100は居るな、それにあの肩のマーク…クカカツ、今回の相手は日本人じゃあねえなあ、これなら俺も本気をだせそうだったと、一応報告しとくか」

無名は懐から携帯を取り出して電話を掛け始めた

無名「あー、もしもし、剣帝か？ああ、俺だ、おう、偵察は完了だ、今回の相手は北

だな、おう、あっちの方にも干渉は多々届いてるみたいだからな、どうせ土地欲しさだろうさ、おう、おう、あいよ、叩いて潰せばそれで終いだな、おうよ、それじゃあなあ、クカカツ」

無名は通話を終わると携帯をスリープモードにしてから懐に仕舞い込み、歩き始めた、その顔には残酷性抜群な笑みが現れていた

（side：剣帝）

剣帝は剣で作られた玉座に腰掛けながら携帯の通話を切り、画面を消してスリープモードにしてポケットに仕舞っていた

剣帝「敵はあの国の兵隊か……フフツツ、それなら加減の必要はないな」

剣帝が玉座に腰掛けていると剣帝の携帯に電話が掛かって来た、剣帝がその電話に応じてポケットから携帯を取り出すと画面には死帝とという文字が表示されていた、剣帝はそれを確認すると通話ボタンを押した

剣帝「もしもし、俺だ、どうした？死帝」

死帝『敵が来たから、その報告』

剣帝「ああ、そうか、出現位置的にそこが一番だったか、敵の数はどれくらいだ？」

死帝「分かんない、取り敢えずいっぱい」

剣帝「OK、了解だ、そのまま相手さんを殲滅しな」



死帝「はーい」

死帝は元気に返事をするのでブツリと通話を切った、そして、通話が切れたことを確認すると剣帝も通話を切り、また画面を消してからポケットに携帯を仕舞った

剣帝「やつぱりかあ……まあ、アイツなら負けないだろ」

剣帝は紅魔館に襲撃者が来たという一報を聞いても動じる事なく、波打つように動いている姿の龍が刻印されている煙管を啜えて、煙を吐いていた

## 第六十一話 「無双の兄妹：前編」

（side：死帝）

紅い煉瓦造りの門の目で迷彩服や軍服に身を包んだ男達が死帝に向けて銃を乱射してたが一発たりとも死帝にはかすりもせず門の前の草むらは穴だらけになっていた

男A「クツ、チヨロチヨロと鬱陶しい！」

死帝「アツハハ、たつのしい〜♪」

男A（何故だ……何故一発たりともあの娘に当たらない）

死帝「あれ〜？もう終わりなの〜？つまんな〜い!!」

男達は死帝に向けて高速で弾丸を連射していたが撃ち続けている間にトリガーを引いてもカチツカチツという音しかしなくなつた、どうやら残弾が切れてしまつたようだ  
死帝は飛んでくる弾丸を完全に見切り体を反らしたり時には手に持った刃が黒い短刀で切り落したりしつつ笑顔で回避し続けていたが、男達が銃を撃てなくなると頬を膨らませて怒り始め、男達に向かって走り始めた

死帝「ならもう、死んで？」

男A「やはり子供か！近づいてくるのなら銃で殴ってしまえばつ、ギャアアアアアア!!!」

死帝「あく！やっぱり人肉の斬るのって楽しい♪堪んない！」

死帝は自分に向けて振られてきた銃に当たる寸前その銃に手に持った短刀を斜めから切り込み、そのままその銃を切断してから男の手首も切り落とし男Aの後ろに周り込んだ

男A「アアアアアア!!!」

死帝「次は何処を斬ろっかな〜♪」

男B「化物が！」

死帝「えー、女の子に対して化物ってそれ酷くなくい？」

死帝は手首を切り落とされ悶絶している男Aの近くに死帝が歩いていくと男Bが死帝に向けてナイフを振り、斬りつけようとしたが死帝はそれを事前に知っていたかのようには回避し男Bの身体をバラバラに切り捨てた

死帝「ああ、良い、やっぱり人を刻むのって楽しい♪」

男A「く、狂っている……」

死帝「アタシは別に狂ってないも〜ん、アタシはただ単に楽しい事を楽しんでるだけだも〜ん♪」

手首を斬り落とされている男Aは死帝の様子を見て恐怖の表情を浮かべていた、それも筈死帝は男Aの手首を斬り落とし、男Bをバラバラに切り捨てた時の返り血を浴びても嫌な顔など一切せずに幸悦とした嬉しそうな表情を浮かば続けているからだ

男A「く、クソツ、今はとにかく逃げ」

死帝「逃がすと思つた〜？」

紅魔館に攻め込もうとしていた男達は死帝の様子を見て心の中を恐怖で満たしてしまい、リーダー格の男Aから我先に逃げようと走り始めたが、瞬時に幼いようで狂気を含んだ笑顔を浮かべている死帝が男達の目の前に周り込んできて手を体の後ろに回してゆつくりと男たちに近づいていく

男A「く…来るな…こつちに来るなアアア!!!」

死帝「バイバイ♪」

死帝は男Aの首を切り落とすとそれを皮切りに次々と別の男達の身体をバラバラに切り捨てていった

死帝「あゝ、楽しかった〜♪ん？」

死帝が血の雨を浴びながら満足げな笑顔で立っていると霧の湖の方角から何か一つの影が歩いてきた

side：双月

双月「ハア……暇です」

人里の入り口の前に頭にカチューシャのような物を付けた髪色が青みがかった淡い紫色で髪型が短髪

そして、服装は中心から一直線を描くように半分が白色半分が黒色の服に身を包んだ目の色が左右で目の色が赤と青でバラバラのオッドアイになっている少女、双月が退屈そうな顔をしながら立っていた

双月「幾らなんでも……ん？」

双月が空を見ながらグチグチと愚痴を溢していると人里の前に広がっている草原の方向から迷彩服に身を包んだ男達が歩いてきていた

双月「ようやくですか……ハア……」

男B「分隊長……アレも危険分子です」

男A「ならば、警戒しつつ蜂の巣にするぞ！総員掃射開始！」

リーダー格の男Aが命令を下すと男達は有無も言わぬ内に双月に向けて銃を連射し、双月が立っている位置に砂煙が立ち上った

男A「撃ち方止め！」

男B「流石にこれだけの銃弾を浴びせれば殺せたでしょ」

双月「ハア、いきなり銃弾プツパなすとかアンタ等どうい脳内神経してんの？信

じらないんだけど」

男B「何っ!？」

砂煙が晴れていくと双月が居た位置の目の前に分厚い氷の壁が現れていてそれが砕け散ると双月の居た場所には赤みがかつた紫色の髪色の短髪の少女が立っていた

その身体には先程の双月同様に中心から一直線を描くように白と黒に別れた色をしているワンピースを着た背中からピンク色の一对の翼を持った頭に大きな赤いリボンをつけたオツドアイの少女が立っていた

男A「お前は何者だ！」

双月「はあー? 何でアタイがアンタ等みたいなムサイ臭いオッサン共に名前乗らないといけないのよ、頭にウジでも湧いてんの?」

男達「ムサツ……クサツ……」

双月「あー、マジイライラする、アンタ等のせいで剣帝さんに抱き着く時間減るじゃん、取り敢えずイラ付くからアンタ等とつと片付けるとするわ、拒否権は無し」

双月はそう言うのと翼をバサリと大きく広げ、スカートの裾に付いている白い雪吹雪の描かれたホルダーと黒い炎の描かれたホルダーからそれぞれ同色の黒いマグナムと白いハンドガンを取り出した

そして、銃を自分に向けて構えている男達に向けて手に持っている二丁の拳銃を向け

た

双月「さあて、ぶっ飛ばすわね」

男B「そんな二丁の単発銃で我々に勝てるでも思っているのか！」

双月「ええ、当然思うけど？何なら試すけど？」

男B「やれるもんならやってみな」

男Bが喋っている最中に突然男達の真ん中辺りで大きな爆炎が上がった、その際双月は黒い方の銃のトリガーを引いていた

男B「何が……起きてるんだ……」

双月「ん？アンタがやれるもんならやってみなつて言ったからふっ飛ばしたんだけど？何か文句でもあんの？」

男B「その銃、徹甲弾でも詰まっているのか!？」

双月「聞く馬鹿がどこに居んのよ、答える馬鹿も居ると思う？」

男B「クツ、答える気は元々から無いと言う訳」

双月「でもアタイは自慢しちゃうのよねえ！」

双月は高らかに黒い方の銃を掲げると自分の胸に手を当てて自慢をし始めた

双月「アタイのこの黒い銃には炎の邪神、クトウグアの力が宿ってるのよ、だから、射出した弾丸が炎にまつわる事柄なら大抵起こせるのよ、例えば火炎放射器のように炎を

吹いたり、打ち出した弾丸の着弾点に爆炎を起こしたりって感じに」

男B「邪神……だと、神などこの世の中に居る訳が……」

双月「へえ、アンタはこの郷に来て尚神や幻想の存在を否定すんのね……んじゃ、アンタはやっぱり消えて……いいえ、生きて貰うわね」

男B「な、何を……ひつ、止めろ……止めてくれ！寒い……嫌だアア!!」

双月は驚いたような表情を浮かべている男Bの足元に白い銃を向けるとそのまま弾丸を発射した

だが、白い銃の弾丸は黒い銃の弾丸とは違い爆発は起こさなかった、但し、着弾地点から男の体を凍り付かせ、男の体を氷塊に変えてしまった

双月「これでお終いと……さあ、運びましょう？水月（ひょうげつ）」

双月が自分の目の前の空中に向けて白い銃を投げると双月の髪色が紫から徐々に赤に変わり、それと同時に服の色も真っ黒に変化していき、目の色も両目とも朱色に変化した

そして、空中に投げられた銃は形を変化させて徐々に少女の姿を取っていった、その姿は戦闘を始める前の双月の姿に酷似していて違う点といえば服の色が真っ白になった点と髪色と目の色が両目とも青くなったところぐらいなものだ

水月「炎月（えんげつ）姉さん、何時も思うのですが。敵への自慢話などは止めたほ



うが良いのではないですか？それをするだけで隙が出来てしまいますし」

炎月「良いじゃないのよ別に、お馬鹿な敵に死ぬ前に知恵を得る機会を与えてやってるんだから」

氷月と呼ばれた少女と炎月と呼ばれた少女は互いに氷塊になった男を足元から持ち上げ、そのまま飛び去ろうとしていた、そんな二人に近づいていく一つの人影

炎月「……………氷月……」

氷月分かつてます。剣帝兄さんの元へこれを運ぶのはこの方を倒してからですね」

炎月と氷月は氷を砕かないように降ろすと、氷月は白い銃を手に持ち、炎月は黒い銃を手に持って、両者同時に自分たちに向かってくる人影に向けて構えた

〈side：剣狼〉

剣狼「はあ……やはり雑魚ばかりですわね」

濃い紫色の長髪を流しながら黄色いドレスのような服に身を包んだ狼のような尻尾と耳を生やした女性、剣狼は山の中腹部の木の太い枝の根本に腰掛けながら対物ライフルで襲撃してきていた男達の頭を打ち抜き、的確に殺していた

剣狼「この程度の実力しかないにも関わらず剣帝御兄様に逆らおうとするとは、万死に値しますわね」

剣狼はそう言いながら対物ライフルの空になった弾倉を抜き取るとそのまま流れる

ようにポーチに仕舞い込んで別の弾倉を取り出して弾丸を装填した

だが、劍狼は装填後にも関わらず対物ライフルを打とうとし始めず考え始めてしまった

劍狼「劍帝御兄様のお手伝いの為にこれを頂きましたが……どうにも私の手にはあまり合いませんわねえ」

劍狼がボソボソと独り言を言っていると劍狼の後ろの木々から迷彩服に身を包んだ男がナイフを片手に飛び掛ってきた

男G「貰ったあ！……あ？」

劍狼「やはり、私といえどこちらですわね」

男のナイフが劍狼の体に当たる寸前、ナイフは突如叩き折られ、男の首も男の身体から離れた、その要因となったであろう物の正体は劍狼の手に握られていた刃が劍狼の髪色同様に濃い紫色に禍々しく輝く大鎌だった

劍狼「さて、御兄様からは好きにやれと言われましたし……殲滅を開始しますわ！」

劍狼は腰掛けていた木から降りると、口の中の大量の牙を見せつけるような笑みを浮かべながらその手に持った大鎌を構えた

男C「う、撃て！どうせ奴の獲物はこの木々の広がる中では十分に發揮できはしない

！」

劍狼「ウフフツ、貴方達はどんな声を上げて鳴くのでしょうか？」

劍狼は自分に向かつてくる弾丸に恐怖する様子もなく大鎌を振り始めた、すると、劍狼の周りにあつた木々や岩、更には劍狼に向かつて飛んできていた弾丸までもが元々からそういう形であつたかのように綺麗に切れてしまった

劍狼「さあ！貴方達の悲鳴を聞かせてくださいまし！貴方達の肉を食べさせて下さいまし！」

男達「「ヒイイイ！」」

男達は自分たちに向かつて走つて来る劍狼に向けてマシンガンを連射するが、劍狼は飛んでくる弾丸を大鎌を片手で回して弾きながら走り続ける

劍狼「ウフフフツ、アハハハツ！さあ！貴方達は早く死んで頂戴！ワタシが劍帝御兄様に褒めて貰うためにも！」

劍狼は飛び上がり両手で大鎌を構えると眼下に広がる男達の首を一線、手に持つている大鎌で薙ぎ払い男達の体を切り裂いた

すると、男達の身体はぬちやりという音を立てながらバラバラに倒れ辺りには大きな血溜まりが出来た

劍狼「ウフフツ、さあ、貴方達のお肉、食べさせて貰うわね」

劍狼がそう言っていると劍狼の足下の影に突如白い牙や大きな眼が現れ、それらは劍

狼の後ろの木陰にも現れた

その影の口や眼は劍狼が腕を男達の死体に向けて振るうとその振るわれた腕に従うように真つ直ぐに男達の死体に向かって行き、バリボリと骨を砕き、肉を裂きながらクチャクチャと咀嚼し食べ尽くした

劍狼「あまり美味しくはありませんわね。やはり数千年前に一度だけ食べた劍帝御兄様のお肉の方が数段美味しかったですわ」

劍狼は自分の口周りに向かつて飛んできた血飛沫を拭くと男達を食べた感想のような悪態をつき始めた、そんな劍狼に向かってゆつくりと近づいてくる一つの影があった。劍狼「あら、久し振りですわね。劍帝御兄様の元を離れたから数世紀は経ってますし。てつきりもう死んだものと思ってましたわ……まあ、どうせこれから私が殺して差し上げますが」

劍狼はニツコリとした笑顔を浮かべながら大鎌を両手で持ち、ゆつくりと自分に向かってくる人影に向かって歩いて行った

〈side:劍帝〉

劍帝「さて、そろそろかなつと」

劍帝は相変わらずビールケースに腰掛けて、自分の店の前で侵入者たちを待ち構えていた、そんな劍帝の居る場所に向かって明らかに他の場所に向かった男達とは気配が全

く違う男達が歩いてきていた

劍帝「……………中の連中じゃないな…お前等」

??「おお、アイツの言つてた通りマジで居るなあ」

劍帝の視界の先から歩いてきた男達は他の場所に行つていた連中とは違い、顔はマスクとヘルメットでほぼ隠して見えず、唯一見えるリーダー格と思われる男は色黒の肌に全身黒い警備員のような服を身に付け、頭にも黒い帽子を被っている口や鼻、目の下に金色のピアスをした男が居た

劍帝「何ともまあ、見覚えがある軍団だな、どこで見たか忘れたけどな」

??「なら、思い出す間もなく死んだらどうかねえ？撃て」

リーダー格の男が命じると後ろにいた五十人は超えるであろう男達が一斉に手に持ったマシンガンを連射し始め、劍帝はその全ての弾丸を中指を軽く動かし、謎の力で落とした

劍帝「これがどうした？」

??「ヒヒヤヒヤ！そうこなくっちゃねえ！ここに来るまで何も会わずにツマンネエと思つてたんですわ！」

リーダー格の男が劍帝に向けてハンドガン撃つと、他の弾同様落とされるかと思いきや、その弾丸は劍帝の力を砕くように掻き消し、劍帝の肩に着弾した

劍帝「なっ…」

??「ヒヒヤヒヤヒヤヒヤ!!マジでアイツのくれた弾丸相手さんの能力らしいもんを砕きやがったよ、そら、今の内に蜂の巣にしちまえ」

劍帝が自分の肩を抑えてながら自分の肩に気を取られていると、劍帝の肩に弾丸を打ち込んだ男の後ろにいる集団が劍帝に向けてマシンガンを掃射し、劍帝を蜂の巣にした??「よおーし、それじゃあコイツの奥さんつてやつを殺しに行くかねえ」

劍帝を蜂の巣にし終わり、劍帝が前のめりに倒れて周囲に血溜まりを作ると男達は劍帝に興味を失ったように歩いて竹林の中に入って行った

く迷いの竹林：内部く

??「それにしても、例の最高危険人物つてのはやすやすと片付いちまったなあ、正直拍子抜けて感じだ」

男達は列をなすように迷いの竹林をズンズンと進み、劍帝の自宅に近づいて行く??「さあてえ、アイツから地図も貰ってるから迷う心配無しだ…んっ?」

男達が悠然と進んでいると突如男達の間を細い糸のようなものが走ったかと思いきや、リーダー格の男啜えていた煙草が切れ男の斜め後ろに並んでいた男二人の体が突然断ち切れ、肉片がバラバラと飛び散り、その肉片から周囲に血を撒き散らした

劍帝「ふむ…外したか、やつぱり普段のようにはいかないな」

?? 「な、なんでテメエが生きてやがる！テメエはさつきキツチリ」

劍帝 「殺した筈、か？残念、お前らの弾丸じゃ俺は殺せない」

?? 「!!撃てえ!!」

リーダー格の男がまた命令を出すと後ろの男達が一斉に銃を掃射するが、劍帝は即座に先程男を断ち切るのに使ったであろう糸を自分の正面に張り巡らせた

更に、その糸の残りの部分を銃を掃射してきている男達の方に向かわせた

劍帝 「……やっぱり予想通りか、動きが妙に鈍いし、人間の匂いもしない……お前等、グールだな？それで、グールをそんな風に従えて銃を持たせてる奴を一人だけ俺は知ってる、おまえの名前は、ヤン・ヴァレンティンだな？」

ヤン 「何で……俺の名前を……」

劍帝 「気にするな、どうせお前はこれから死ぬからなつと」

劍帝は喋り終わると同時に手の近くにある糸を引いた、すると、劍帝の周りの竹が切れ、更にそれと同時にヤンと呼ばれた黒人の男の後ろの兵隊たちの体が断ち切れた

劍帝 「さて、お前等、小便は済ませたか？邪神様にお祈りは？竹林の隅でガタガタ震えて、命乞いをする心の準備はOK？」

ヤン 「誰がそんな真似するかあ！テメエを殺してしまいだあ！」

?? 「少しは落ち着け、お前一人でその男に勝てる筈が無いだろう」

ヤン「あ、兄貴…」

ヤンが両手に二丁のマシンガンを構えて突撃しようとしていると、ヤンの後ろの男達の更に残ろから声が聞こえて来て、ヤンの動きを止めた

その声を発した主は髪は金色の長髪ストレートで腰の辺りで髪を括り服装は白いロングコートを肩から掛けて羽織り、その内側には白いタキシードを着ていた

剣帝「……お前は」

??「始めまして、妖悪剣帝様、私は」

剣帝&??「『ルーク・ヴァレンティン』だろ?」

ルーク「ご存知でしたか」

剣帝は男達の後ろから金髪の男、ルークが自己紹介をしていると、名を名乗ると同時にルークの名を呼んだ

剣帝「さて、ルーク君、君は俺を倒す自信でもあるのかな?」

ルーク「その通り! 貴方の不死伝説も今日終わるのです」

剣帝「ほお? つまりは、俺を殺すって訳か、だが、どうやるつもり……だ?」

剣帝がルークに斬りかかろうとしているとルークはロングコートを翻してロングコートの下から一人の少女を出した、その少女が剣帝の視界に入ったと同時に剣帝は動きを止めた



劍帝「妹……菜……」

ルーク「やはり貴様の関係者か！この竹林に歩いている様子が見えたのでな、そうだろうと思つたぞ……さて、劍帝よ、この娘がどうなつてもいいのか？」

劍帝「止めろ!!その娘には……手を出すな……」

ルーク「ならば、貴様はこれから一切抵抗せずに我々に倒される、それでこの娘は開放してやろう」

ルークが少女、妹菜の首にナイフを押し当てようとしていると劍帝がルークの行動を止めるように言い、武装を解除した

劍帝「これで、良いんだろう？」

ルーク「ああ、それで良い、それで十分だ」

妹菜「パパ！」

劍帝「妹菜、お父さんは大丈夫だから、目を閉じて待つていなさい」

妹菜「で、でも……」

劍帝「良いから早く、目を閉じなさい！」

妹菜「うう………はいっ！」

妹菜は劍帝に怒鳴られると涙目になりながらも必死に目を瞑り始めた、その様子を見ると劍帝は穏やかな表情を浮かべ、こつそりと指を鳴らし、妹菜の耳に小さな遮音性の

高い膜を貼った

ヤン「健気だねえ、父親の言う事を正直に従う娘」

劍帝「黙れゴミ吸血k」

ヤン「口を慎みやがれてっただよ」

ヤンは劍帝に黙れと言われると頭に來たようで怒った表情を浮かべながらさつき店の前で撃つたものと同じ銃で劍帝の左膝を撃つた

ヤン「さあてえ、テメエはどんな風に殺してやろうかねえー?」

ルーク「ヤン、そんな事を考える暇が有るならばとつとこの男を蜂の巣にしろ」

ヤン「はいはい、分かりましたよーつと」

ヤンが指を鳴らすと同時にヤンの後ろの男達が劍帝に向けてマシンガンを掃射し、劍帝を蜂の巣にしようとし始め、劍帝の居る位置に砂煙が巻き起こる

??「あつぶねえな。この俺様に当たる所じやねえか」

ヤン「あん?誰だあ?アンタは」

ヤンの後ろに並んでいる男達が撃つた弾丸は、ヤン達と劍帝の間に現れた男に当たる寸前で男に当たる弾道だった弾丸だけ弾き消されていた

劍帝「夜鴉様……当たるわけ無いなあ……あの娘が確実に守るだろうし……」

夜鴉「えーつとこういう時はなんて言うんだっけ?」

?? 「主、悪党に名乗る名前等ないではありませんか？」

夜鴉 「あー、それだ」

夜鴉が目を閉じ少し考えていると夜鴉の少し後ろから身体の様々な場所に機械的な物が付いた、栗色の髪の毛の長髪の少女が現れ、夜鴉に喋り掛け、その後すぐに姿を消した  
劍帝 「助けて下さり有難う御座います」

夜鴉 「何言ってるの？ たまたま歩いててたまたま攻撃が飛んできただけだぞ」

劍帝 「そ、そうでしたか。何はともあれ助かりました……が」

夜鴉は劍帝の感謝の言葉を聞くと何がといわんばかりの顔をしながら劍帝に返答した、劍帝はその内容を聞いてから顔を一度俯け、夜鴉の向こうに居るだろう、ヤンとルークを睨みつける

夜鴉 「さて、この子お前の娘？ 女の子が囚われてたから取り敢えずパチってきたけど」

劍帝 「あ……有難う御座います」

ルーク 「なっ！ 何時の間に!？」

夜鴉がバサリと身に付けている黒いマントをはためかせると、そこにはルークに捕まっていたはずの妹菜が居た、そして、妹菜は自由になると同時に劍帝に抱き着いた  
妹菜 「パッ!!」

劍帝 「おー……よしよし、ゴメンな、怖かったな」

劍帝は自分に抱き着いてきた妹菜を受け止めると、妹菜の後頭部を撫でながら優しい笑顔を浮かべている

夜鴉「あー、やだやだ。こんな感動物語みるために女の子助けたんじゃないけどな。腹いせに男を殺すか」

ルーク「何っ!？」

ヤン「はあ?!」

劍帝「ああ……俺の命日は今日か」

夜鴉の言葉を聞くと自我のある夜鴉の周囲の男性は同時に顔を青ざめさせ始め、ヤンとルークは抵抗しようとするが、劍帝は妹菜に自宅へと行くように言ってから白拍子に着替えた

夜鴉「さて。男性諸君、君達の股間をもぎ取るから覚悟しなさい」

ルーク「やらせるものか」

ヤン「近付いてきたら蜂の巣にしてやるぜ！」

劍帝「……ポント」

ルークがナイフを構え、ヤンが二丁のマシンガンを構えていると、夜鴉の後ろで劍帝は瓶に入った薬を飲み、姿を変えていた

夜鴉「あはは、お前ら行動遅いんだよ。これなーんだ？」

ルーク「また……」

ヤン「俺のまてが!？」

剣帝「何でお葉持っていくんですか……自決用なのに」

ルーク、ヤン、剣帝の各自は自分が持っていたものを夜鴉に盗られている事に気付くとヤンとルークはまた驚いた反応をしているが、剣帝だけはシクシクと涙を零している

夜鴉「あはは、さてどうしようかな？素手が良い？刀？それとも鋸？」

ヤン「やられてたまるかよ！逃げるぜ兄貴！」

ルーク「ああ、当然だ！」

剣帝「出来れば落とすから股間をではなく首を落として下さい」

ヤンとルークは連れてきていた男達を盾にして逃走を図り始めたが、剣帝は夜鴉に向けて頭を下げ始めた

夜鴉「あーあ、終わっちゃった。もう落ちてるのにね」

剣帝「……………お手数おかけしました」

剣帝は血をボタボタと流しながら立ち上がり、剣帝が立ち上がると同時に竹林の外からガラス状の物が砕け散る音が幾つもあった

夜鴉「良い、俺は帰る。しかし用心しろよ。これでも持つとけ」

剣帝「はい？何ですか？これは」

夜鴉は劍帝の手に自分の手をかざし、何かを手渡してきた

夜鴉「オーフィスの蛇。要らんからやる。でも今日一日過ぎれば無くなるから気をつけろ」

劍帝「了解しました」

劍帝は蛇を受け取るとその力を自分の全身に回し、全身に力を込めた、すると、劍帝の股の血が瞬く間に止まった

夜鴉「じゃあな。俺は帰る」

劍帝「はい……………」

劍帝は空へと消え去っていく夜鴉に向けて頭を下げ、夜鴉が完全に消えるまで頭を下げ続けていた

## 第六十二話「無双の兄妹：後編」

↳ 迷いの竹林：内部↳

劍帝「……………出せる範囲は…三……………五割か…」

劍帝は片手を握ったり開いたりを繰り返して自分の体の調子を確認した

劍帝「……………さつてつと、虐殺を始めるとしようか…行くぞ黒」

黒『へいへい、好きにしな』

劍帝が迷い竹林の外へと歩きながら黒影に話し掛けると劍帝の近くの竹の根本の影から黒影の音が響き、その後、竹の影から劍帝の影へ黒い何かが移動すると劍帝はニヤリと口を歪ませながら竹林の出口へと背中にと手と足と大きな翼のある龍が刻印された白いマントを羽織り、そのマントをはためかせながら歩いて行った

↳ 迷い竹林出入り口付近↳

劍帝「一、二、三、四……………多いなあ」

劍帝が竹林の外へと歩いて出るとそこには劍帝が先程倒した虚ろな男性達とは違った五十人を超える軍服の男達が立っていた

劍帝（なるべく使いたくなかったんだがなあ……………これ使うとつまらないし……………まあ、

そんな事を言ってる余裕はあんまりないか……)

男α「最重要危険人物が現れたぞ！総員、撃て」

剣帝『喰らい尽くせ』

剣帝が右手を伸ばし前に向けると剣帝の袖から大量の蛇が現れ、その蛇の軍団は男達に向かつていった

男α「な、何だこの蛇は！」

剣帝「それは俺のペットだ：可愛いだろう？」

男α「撃て！早く撃ち殺せ！俺は：蛇が：苦手なんだ!!」

剣帝「……：蛇が苦手とは可哀想に、ならば、蛇に包まれて、体中を噛まれ、締め付けられて、死ぬが良い」

剣帝は喋りながら腕を伸ばし続け、その剣帝が伸ばしている右腕の袖からは剣帝が伸ばし続けている間ずっと蛇が湧き出続けた、その蛇の群れは男達の足元まで這って行き、男達の足に噛み付き、絡み付き、全身を取り囲み、締め付け、毒を流し込み、包まれた男達は一人残らず断末魔を上げながら、苦しみながら息絶えた

剣帝「……：そろそろ全員死んだかな？さあ、ご飯を食べて戻っておいで」

黒影『相変わらずエゲツねえなあ……：幾ら蛇が好きだからって数千を超える蛇を体内に飼うのはどうかと思うぜ？』



劍帝「良いじゃないか、別に」

劍帝は断末魔が止むと同時に手を降ろしていた、そして、それと同時に男達が居た場所では、グチャグチャという肉が裂かれる音やボキボキと骨が砕かれる音、そして、クチャクチャという咀嚼音がした後、それらが止むと蛇達は劍帝の身体を這って登り、劍帝の袖の中を蠢きながら消えていった

劍帝「ご馳走様……五十人以上は居るなあとは思ってたけど、まさか七十八人居たとはなあ……まあ、蛇たちの腹の足しにはなるか」

黒影『肉は蛇に、魂はお前に喰らい尽くされ、アイツ等の痕跡は血だけだな』

劍帝「それもどうせ消えるけどね」

劍帝がそう言いながら血溜まり、いや、最早血の海と呼ぶに相応しい物を見ていると劍帝の足元の影が急激に広がり、その影には大量の目や口が現れた、そして、影は劍帝の見つめている血の海に向かって伸び、血の海を全て覆うと血の海を一滴残らず吸い尽くした

劍帝「はあーあ、やつぱり朝に飲んだ妹紅の血の方がよっぽど美味しかったなあ」

黒影『食事が済んだんなら次行かねえとな』

劍帝「ああ、分かってるよ、侵入者は全員……ん？」

劍帝が黒影と喋りながら次の標的を探しに行こうと足を踏み出そうとしていると、劍

帝達の目の前に前髪の一部だけが青く、そこ以外が全て黒い短髪の人物が歩いてきた?? 「久々つすなあ、剣帝ニイニ」

剣帝「…………お前、未だに生きてたのか」

?? 「当然つすよ、オレっちはこれでもニイニと同じ妖悪の姓を冠するもの、そうやすやすとは死にやしないつすよ」

剣帝「なら、キツチリお前を殺してやるよ、今回みたいな事を起こされてちゃ面倒だ」  
剣帝が右手を両腕を真横に向けて伸ばすと、その腕を這って数匹の蛇と一際大きな蛇が一匹、這い出てきた、そして、一際大きな蛇が口の中から刀の刃を出すと、それ等の蛇は一本に纏まり、二振りの刀が現れた

?? 「おやおや、本気つすなあ!」

剣帝「そういう、お前もな」

剣帝が刀を出し終わった次の瞬間、剣帝の顔に向かって黒い線がヒュルンと音を立てながら伸びて行った、だが、剣帝は特に慌てる様子もなく、その自分の顔に向かって飛んできた線を右手の刀ではたき落とした、すると分かったが、その線の正体は青と黒の入り混じった髪の毛の男の左手から伸びていた一本の剣の刃のようなものが付き節々で分かれるようになってる鞭のような武器だった

剣帝「蛇腹剣（じゃばらけん）、俺が作った武器の中では四番目に当たる作品だ」

?? 「さっすが、製作者はその辺もきっちり覚えてるんっすな」

劍帝 「当然だ、あの時は離反されるとは思ってなかったからな、中、近距離武器として重宝するつもりだったんだがな！」

男は蛇腹剣を劍帝と会話している最中でも振るい、劍帝に攻撃を浴びせようとするが、劍帝はその尽くを斬り落とし、弾き落としていた

?? 「流石はオレっち達の創造主、オレっちの攻撃は全部捌かれるっすか」

劍帝 「当然だろう、お前の攻撃じゃ俺に当てる事は」

?? 「なら、こんな手はどうっすか？」

男は劍帝の持つている蛇刀の刃に蛇腹剣をグルグルと巻き付け、ギリギリと言う金属音を鳴らしながら引つ張り始めた

?? 「オレっちがこんな手を使うとは、思ってたかったっすね？」

劍帝 「まあな、だが、問題は無い」

劍帝が巻き付かれた右手の蛇刀を手放すと、刀の刃は蛇の内側に収納され、蛇達はバラバラになり、地面に落ちた、そして、その蛇達は劍帝の足を這いずって登り、また劍帝の右手で刀の形を取った

?? 「うげえー、そう来るっすか」

劍帝 「俺がそうやすやすと武器を取られると思ったか？」

?? 「まっ、半分子想してたっすけどね！」

?? (ニイニが奥の手をまだ使っていないのも使う気がないもの……な)

男は蛇腹剣の刃を地面に跳ねさせながら剣帝に向けて伸ばすが剣帝はその軌道を読み、二振りの刀で弾き続けた

↳ Side: 剣狼

剣帝が竹林で男と戦い始めていた時、剣狼は霧の湖の湖畔で一人の女性と睨み合っていた

?? 「貴女は相変わらず獣臭いですわねえ」

剣狼 「そういう貴女こそ相変わらず、塗料臭いですわよ？」

?? 「ウフフツ、貴女の獣臭には負けますわ」

剣狼 「そんな事ありませんわあ、間違いなく貴女の方が臭ってますわよ？ 映菜（えいな）」

剣狼と向き合っている女性、映菜の服装は全身に白いキャンバスの様な真っ白のワンピースを着込み、着こなしている、そして、髪の毛は剣帝と同様に紅く、髪型は腰に届くほど長い髪をたなびかせていた映菜はニコニコとした笑顔を見せながら相手、剣狼への敵意と殺意で辺りの空気を重くし続ける

剣狼 「フフフツ」

映菜「ウフフフツ」

劍狼「このモノマネ女！」

映菜「このヤンデレ狼！」

劍狼&映菜「『気に入らねえ！』！」

劍狼と映菜はお互いに憤怒を顕にしながら相手に向かつて走って行き、劍狼は大鎌を再度出現させ映菜の首に向けて振るつた

映菜「そんなの、このわたくしに当たる訳が無いでしょう？」

劍狼「チツ、劍帝お兄様のお力を無闇やたらに真似て使うんじゃないわ、虫唾が走ります」

映菜「嫌ねえ、わたくしの力を否定するのですわね？」

劍狼「否定はしませんわ、ただ、単に虫唾が走るので殺すだけですわ！」

映菜「それを世間一般では、否定している、と言うのではなくって？」

劍狼は映菜に激しい怒りを向けながら鎌を振るい続ける

劍狼「第一、貴女も劍帝お兄様を敬愛しているでしょう！なのに、何故お兄様を裏切つたのかしら!？」

映菜「そんな事、理由は簡単ですわ。あの方はわたくしを選ばずにあの女を選んだからですわ！」

劍狼「そんな事は理由にならないわよ！ 劍帝お兄様が妹紅さんを愛し始めていたのはずっと昔、私達が作られる前から変わらない、それは貴女の知っている筈でしょう！」

映菜「ええ！でも、それでも、心変わりをしてわたくしを選んで欲しかった！いいえ、選ぶべきだったのですわ！わたくしはあの女よりも役立ってみせたのに！」

映菜は劍狼の大鎌での攻撃の回避を辞めると、劍狼の鎌を片手で止めた

劍狼「……………この力は……………怪力乱神、『星熊勇儀』さんの力ですわね……………」

映菜「ええ、流石は劍狼姉さんですわ。わたくしの使う能力をズバリと言い当てるとは」

劍狼「当然でしょう？ 私はあの方のお近くにずっと居続けた、貴女が創られるよりも前からずっと、だから、どんな力だろうと私には分かれますわ」

映菜「ならば、たつぷりと堪能させてあげますわ。わたくしの力を！」

劍狼と映菜は叫び声を上げながら互いの力をぶつけ合っている

〈side：死帝〉

死帝「久し振りねー、鏡花（きょうか）ちゃん」

死帝は紅魔館の前の霧の湖の畔で髪型と髪色が透き通るように白い長髪で、服装は上に白いカーディガンを羽織り、その下に水色ワンピースを着た、高身長的女性、鏡花と対面し、近寄っていた

鏡花「ええ、お久しぶりですわ。死帝御姉様……相変わらず若作りしていらつしやいますわね」

死帝「えー、酷ーい！アタシ若作りなんてしてないもーん!!」

鏡花「よく言いますわ……というか、そんな子供の姿でワタクシに勝てると思いですの？」

死帝「むうー！……まあ、この姿じや鏡花ちゃんには、勝てないのも事実ねえ」

死帝は鏡花の発言にプンプンと怒っていたが、改めて言われるとハアー、と溜め息をつき始めた、すると、死帝の周囲に煙が起き、死帝がその煙に全身を包まれ、一分後にその煙の中から突如黒いサイドテールのスタイルの良い大人の女性が現れ出た

鏡花「そのお姿こそ、ワタクシが憧れ愛したお姿ですわ。死帝御姉様！」

死帝「その辺も相変わらずなのね、鏡花ちゃん」

鏡花「ああ、その冷ややかな瞳、堪りませんわ！」

死帝「ハア……どうしてこんなレズっ娘になっちゃったのかしらねえ」

煙から現れた死帝に向かって鏡花はハアハアと息を荒くし、鼻息も荒くしながら近付いていくか、死帝は呆れたような軽蔑しているような、冷ややかな眼を向けながら、一定距離を保つようにしていた

鏡花「それは死帝御姉様や剣帝御姉様や無名御姉様の様にとても綺麗な女性に囲まれ

ていたから仕方の無い事ですわ！」

死帝「意味が分からない上に近寄らないでくれるかしら？ ついでに言うとな剣帝兄は男性のお兄ちゃんが一番よお？」

鏡花「何を仰っているですか？ 剣帝御姉様や無名御姉様は女性の御姉様が一番ですわ！」

死帝（これだからこの娘は苦手なのよねえ……）

鏡花「ああ、気持ち悪がつてる御姉様の御顔も素晴らしいですわ！」

死帝「気持ち悪いって思われてると分かつてるなら、その気持ち悪い発言やめてくれるかしらあ？」

死帝は鏡花の発言に顔をとても嫌そうなものに変え、鏡花が近づいてくる度に身体から殺気を放ち始めた

鏡花「嫌ですわ！ ワタクシは御姉様達を愛しているのです！ それとも、御姉様はワタクシ等を否定するのですか？」

死帝「別に否定はしないわあ、ただ貴方がアタシに向けてくるその感情を気持ち悪いって言ってるのよ」

死帝は鏡花の発言が頭に來たのか懐から子供の姿の時に振るっていたものよりも刃渡りの大きな短刀を二本取り出すと逆手持ちで構えた



鏡花「怖がらなくても大丈夫ですわよ！すぐにワタクシの考えに賛同できるように染め上げて差し上げますわあ！」

死帝「やれるもんならやってみなさいよ、この曇り鏡！」

死帝は怒り心頭の表情をしながら鏡花に切りかかったが鏡花は片手に小さな手鏡を出すと、死帝が持つている二本の短刀を出現させ、死帝が振ってきた短刀を受け止め、弾いてガードした

死帝「こんの糞ガラス……」

鏡花「ウフフツ、今回こそは勝たせて頂きますわ、御姉様」

死帝「ほざくんじやないわよ！」

二人は互いに短刀をぶつけ合い、戦闘を行い始めた

くサイド：双月く

水月と炎月は自分達に向かってくる人影に警戒をしながら銃を構えている

水月「炎月姉さん」

炎月「何？水月」

水月「一旦一つに戻りましょう」

炎月「まあ、様子見にはなるものね」

炎月と水月は相手には聞こえないよう小さな声で会話をすると、同時に銃を上に向けて

てそれぞれ右手と左手を合わせて、双月に戻り、上に投げた銃が降つてくるとそれをシツカリとキヤツチして片手づつで構えた

双月「この病愛郷に如何なる御用件でしょうか？侵入者さん」

??「侵入者とは随分なあいさつじやあねえかあ、一応これでもお前さんらの兄妹なんだぜええ？」

双月に向かつてきた人影の姿は髪色は金髪で爆発したように髪の毛が逆立っていた、そして、服装は耳にピアスを付け下にはダメージジーンズを履き、上は髑髏が背中に描かれたスカジャンを着ていて中には爆発したような絵が描かれた服を着ている男だった

双月「双達の……兄妹？」

音刃「ああ、そうだぜえ、オレは音刃（おんば）、あのいけすかねえ劍帝の野郎が作ったお前らの兄妹だ！」

音刃と名乗った男が怒鳴るように大きな声を出すと、周囲に衝撃波が走り、双月の耳に耳鳴りが鳴り始めた

双月（音刃……ああ、劍帝兄さんの下さった資料に載っていましたね……確か武器は）

音刃「どうしたどうしたあ!!掛かってこいやあ!!」

双月「うる……さい……です！」

音刃「良いねえ良いねえ!! もっと来いやあ!!!」

音刃が叫ぶように声を出し続けると、突如音刃の周囲が爆発し始めた

双月（間違いないですね……音刃、能力は声を爆弾にする力……と声が衝撃波に変わる力……そして、武器はマイク……）

音刃「オラオラあ！本気で行くぞお!!!」

双月「出て……来ましたか……」

音刃が片手にマイクを出現させ、そのマイク越しにでも叫ぶと、音刃の叫び声が可視化出来る様になり、双月に向かって飛んできた

双月「来ましたね。爆裂音声」

音刃「やっぱりオレの能力は筒抜けって訳かあ!!」

双月「当然でしょう！」

音刃「ハッハアア!!! 面白いじゃねえかあ!!」

双月は音刃が放ち続ける叫び声に苦しそうな顔をしながら距離を取り、双月は音刃に向けて二丁拳銃を撃ち放ち始め、音刃も双月に向けて大音量の声と爆発する声を放ち続ける

## 第六十三話 「黒幕の正体」

（side：劍帝）

劍帝「……………チツ」

男「ウケケツ」

劍帝と青と黒が入り混じった髪色の男は互いに持つている劍の刃をぶつけ合い、鏢迫り合いをしていた

劍帝「やっぱり決め手に欠ける……か」

男「当然つすよ、本気のほの字も出してないニイニに負けるオレツチじゃねえつすから」

劍帝「……………はあ、それなら本気を出してやるよ」

男「まあ、だからって本気を出させる隙なんて与えたりはs」

劍帝は男との鏢迫り合いを止めると、男と一旦距離を取ろうとしたが男は劍帝に向けて蛇腹劍の切っ先を伸ばしてきた、だが、劍帝は一切動揺する仕草もなく口を開き

劍帝「……………ダラ、止めろ」

男「ゲツ……………面倒な奴が出てきたつすなあ」

剣帝がダラと言う言葉を発すると、剣帝の後ろの剣帝の少し上の空間が砕けて、そこから超巨大な蛇が現れ、剣帝に向かって伸びてくる蛇腹剣の切っ先を弾いた、そして、ダラと呼ばれた蛇の頭が剣帝の前に来ると、剣帝は申し訳なさそうな顔つきでダラの頭に引っ付いて撫で始めた

剣帝「ゴメンな、ダラ、痛いだろうけど我慢していてくれよ」

ダラ「シヤアア……♪」

剣帝「有難うな、少しの辛抱だからな」

剣帝が撫でるとダラは嬉しそうな声を出し、剣帝の周囲を取り囲み、必死に剣帝を守り続けている、そして、ダラに守られている間に剣帝は自分の腰に赤い出っ張りが2つ前方に付ける部分があるベルトを装着した

side: 無名く

く時間は少々遡りく

無名「はあ………ダツル」

無名は博麗大結界に空いた穴がある場所に向かってため息をつきつつも歩いていた  
無名「面倒事はその根本から断つに限るだろつと……アレか」

無名の視界の先には確かに事前のあふれるのどかな風景から一転、近代的な建物などが広がる景色が空中を突き破って見えていた、そして、その穴の目の前に何万を越える

兵士が立っていた

無名「さあーてとおー、面倒だからさっさと片付けるぜえー」

兵士長「ハッ、て、敵だ！俺を守れ!! そうしたら向こうに帰った後相応の報酬をくれてやる！」

無名「……………一人一人殴ってやろうかと思つたが、止めだ、アイツだけ先に消し飛ばしてやる」

無名は兵士達のリーダー格らしき男の発言が少し頭に來たらしく右手を銃のような形にしてから伸ばすと、手の形を銃のようになしてから、指の先端部から小さな黒い球体を発射し、少し息をついた

無名「ふう……………」

兵士長（な、何だ、もしかして大して警戒しなくても良い相手、雑魚なのか？ だつたら俺が片付けてやろう！）

兵士長「フンツ、見掛け倒しの雑魚風情が！ この俺に楯突いた事を後悔しながら死ぬが良い！」

無名「ハンツ、どう後悔させてくれるのか教えてくれや、雑魚野郎」

無名に雑魚野郎と言われると途端に兵士長は顔を赤くしながら無名に向かって走ってきた、二人の間にある黒い謎の玉の存在を忘れて

無名「速く来いよ、ヘタレ成金童貞君」

兵士長「何だとお!? お前は必ず俺の手で殺してやるぞお!!」

無名「クカカツ、殺れるもんなら殺ってみな」

兵士長「クソ野郎がああ!! 其処にいろよお!」

兵士長は無名に更に煽られると無名に向かつて猛ダツシユを始め、無名はその様子をニヤニヤしながら見つけていた、そして、兵士長は存在を忘れていた黒い球にぶつかり、その玉に吸い込まれ始めた

兵士長「あ……ああ……アアアアア!」

無名「バーカ、金だけで成り上がろうとするからそうなるんだってーの、さあて、テメエ等はどうする?」

兵士長が黒い玉に吸い込まれ終わると、無名はニヤリとした不敵な笑みを浮かべつつ残った兵士達に自分へ勝負を仕掛けてくるかどうかを聞き始めた、すると、残された兵士達はオロオロとして返答を濁らせていた

無名「まあ、所詮は金持ちのボンボンの兵士長なんぞに連れられてた雑魚共だしな、興味すら湧かねえし、シツシツ」

無名が手を払い、あつちに行けと言いつつ挑発をすると、残された兵士達の怒りを買ったように兵士達は無名への殺意が満たされた瞳で無名を見て、銃を無名に向けて構

えた

無名「ほおー？俺とやろうつてのか？………良いぜ、全員殺してやるよ」

無名は六枚の白い大きな翼を広げると、両手に黒い刃の刀を出現させ、自分に向かって兵士達が発射してきた弾丸を全て斬り落とし、兵士達に向かって飛んできた

無名「消えろ、雑魚共が」

無名はすれ違いざまに兵士達の胴体の腹と首に斬り込みを入れて、兵士達の身体を輪切りに斬り捨てた、そして、斬られた兵士達は無名に斬られた事に気付かず、無名の動きを追って体を動かすと体がグラリと崩れ、バラバラになってしまった

無名「鈍感な野郎共だぜ、斬るついでに言つてやるべきだったかな？『振り向くな』とでも」

兵士 a 「えっ？………えっ？ひっ！」

無名がニヤリとした笑みを浮かべながら振り向くと、そこにはさっきまで一緒に立ち向かうとしていた仲間が見るも無残な姿になって死に絶えた事に驚愕と恐怖を隠せず居る兵士達が立っていた

無名「さあて、次はどいつにしようかなあー？」

兵士 J 「………やあ！」

無名が自分の右肩に黒い刃の刀をの刃の反りを当てていると、無名の背後から突如一



人の兵士が切りかかり、無名の服の背中の部分切る事に成功した

兵士J「や、やった！当たった」

無名「テメエ！何しやかんだよ！」

無名は服を切られた事に怒りを覚え、その自分の服の背部を切った兵士が喋っている途中でバラバラの肉片になるまで切り捨てた

無名「俺のお気に入りを斬りやがって、直すの面倒なんだぞ全く……」

服の切られた部分からは無名の背中に刻まれていたとある文様のように入れ墨が見えた、その入れ墨は残虐な笑みを浮かべた六枚の翼を持つ、天使のような入れ墨だった  
無名「あつちやあ……見ちまつたんなら仕方無いなあ……全員バラバラの、物言わぬ肉片になつて貰おうかねえ」

無名はニコニコとした笑みを浮かべたまま二振りの刀を頭上で打ち合わせると、そのまま体の横に向けて開き始めた、すると、その二振りの刀の軌道上に幾十、幾百もの黒い刃の刀が現れ、その全ての刀の切っ先が兵士たちに向かい始めた

無名「さあ、死の舞踏を踊りな、『エンドレスワルツ』」

兵士g「ヒイイイ!!」

兵士a「ギャアアア!!」

無名が音楽の指揮者が指揮鞭を振るうかのように刀を振るうと同時に軌道上に現れ

た刀は全て兵士達の後ろを追い掛け回しながら、兵士達の体を貫き、それと同時に刀はねずみ算式に増殖し、兵士達を追い続け、兵士達の体をバラバラにしていく

無名「はあーあー……もつと骨のある奴は居ねえもんかねえー？……んん？」

無名が兵士達の呆気なさに呆れていると、無名の腰の辺りに剣帝がはめていた物と同様の赤い出っ張るのあるベルトが出現した、無名はそのベルトを見ると、懐から緑色のメモリを取り出し、メモリの差込口付近のボタンを押した

《サイクロン！》

無名「さあて、次の相手は誰かなあー？………」

無名がメモリをベルトの右の出っ張りに突き刺すとメモリは消滅し、無名の意識が同時に切れた、そして、それと同時に機械的な姿の鳥がどこからともなく現れ、無名の身体に光を当てて、無名の体が地面に当たる前に回収し、どこかへ向かって飛び去って行った、そして、無名が居た場所付近は無名が殺した兵士達の死体だけが残っていた

くそして、時間は剣帝がダラに包まれた後まで戻るく

剣帝「……………来たか」

剣帝がベルトを付けてから少し立つとベルトの右側の赤い出っ張り部分に無名が自分の腰に現れたベルトに差し込んだ筈の緑色のメモリが現れた、剣帝はそのメモリをベルトに押し込むと同時に、懐から前もって取り出していた黒いメモリの差込部近くのボ

タンを押ししてからベルトに差し込み、押し込んだ

《ジョーカー!!》

剣帝「変身……は、これを付けてからだな」

剣帝はダラの体の隙間から入ってきた機械的な姿の鳥を掴むと、その鳥をベルトの部分に取り付け、鳥の頭のような場所がちょうど半分になるように開いた、すると、剣帝の目の下に涙のような模様が現れ、剣帝の体が中央部に白い線が走り、左が黒右が緑色の仮面ライダーWエクストリームに変身した

無名「何だ、ダラちゃんが守ってたのか」

剣帝「まあな、有難うなダラ、もう大丈夫だから店に行ってお菓子食べてきなさい」  
ダブルの右と左の赤い瞳がそれぞれ光ると右のタイミングで無名の声が聞こえ、左のタイミングで剣帝の声が聞こえた、そして、剣帝から命令を受けるとダラと呼ばれた巨大蛇はスルスルと身体を伸ばし、発光を始め、小さな蛇のような尻尾が生えた少女の姿に変身した

ダラ「はーい、行つてきまーす」

剣帝「ああ、たとと食べて大きくなるんだぞ……つと、待たせたな」

男「ウケケツ、オレっちは別に待っっちゃ居ないっすよお？」

無名「良く言うぜ、隙間が有つてもダラちゃんにしか攻撃してなかっただろうがよ」

、劍帝はダラに行つてらつしやいというと、男の居る方向へ向き直つた、そして、無名と劍帝は男との会話を始めた

無名「どうでも良いからさつきと始めようぜ？」

男「望む所つすなあー」

劍帝「それじゃ、行くぞ」

劍帝&無名「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

劍帝は男との会話を終えると、中央に走る白い部分から円形の盾とそれに付属するよ  
うに刺さっている剣を出した、そして、その剣の柄頭の部分に一本のメモリを差し込み、  
剣を引き抜いた

《プリズム！》

劍帝「さつきと片付けるぞ」

無名「あーいよ」

男「そう簡単には片付いてやらないっすよおー！」

劍帝が盾と剣を構えると、男は劍帝に向けて蛇腹剣を伸ばしてきたが、劍帝は盾でそ  
の蛇腹剣への切っ先を弾き、男に向かつて走り始めた

side: 劍狼

劍狼「この気配は………劍帝御兄様が御遊びを終えたようですわね………ならば私も本

気で潰すとしようかしらね！」

映菜（御遊びを終えた…本気で潰す…まさか！）

劍狼「卍解…牙劍狼王（がけんろうおう）！」

劍狼が地面に鎌の刃を叩き付け、円を描くように走らせると、鎌の通った軌跡から紫色の光が走り、劍狼の姿を隠した

映菜（劍帝お兄同様に劍狼も卍解は使える……だけと、ワタシは一度も見た事が無かつたわ……理由を昔劍帝お兄に聞いたらこう答えられた……）

劍帝『劍狼が何で卍解しないかって？俺がするなって言ってるんだよ、俺でも手を焼くくらい強いから』

映菜（でも、今ならワタシでも勝てるはず）

映菜は劍狼が光に包まれている内に片を付けようと銀色の刃の剣を手元に出現させると、そのまま構えていたが、突如光から放たれてきた紫色の斬撃に剣を持っていない方の腕が肩ごと切り落とされた

映菜「……………えっ？」

劍狼「あら、外しちゃったみたいね…まあいいわ、すぐに片付けられるし」

斬撃が飛んできた場所から光は地面に治まる様に消えていき、光の中から一対の大鎌を携えた紫色の二股の尻尾を持った劍狼が歩いてきた、そして、劍狼はすぐに何度も映

菜に向けて斬撃を飛ばしてくる

劍狼「さっさとバラバラになつてくれる？じやないと劍帝御兄様の元に行けないし」

映菜「誰が……言う通りに……なるもんですか」

劍狼「そう……だったら仕方ないわね」

劍狼が大鎌の刃を再度地面に叩き付けると、突如大鎌の刃が峰の部分から割れて、その割れた部分に鋭利な犬歯のような牙が現れた

劍狼「噛み千切るしかないわよね」

映菜「……これが本気のアンタの姿なのn」

劍狼「黙つて死んでなさい」

劍狼が瞬時に姿を消すと次の瞬間、映菜の首から上が消滅した、そして、それと同時に劍狼が映菜の後ろに現れ、その手に持つている大鎌はクチャクチャと咀嚼音を立てていた、そして、映菜の体が前のめりに倒れ、地面に当たると、硝子が砕けるようにパリンと音を立てて消えた

劍狼「……ふうん、そういう事でしたか」

劍狼は卍解を解除して砕け散つた映菜だった物の残骸を拾つてから、劍帝が戦っている迷いの竹林の方向に向かって歩いていく

## 第六十四話「帝王の夜」

（side：死帝）

死帝「あら、この気配は…」

鏡花「隙だらけですわ！死帝御姉様!!」

死帝が動きを止めると鏡花は手に持った銀の刃の直剣を死帝の体に向けて振るってきたが、鏡花の刃が当たる前に死帝の姿はするりと消えた

鏡花「あら?……後ろですわね」

死帝「流石にバレちゃったわねえ…まあ、仮にもワタシの妹だものねえ」

鏡花「ええ、その通りですわ。そして、今度は逃しませんわ!」

鏡花は死帝が自分の後ろに姿を現すと同時に指を鳴らした、すると死帝が移動した位置の地面から糸のような物が死帝の体に向かって伸びてきた、そして、死帝はその糸に拘束されてしまった

死帝「あら、随分と硬い糸を用意したものね」

鏡花「ええ…この日の為に剣帝御姉様の使う剣糸の三倍の強度の糸を沢山用意しましたわ」

死帝「ふうん、頑張ったのね……でも、無意味ね」

死帝が糸に拘束されたまま自分の体に巻き付いている多数の糸に触れていくと、その糸は音を立ててブツリブツリと切れていった

死帝「ワタシ以外になら効いてたでしょうけど、ワタシには効かないわねえ」

鏡花「……………死帝御姉様、何故それほどにこちら側へ来る事を拒むのですか？」

死帝「そんなの答えは簡単じゃないの、ワタシは剣帝兄が大好きなの、そして、そんな剣帝兄が護るこの郷やあの家庭が好きなの、だから、それを壊そうとする貴方達は嫌いなものよ」

鏡花「単純にして明快な答えですわね……良いですわ！ワタクシはワタクシの力で御姉様を自分の物に致しますわ！」

死帝「それは今回は無理ね」

鏡花は死帝に掴みかかろうと走って来たが、死帝はまたもや瞬時に移動して鏡花の後ろに周り込んでから喋り始めた

鏡花「何故、そう言い切れるんですの？」

死帝「だって、あなた本体じゃないでしょ？」

鏡花「……………何時から気付いていらっしやいました？」

死帝「何時からって……………顔を合わせた時からかしら」



鏡花が振り返りながら口元を歪ませて質問すると、死帝は淡々と返事をし始めた

死帝「だって、アナタの気配、離反した時よりもずっと弱くなってるし……能力で作った複製体よね？」

鏡花「その通りですわ。ワタクシは複製体、本体ではありませんわ」

死帝「そうでしょうね。だからこそ、倒すのも容易いのよね」

鏡花「そう……でした……か……」

死帝が手に持った二振りの短刀を納刀すると同時に死帝の背後に居た鏡花の身体にヒビが入り、ガラスの様に砕け散った

死帝「さてつと……アタシも行かなきゃね！」

死帝は鏡花が砕け散った後、自分の周囲に煙を発生させると子供の姿に戻り、テトテトと迷いの竹林に向かって歩いて行き始めた

side: 双月

双月は音刃からある程度距離を取りながら手に持った2丁拳銃を撃ち、音刃に向けて弾丸を放っていた

音刃「んなもんがオレに当たるかあ!!!」

双月「やはり普通の弾丸では近付ける事すら不可能ですか……」

しかし、音刃はマイクを口元に近付けて衝撃波の領域に入っている大音量の声を

し、弾丸を止めて落として、自分に当たる事を防いでいた

音刃「オレに弾丸なんぞが当たるかあ!!」

双月「ええ、そうでしょうね。先程も弾かれていたから分かります」

音刃「そうと分かっているならとつとと降伏しろよ!」

双月「嫌です。それに、手がもう無い訳では有りませんし」

双月は音刃の発言を聞きながらハアアと口から大きく息を吐き出し全身の力を抜き始め、その次に今度は息を大きく吸い込み、音刃を見据えるように睨み付け始めた

双月「あまり、兄さんを待たせるのは出来る妹にあるまじき行為なので、さつさと片付けさせて頂きます」

音刃「ハアツハアア!!オマエの攻撃はオレには通じねえぜえ!?!どうする気だ!?!」

双月「こうするんですよ」

音刃「だから、そんなもんはオレにはあだつ!」

双月が音刃を見据えつつ今まで同様に黒い銃から弾丸を撃ち出すと、音刃は笑いながらまた衝撃波の声を出し弾丸を弾こうとした、だが、弾丸は音刃の衝撃波に当たると弾かれるどころか爆発をして音刃の顔に爆炎と爆風、弾の破片が当たってきた

音刃「小娘が…ナメたマネしやがって…」

双月「うるさい方です。とつとと黙って消えて下さい」

双月は音刃に向けて呆れたような口調で喋りつつ、音刃の周囲に白と黒の銃で交互に弾丸を撃ち込み、その後音刃に向けて黒い銃で弾丸を撃ち込んだできた

音刃「同じヘマをオレがする」

双月「連鎖爆裂（チエイン・ボム）」

音刃「熱っ！冷てっ！」

双月がボソリとある単語を言うと同時に音刃の周囲の足元に撃ち込まれていた弾丸が爆発を起こし、音刃の周囲の足元から大量の火炎と大量の氷が音刃に向かって飛んできた

音刃「イテテテツ!!」

双月「これで終わりですね」

音刃が足下の氷や火炎に気を取られていると双月は銃の先端に炎と氷を混ぜたようなエネルギー弾を作り出し、音刃に向けて発射した

そして、そのエネルギー弾が音刃に命中すると大爆発が起こり、その大爆発の間に何が碎ける音が聞こえた

双月「さて、兄さんの元に一番に着いて双が一番良い妹だと証明しないと♪」

双月は楽しそうな表情を浮かべつつ、スカートの裾をはためかせつつ剣帝が戦っている迷いの竹林に飛んでいった

（side：劍帝&無名）

??? 「どうしたんすかあ？ニイ二達、随分と弱くないっすか？」

劍帝 「チツ、うるせえなあ」

劍帝は左手で持つている円形の盾で男から伸ばされてくる蛇腹剣を弾きつつ、右手で持つ剣で切り付けようとするが、男は軽やかな動きで劍帝の剣を回避しつつ距離を取る  
??? 「オレッチが居なくなつてからのの方が弱くなつたんじやないっすか？えっ？どうなんすか？」

劍帝 「あー……苛々する……」

??? 「何すか？オレッチへの怒りっすか？」

劍帝 「チゲえよ、俺自身の弱さに苛立つてんだよ」

劍帝はハアと溜め息をつきながら自分の弱さに嘆き、右手に持った剣を首の付け根の辺りにカンカンと当て始めた

??? 「なら、大人しくオレッチに殺され」

無名 「そんな弱さに嘆いてる劍帝に朗報だぜ……時間が経つたぜ」

劍帝 「ようやくか」

??? 「時間？何の時間が経つたん……まさか！」

無名 「まあ、お前の予想してる通りだと思っぜ？劍帝と駄弁る時間がありや闇討ちで

もすりや良かったのによ」

無名が担当する右側の目の部分が光り、剣帝が剣を天に向けて上げ、軽く振るうと、それまで満天の青空だった空が砕け散り

黒い空に星々が輝き、その中で一際大きく赤い月が輝く夜に突然変化した

??? 「い……何時の間に……」

無名「ちよつと前だな、まあ、取り敢えず……時間切れだな」

男が驚きながら空を見上げてから剣帝達の方向を向き直すと、そこには月と同じくらい紅い髪をした男、剣帝とその横に黒髪長髪の男、無名が立っていた

剣帝「さあ……お仕置きの時間だ」

??? 「……………に、逃げるが勝ちっすね!!」

剣帝「逃がす訳無いだろ」

??? 「グエっ!」

男が剣帝から逃げ出そうと走り出した、だが、その次の瞬間剣帝が目の前の空間を握ると男の体に周囲からでも見て取れるような窪みが現れ、男を拘束した

剣帝「散々コケにしやがって……偽物風情が」

??? 「あつ、やっぱりバレてたっすか?」

剣帝「当然だろう、お前を作ったのは他でもない俺だ、その俺の弱体時で善戦できる

とかあり得ないだろう」

??? 「いやー、おつかないっすねえ」

劍帝「馬鹿にしてんのか…まあいいや、今度は本体で来いや」

劍帝は右手で男を掴み続けながら男に向けて左手を伸ばし、灰色の極太のビームを放ち、男を消し炭にした

劍帝「ふう……………これで終わりだな」

無名「そうだなあ……………ところでもう切っても良いか？」

劍帝「ああ、悪いな、手間を掛けさせた」

無名「全くだ」

無名が全身から力を抜き、ハァーと息をつくると劍帝達の上で輝いていた赤い月が消え、元の新月に戻った

無名「あー…………マジで疲れた」

劍帝「お疲れさん」

無名「お前もな……………さて、帰るか」

劍帝「おうよ、そうだな」

劍帝達があくびをしつつ自分達の目の前の空間に黒い穴を開いていると、双月、死帝、

劍狼が駆け付けてきて、全員黒い穴の中に消えて行った

く  
???  
く

周りの壁が機械的な部屋の中の中央の大きな銀色の机に足を掛けながらとある一人の人影が騒いでいた、そして、その人影にスタスタと一人の女性の人影が近づいて来ていた

??? 「だああ、負けたつすう!!」

鏡花 「申し訳有りません、ワタクシの力不足のせいで」

??? 「あー、気にするなつすよ、あのクソニイニ達が異常なだけつすから」

机に足を掛けていた男は少し前まで剣帝と戦っていた男と同じ姿だった、そして、その男に近付いていたのは死帝と戦っていた鏡花だった

鏡花 「ですが：ワタクシがもつと力を付けていけば」

??? 「良いから気にするなつす、それよりあのクソニイニ達をぶつ倒す方法考えるつすよ、鏡花」

鏡花 「はい！分かりましたわ。裏切（りせつ）御兄様」

青と黒が入り混じった髪の方、裏切と呼ばれた男は腰掛けていた椅子から立ち上がり、鏡花の頭をポンと優しく叩いてから鏡花を連れて退室していった

## 第六十五話 「強大な兄弟の組手」

## 第六十五話「」

前書き

東方とハイスクールD×Dの二次創作です

これはうp主の自己満足品です

キャラ崩壊が多分に含まれます

これは駄文です

妹紅は俺の嫁、異論は認めん

後、オリ主はチートです

後、残酷な表現があります。

それでも良いよって方はゆっくり見て行ってね

あらすじ

く裏切と戦ってから数日後く



セラ「劍帝くん、何処に居るの〜？」

黒影「どうしたあ？セラちゃんよ」

セラ「あつ、黒影君、劍帝君って今何処に居るかなあ？」

黒影「劍帝の居場所だあ？……あー、今は止めとけ、100%怪我するぞ」

セラ「フォールが劍帝の屋敷の中で劍帝を探していると部屋の中から首だけ黒影が顔を出してきた、セラフォールはそんな状態の黒影に劍帝の居場所を聞くが、黒影は辞めるように言ってきた」

セラ「何で怪我するって分かるの？」

黒影「劍帝と無名の居場所がほぼ揃ってるからな、確実に組手中だろうからな、余

波がヤベェんだよ」

セラ「組手？何で二人が組手なんてするの？」

黒影「さしずめ劍帝が体の調子確認の為に無名に頼んだって辺りかねえ」

黒影はソファで横になりながらセラフォールから投げかけられてきた質問に返答していく

セラ「へえ〜、そうなんだあ……それで劍帝君達は今何処に居るの？」

黒影「俺の話聞いてたか？今行くとほぼ確定的に怪我をするぞ？」

セラ「ワタシって実はそれなりに強いから平気だも〜ん」

黒影「あのな……はあ、廊下の奥の階段を降りた先の地下室だ」

黒影はセラフオルーに再度剣帝の居場所について聞かれるとまた答えることを断ろうとしたが、セラフオルーの発言に呆れつつも行き方を教えてくれた

セラ「有り難うね、黒影君、それじゃあねえ」

黒影「はあ……後で見に行くか」

黒影はセラフオルーがルンルン気分で走っていくのを見送ってから軽い睡眠を取ろうとし始めた

く 剣帝邸：地下

セラ「剣帝君く、キヤアツ！」

無名「どうしたぞしたあ!?! 剣帝! 随分と弱いじゃねえか!」

剣帝「喧しい! 長期間力を封じられて過ごした上にその後の帰還後も新月で力が出にくいんだよ!」

無名「長期間って、今回はどれ位だったんだ?」

剣帝「二年」

無名「うっわ、ちと長いな!」

セラフオルーが地下室の入り口に着き、地下室の中を覗くと其処では剣帝と無名がお互いの体目掛けて目にも止まらぬ速さで拳や蹴りを放ち、互いにそれを受け止めてい

た、そして、その受け止めた際に互いの位置から強い衝撃波が放たれる

剣帝「まあ、もうちよいしたらまた行くけどな」

無名「へえ、御苦労なこったなあ、修行か？」

剣帝「まあな、今回の騒動で俺の力不足は痛感したからな、まだ弱い」

無名と剣帝は会話を続けながら互いに蹴りや拳を相手に向けて撃ち放ち続ける、その攻撃の余波で辺りには強い衝撃が走る

無名「力不足って……現状のお前は这个世界での生物内最強じゃねえか」

剣帝「だが、生物を超える相手には勝てない」

無名「それは神って部類だろう、が！」

剣帝「その通り、俺はいずれ神も超える程強くなり続けなければならぬんだよ、あの子の為に」

無名「ばっかだなあ」

黒影「馬鹿はてめえら二人だろうが！ちゃんと周り見やがれ！」

剣帝の言葉を聞くと無名は剣帝の頭に向けて岩をも粉々に砕きそうな蹴りを放ったが、剣帝はそれを右腕一本で難なく止めた、だが、その蹴りを受け止めた際には今まで最も大きな衝撃波が発生した

剣帝「どうした？黒……あつ」

無名「うるせえなあ、誰が馬鹿、あつ……」

セラ「……………」

黒影「テメエ等はまだ少し加減を覚えろや！この部屋の壁ってブラックダイヤより硬いはずなのにんで余波だけでポッロポロに傷が入ってんだよ！」

無名と剣帝に向けて文句を言っている黒影の腕の中には剣帝達の相手の余波で倒れてしまったセラフオルーが居た

剣帝「かなり加減してるけど？」

黒影「……………ああ、そうだよな、テメエの場合は加減してこれだもんな」

無名「第一、倒れる側が悪いだろ」

黒影「テメエは理不尽を辞めろやボケが」

黒影が幾ら文句を言っても無名は知らんと言わんばかりの反応で剣帝は申し訳無さそうな表情をしている

黒影「つたく……………まあ、幸いセラちゃんは余波で気絶してるだけだし……………取り敢えず俺様はセラちゃんをベットで寝かせてくるわ」

無名「あいよ……………さて、続けるか」

剣帝「おうさ、と言いたい所だがここでやると確実に家に響くから終わりだ」

無名「ちえつ、ツマラン」

黒影は気絶しているセラフオルを脇に抱えるとそのまま階段を上がって部屋に向かった

そして、無名は組手を続けるかと提案したが剣帝はそれを却下し、無名はしよぼくれた感じで部屋に向かって歩いて行った

剣帝（……………さて、適当に散歩しに行こつかな）

剣帝は自分の目の前に黒い穴を出現させると、その穴の中に消えていった

く幻想郷：森奥地く

鳥が鳴き、風が吹き抜ける音等の自然の音以外が一切聞こえない森の中に突然黒い穴が開かれ、その穴から剣帝が出てきた

剣帝「ふぁーあ……………さて、情報抹消の煙使っちゃったからなあ……………居るか？、ジャック」

ジャック「なあに？おかあさん」

剣帝「そうか居たか、なら、おいで」

ジャック「はあい」

剣帝が左手を突き出しつつジャックという名前を呼ぶと剣帝の前の木の上にある枝に白髪の目の辺りに縫い跡がある少女が現れた

そして、剣帝がその少女に向けて腕を広げていると少女は嬉しそうな顔をしながら剣

帝の胸に飛び込んできた

剣帝「よしよし、ジャックは良い子だな」

ジャック「えへへ♪」

剣帝「さてと…ジャック、少し悪いとは思うんだがお願いがあるんだ」

ジャック「おねがい？」

剣帝「そう、ジャックが宝具を使う時に発生させる霧に情報抹消を混ぜ込むのをくれるように時々頼むだろ？それをくれないか？」

剣帝は自分の胸に飛び込んできたジャックと呼ばれる少女を抱き止めると優しく頭を撫で始めた

そして、剣帝は少し撫でてからジャックの顔を自分の胸から離すとジャックと視線を合わせてジャックにおねがいをし始めた

ジャック「は〜い、何時も通りわたしたちがそれを作り出したらおかあさんが取るんだよね？」

剣帝「うん、そうだよ」

ジャック「それじゃあ今から出すね」

剣帝「何時もゴメンな、疲れるだろうに」

ジャック「大丈夫、わたしたちはおかあさんに喜んで欲しいもん」

劍帝「有り難うな、ジャック」

ジャックが腰に付けたナイフポーチの様なものからナイフを取り出し、両手でナイフを構えているとジャックの足下から白い煙のような霧が発生し始めた

すると、劍帝がすかさずその霧を小さな瓶で回収し始めた

劍帝「これで良しつと」

ジャック「これで良いの？お母さん」

劍帝「ああ、これで充分だよ、お疲れ様、さあ、俺の店にお菓子が置いてあるからそれを食べておいで」

ジャック「うん、またね、お母さん」

劍帝が煙を回収し終わり小瓶に蓋をすると、ナイフをポーチにしまったジャックが近づいてきた、すると劍帝はジャックの頭を撫でながらジャックの後ろに黒い穴を展開し、話し終わったジャックは穴の中に消えていった

劍帝「さつてつと……出て来いよ無名」

無名「クカカツ、気付いてたか」

劍帝「当然だろう、それで、何の用だ？」

無名「んなもん言わなくても分かっているだろ？」

劍帝「……まあな、さしずめ組手をまたしたいんだろ？」

無名「御明察」

劍帝がジャックが入って行った穴を消し自分の斜め後ろの木の方に意識を向けつつ無名の名を呼び声を掛けると、丁度その位置から無名が現れた

そして、劍帝が無名の要望を言い当てると無名はニヤニヤとした顔付きになり、無名が肯定すると同時に二人は拳を構え、同時に臨戦態勢に入った



## 第六十六話 「劍帝の逆鱗に触れた結果」

「幻想郷：とある森の奥地」

無名「さあ、始めようぜ」

劍帝「まあ……ほどほどでな」

互いに拳を構えている二人の周囲が陽炎の様に歪み、劍帝の周りには蜷局を巻く、金色の龍の様な幻影が現れ

無名の周りには大きく口を開けた六枚の翼のようなものが付いた人骨の頭のような幻影が現れ、互いにぶつかり合いを始め、ぶつかった箇所では赤と青の電流が走り始めた

無名「さつきみたいにテキトウな加減して俺を落胆させんなよ？」

劍帝「そんな事言ってる場合か？馬鹿が」

無名「クカカツ、無駄口叩く余裕が有るんなら問題ねえな」

劍帝「お前こそな」

劍帝と無名がそれぞれ左手と右手をまっすぐ横に伸ばすと、無名の右手には黒色の鞘に収まった柄が真つ黒な脇差が現れ

劍帝の伸ばした左手の先には劍帝が再三開いた黒い穴が開きそこから劍帝の髪の色と同じ赤色の鞘に収まった劍が出てきた、そして、劍帝はその劍の柄を握り、穴から劍を引き抜いた

無名「へえ、それを出したって事は俺がある程度本気出しても平気だな」

劍帝「まあ、そうだな」

無名「んじゃ、今回こそは勝たせて貰うぜ」

劍帝「やれるもんならやってみな」

劍帝が劍を背中に背負い、無名が腰に刀を帯刀すると、劍帝が無名に向けて右手を伸ばし指を動かして無名を挑発すると、無名はそれに乗るように劍帝に向かって走ってき  
た

そして、無名は劍帝に向けて目にも止まらぬ速さで刀を振るってきたが劍帝はさも当然のように左手で劍を掴んで刃を鞘から引き抜くと無名が振るってきた刀の刃を受け止めた

無名「やっぱ受け止めるか」

劍帝「まあな、音速程度じゃ遅過ぎるからな」

無名「普通は音速は充分過ぎるくらい速さなんだがなあ……」

劍帝「俺等の間じゃそんなの通用しないだろうが」

無名「そりやそうだ！」

劍帝「おっと」

無名は劍帝に刀の刃を受け止められて残念そうにしながら劍帝の顔目掛けて突きを放ったが、劍帝はそれを見切つて難なく回避した

無名「チツ……」

劍帝「加減も過ぎるとつまらないからもう少し本気でやろうや」

無名「クカカツ、良いぜ」

劍帝「んじゃ、仕切り直しだなっと！」

無名「うおっ！」

劍帝が無名と鏝迫り合っていた状態から剣を力強く振ると、無名は後方に吹き飛び、それと同時に大きな風が辺りに吹き荒び、劍帝と無名を包むように風が竜巻に変化した

く迷いの竹林：劍帝宅く

セラ「ねえ、黒影君、幾つか質問良い？」

黒影「どしたあ？セラちゃん」

セラ「あの竜巻……何？」

黒影「あー…アレは劍帝と無名が軽い戦闘してるからだな」

セラ「それと、何だか体が重たいんだけど……何で？」

黒影「それはアレだな、剣帝と無名の相手への殺気とか闘志とかのぶつかり合いのせいだな」

セラフオールと黒影は少し距離を開けながら二人並んで縁側に座り、セラフオールが少しつらそうな顔をしながら黒影に質問していき、黒影はその質問に余裕の表情をしつつお茶を飲みながら返答していく

セラ「それじゃあ……アレが剣帝君のホントの本気って事？」

黒影「いやー？出して二割か三割だろうなあ、その程度じゃないと衝撃があんな小規模な訳ねえし」

セラ「えっ！アレで小規模なの!?!あの竜巻周りにあるおつきな木まで吹き飛ばしてるけど」

黒影「ああ、小規模だぜ、剣帝と無名が五割の力とか出したらそれこそこの郷なんぞ軽々と消え去るし、本気なんぞ出したら最早太陽系が消し飛びかねんからな」

セラ「……………剣帝君って何者なの？」

黒影「ん？剣帝は簡単に言うとは怪物だな」

セラフオールは若干怖がるような様子を見せながら剣帝と無名が戦っている竜巻を見つめ、黒影は特に興味も無さそうにお茶を飲んでる

く幻想郷：とある森奥く

無名「さあて、行くぞお!!」

剣帝「良しつ、来いっ!」

無名は一見恐ろしい笑顔を見せながら剣帝に切りかかり、剣帝も恐ろしさが滲み出ている楽しげな笑顔を見せて互いに相手の身体を切り裂いていた

だが、傷付いた端から無名と剣帝の身体は瞬時に傷口を再生して辺りにはただ血飛沫だけが飛び散っている

剣帝「あー、久々の切り合いは楽しいな、無名」

無名「そういうのはもつと本気に出してから言いやがれ! つか眼鏡外せ!」

剣帝「……………あー……………悪い、忘れてた」

剣帝は無名に眼鏡を外すように文句を言われると、ニコニコとした笑顔のまま眼鏡を外し、自分の真横に黒い穴を小さく開き、そこに眼鏡を入れて閉じた

その次の瞬間、剣帝の髪の色が頭頂部から変色し始め、赤色から銀髪に変化し、それと同時に後方に向かって二塊の髪の毛が跳ねた

剣帝「そら、掛かって来いよ」

無名「けつ、ようやく四割出しやがったな、このクソ兄貴が」

剣帝「無駄口叩かずとつととやるぞ」

無名「ああ、分かつてるが、武器はどうする？」

劍帝「……………要らんな」

無名「だな」

劍帝と無名は互いに自分の後ろに黒い穴を開くとそこに劍と刀と鞘を投げ入れ、入り切ると同時に穴を閉じ、相手に向かって殴りかかった

無名「クカカカカカツ、テメエとの殴り合いなんざ久し振りだよなあ！」

劍帝「確かに、そうだな！」

無名「腕は鈍ってねえよなあ!? つと、胴体がら空き！」

劍帝「グフツ! ……そっちこそ鈍ってんじやねえのかあ!? 脳天ガラ空きだぞ！」

無名「うぐおつ! ……やるねえ」

劍帝「テメエこそなあ」

劍帝と無名は互いに互いの身体を拳一つで殴り始め、互いの拳が身体にぶつかる度にビキビキと体の骨にヒビが入り

時にはゴキリという骨が折れる音やボキャツと言う骨が碎けるような音が聞こえてくる、だが、二人は楽しそうに互いを殴りながら高笑いをしている

劍帝「ハア—ハハハハハッ!!」

無名「クカカカカカカツ!!」

そして、二人が互いに相手へのトドメの一撃を叩き込もうとした瞬間、二人の周囲の風や草木の動きが止まった

劍帝「……………無名、お前、時間停止使ったか？」

無名「いんや、使ってねえよ？つか、こんな楽しい時にんな不粋な真似するかよ」

劍帝「と、なると別の誰かか……………」

無名「そーういや劍帝、妹紅ちゃんは今何処だ？」

劍帝「……………今晚の飯を買いに人里だな」

無名「……………行くか」

劍帝「ああ」

二人は互いに拳を納めると、まるで我が子を盗られた獅子のような目付きをしながら時間が止まった世界の中を歩いていく

く幻想郷：人里く

??「デユヘヘツ、偶々手に入れたこの時計がまさかどこぞの薄い本に出てくるような時間停止アイテムだっただなんて」

時間が止まってしまった人里の中で下卑た笑い声を出しながらブクブクと太った不潔そうな見た目の男が歩いていく

太男「しかも、運が良い事に今、正に目の前に藤原妹紅ちゃんが居る……………デユヘヘツ、

たあつぷりと調教して、僕のお嫁さんにしてあげるからねえ」

太った男が妹紅に触れようとした瞬間、その妹紅に向かって伸びた腕を掴み取り、握り潰そうとする手が横から伸びてきた

太男「ブヘツ!?!だ、誰だお前!!」

劍帝「ああ!?!俺はこの娘、妹紅の夫だよ!このクソ野郎が!」

太男「ふ、ふうーん、だったら大人しく止まって妹紅ちゃんが犯されて僕の物になるのを大人しくアホ面しながら見てるが良いさ!」

男はそう言いながら何度も手に持った時計のボタンのような場所を押し、周囲の時間を止めては動かし止めては動かしを繰り返すが、劍帝は余裕で動き続ける

太男「な、何で止まらないんだよお……」

劍帝「残念だったな、俺は妹紅をそういう輩から守る為にその手の類の術を無効化出来るようにしてるんだよ」

太男「だ、だったらこれで!」

劍帝「……………」

男は劍帝に時間停止が聞かないと分かるとすぐに時計に付いたもう一つの能力を発動させた

太男「お、お前は今から『僕の奴隷』だ!良いな!!」



劍帝「はっ？断る、何で俺がお前みたいなグズの奴隷なんぞしなきゃならないんだよ」  
太男「こ、これも効かないのか!？」

劍帝「お前、ちゃんと俺の話聞いてたか？俺はその手の、類、の手を無効化するって言ったよな？類って事は複数種、つまりは、催眠とか洗脳も無効化出来るんだよ、ボケが！」

太男「ひ、ヒエエエ!!化物だあ!!」

劍帝「第一、俺はろくに努力もしねえ様なテメエみたいなカスが、かわいい女子に相手して貰えるとかって妄想を押し付けようとしてるのが一番苛つくんだよ！」

太った男は四つん這いになりゴキブリのように必死に手足を動かし劍帝から逃げていくが、劍帝はその後ろからずんずんと歩いて近づき、人里から出た辺りで男を捕まえた

劍帝「テメエみたいな奴は普通の痛め付け方じゃあ俺のイラつきが収まらねえ」

太男「や、辞めてくれ……た、助けてえ……見逃してくれえ……」

劍帝「はあ？お前はそうやって言って嫌がって助けを求めてくる女の子を見逃した事あるのか？」

太男「そ、それは……」

劍帝「やっぱ無さそうだな……うん、クロだな」

劍帝は男を右手で捕まえるとそのまま片腕で難なく持ち上げ、左手で空のドラム缶を創り出した、そして、そのドラム缶の中に男を投げ入れ

その後、何処からともなく出したボンベの様なものを背負い、そこから伸びるシャワーのノズルのような物をドラム缶の空いた上側に付け、ノズルからとある液体を男に向けて流し始めた

太男「な、何だこの水は……あ、暑い!!肌が焼けて溶けるように、あづっ!!」

劍帝「そら、硫酸風呂の湯加減はどうだ？」

太男「や、辞めっ……どげる……じ、じ……ぬ、……」

劍帝「ああ、死ねよ、今すぐに死ねよ」

劍帝は太った男の頭から大量の硫酸をかけ、男が溶けた事を確認すると何かしらの能力で硫酸だけを消してから自分の指を咬み、ドラム缶の中に血を一滴だけ垂らした

すると、どういう訳か骨の欠片や少しの歯しか残っていなかった太った男の身体が元通りになり蘇った

太男「あ、アレ?……な、なあんだ元々から僕を殺す気なんて」

劍帝「……はあ、お前の頭は相当におめでたいらしいな」

太男「ふえっ?」

劍帝「あのなあ……俺が愛する嫁さんを汚されそうになって、その犯人を捕まえて、

一回殺しただけで済ませると思うか？」

劍帝は冷徹な、まるで家畜を見るような目で男を見ると、男の頭上に手をかざした、そして、服の袖口から多種多様なおぞましい姿をした虫や多様の寄生虫、加えて大量の毒虫、更には殆どの人間が嫌悪対象とするゴキブリなどを放ち、ドラム缶に蓋をした

太男「や、止めつ、来るな！来るなアアア!! オゲエエエ!!」

劍帝「そのドラム缶がお前の墓標だ」

劍帝はドラム缶の蓋が開かないように重りを乗せてから、そのドラム缶を自分の店の裏まで運んでいった

劍帝「さて、蠱毒の実験だ」

劍帝は店の裏の地面に人が二人は入りそうな大きな穴を掘ると、其処に重りが外れなようにぐるぐる巻きにしたドラム缶を投げ入れ、埋めた

劍帝「そのうち掘り返してやるよ」

劍帝はそう言いながらスタスタと自宅へと帰って行った

《後日、掘り起こされたドラム缶の中身は見るも無惨な程に体中を虫に喰われ、更には多様な寄生虫に寄生され苗床となってもまだ劍帝の力のせいで死ねずに居た、体の各部に骨が見え隠れしている男の姿があつたそうな》

## 第六十七話 「茶色い血の味」

「二人が殴り合いをしてから数日後、今日はバレンタイン」

「迷いの竹林奥地：無名の家」

無名「はあー……暇だなあ……」

無名は迷いの竹林にある永遠亭より更に奥に有るとある一軒家の中のリビングでホットカーペットを付け、テレビを見ながらオレンジジュースを飲んでいた

無名「世間は今、バレンタインかあ……こつちにもバレンタイン流れて来ないかなあ……  
……したら何人か俺にチョコくれるだろうし」

無名がオレンジジュースを飲みながら天井を見上げて居ると、突然家中に警報音が鳴り響く

無名「はあ？……俺の家にチョコつてまさか！もうバレンタインは幻想入りしてたのか!?」

無名が半分ウキウキ気分でテレビの入力切替をして、画面の内容を監視カメラに切り替えると、そこには

無名の家の廊下に仕掛けてある直径10m以上は確実にある針だらけの鉄球や明ら

かなまでに当たると体に食い込み噛み千切りそうなトラバサミを気合と拳のみで叩き壊す剣帝の姿が

無名「……………何でアイツはあんなに殺意放って来てんだよ…」

剣帝『無名……………見ているなあ？』

無名「げっ！気付かれた！」

剣帝『今からそつちに行くかなあ？』

剣帝が監視カメラに指差しをして予告をすると、その次の瞬間テレビ画面が砂嵐になり、状況が分からなくなつた

無名「B級のホラー映画かよ……………」

無名（にしても、何で剣帝があんなに殺気を放ってこつちに來てるんだ？……………うーん、思い当たる節があり過ぎて困る）

無名が自分の顎に手を当て、困っていると、一つ、とある事柄が思い浮かんできた

無名（まさか…昨日の…）

く遡る事一日前く

無名「ほーれ！高い高い！」

妹志「たかいたかーい！アハハッ！」

無名「妹志ちゃんは元気だなあー」

妹志「エヘヘ、無名おじちゃんやしやししい」

無名が劍帝の自宅の庭で劍帝の娘の次女、妹志（もか）と戯れ、妹志に頼まれて高い高いをしていた

無名「そーいや、妹志ちゃんは何歳になったんだっけ？」

妹志「んー……四ちやい」

無名「そうかあ、四歳かあ……将来は美人さんになるなあ」

妹志「ママみたいにー？」

無名「おうさ」

妹志「わあーい！」

無名が妹志を抱きかかえて可愛がっていると妹志は嬉しそうに両手を上げて喜んでいた

無名「あー……美人と言えば、明日はバレンタインかあ……」

妹志「バレンタインってなあに？」

無名「ん？女の子が好きの人にチョコを送ったり、友達にチョコを送ったりする日だけ？」

妹志「しようなんだあ……無名おじちゃんもチョコ貰いたいの？」

無名「まあな、どうせ妹志のパパは一杯貰うだろうけど、俺はあんまり貰えないしな」

妹志「無名おじちゃん可哀想……妹志があげるね！」

無名「クカカツ、有難く貰おうかねえ」

くそして、現在に戻るく

無名（まさか……アレか？アレが原因で……か？）

無名が記憶を思い出す事に集中していると、後ろの扉が強く叩かれる

無名「まさか……もう」

そして、また力強く扉が叩かれると、扉は勢い良く開いた、そして、そこには可視化された燃える炎のような気を纏った剣帝がチョコを3つ握っていた

剣帝「よお、無名」

無名「よ、よお、剣帝……どうした？そんなに殺気だつて」

剣帝「喜べ無名、俺の愛する嫁からの義理チョコと、俺の愛する娘達からのチョコだ  
！」

無名「そ、そうかあ……どうせ全部義理だる義理」

剣帝「因みに、娘二人から俺へのチョコは無い……」

無名「………逃げろ！」

無名が何かしらの危機を察知したのかポチリと手元のボタンを押すと、無名の足下が開き、無名はそこに開いた穴に落ちていった

無名「んじや、ばいちゃー！」

劍帝「……………」

劍帝は無名が逃げた様子を見ると、クルリと体の方向を転換して無名の家の外に向かつて歩いていく

↳ 迷いの竹林：内部↳

無名「何で！…………俺の位置が！…………分かるんだよ！」

劍帝「逃げる事無いじゃないか、無名、可愛い妹菜と妹志が丹精込めて詰めたチョコの詰め合わせだぞ」

無名「チョコの詰め合わせは嬉しいが、持ってくる teme は願ひ下げだボケエ!!」

劍帝「ならばチョコはくれてやるから止まれ」

無名「そんなに殺気立ってるお前を信用出来るかあ!!!」

無名は走って逃げていたが、劍帝はその後ろをスタスタと早歩きで走っていく、その二人の距離の差は一向に伸びない

無名「とうか！渡すなら普通にポストに入れとけや！」

劍帝「……………断る！」

無名「はあ!？」

劍帝「さつきくれてやると言ったな、アレは嘘だ、欲しければ俺を倒せ！要らぬと言



うならお前を殺す！」

無名「どつちにしろBadendじゃねえか!!!」

劍帝「さあ！勝ち取るが良い！」

無名の後ろをずんずんと進んでいく劍帝の髪は一旦銀色の長髪になったが、すぐにまた赤髪の短髪に戻り、更には劍帝の姿が黒いロングコートに変化し、劍帝の後ろに後光のようなものが現れた

無名「テメエエエ!!一々弟にチヨコ渡すだけで本気出すなよ！」

劍帝「貴様が何時までも逃げるからだ」

無名「し、る、か、ボケエえええ！」

劍帝「さあ！俺からチヨコを勝ち取ってみろ！」

無名「無理じゃボケエ！テメエはもう既に生物の域を超えてるじゃねえか！」

劍帝「それは要らないと判断する、なので貴様を殺す！」

無名「理不尽じゃねえーかあー!!!」

無名は必死に劍帝から逃げる為に走るが、劍帝はその後ろを小走りで追い続け徐々に近付いていく

無名「クツソ、が！」

劍帝「おっと」

無名「無かったことにすんなクソが！」

劍帝「知らんなあ」

無名は逃げている最中に後ろを振り向き、劍帝に向けて黒い球体を投げ付けるが、劍帝が右手を目の前で軽く振ると、黒い球体は元からそこになかったかのように消えてしまった

劍帝「さあ、大人しく勝ち取れ！」

無名「支離滅裂なんだよ！」

劍帝「知らん、な！」

無名「クソ兄貴がああ!!」

無名は黒い球体が消された事を見てから、今度は地面から劍帝に向けて大量の剣を発生させつつ、走らせた、だが、劍帝はそれと同等の勢いで無名に向けて剣を発生させつつ走らせ、相殺した

無名「はあ……クソ兄貴があ……無駄な体力使ってんじやねえよ……」

劍帝「ふあーあ……そうは言ってもな……お前が妬ましいからな」

無名「どうせ、お前の娘ちゃん達がお前にチョコを渡さなかったのは、アレのせいだろ」

劍帝「……多分な」

無名と劍帝は互いに向き合いつつ話し合い、無名は話している最中に竹林の外にある劍帝の店の前を親指で指差した、そこには山盛りに積まれた包装されたチョコの箱が見える

無名「お前が毎年のごとくあの山を貰ってるから、お前の体を心配してるんだろ」

劍帝「それでもやっぱ俺は娘二人からのチョコが欲しい！」

無名「あつそ、取り敢えずこれは俺が貰つとくわ」

劍帝「あつ……………まあ、それも一応勝ち取った、に入るかな？」

劍帝がチョコの山を見つめながら娘二人からチョコが貰えない事を落胆していると、その隙に無名が劍帝の横を通り過ぎつつ包装されたチョコの詰め合わせを持っていった

劍帝「……………ああ、そういえば、無名！」

無名「んだよ！まだなんか有るのかよ！」

劍帝「いや、近々俺が休眠するから、その間のあの娘等の警護宜しく」

無名「はっ？何する気だよ」

劍帝「いやー、外界からの侵攻でちと警備を厚くしようと思つてな、とある物作るつもりなんだわ、俺の見立てだと一年は寝る」

無名「……………はあー、了解だ、で、何作るんだ？」

劍帝「白い文明破壊兵器」

無名「……………なるほどな、理解した」

劍帝はチョコを持って帰っている無名の横に並び帰り始めつつ、無名に近々自分がやる事等を伝えていった

## 第六十八話 「紅き王の眠りと白き巨兵機」

「劍帝が無名を押し掛け回していたすぐ後：劍帝の店の目の前」

劍帝「ふあー……皆、良く集まったな」

劍狼「いいいえ、劍帝御兄様からの呼び掛けとあらば例え家事の途中であろうと駆け付けますわ！」

双月「その後片付けやるのは双なので出来れば控えていただきたいのですが……」  
死帝「どうでも良いけど、なあに？劍帝兄」

劍帝は黒いロングコートの姿のまま劍狼、双月、死帝、無名の目の前に立っていた、そして、眠そうにながらも話し始め

劍帝「えー……今からちと前から作ろうと思ってた、とある巨大兵器を作るんだが」  
劍狼「どう致しました？」

劍帝「いや、作るとそのまま一年間ほど寝るからな、あの娘達の警護、任せたぞ？」  
双月「分かりました！双にお任せ下さい！」

劍狼「双月には負けませんわ！」

劍帝「気合があるのは結構……それじゃ、作るからちと離れてろ……それから無名」

無名「何だ？」

劍帝は段々臉を降ろしつつ、眠そうな目を擦りつつ無名に話し掛ける

劍帝「俺が今から作る物、誰にも触られないように保管宜しく」

無名「あいあい、わあつたよ」

劍帝「……頼んだぞ」

無名「んじゃ、後始末は俺等がやつとくからよ、きつちり作って、ゆっくり寝な」

劍帝「ああ」

劍帝は無名と喋り終わると全身に力を込めて、自分に備わった能力を使って自分の目の前に何か白い物を作り出し始めた

そして、その作り出されていく白い物はどんどん形が出来上がって行き、劍帝が立っている場所辺りには一見人の足のようにも見えるものがあつた

更に、劍帝が作っている物はそのまま上に向かつてまっすぐ伸びていき、胴体らしき場所には無数の管が伸びていて、その中央部に目立つように赤い球体が嵌められていて、そこから上に更に伸び、龍のような頭をした白い巨大なロボットが出来上がった

劍帝「はい……完せい……zzzz」

無名「おっと、危ない危ない」

死帝「無名兄、これってもしかして」

無名「ああ、製作者が近くに居ない状態で起動すると自己判断で悪い文明と判断した物をぶつ壊す、ギヤラクトロンだな」

死帝「やつぱり……」

剣帝はギヤラクトロンと呼ばれた白い巨大な機械を作り終えると同時に前のめりに倒れ込んだが、無名がすかさずその身体を支えて抱えた

死帝「で、剣帝兄はどうするの？」

無名「何時も通りあそこにポイだな、起きたらどうせすぐに戻ってるだろうし」

死帝「……あのー、えっと、セラフォルーちゃん、だっけ？あの人にはどう説明するの？」

無名「適当に嘘で誤魔化しときゃ良いだろ、じゃ、俺は行つてくるわ」

死帝「行つてらっしゃーい……」

無名は剣帝を抱えたまま自分の目の前に自分が入れるほどの黒い穴を開き、そこに入るまでに首だけ後ろに振り向き、死帝からの質問などに答えてから穴の中に入つて行つた

死帝「さあて、どんな嘘にしよつかなあ〜」

死帝は黒い穴が閉じると同時に面倒そうな顔をしつつ、剣帝の屋敷に向かつて、スタスタと歩いていった

く??く

無名「よつこらせつと」

無名は謎の真つ黒い空間に眠っている剣帝の身体を優しく置いた

無名「これで良しつと」

剣帝「妹紅く……むみや」

無名「寝言を言うんだつたら俺が帰つてからにしてくれよなあ」

無名はブツブツと文句を言いながらも歩いていき、黒い穴の中に入り、そのまま元居た場所に帰つて行つた

《迷いの竹林：内部》

無名「ただいまくつと」

死帝「お疲れ様、無名兄」

無名「有難うな、死帝」

双月「大した事もない癖に、無駄に偉そうですね。女たらし」

無名「テメエは少しは義兄を敬う気はねえのか」

無名が黒い穴から出てくると、死帝が無名の目の前まで走つてきて、劳いの言葉を掛けた、無名はその言葉に有難うなど言いつつ死帝の頭を優しく撫でている

そんな様子を死帝の少し後ろから見っていた双月が不機嫌そうな表情をしながら無名



に嫌味のような言葉を言ってきた

双月「有りませんね。第一、双達は劍帝兄さんや死帝姉さんは兄妹と姉妹と認めていますが。貴方のような女たらしは兄としては認めていません」

無名「あつそ……死帝、悪いがビール取ってきてくれよ」

死帝「はゝい」

双月「少しは自分で動いたらどうですか？」

無名「知らんなあ、つと、有難うな死帝」

無名は双月からの嫌味を聞き流しつつ死帝に飲み物を取ってくるように頼み、死帝は頼まれた飲み物を取りにキッチンに向かつて行った

そして、死帝が走っていく姿を見ながら双月は更に無名に文句のような物を言っているが、無名はその言葉もスルーして、帰ってきた死帝から飲み物の缶を受け取り、開けて飲み始めた

無名「くうう、美味しい」

劍狼「劍帝御兄様が居ないからと飲み過ぎないで頂けますか？無名御兄様」

無名「別に樽ごと飲んでるんじゃないやねえんだし、良いじゃねえかよ」

劍狼「劍帝御兄様が居ないので追加が用意出来ないのです」

無名「はあ……はいよ」

無名が美味しそうに飲み物を飲んでいると、死帝が飲み物を持ってきた方向から劍狼がゆつくりと歩いて来た

そして、劍狼は無名に小言を言い始め、無名は仕方無いと言わんばかりの態度をしながら劍狼の小言を聞いていた

無名「さて……セラフオルーちゃんにどう言おうかねえ……」

無名はビールを飲み終わって、空き缶をゴミ箱にポイと投げてから、セラフオルーへの言い訳を部屋の中で椅子に座りながら天井を見つつ考えていた

## 第六十九話 「双子と次男は仲悪し」

「劍帝が眠りについてから数時間後」

《迷いの竹林：劍帝の自宅の前》

文「えー、本日はこの幻想郷設立に関わった三人の内の一人！妖悪劍帝さんに取材をしてみたいと思います！」

劍帝の自宅の目の前で黒髪に頭に赤い山伏を被っているような帽子を乗せた背中に一対の鳥のような翼を生やした少女、射命丸文が喋っていた

文「では、早速突撃したいと思います」

無名「うるせえ！」

文「あつ、こんには無名さん」

無名「おうよ、こんには、文ちゃんよ」

文「どうしたんですか？不機嫌ですわね」

無名「ああ、何処ぞの誰かさんが家の前で喧しかったからなあ、機嫌も悪くなるわ！」  
文が劍帝の自宅の扉を押し開けて突撃しようとしていると、文の頬を掠めるように扉が竹林を飛んでいった

そして、その扉があつた位置には両手をポケットに入れている不機嫌な顔付きの無名が立っていた

文「えーつと……もしかして、私のせいですか？」

無名「ああ、文ちゃんのせいだな」

文「それは……その……すみませんでした」

無名「……はあ、良いぜ、許してやるよ、ところで何の用だ？」

文「えー……実は、本日は剣帝さんに密着取材したいなと思つてきたんです」

無名「ああ？ 剣帝に密着取材だあ？……悪いが剣帝は今、用事で出掛けてるから一年ほど帰つてこねえぞ」

文「えっ！ な、何ですか!？」

無名「外にデカイ機械あるだろ？」

文が剣帝の自宅の前に行ってきていた理由を話すと、無名は剣帝は今不在である事、しばらく帰つてこない事、そして、その原因を文に話した

無名「あのデカイの作り出して、剣帝今寝てるんだわ」

文「なるほど……では、今回は主旨を大きく変更して無名さん達に取材をさせていただきますね！」

無名「……はっ？ 今何つた？」

文「ですから。取材ですよ。取材、普段は劍帝さんと抱き合せめに取材してきましたので、今回は無名さんや他の御兄妹に根掘り葉掘り聞くつもりです!」

無名「……………仕方ねえなあ……………但し、答えられねえ質問は答えねえからな?」

文に取材をしたいと言われて、無名は後頭部をボリボリと書きながら質問に答え始める

文「有難う御座います!では、早速、質問なのですが。無名さんの好物ってなんですか?」

無名「俺の好物なあ?俺の好物は日本酒、お菓子、酒の肴になるような料理とかだな」

文「まんま酒飲みですね…」

無名「うるせえ!酒が好きで何が悪い!劍帝も好きだろうが!」

文「あー、そういうえば劍帝さんも度々宴会の場に現れては鬼の方々と飲み比べをなさってますね……………何故か劍帝さんが全勝してますが……………」

無名「アイツ色々と桁が違うから飲めるんだとよ」

文は無名への取材を開始し、そして、無名からの返答を逐一メモ帳にメモしていった文「なるほどなるほど……………ところで、また質問なのですが」

無名「何だあ?」

文「無名さんは普段は何を為さっているのですか?」

無名「ああ？警備だよ警備、幻想郷内部で問題が起きてないかの巡回だよ」

文「はあー、だから何時も人里の中などを歩き回って居るのですk」

双月「そんな訳が無いでしょう。こんなちやらんぼらんがそんな責任感ありそうな人がやる事をやると思いますか？」

文が無名からの返答をメモ帳にメモしていると、文の後ろに突然双月が現れ、ツッコミをしてきた

無名「誰がちやらんぼらんだと、この半分女」

双月「あなたの事ですよ？この女ったらし！」

無名「あゝあゝん？？」

双月「やりますか？この男女」

無名は双月に煽られると、玄關から双月に向かってスタスタと近づいていき、無名の周囲には剣帝と戦ったとき同様に六枚の翼がついた天使の頭蓋骨のようなオーラが現れた

それに対して双月も自分の周りに半分が業炎を纏うタコのような頭部、もう片方が吹雪が周囲に起きている白い猿人の様な顔のオーラを発生させている

無名「全くもって可愛くねえ妹が……」

双月「あなたに可愛いと思われても微塵も嬉しくないので、結構です」

無名「ああ、そうかい！」

双月「今度こそは倒してあげます！」

無名は双月に近づくと同時に両手に黒いハンドガンを創り出し、双月に向け

対する双月も腰に付けたガンホルダーから黒と白の2丁拳銃を素早く取り出し、無名に向けた

無名「死に散らせえ!!」

双月「あなたこそお！」

無名「ぐっ！」

双月「がっ！」

そして、二人は同時に引き金に指を掛けて、今にも銃撃戦が始まろうとした、その次の瞬間、無名と双月の頭に勢い良く紫の刃の大鎌が振り下ろされ、二人は痛そうに頭を抑えている

劍狼「全く……無名御兄様、双月、お二人共いい加減して下さいませ」

双月「だって、あの女ったらしが」

劍狼「だって、へつたくれも、有りませんわ！劍帝御兄様が不在の時にこの郷を壊して劍帝御兄様に大目玉を食らいたいんですの!?!」

双月「そ、そんな事有りません！」

劍狼「なら、大人しくして下さいませ！無名御兄様も宜しいですわね！」

無名「あー、はいはい、わあったよ」

劍狼は二人の頭へ大鎌を振り下ろした後すぐさま大鎌を消し、二人への説教を始めた。そして、双月と無名はそれぞれ説教を受け、双月は劍狼に敬礼しながら反省し、無名は『テメエの説教は聞き飽きた』という感じで反応した。

文「あ、あのお……劍狼さん」

劍狼「はい、何ですの？」

文「劍狼さんって……無名さんよりも強いんですか？」

劍狼「いいえ？本来は私は序列四位、無名御兄様が二位なので無名御兄様の方がお強いですわ」

文「序列、とは何の事ですか？」

劍狼「序列というのは私達の強さをランキングにした物ですわ。私は四位、無名御兄様が二位、劍帝御兄様が一位、上に行けば行くほど強くなりますわ」

文「そうなんですか……それじゃあ、何故、無名さんを劍狼さんが止められたんですか？」

劍狼「ああ、その答えは簡単ですわ、実は……」

無名「劍狼！」



文は劍狼へ質問をし始めた、すると、劍狼はすぐさま振り返り文からの質問に返答し始めた

そして、文はその質問への返答の音を聞き、また別の質問が頭の中に思い浮かび、その質問を劍狼へとして、劍狼もその質問に答えようとしたが途中で無名が怒鳴った

劍狼「……………分かりましたわ。無名御兄様」

文「あのお、先程の質問への返答は」

劍狼「申し訳ございませんが、あの質問への返答は無しとさせて頂きますわ」

文「そう……………ですか。分かりました」

文は質問への返答をされないと分かると一瞬だけ嫌な顔をしたがすぐにその顔を辞めて、メモ帳を閉じて空中に浮いた

無名「何だ、もう取材は良いのか？」

文「あつ、いえ、まだ質問したい事は有りますが。このままここに居ると命の危機を感じるので……………」

無名「そうかあ、じゃあ、またな」

文「はい、またお会いしましょう」

文は無名達へ別れの言葉を告げると、竹林の外へと飛び上がり、そのまま自分の新聞を作る事務所のある山に向かって飛んで行った

無名「さつてつと、戻るぞ」

双月「……………あなたに命令されるのは癪です」

劍狼「双月、そんな風に言つてないで戻りますわよ」

双月「分かってます」

文が飛び去ると無名、劍狼、双月は劍帝の自宅に戻って行き、三人が家の中に入ると、無名が蹴り飛ばした扉が自動的に戻って来て、修復された

## 第七十話「帝王の再来の決定」

く 剣帝が眠りについてから一年後く

《??》

剣帝「ふあーあ……………良く寝たあ」

剣帝は周囲が完全に闇に包まれた真つ暗闇の中で上体を起こして、眠気眼を右手で擦っている

剣帝「あー……………もう一年も経ったのかあ」

剣帝は今現在、自分が居る場所と現在に到るまでで一番新しい記憶に残っている、自分が言った言葉を思い出していた

剣帝「……………一年もあの娘に会えてないからな、早く帰らないとな」

剣帝はそう言いながら、自分の目の前に黒い穴を展開し、そのすぐ後に自分の顎に手を当て考え始めた

剣帝（普通に帰ったんじゃ、サプライズ感無いなあ……………そうだ、アレをやろう）

剣帝はニヤリと笑みを浮かべると右手を強く握りながら黒い穴の中に入って行った

《剣帝の自宅》

劍帝「ただいまあゝ、つて言っても誰も反応しないだろうけど、ねっ！」

劍帝が自分の自宅に帰ると、そこには全ての動きが停止した世界が広がっていた

劍帝「いやあ、こうすれば多分妹紅をびつくりさせられるだろうなあ」

劍帝はぶつぶつと独り言を言いながら、自分の部屋から出ていき、リビングへと向かった

そして、劍帝が向ったリビングには妹紅がソファに座っており、劍帝は妹紅の姿を見つけると妹紅の後ろに周り込んでから、右手を開いた、すると、同時に止まっていた時間が全て動き始めた

劍帝「ただいま！妹紅」

妹紅「わっ…何するんだ、劍帝」

劍帝「いやあ、会うの一年ぶりだからさ、驚かせたくてね」

妹紅「それなら他の方法を使ってくれよ、流石に怖い」

劍帝「ごめんゴメン」

劍帝に突然抱き着かれると、妹紅は一瞬驚いたが、抱き着いた人間が劍帝と分かるとすぐに驚きが消えて何時もと変わらない表情に戻った

妹紅「そういえば、今回の眠る原因は外に立ってた、あの白い巨大な機械のせいかな？」

劍帝「あー…：うん、そうだね、ゴメンね？前もって言わずに寝ちやって」

妹紅「別に気にしちや居ない……剣帝が突然なのは何時もの事だし」

剣帝「本当にゴメン……妹紅」

剣帝は何度も妹紅に謝りながら妹紅の頬を優しく撫でている、そして、そんな状態の二人の後ろに突如黒い穴が開き、そこから剣帝の頭に向けてチョップが振り下ろされてきた

無名「イチヤつくなら自室に……しやがれ！」

剣帝「……フンツ」

無名「……何で見もせずに平然とチョップを止めて、更に俺の手首を折ってんだよ」  
剣帝「いきなり攻撃してくるお前が悪い」

だが、剣帝は自分の顔を微動ださせずに一切後ろを見ることも無く、その振り下ろされてきた無名のチョップを片手で受け止めて、当然のように無名の首をゴキリツと音を鳴らしながらへし折った

しかし、無名は『あー、イテテ』とだけ言って、何事も無かったかのように振り下ろした右手の手首をまたゴキリと鳴らして元に戻した

無名「つうか、お前、どうやって俺のチョップを……あー、そういう事か」

剣帝「さて、どういう事だと思う？」

無名「テメエもその力に随分と馴染んだなあ、神の力を目だけに部分展開して、正に

”神眼、を使つて……さしずめ未来視でもしたか？”

劍帝「正解、奇襲されたら面倒だからね」

無名が劍帝に文句を言う為に劍帝の目を見ると、劍帝の目は普段の黒色から金色に変色していた

無名「まあ、それが出来れば探知とか簡単だもんなあ」

劍帝「まあ……なあ」

無名「どした？ 劍帝」

劍帝「えーつと……人里にちよいと懐かしい人が居るから会ってくる、ゴメンね？ 妹紅」

妹紅「大丈夫だから、行ってらっしゃい」

劍帝は無名と話している最中に三秒間だけ止まると、妹紅から離れて近くのコート掛けに掛けて有った、コートを着てから帽子を右手で取り

そして、妹紅に謝罪をしてからリビングの出口を開き、帽子を頭に被つてからそのまま玄關の扉を開いて外に出て行った

無名（それにしても……劍帝が懐かしいって言う相手……誰だか気になるし付いて行つてみるか）

そして、劍帝に続いて無名も家から出て行った

く幻想郷：人里く

劍帝（んーっと……あの人は……おっ、居た）

劍帝は人里の中で人混みをすり抜けるように歩き、とある一軒の茶屋の店先の長椅子に座った

劍帝「スママセン、みたらし団子と三色団子を六本」

店員「はい、承りました」

そして、お店の中に居る店員に注文をすると、帽子を脱ぎ、自分の横に置いてから口を再度開き、自分の斜め後ろに座っている三度笠を被った男性に話しかけ始めた

劍帝「………お久しぶりですね。師匠、相変わらずお元気そうで何よりです」

男「フツ、お主に心配をされるとはな……」

劍帝「そりゃあ、長い間姿が見れなきや心配しますよ。お孫さんも心配してますし」

男「あの子にはもう教えるべき事は教えたから、問題は無い筈なんじゃがな」

劍帝と喋っている男性は顎から生やしている白い髭を触りながら劍帝に応対をしている

劍帝「一応、血の繋がった数少ない親族の安否ですし。そういう事関係無く心配すると思いますよ?」

男「まあ……それもそうじゃな」

劍帝「……………納得してるフリして、本当は納得なんてしてないんでしょ？ 違いますか？ 妖忌師匠」

妖忌「無論、あの子に儂が付いていてはあの子が儂に頼ってあの子の成長の妨げとなってしまうからのお」

劍帝と話していた男性、妖忌は頭から三度笠を脱いで自分の隣に置いた

劍帝「妨げ……………ですか」

妖忌「うむ、故に今のところは儂は戻らぬつもりじゃ」

劍帝「それでも偶に位は」

店員「お待たせ致しました」

劍帝「ああ、スミマセン」

劍帝と妖忌は背中越しに喋り続け、妖忌の発言に反応して劍帝が後ろを振り返ると同時に店員が注文していた団子を皿に乗せてやってきた

劍帝「とにかく…モギユモギユ……………一回は…ゴツクン……………戻った方が良いのでは無いですかね？」

妖忌「儂は別に逃げるつもりはないから食べるか喋るかどちらかにした方が良いと思うがのお？」

劍帝「……………そういう事ならそうしますかねえー」



?? 「ギヤッ！」

劍帝は団子をモグモグと食べ進め、串を一本食べ終わると、妖忌の方向を向きつつ串を後方に弾き飛ばした

すると、劍帝が串を飛ばした方向に居た劍帝に銃を向けていたと思われる黒い服装の男のオデコにクリーンヒットした

劍帝「ワァー、キズカナカッタナー、ソナトコロニイタラアブナイゾー？」

妖忌「わざとらしいにも程が有るのお？ 劍帝」

劍帝「まあ、気付いてましたからね。店の屋根の上の後二人と…近くの民家の間に後三人、それから、店の店員もグルですかねえー」

店員「な、何の事でしょうか？」

劍帝「惚けなくても良いですよ？ 団子の味が変でしたし、さすじめ麻痺の薬つてところですかね。まあ、人間が作った薬程度の毒みたいな薬じゃ、俺には通じませんから。問題無いですけど、ね♪」

劍帝は黒い服装の男の近くに座り込み男のオデコから串を引き抜き、喋り始め、ある程度喋ってから店の方向に向き、自分に向かつて放たれてくる銃弾の軌道を串一本で逸らしつつ、店員の近くに歩いていく

店員「ば、化物め……」

劍帝「今更気付いたのかな？俺は紛れもない化物だよ？つと」

男「グフツ……あ……あ……あ……」

劍帝「おいおい、劍狼、勝手に殺すなよ」

劍帝が店員のすぐそばに立ち、店員を見下ろしながらニヤリと笑みを浮かべていると劍帝が少し前まで居た場所に寝そべっている状態の男の腹部の背中に何処からともなく紫色の刃の大鎌が飛んできて男の体を貫通して突き刺さった

そして、劍帝が男のその状態に気付くと振り向きながら劍狼の名前を呼んだ、すると、大鎌の形がグニヤリと歪み初めて、人の形を取った

劍狼「劍帝御兄様に敵意を向ける途方も無い阿呆を見逃すなど、私には出来ませんわ！！」

劍帝「あー、うん、忠義心は結構なんだが、俺的には情報欲しいから……ね？」

劍狼「……なるほど、了解致しましたわ！」

劍狼は劍帝に軽く抗議をしてから、劍帝の言い分と聞くと二秒間だけ顎に手を当てて考えてから納得をして、腹部に穴を開けられた男の横腹を蹴り上げ始めた

劍狼「貴方達は一体誰の差し金ですの!?何処の誰が私の愛する劍帝御兄様に貴方達のような輩を差し向けたんですの!?!」

男「グツ!……ガハツ!……ゲホツ!……オエツ!……うう……」

劍狼「早く答えなさい！」

劍帝「劍狼く？ステイステイ」

劍狼は男の横腹を蹴り続けながら男に質問し始め、男が痛みで呻いて質問の返答を中々しない事に腹を立てたのか劍狼は劍帝を止める直前、男顔面を全力で蹴ろうとしていた

だが、劍帝にステイと言われると、ニツコリとした笑みを浮かべながら足を揃えて劍帝の方を振り向いた

劍狼「何ですか？劍帝御兄様」

劍帝「ソイツ、もう腹に風穴開いてるから、な？そんなにお前が蹴っちゃ死んじゃうだろう？」

劍狼「そんな……御自分の身体を狙ってきた阿呆の傷を心配するだなんて！私、感激致しましたわ！」

劍帝「あー、はいはい、そんな事はどうでも良いから全員捕まえて来い……よつと」

劍帝が自分の後頭部を掻きながら倒れている男に歩いて近づいていると、劍帝の後頭部目掛けて風を切りながら一発の弾丸が猛スピードで飛んできた

そして、その弾丸が劍帝の後頭部に当たる直前で、劍帝はその弾丸を人差し指の親指の二本だけで摘んで止めて、その弾丸の形状を見てから飛んできた方向を見つめた

劍帝「んー……イマイチ見えないなあ……仕方無い、ちよつと、視えるようになるか」

く人里から五キロ離れた地点く

狙撃手「嘘だろ!?あの弾丸も止めるのかよ……」

劍帝の居る位置から五キロほど離れた位置に居た狙撃手は劍帝の行動に驚いて一旦スナイパーライフルのスコープから目を離し、そのすぐ後に劍帝の様子をスコープで確認した

すると、狙撃手がスコープを覗いた瞬間に見えたのは変わらず狙撃手の居る方向を見ていた劍帝の姿だったが、ただ唯一、劍帝の顔付きがニツコリとした笑みに変わっていた

く人里く

劍帝「見い付けたあつと」

劍狼「行つてらつしやいませ、御兄様」

劍帝「ん?行かないよ?向こう行くまでで逃げられたら面倒だからね」

劍狼「では、どうなさるおつもりですか?」

劍帝「こうする」

劍帝は自分の懐に手を入れ、そして、ゆつくりとある銃を引き抜いた、その銃の銃

身にはXという文字が刻印されていた

劍狼「ああ……その銃を使われると言う事は……一応周りへの被害削減の配慮ですの？」

劍帝「まあねえー」

劍狼「それでは、私はこの阿呆共を連れて先に戻って居ますわね」

劍帝「あー、速攻で終わるからちよい待ち……なっ！」

劍帝が取り出した銃のトリガーを引き絞ると、劍帝の持っている銃からは橙色の炎の塊のようなビームが放たれ、そのビームは狙撃手の元に難なく届き、狙撃手を骨一つ残さずに焼き尽くした

劍帝「さっ、帰るぞー」

劍狼「はい、分かりましたわ」

劍帝はビームを撃ち終わると、銃を懷に仕舞い込み、自分を狙ってやってきていた連中を目にも止まらぬ速さで気絶させていき、脇に抱えた

そして、劍狼と合流してから妖忌に『それでは師匠、また何処かで』と言い残して人里から歩いて帰って行った

く劍帝の自宅前く

劍帝「聞き出し宜しくなー、まあ、大体の予想は付けてるけど」

劍狼「畏まりましたわ」

劍帝「んじや、また後でなーつと」

劍帝は持つてきていた刺客たちを全て劍狼に渡すと、扉を開けて自宅の中に入つて  
いった

劍帝「ただいまあーつと」

セラ「あつ、丁度良い時に帰つてきてくれたね、劍帝君」

劍帝「どうしました？セラ様」

セラ「こつち来てから一年経つてるし、ちよつと里帰りしたいの」

劍帝「……………ちよつと待つてて下さいね、夜鴉様に許可取つてきますので」

劍帝はセラフォルーに里帰りしたいと言われると溜息をつきながら再度家の外に出  
て、空を見上げて息を吸い込み

劍帝「夜鴉様ー！」

ペタン「主への連絡ですか？」

劍帝「あつ、はい……………実は……………」

劍帝が再度ハイスクールD×Dの世界に夜鴉に送つて貰おうと夜鴉の名前を呼ぶと、  
やつてきたのは夜鴉ではなく、その部下のペタンだった

劍帝「俺の家に居るセラ様が里帰りをしたいと言つていました」

ペタン「そうですか……理由は？」

剣帝「一年間会ってないから寂しくでもなったんじゃないですかね？」

ペタン「ではもう帰ってこなくてもいいですね。何度も何度も次元超えるのは私共としても面倒なので」

剣帝「……………一応、俺も同伴しなきゃいけないんで、結果的に俺も帰れなくなってしまう」

ペタン「次元の壁越えるのは私なんです。主が送るのに壁を穴を開けるのは私です。素手で開けるので案外痛いんですよ」

剣帝「それはあ……………すみません……………」

ペタン「貴方単体なら別に少し開けて放り投げるからいいんです。ですが複数になるとその三倍以上の穴を開けなければ行けないのです。なのでその女を投げ入れるだけなら楽なのでもうそれでいいですか？それなら試練等はもういいので」

剣帝「……………申し訳無いんですが。俺自身もう一度向こうに行って鍛えたいんで、お願いします」

ペタン「はあ……………では後日その女と一緒に試練受けさせますので……はあ……………」

剣帝「すみません……………」

ペタン「多分主は前同等の事させますのでその女を守りなさい。」

劍帝「……………了解しました」

劍帝はペタンとの話を進めると、劍帝はペタンに申し訳無さそうに頭を下げながら、試練についても了解した

劍帝「それでは」

劍帝はペタンにお辞儀をしてから自宅に戻っていった

劍帝「只今戻りました」

セラ「お帰りなさい、劍帝君、それで行けそう？」

劍帝「条件付きでなら行けそうです」

セラ「そっかあ、それじゃあちゃんと準備してから行かないとね」

劍帝「そうですねー……………」

劍帝が家の中に戻り、セラフォルーに行けるかどうかの報告をすると、セラフォルーは嬉しそうにハイスクールD×Dの世界に行く準備を始めようと部屋に向かい、劍帝はその様子を疲れた眼差しで見送っていた、そんな様子の劍帝にゆつくりと妹紅が近付いてきた

妹紅「なるべく早めに帰ってきてね？ 劍帝」

劍帝「分かってるよ」

妹紅「それじゃあ、行ってらっしゃい」



劍帝「ああ、行ってきます」

そうお互いの顔を見つめ合った二人はそのまま互いに顔を近づけてキスをし始め、そのまま十数秒間互いの舌を絡めつつキスし続けた

そして、その数時間後、劍帝とセラフォルは空中に空いた穴に入っていく、ハイスクールD×Dの世界に転移していった

## 第七十一話 「再来の帝王」

（駒王町：河川敷）

駒王町に流れる大きな川の河川敷に突如黒い穴が開かれ、そこから赤髪で長身の男、剣帝が大きなスーツケースの様なものを片手で軽々と持ちつつ現れ

その後ろからゴロゴロと車輪のようなものが付いたケースを引き摺って、セラフオル・レヴィアタンが出て来た

剣帝「まさか、また来る事になろうとはねえ」

セラ「剣帝君自身はもう来ないつもりだったの？」

剣帝「まあ、一年前、元々は向こうに一人で帰るつもりでしたからね」

セラ「そうだったんだあ、ふうくん」

剣帝達が完全に出てくると、次元に空いた穴は塞がり、剣帝はその穴が完全に消えた事を確認すると、自分の近くにスーツケースを落としてからそれに座り、セラフオルからの質問に答えた

剣帝「さつてつと、それじゃあ、ささつと今がどんな状況か、調べますかねえ」

セラ「頑張つてね、剣帝君♪」

剣帝「分かっています。よっと」

剣帝はスーツケースから退くと、地面を触り始めた、そして、自分の魔力を周囲に放ち、探知する為の結界のようなものを張った

剣帝「んー……んん？……あー、なるほどなるほどお」

セラ「何か分かったの？」

剣帝「まあ、色々と分かりましたよ。まず一つ目に、今はカオス・ブリ・ゲイドと三界連合が戦争してますね。それも終盤です」

セラ「……えっと、どういう事？」

剣帝「つまり、少しだけ俺達は過去に飛んでるか、前とは少しズレた世界に飛びましたね」

セラ「へえ、そうなんだあ」

剣帝は調べ終わると、その結果をセラフォルーに報告した後すぐに、自分の足元に転移用の魔法陣を展開し始めた

セラ「で、剣帝君は何してるの？」

剣帝「いやあー、暇なので一誠君のところにも行こうかなと思ひまして」

セラ「じゃあ、ワタシも行こっかな♪」

剣帝「それじゃあ、しっかりと捕まらせて下さいね」

セラフォルーが剣帝に抱き着くと、二人の足下の魔法陣が輝き始め、転移が始まった。倒壊した戦場。

剣帝「はい、転移完了つとお！」

剣帝達が転移し終わると剣帝達が転移してきた場所に丁度、ブレスが放射されてきた。だが、剣帝は即座にブーステッド・ギアを出現させ、そのまま流れるようにバランスブレイクを発動して、ブレスを弾き飛ばした。

剣帝「あー、危ない危ない」

セラ「大丈夫？ 剣人君」

剣帝「んー……問題無さそうですね。軽く痛いだけなので」

剣帝はセラフォルーに怪我の有無を心配されると、右手を開いたり閉じたりを二、三回繰り返して、問題なしと判断し、その後セラフォルーと一緒に地表に降り立った。

剣帝「それにしても、まさかまだ戻っていなかったとはなあー」

ヴァーリ「お前は……まさか」

剣帝「やあ、久し振りだねヴァーリ君」

ヴァーリ「……俺と戦った後、帰ったとあの方から聞いたが？」

剣帝「まあ、色々とあって、戻ってきたんだよ」

リアス「ヴァーリ、あの男は貴方の仲間かしら？」

ヴァーリ「いや、アイツはセラフォル・レヴィアタンのクイーンの筈だぞ？」

ヴァーリが剣帝の説明を終えるとリアス達は驚いた表情のまま立ち尽くしていた

リアス「ほ、本当なの？」

剣帝「本当ですよ？ねっ？セラ様」

セラ「うん、剣帝君はワタシの大切なクイーンよ？」

剣帝「有難う御座います。まあ、俺からしてもセラ様は大切なキングなので……………傷

つけられそうになつて少し、イラツと来ました」

剣帝は自分の後ろから現れた、セラフォルにお辞儀をしてから上空に飛び上がり、赤い龍を見つめている

剣帝「ちよつとお痛が過ぎる後輩君にお仕置きしてきますね」

セラ「やり過ぎちゃ、駄目だよ？剣帝君」

剣帝「分かってます」

剣帝は顔のバランスブレイクを戻すと、そのまま赤い龍に向かって飛んで行つた

リアス「彼は……………何をやる気なの？」

ヴァーリ「恐らく覇龍化した兵藤一誠を疲弊させて、覇龍化を解除するつもりなのだ

ろう、あの姿で」

リアス「バランスブレイクで覇龍に勝てるのかしら？」

ヴァーリ「通常は無理だ……が、あの男なら話は別だ」  
リアス「どう言うこと？」

ヴァーリ「アルビオン曰く、あの剣帝と呼ばれているもう一人のブーステッドギア保持者は、二天龍が相手でも遊びながら勝ったそうさ」

ヴァーリやセラフォル等の残された者達は剣帝が飛び去り、一誠の近くに降りる姿をただ呆然と遠目で見ている

く荒れ果てた戦場の中心部く

剣帝「やあ、一誠君」

一誠「ガアアアア！」

剣帝「よつと！」

剣帝が赤い覇龍と化した一誠ノ前に降り立つと一誠は何の躊躇も無く剣帝を踏み潰そうとした

だが、剣帝は自分に向かって振り下ろされてくる一誠の片足を難なく右手で受け止めた、そして、剣帝が受け止めると同時に右手の甲に付いている玉が輝き始め、それに呼応するように左手の甲にある玉も輝き始め、交互に音声が鳴り始めた

《Divid Boost Divid Boost Divid Boost Divid Boost

Divid Boost Divid Boost Divid Boost Divid Boost Di

vid Boost Divid Boost Divid Boost Divid  
 d Boost Divid Boost Divid Transfer Div  
 id ≪

劍帝「さて、まだまだ吸おうかな?……ん?」

劍帝は一誠の状態を見つつ、自分の吸い取る力を、ブーステッドギア本来の能力であるブーストで高め、一誠が元に戻るまで吸い取りきろうとしていた

そして、劍帝が未だに人型に戻らない一誠の状態を見て、更に力を吸おうとしていると、突如巨大な映像が二人の近くで流れ始めた

劍帝「この映像は……うわぁ」

一誠「ガアアア……アアア……」

その映像がある程度流れると同時に突然一誠が苦しみ始め、徐々に人型に戻ろうとし始め、劍帝も一誠の足から手を離し、少し距離を取った

劍帝「これで良いのかよ……ハア」

ドライグ『どうした? 相棒』

劍帝「萎えた、戻るぞドライグ」

ドライグ『フツ、了解だ』

劍帝は呆れたように手を頭に当てると、そのまま上空に飛び上がり、まっすぐセラ

フォルーの元に戻ってきた

「荒れ果てた戦場の端」

セラ「お帰り、剣帝君、お疲れ様」

剣帝「ああ、有難う御座います。ハア」

セラ「どうしたの？そんなに疲れたの？」

剣帝「いえ、疲れとかは全く無いんですが……ちよつと……ね」

剣帝はセラフォルーの近くに帰ってくると思息をつきながらセラフォルーの側の岩に腰掛け始めた

剣帝「……多分、もう一誠君は大丈夫だと思いますので帰りませんか？セラ様」

セラ「嫌々、一応最後まで見届けたいの」

剣帝「そうですか……なら、魔法陣だけは展開しておくので終わったら帰って来てくださいね、俺は興味無いんで帰ります」

剣帝は岩から立ち上がると、フラフラと歩いていき自分の足元に魔法陣を展開して、そのまま転移を始めた

そして、自分とセラフォルーが住んでいた屋敷の自分が寝泊まりしていた部屋に入り、ベットで横になり始めた



## 第七十二話 「そうだ!京都に行こう」

第七十二話「そうだ!京都に行こう」

く幻想郷から渡ってきた後日く

劍帝「暇だ………」

劍帝は自分の眠っていたベットの上で横になりながら独り言のように文句を言っていた

劍帝「仕事はもう昨日の内に全部片付けちゃったし……」

黒影「ならよお、遊びに行かねえか? テキトウに例のハーレム野郎のキングの実家のある領地によお」

劍帝「グレモリー領にかあ………面白そうだし、そうするか!」

黒影「んじゃ、とつとと行こうぜ」

劍帝「あーいよつと!」

劍帝が文句を言い続けていると、影に潜んだまま黒影が提案をしてきた、そして、劍帝はその提案を聞くとそれに賛成してからベットから飛び起き、窓に近づいた

劍帝「さつてとおー、グレモリー領って割と遠いからなあ……………ドライブグ」

ドライブグ『何だ…』

劍帝「悪いんだが、Boost…三回宜しく」

ドライブグ『良いだろう』

劍帝は窓を開けると、空を見上げながら自分の内に居るドライブグの名前を呼んだ、すると、劍帝の左手に赤い手甲が出現し、その手甲からドライブグの声が聞こえてきた

そして、劍帝がドライブグに頼みを言うと、ドライブグはそれを了承し、強化を劍帝の身体に掛け始めた

劍帝「んじや、翼と足に譲渡だ」

《Transferr!!》

劍帝「さて、行くか！」

劍帝は窓から屋敷の外に出ると、窓縁を掴みながら屋敷の外壁に足を付き、足に力を込めてから一気にジャンプをするようにグレモリー領に向かって飛んでいった

くグレモリー領：上空く

劍帝「で、飛んで来たは良いけども、何をしようかな……………」

黒影『普通に領主さん所に行ってみたらどうだ？』

劍帝「見ず知らずの俺が行っても警戒されるだけだわ！」

黒影『なら、どうすんだよ』

剣帝「取り敢えず、何か面白い事が起きてないか、軽く調べる」

剣帝は目を閉じると、周囲に巨大な探知式の結界を展開して、グレモリー領全域を調べ始め、そして、五分ほど経ってからニヤリと笑みを浮かべた

黒影『何か見つけたか?』

剣帝「ああ、領主さんのお屋敷で、どうやら一誠君と……これはサイラオーグ君かな?が戦ってるっぽい」

黒影『んじやあ、行くか』

剣帝「おうさ」

剣帝は意識内部の黒影と喋り終わると同時に自分ノ目の前に転移用魔法陣を出現させて、その中に入って行った

くグレモリーの屋敷：闘技場く

サイラ「並の悪魔なら、今の拳で倒せるだろう!」

一誠「なんて速さだ……痺れて感覚が無いけど……動く!」

グレモリーの屋敷にある小さな闘技場の様な場所の中で黒髪の筋骨隆々とした男性、サイラオーグと、全身を赤い鎧で包んでいる人物、一誠とが戦っていた

そして、一誠の右腕の鎧はサイラオーグに殴られた衝撃でヒビのようなものが走って

いた

サイラ「まあ、今のは挨拶代わりのようなものだ」

一誠「挨拶代わり!? 素手で俺の鎧を壊すなんて冗談じゃねえ!」

一誠がサイラオーグの言葉に驚きながらも両手を自分の体の前に出して構えていると、サイラオーグが不意に闘技場の外の観客の居る場所を見つめながら口を開き始めた

サイラ「覗き見とは趣味が悪いな、大人しく出て来い!」

リアス「えっ? な、何を言っているのかしら? サイラオーグ」

サイラ「リアス、お前の後ろの壁に転移魔法陣を開き、こちらを覗いている者が居るんだ」

リアス「ええっ!?!」

剣帝「あつちやー、バレちゃいましたかあ、流石は『若手最強悪魔』さん」

サイラオーグに出て来いと言われると、少し経ってからリアス・グレモリーの後ろの壁に大きな魔法陣を出現させ、そこから剣帝がひよっこりと出て来た

リアス「貴方は、セラフォール様のクイーンの!」

剣帝「どうも、先日ぶりですねえ。リアスさん」

サーゼクス「ほお? つまりは君はセラの居場所も知っているのかな?」

剣帝「ええ、知ってますよ? お教えするのは……そうだなあ……」

劍帝はサーゼクスにセラフォルの居場所を聞かれるなど考えると、自分の顎を軽く触りながら周囲を見回し始め、何かを思いついたような表情を浮かべると口を開き始めた

劍帝「一誠君とサイラオーグさんと戦わせて下さったらお教えします」

サーゼクス「一誠君とサイラオーグとか……構わないかい? リアス」

リアス「ええ、ワタシの一誠とサイラオーグならきつとこの男にも勝てる筈です」

劍帝「じゃあ、決まりですね」

劍帝は両手をブラブラと振りながら闘技場の中央部に向かってゆっくりと歩いていき、闘技場に着くと二人に向けてゆっくりとお辞儀をして

劍帝「それじゃあ、お手柔らかにお願いしますね」

一誠「アンタ、何か武器とかは使うのか?」

劍帝「えーっ……一応普段なら剣の一本でも使う所ですが……それじゃあツマラナイので、今回は素手でお相手しますよ」

劍帝は自分が腰に帯刀していた木刀を引き抜くと自分の後方に向けて放り投げ、放り投げられた木刀は石の床なのにも関わらず、刃先が床に突き刺さった

劍帝「まっ、ささつと勝負が付いてもツマラナイので、一分間、俺は一切攻撃しないでおきましょうかね」

一誠「舐めて掛かってるんなら、後悔させてやる！プロモーション、ルーク!!」  
サイラ（この男、相当に強いな……それに、何処かで見覚えが）

劍帝「ほらほら、どうしました？速くして下さいよ」

一誠「言われなくてもボコボコにしてやる！」

一誠は自分の体に何度も強化を掛けてから劍帝に向かって走り出し、劍帝の鳩尾や腹部に殴りを叩き込み、脚部に蹴りを叩き込んだ

しかし、劍帝はその全てを受け止めきり、痛がる素振りを一切見せる気配が無い

劍帝「……………これで終いですか？」

一誠（何だコイツ…殴られても全く痛がらねえ上に、殴ってる感覚がまるで岩だ）

ドライグ《……………思い出した…》

一誠「どうしたっ？ドライグ」

ドライグ《この男の顔を、何処かで見覚えがあるなど思っていたが、マズイぞ、この男は間違い無い》

劍帝「んーっと……………」

一誠が劍帝から少し距離を取り自分の体の内にいるドライグの言葉に耳を傾けて居る間に、劍帝は懐から蓋の付いた懐中時計を取り出し、時間を確認した

劍帝「もう一分経過してますね」

ドライブグ《!!避けろ!相棒!当たれば即死だぞ!》

一誠「はあ!?それってどういっ」

劍帝「スウー………フンツ!」

劍帝がバツと立っていた場所から跳躍すると、一誠のすぐ側まで近付き、一誠の胸部に当たれば胸骨が砕け散りそうな拳を叩き込もうとしてきた

だが、劍帝の拳が当たる寸前でサイラオーグが一誠を跳ね飛ばし、一誠は何とか無事だったが、代わりにサイラオーグは壁に叩きつけられる形で弾き飛ばされた

劍帝「ありや、そちらが代わりになりましたかあ……うーん、目的から逸れたけど……まあいいか」

一誠「テメエ!!」

劍帝「一誠君にはこれかな」

劍帝は右手をグツと握り、その後右手を開くと、其処には煌々と輝く小さな炎球が現れた

劍帝「ほら、爆裂しろ、コロナ・ボム、ツ!? (陽炎爆弾) ……チツ、まだ終わってなかつたか」

サイラ「俺がああの程度で倒しきれれると思っていたのか?」

劍帝「思っては居なかつたですが……そこまでケロリとされると少し……腹が立ちま

した」

劍帝が炎球を一誠に向けて投げ飛ばそうとしていると、少し前に劍帝に殴り飛ばされたサイラオグが劍帝の頬を殴って吹き飛ばした

が、劍帝は何事をなかつたかの様に体制を立て直し、サイラオグを見詰めながらイライラした顔になっていた

劍帝「なので……ほんの少しだけ本気を出します」

サイラ「ほお？先程の一撃は全く本気ではなかつたという訳か」

劍帝「ええ、そういう事です……ドライグ」

ドライグ『何だ、相棒』

劍帝「ちよつと力を貸せ」

ドライグ『良いだろう』

劍帝がイライラした状態のまま自分の目の前で握り拳を作ると、劍帝の左手を一誠が全身に纏っている様な赤色の籠手が出現した。そして、それを見ると周囲は同時に驚きに包まれた

劍帝「さて………サクツと片を付けましようかね」

一誠「何するつもりだよ！」

劍帝「そんなの聞かれても、答えるとても？」



サイラ「答えるつもりがないのなら、発動する前に叩くだけだ」

剣帝「それができますかねえ？」

剣帝は左手を自分の体に前で構えつつ、何かの準備を始め、その準備が始まるのを聞くと同時に一誠とサイラオーグはいっぺんに剣帝に殴りかかった

しかし、その拳は一つたりとも剣帝にはモロには当たらず、剣帝はすんでのところで回避し続けていた

剣帝「つと、危ない危ない」

一誠「ちよこまか逃げるんじゃねえ！」

剣帝「嫌ですよつと」

サイラ（この素早さ……身のこなし……やはり何処かで……）

剣帝「さあて、それじゃあ、もう終わりにしますね」

『Boost, Boost, Boost, Boost, Boost, Boost, Boost!!』

剣帝は逃げ回るのを辞めて立ち止まると、二人との距離を一気に詰めて、二人の胸部に強烈な一撃を叩き込んだ

一誠「ガッハツ!!ゴフツ！」

サイラ「くうっ……」

剣帝「うーん……一誠君は鎧でダメージが多少軽減、サイラオーグさんにはガード

されちゃいましたかあ」

ドライグ 『オイツ、劍帝』

劍帝 「何かな？ドライグ」

ドライグ 『お前、さつきかなりの力を込めて拳を放つただろう……あの小僧死にかねんぞ？』

劍帝 「へーきへーきいー、どうせここには回復役さんも居るしいーつと……そろそろ帰るとしますかねえー」

劍帝は二人を吹き飛ばした後、右回りに反転して、屋敷から出ていこうとしていた、だが、そんな劍帝の目の前に一誠の仲間達が立ち塞がった

リアス 「貴方、ワタシの可愛い一誠を瀕死にしておいて、ただで帰ることが出来ると思っていたのかしら？」

ゼノヴィア 「一誠の痛みはわたし達が返してやる！」

木場 「僕の大切な友人を傷付けたんだ、君にはある程度傷ついて貰うよ！」

劍帝 「はあー………面倒臭あ………まっ、仕方無いか………」

劍帝は一誠の仲間達の言葉を聞くと、大きく溜息をつけてから、自分の体に横で右手を大きく開いた、すると、劍帝の開かれた右手に向かって劍帝が突き刺した木刀が勢い良く飛んで来て、柄の部分が劍帝の右手に収まった

劍帝「退け…邪魔だ」

一同「!!!?」  
「!!!」

劍帝が目を見開き、全身からおぞましいまでの殺気を放つと、劍帝の目の前に立っていた者達はおろか、それ以外の人達まで口をパクパクとさせ、恐怖を感じ取っていたリアス（何なの…この男…このワタシを殺気だけで威圧するだなんて…）

劍帝「それじゃあ、さようならあー、また何処かでお会いしましょうね。」「若手最強さん」

劍帝は殺気を放ちながらゆっくりと闘技場の外側まで歩いていき、転移用魔法陣で何処かへと転移した

サイラ「……………若手最強…か、あの男に言われると、皮肉にしか聞こえんな」

サイラオーグは劍帝が消えて行った方向を見つめながらフツツと少し笑みを溢していた

くその翌日く

劍帝「駄目だ…今日も暇だ…」

黒影『今度はどうすんだよ』

劍帝「どうしよつかなあー……」

劍帝はまた独り言のように文句を言いながら自分の部屋のベットの上で横になって

いたが、不意に何かを思いついたのか上体を起こした

劍帝「そうだ、前は何かと戦闘が多かったからろくに観光が出来てないし、観光して来よう」

黒影『観光に行くのは良いとして、何処に行くんだよ？』

劍帝「ん？そうだなあ……まっ、ここはベタかもしれないが、京都にでも行こう」

劍帝はそう言つて、荷物が入った鞆片手に転移魔法陣を展開すると、その中に入り、京都へと転移を始めた

## 第七十三話「不穩漂う魔都」

〔京都：路地裏〕

京都の人通りが無さそうな路地裏の地面に魔法陣が展開され、そこから剣帝が現れ出てきた

剣帝「あー、着いた着いた……さて、観光と行こうかな」

剣帝は路地裏から大通りにこっそりと出ていくと京都を観光しようと街の中を歩き始め

剣帝（……：適当に腹に何か入れたいし……何か買おうかなあ……）

剣帝が周りを見回していると、ふと焼き鳥屋が目にと止まり、剣帝は口元に笑みを浮かべてからその焼き鳥屋に近づいた

剣帝「スミマセーン、タレの焼き鳥を十本と塩の焼き鳥を十本下さいな」

剣帝は焼き鳥屋に入ると、持ち歩きながら食べる為の焼き鳥を多数注文した、その注文を聞くと店員は多々慌てつつも焼き鳥を用意して剣帝に手渡した

剣帝「有難う御座います。はいこれ、お釣りは要りません、これからも頑張ってくださいね」

劍帝は焼き鳥を受け取るとお会計の金額を聞くと同時に三万円財布から取り出して、カウンタ―に置き、そのまま店から出て行った

劍帝（ん、やつぱり焼き鳥は良いなあ）

黒影『オイッ、ボケ』

劍帝（何だよ、黒）

黒影『何だよじゃねえよ、三万も一気に置いてきやがって』

劍帝（別に良いじゃんか、美味しい焼き鳥を作るお店には繁盛して貰いたいんだよ）

黒影『はあ……相つ変わらざるの焼き鳥鬻店だな』

劍帝はルンルン気分で焼き鳥を食べながら町中を歩いていき、そんな様子の劍帝を劍帝の内側から見ていた黒影は溜息をついていた

劍帝（それはそうと……次はどこに行こうかなあ？）

黒影『適当に町中を散策で良いんじゃないやねえのか？』

劍帝（それだところ、京都に来た観光の意味が無くなるだろうが……そうだ、伏見稲荷大社でも行くか）

黒影『オイゴラ、お前、今現在には仮にも悪魔だろうが、頭痛喰らうぞ？』

劍帝（平気平気、耐えられるから）

黒影『普通は無理な筈なんだがなあ……つくづく常識外れなやつだ』

劍帝は少し前に買った焼き鳥のタレの五本目を食べつつ、伏見稲荷大社に向かって歩いていく

く京都：伏見稲荷大社前く

劍帝「はあく、やつぱりデツケエなあ、鳥居」

劍帝はユラユラと歩きながら鳥居に近づいて行き、鳥居の下を潜ろうとした、その瞬間、劍帝は何かに衝突した

劍帝「あ痛っ」

黒影『結界だな、どうするんだ？ 劍帝』

劍帝「んー、ちよい待ち………あー、ブチ抜けるし、通るわ」

黒影『ゴリ押しじやねえか』

劍帝が軽く目の前でデコピンをすると、鳥居の下に貼られていた結界の一部が砕け、人一人入れる程の隙間が空いた

劍帝「さっ、バレル前に行くぞー」

黒影『相変わらず過ぎて笑えてくるな……』

劍帝「俺はお参りがしたいんだよ！」

黒影『信心深い悪魔だこつて……』

劍帝は神社の敷地内に入ると同時に頭痛を多少感じつつも歩みを進めていき、本殿に

四十五円を入れて御参りをしていた

劍帝（これからも末永く妹紅や八劍と一緒に居れますように）

黒影（俺に見合つたサンドバツク（玩具）が手に入りますように）

劍帝「さつてと、千本鳥居に行くか」

黒影『今度はブチ破るなよ？量が多そうだし』

劍帝「多分大丈夫大丈夫」

劍帝はユラユラと身体を揺らすように歩きつつ焼き鳥を食べ続け、神社の境内を奥へ奥へと歩いていく

すると、劍帝の視界内に最近見た見覚えのある後ろ姿が見えてきた

劍帝「えーつとお……あの後ろ姿はー……もしかしてえ……」

黒影『十中八九、あのエロガキ一味だな』

劍帝「少し前に一悶着起こしたし……あんまり顔は合わせたくないなあ」

黒影『なら、こつそりで行くとするか』

劍帝は修学旅行で京都に来ていた一誠達を見付けると、少し困つた表情を浮かべつつ

も、距離を取りながら歩いていき

劍帝「おつ、見えてきた見えてきた……ん？」

黒影『なあんか上の方から妙な気配がするな』



劍帝「……………この気配は……………向こうでも度々感じた事あるのが有るな…これはー」

黒影『烏天狗だな』

劍帝「あー……………」

劍帝はさつきよりも困った表情を浮かべ、少しの間考え込んでからまた前方に向かって歩いていく

黒影『良いのか？バレかねんぞ？』

劍帝「その時はその時、どうにかするよ…」

黒影『九尾の力でも振るうのか？』

劍帝「場合によっちゃね」

劍帝は焼き鳥のタレ残りの二本をゆっくりと食べながら歩き続けていきつつ、前方を歩いていく一誠達を見つめていた

すると、突然一誠が他の仲間を置いて走り出していき、それを見ていた劍帝は少し驚いた表情になっていた

黒影『劍帝、上の気配が荒立ってきてるぞ』

劍帝「んー……………仕方無い、行くか」

黒影『あいよ』

劍帝は頂上付近の気配の動きを察知して、脚に多々力を込めて、勢い良く階段を駆け

上がっていく

く伏見山：頂上く

一誠「何言つてんだ！俺はお前の母ちゃんなんて知らないぞ！」

??「嘘をつくくな！わたしの目は誤魔化しきれんのじゃ！」

山の頂上の神社で一誠は石鳥居の上に立っている謎の巫女服を身に纏った頭から狐耳を生やし、背部には狐の尻尾を携えた少女に喧嘩を売られていた

そして、少女が一誠に向けて手を振るうとその少女の下に居た山伏のような格好をした鳥のような見た目の生物が錫杖を片手で持ちながら、一誠に向かって飛んでいった

一誠「うおっ！」

その鳥のような見た目の生物が振るった錫杖を避けようと一誠を身を低くしていたが、何時まで経つても錫杖は一誠の頭上を通り過ぎなかった

そして、それを不審に思った一誠が自分の目の前を見ると、其処には、素手の右手一本で錫杖を受け止めている、和服に身を包んだ剣帝が立っていた

剣帝「やあ、一誠君、先日ぶりだね」

一誠「なっ!? テメエが何でここに居るんだよ！」

剣帝「そんなに怒らないでよ……：：：：先日とはゴメンね、少し一誠君の実力が知りたくつてさ……痛かったかな？」

一誠「ああ……問題ねえよ、アーシアに治療して貰ったし」

劍帝「それは良かったよ」

劍帝は片手で錫杖を握りながら一誠の方向を向き、少し前に一誠を殴り飛ばした事を謝っていた

その間に錫杖を握られていない別の鳥のような見た目の生物が劍帝の頭部目掛けて錫杖を振るってきた

一誠「危ねえ！」

劍帝「心配有難う、でも、問題無いよ！」

劍帝は空いていた左手でもう一本の錫杖も握り締めて平然と受け止めた

劍帝「さあ、一誠君は早くお逃げ、ここは俺が引き受けとくからさ」

一誠「そんな事させられっかよ！俺も戦うぜ！」

劍帝「……有難うね、一誠君」

??「ぬうう……不浄なる魔なる者共めえ……」

劍帝「不浄なる……ねえ？」

劍帝は狐耳の少女に不浄なる者と言われて少し頭に來たような表情を一瞬だけ見えた後、すぐに平常の顔に戻した

劍帝「それにしても……数が多いなあ、狐が十は居るし……鳥天狗もだな……仕方無

い」

?? 「掛かれえ!!」

一誠 「クツソ、何でいきなり襲われなきやならねえんだよ!」

劍帝 「一誠君、ちよいと伏せてね!」

一誠 「へっ?……うわっ!」

劍帝は両手で持っていた錫杖を少し勢いを付けて押しつつ離し、その後すぐに右手の指を鳴らした、すると、劍帝の背後に巨大な九本の狐の尻尾が現れ、周囲に居る妖怪達の腹部に勢い良く当たった

?? 「なぬっ!」

一誠 「はあ!?!何だよそれ!」

劍帝 「俺の秘密アイテムだよん……まっ、気にしない気にしない」

?? 「何故、妖怪が魔なる者なぞに……」

劍帝 「そもそも気にしない、さて、一つ提案だ、大人しく俺にボコられるか、大人しく帰るか、選べ」

?? 「て……撤退じゃ……おのれ邪悪な存在め!必ず母上は返して貰うぞ!」

少女は劍帝の提案を聞き入れたのか苦虫を噛み潰したような顔をしながらも周囲に撤退を命じて、竜巻と共に消えて行った

劍帝「ふう……良かった良かった、帰ってくれた」

一誠「劍帝……アンタ一体」

劍帝「まつ、その辺は気にしないでくれるかなつと、そんじやあねえー」

劍帝は一誠に自分の狐の尻尾について聞かれそうになると慌てて飛びさって行った

く京都：町中く

劍帝「はあー、危ない危ない……ん？」

劍帝が息をついていると劍帝の耳元に通信用の魔法陣が展開されてきた

セラ『もしもくし、劍帝君？』

劍帝「はい？何ですか？セラ様」

セラ『今ね、サーゼクスちゃんに頼まれて京都の方に来てるの、劍帝君来てくれない？』

劍帝「………了解しました」

劍帝はセラフォルーからの連絡を聞き終わると、自分の足元に魔法陣を広げてセラフォルーの元に転移し始めた

く京都：宿く

劍帝「申し訳有りません、遅れました」

セラ「やつと来たのね、劍帝君」

劍帝「着替えるのに多少手間取ったんですよ」

劍帝は転移してから少しの間部屋で寛いだ後、服を和服からいつも通りの執事服に着替えて部屋に入った来た

そして、劍帝は客間に入ると、セラフォルの側に座り込み、テーブルの上に並んでいる料理を食べ始めた

劍帝「……………美味しいですね。鳥料理」

セラ「でしよ〜？この鳥料理は絶品ってサーゼクスちゃんが言ってたの」

劍帝「へえ〜、そうなんですかあ……………」

アザゼル「……………なあ、さっきから思ってたんだがよ、お前さん等何時こっちにきたんだ？」

劍帝「ん？ん〜と……………少し前からですかね。大体そこに座ってる一誠君がジャガーノートで暴走した時です」

アザゼル「あの時のヴァーリの話はマジだった訳か……………」

劍帝は料理を食べ進めながらアザゼルから向けられてきた質問に返答していく

劍帝「そういうえば、アレからも大紅竜さんとはアツアツですか？」

アザゼル「アンタ……………それは嫌味か？」

劍帝「いえ？違いますか？」

アザゼル「嫌味にしか聞こえねえよ……」

劍帝とアザゼルが会話をしていると、横から一誠等が口を挟んできた

一誠「アザゼル先生、劍帝とはどういう関係だ？」

アザゼル「どういう関係も何も……あー、そういや、お前等は劍帝に記憶消されてんだっとな」

一誠「はあ？記憶を消されてる？」

劍帝「……さて、そろそろ俺は退室しますねえ……アザゼルさん、無駄口叩いてると大紅竜さん呼びますからね？」

アザゼル「つとと、悪いが俺からは話せねえな」

劍帝「それじゃあ、セラ様、御用の際は通信用の魔法陣でお願いしますね」

劍帝はアザゼルが自分について話そうとしている様子を見ると、自分が使った食器を片付け、立ち上がってから、退室しようとし始めた

そして、退室する際にアザゼルが自分の事を喋らないように釘をさしてから出て行った

劍帝「はあ……疲れる」

劍帝は宿の廊下でため息をつきながら、自分が泊まっている部屋に向かって行った

## 第七十四話 「英雄と霸王」

（京都：宿）

劍帝「んんう……妹紅お……」

黒影『オイゴラ、ボケ兄貴！もう朝だ！起きろ！』

劍帝「後五分く」

黒影『………寝坊する奴は妹紅ちゃんに嫌われんぞ』

劍帝「お早う」

劍帝は宿の自分の部屋で布団に包まりながら眠り続けていたが、黒影に起きろと言われ、とある事を言われるとおとなしく起き上がった

劍帝「ふあーあ………今何時だ？黒」

黒影『んなもん自分で確認しろや』

劍帝「………ケチだなあ」

黒影『黙れボンコツ兄貴』

劍帝「はあー………何だ、もう八時だったのか」

劍帝は精神内に居る黒影と喋りながら執事服に袖を通して、キツチリと着こなし、最



後に眼鏡を掛けた

そして、剣帝が服を着終わると同時に剣帝の耳元に通信用の魔法陣が展開された

剣帝「はい、何の御用でしょうか？セラ様」

セラ『今から妖怪さん達の所に行くから剣帝君も来てくれる？』

剣帝「了解しました。今から向かいます」

セラ『それじゃあ、また後でね☆』

剣帝はセラフォルーからの通信を聞き終わると、右手の指を鳴らして自分の足元に転移用の魔法陣を展開して、セラフォルーの元に転移を始めた

く妖怪の隠れ里く

剣帝「お待ちせ致しました」

セラ「大丈夫よ、わたし達も今着いたところだもん」

剣帝「そうなんですか……で、何ですか？」

セラ「えーつとね、これから妖怪さん達が剣帝君とかを襲った理由を聞くから、一応ね？」

剣帝「なるほど」

剣帝は妖怪の隠れ里に居るセラフォルーの目の前に転移してきて、セラフォルーに呼び出した理由を聞き、その理由を聞いてから納得をしていた

そして、セラフォルーの横に昨日襲ってきた狐耳の少女の姿を確認した

剣帝「やあ、昨日ぶりだね」

九重「わたしは、表と裏の京都に住む妖怪を束ねる者、八坂の娘、九重（くのう）と申す、先日は申し訳無かった、お主の事情も知らずに襲ってしまった…どうか許して欲しい！この通りじゃ」

剣帝「んー…誤解は解けてるみたいだし、別に気にしなくても良いよ？こっちは特  
に怪我とかしてないし」

九重「し、しかし…」

剣帝「それに、九重ちゃんはお母さんが心配なんでしょう？」

九重「と、当然じゃ！」

剣帝「それなら仕方が無いと言えるだろうからね、攫ったと思われるのは悪魔とか、そして、俺は現在は悪魔だ、疑われるには十分な理由だからね」

剣帝は自分に向けて頭を下げて謝罪してくる九重の頭を優しく撫でながら九重に向けて喋りかけた

剣帝「ついでに、聞きたいんだけど」

九重「な、何じゃ？」

剣帝「俺がこの前ふっ飛ばした妖怪達、平気？怪我とかしてない？」

九重「だ、大丈夫じゃ」

劍帝「なら、良かったよ、幾ら襲い掛かられたとはいえ、お互い事情も知らないでふっ飛ばしちゃったからね、ゴメンね？」

九重「う、うむ……………」

劍帝は屈んで九重と目線を同じくくらいの高さにして、九重に質問をしてから謝罪をしていた、そして、劍帝は自分がふっ飛ばした相手の安否を聞き終えると安堵したような表情をしながら足を伸ばした

劍帝「ところで、セラ様、今回の騒動の経緯などの説明頂けます？」

セラ「それは一誠君とかが来てからで良い？」

劍帝「分かりました」

劍帝はセラフォルーに今回九重の母親が攫われた経緯などを聞こうとしたが、その内容などを聞けるのは後回しと言われ、少し残念そうな顔をした

そんな劍帝の足元で九重が劍帝の服の裾を引っ張り、セラフォルーとアザゼルの近くから少し離れさせようとした、すると、劍帝は大人しくその誘導に従い、二人から離れた位置に移動し、再度屈んだ

劍帝「何かな？九重ちゃん」

九重「お主は……………九尾の妖狐で間違いなからう？」

劍帝「そうだよ………まあ、色々と事情があつてね、今は悪魔だよ」

九重「ふむ………ならば余計な詮索はすべきではないな」

劍帝「そうしてくれると助かるなあ」

九重「承知した」

劍帝は九重と話し終えると、足をまた伸ばして立ち上がり、セラフオルーの側に戻つていった

セラ「何の話をしてたの？」

劍帝「まあ、軽い世間話ですよ」

セラ「ふうくん？」

劍帝「さて………そろそろ一誠君達来るんじゃないですかね？」

劍帝がそう言っていると、劍帝達の正面から一誠やアーシア等が歩いてやってきていた

そして、一誠等が到着すると、劍帝やセラフオルー達は後ろにあつた大きな屋敷の中に入り、今回の騒動の経緯を聞き始めた

劍帝（英雄派……）

黒影『面白そうじゃねえか、ブツ飛ばしてやり甲斐が有りそうだしな』

劍帝（まあ、その辺はその時の相手の力量次第だな、下手すりゃこつちが吹っ飛ばさ

れかねん)

黒影『ヒヤハハッ! そうかもな!』

劍帝が黒影との話に集中していると、セラフォルーやアザゼルの話が終わり、劍帝達の目の前にとある一枚の巻物が開かれた

そこには金髪で長い髪をした背後に大きな狐の尻尾を持つ大人の女性の絵が大きく描かれていた

劍帝「……………」

セラ「えっ! け、劍帝君! 何で震えてるの?」

黒影『はあ……………』

劍帝はその絵を見た瞬間に周囲から見ても異常なほどに震え始め、その状態を体内から見ていた黒影が劍帝の体から出てきた

黒影「セラちゃん、こりや発作だ」

セラ「へっ? 発作?」

黒影「ああ、一分も経ちや回復するし、その間の話はちゃんと聞いてるから話を進めな」

劍帝「……………」

セラ「へ、へえ」

劍帝「……………はっ！」

大天狗（この男に任せて、大丈夫じゃろうか）

劍帝のそんな様子を見て、劍帝の正面に座っていた大柄の赤い顔をした天狗は事態がちゃんと解決させられるのか心配になっていた

アザゼル「まっ、そういう訳だから、何かあるまでは旅行を満喫してても良いが、いざという時は頼むぞ？」

一誠「はいっ！」

アザゼル「それと明日は、取材と交流を兼ねて姫様が観光案内をしてくれるそうだし、九重「宜しく頼むぞ」

劍帝はアザゼルの説明などを聞き終わると、ふらりと立ち上がり、自分の部屋に帰ろうとし始め

く翌日：宿く

劍帝「……………さて、観光と行こうか」

黒影『と、言いつつ、どうせ警護だろ？』

劍帝「まーな」

黒影『んじゃ、とつとと行こうぜ』

劍帝「はいはい」

劍帝はまた右手の指を鳴らしてから起き上がり、今回はスタスタと宿の入り口から出て行った

く京都：駅前く

劍帝「はあー、楽しそうだなあ」

黒影『まあた焼鳥食ってんのかお前は』

劍帝「もつちろーん、っと移動し始めた」

黒影『行くぞー』

劍帝はモグモグと焼き鳥を持ちながら一誠達にバレないように後ろから歩いていった

九重（…後ろからあの男の気配が……そういえば、あの男の名前を聞いて居らなかつた…そういえば、劍帝と呼ばれて居ったな）

劍帝「ああ…美味しい」

黒影『護衛中に食いもん食うなよ』

劍帝「良いじゃん別に、反応はちやんとするからさ」

劍帝は焼き鳥を食べ進めながらスタスタと一誠達の後ろをついて行き続け

く渡月橋：橋の上く

劍帝「流石に此処はマズそうだ……な？」

黒影『来たみたいだぜ、お客さんだ!』

剣帝が渡月橋に差し掛かる瞬間、剣帝の周囲が突然紫色の霧に包まれ始め、剣帝の頭上をアザゼルが飛び去っていった

剣帝「急ぐぞ、黒」

黒影『あいよ』

剣帝は大きく足を踏み込み、全速力で一誠達の元へと走って行った

そして、剣帝が一誠達の側に着く直前、一誠達の前方の霧が濃くなっている部分に見えていた人影のうちの一人が長い槍のような物を一誠達に向けてきて、光の線を打ち放ってきた

剣帝はその光線を見た瞬間に全身に赤い鎧を纏い、その光線を右手で受け止め、弾き飛ばした

剣帝「ふう……」

??「始めましてアザゼル総督、そして、赤龍帝」

紫色の霧の中からは大きな槍を片手で持った黒髪の男がニヤリと笑みを浮かべながら現れ出てきた

その男を剣帝は右手を振りつつ鎧の内側から睨みつけていた



## 第七十五話「霸王の悦楽」

↳ 渡月橋：橋上↳

曹操「曹操を名乗っている、三国志で有名な曹操の子孫、一応ね」

九能「母上を攫ったのはお主達か!? 母上をどうするつもりじゃ!」

曹操「御母上には我々の実験にお付き合い頂くのですよ」

九能「実験……じゃと」

劍帝に向けて光線を放ってきた、曹操と名乗った男は九能に何をするつもりなのか質問されると、大人しく自分達の企みを話し、九能はそれを聞き驚いたような表情になっていた

曹操「だが、その前にアザゼル総督と噂の赤龍帝殿に挨拶と少し手合わせを願いたい」  
アザゼル「それは構わん、だが九尾の御大将は返して貰おうか? こちとら妖怪との大事な会談を無事に成功させたいんでな」

曹操「それでは力づくでどうぞ」

劍帝は笑みを薄つすらと浮かべている曹操を見つめながら拳を構えていたが、突然何か悪巧みを思い付いたかのように鎧の内側で笑みを浮かべていた

劍帝（アイツの口振りがちよつとムカつくから屈辱的な倒し方として、盾だけ使つて倒してやろつと）

曹操は劍帝がそんな事を考えているなど露程も考えず、自分の隣にいるフードを被っている少年に命令をしていた

曹操「レオナルド、悪魔用のアンチモンスターを頼む」

レオナルド「……………ハッ！」

曹操に命令されたフードの少年、レオナルドはフードを脱いでから両手を地面に付いた、すると、レオナルドの足下から橋全体に波紋のような物が広がり

その次の瞬間、劍帝達と曹操達との間に全身が真っ黒色で顔と思しき場所が真っ白の人のようなものが多数現れた

アザゼル「アナイ・アレイションメーカー……………」

曹操「御名答、使い手の念じるままに如何なる魔獣をも創り出す事が出来る神滅器」  
アザゼル「世界を滅ぼす事も可能とする最悪の力が……………貴様等の手に……………」

劍帝「何とも面倒臭そうですねぇ」

一誠「そんな…ヤバイじゃないですか！」

一誠が戦闘態勢に入る為に左腕を自分の体の前に構えると一誠の全身を赤い炎が包み込み、一誠の身体は真紅の鎧で包まれた

曹操「ん？何故赤龍帝所持者がふたりも居るのかね？」

一誠「さあな！俺が知るか!!」

劍帝「気にする必要無いと思うな！」

曹操が何故ブーステッドギアの所持者が二人も居るのかを不思議がつている間に劍帝は素早く曹操に近付いた

そして、曹操の腹部に向けて裏拳を叩き込む要領で片手で持てそうなサイズの盾を曹操の鳩尾に叩き込もうとした

曹操「おっと……」

劍帝「チツ……アザゼルさん、コイツは俺が相手しときますんで一誠君達の援護、お願いしますね！」

アザゼル「あ、ああ、分かった！」

劍帝（ついでに、お前も手伝って来い、黒）

黒影「へいへーい、わあつたよおー」

しかし、劍帝の盾を曹操は手に持っている槍の柄で受け止めていた、その状態を確認すると、劍帝はそのまま殴り抜き、曹操を吹き飛ばしてから黒影と分離し、曹操を追い掛けて行った

黒影「さあてとおー、これからどうなるかねえ」

そして、劍帝と分離された黒影は劍帝の命令に従うかと思いきや、ニヤニヤしながら一誠達の様子を眺め始めた

く渡月橋：橋の端く

劍帝「いやあ、英雄派なんて呼ばれてるからどんな豪傑かと思つていたら……随分と若いですね」

曹操「若いからと言つて弱い訳では有りませんよ？」

劍帝「……ああ、俺が若いって言つてるのは、相당한信念が有るのかな？と思つたのにそんな気配が一切無い輩だなんて思つただけだから」

曹操「………何っ？」

劍帝と曹操は渡月橋の端の方で槍と盾を打ち合わせ戦い合つていた

劍帝「だつて、自分達の目的の為にならば他者の大事な母親攫つて、更にそれを悪びれる様子も無いって……英雄としてそれはどうなのかなあ？」

曹操「英雄の子孫でも無い貴方に何が分かる！」

劍帝「知らないよ？分からないし分かる気もないよ、お前らとかどうでも良いし」

曹操は劍帝に言われた言葉に少し腹が立ったのか劍帝に向けて光線を放ってきたが、劍帝はその光線を手の甲に装備している盾で逸らして回避した

だが、光線を一撃逸らしただけで劍帝が装備していた盾は簡単に砕けちつてしまった

劍帝「あちや、ミスったミスった、砕けちゃった」

曹操「隙有り！」

劍帝「うおつと……危ない危ない」

劍帝が砕かれた右手に付けていた盾を残念そうに見ていると曹操は劍帝の腹部目掛けて槍を素早く放ってきた、だが、劍帝はその槍の一撃をギリギリのところまで盾で受け止め、受け流した

だが、やはり当然というべきか受け止めた際に衝撃で劍帝の身体は大きく後方に吹き飛ばされ、同時に左手の盾も砕けてしまった

劍帝「ありや、こつちも……か？」

曹操「取った！」

劍帝が左手の手の甲を見つめていると、その隙をついて曹操は劍帝の心臓目掛けて槍を伸ばした、そして、劍帝はその動きに反応しきれず、心臓を突き穿たれてしまった

劍帝「……ゴフツ」

曹操「どうやら、こちらの赤龍帝は偽物だったようですね……仕方が無い、向こうに戻るとしよう」

劍帝の心臓を突き、劍帝の死亡を確認すると曹操は槍を片手で持つて、一誠達の側まで走って行った

く 剣帝の意識内く

剣帝『あー……ミスった、相手を嘗めすぎた……』

黒影『バーカ、流石に盾だけでは無理だろ』

剣帝『まあ、仮にも相手は曹操だもんなあ……で、何でお前はこっちに戻って来たんだ?』

黒影『だって、曹操はアザゼルと槍対槍で遊び始めたと思ったら、何か馬鹿デカイ人型の兵器が川から出て来たからなあ』

剣帝は傷が一切無い姿で真つ暗闇に包まれた空間に浮かんでいた、そして、その空間でポケーとしていると黒影が現れ、外の状況の報告を始めた

剣帝『仕方無いなあ……そろそろ起きようか』

黒影『だな、じゃなきやマズそうだしな』

精神世界内の剣帝が目を閉じると現実の方の剣帝の傷が急激に塞がり始め、剣帝が目覚めました

く 渡月橋：橋の外側く

ロスヴァイセ「人が気持ち良く寝ていたら……近くでドツタンボタンチュドンって……うっさいですよお!!……喰らえええ!!」

剣帝「何あれえ」

黒影『酔っぱらいの八つ当たりじゃね?』

剣帝「だがまあ、体力の回復としては丁度いいや」

目を覚ました剣帝が最初に見たのは、橋の外側から歩いてきた白髪のスーツの女性、ロスヴァイセが自分の後ろに大量の魔法陣を展開し、攻撃を始めようとしている様子だった

そして、剣帝が眺めていると数秒でその魔法陣全てから一斉に多種多様な光線や炎の線等が橋に向けて放たれていった

剣帝「ああ……美味そうだ! 頂きまーす!!」

剣帝が大きく口を開くと、橋に打ち込まれていた光線等の一部が剣帝の口に向かって伸びていき、剣帝の口の中にスルスルと消えていった

剣帝「ふうー……ご馳走様つと」

ロスヴァイセ「ふう……はあ……ああああ……」

剣帝「おっと、危ないですよ? こんな場所ですら倒れたら」

ロスヴァイセ「んんっ? ああ、有難う御座います」

剣帝「全く……ロスヴァイセさんは髪とか長くて綺麗だし、美人さんなんですから。ヤケにならずに相手を探したらきつと良い相手に巡り会える筈ですよ?」

ロスヴァイセ「ふえっ? そうですかあ?」

劍帝「そうですよ。きつとね」

ロスヴァイセ「えへへ……有難う御座いまあ……スウー……スウー……」

ロスヴァイセは魔法を放ち終えると背中から倒れ込むように後ろに向かつて倒れて行った、が、その背中は勢い良く地面に当たる事は無かった

何故ならば、当たる寸前で劍帝がお姫様抱つこのようにして、ロスヴァイセを支え、優しく地面に降ろしていたからだ

劍帝「さつてつと……逃げられたか」

黒影『お前がその女に気い取られてるからだろうが』

劍帝「とにかく武装解除だ」

黒影『まつ、それが最優先だわな』

劍帝が右手を振るうと劍帝の全身を包んでいた真紅の鎧が消えた、そして、劍帝は鎧を脱ぐとロスヴァイセを背負って、アザゼルに近付き、ロスヴァイセをアザゼルに托した

劍帝「それじゃ、俺はこれで」

アザゼル「お、おう、それじゃあまた後でな」

劍帝「はい」

劍帝は右手の指を鳴らして自分の足に倍加を付与してから周囲の人間に気付かれな



い内にささつと人混みをすり抜けるように歩いていった

く京都：町中く

剣帝「あー……ダルー」

黒影『やる気出せよ……後、どっから焼き鳥買ってきたんだよ』

剣帝「偶々見つけた店」

黒影『お前、焼き鳥持ってない時焼き鳥屋に引き寄せられてねえか？』

剣帝はモグモグと焼き鳥をまた食べながらスタスタと町中を歩き回っていた

黒影『というか、お前、曹操相手で加減し過ぎだろ、どの位でやったんだ？』

剣帝「んー……あー……1部？」

黒影『加減し過ぎだわ！数字に変換すると0.01位じゃねえか！』

剣帝「だって……手加減しないとあの空間その物に影響が有るかと思つたから……」

剣帝の言い分を聞くと、黒影は剣帝の精神内でハアと溜め息を漏らしていた

黒影『んな事言ってるから、規格外って言われんだよ！』

剣帝「まあ……事実だからね、俺がおかしいのは」

黒影『分かってるんなら、もうちよいと普通の行動しろよ』

剣帝「善処します」

剣帝は黒影の言葉にテキトーに反応を示しながらフラフラと町中を歩いて、京都夕

ワーの方へ行つた

く京都：夜く

劍帝「……………そろそろかな」

黒影『だなあ、ヒヤハハツ、楽しみだねえ』

劍帝「まあ、そうだな……………で、何をしに来たのかな？九能ちゃん？」

九能「やはり只者ではなさそうじゃな、ワタシが気配を消して近付いても当然の様に  
気付くとは」

劍帝は京都の町中を全貌する為にか京都タワーの上座り込み、前方だけを見つめつ  
つ、後ろから近付いて来ていた九能にやすやすと気付き、声を掛けた

九能「お主は戦いには行かぬのか？」

劍帝「行きますよ。貴女のお母さんを助けるって約束もしましたし」

九能「ならば、お願いじゃ！ワタシも連れて行ってくれ！母上はワタシが救いたいの  
じゃ！」

劍帝「……………それじゃあ、必ず俺や一誠君の側に必ず居る事、約束出来ますか？」

九能「無論じゃ！」

劍帝「分かりました。なら……………連れて行って差し上げますと……始まったか」

劍帝は九能に戦場に連れて行って欲しいとねだられると劍帝は九能に約束を取り付

けてから、九能のお願いを了承して、タワの下に広がる京都の町中を包み込む煙を確認した

劍帝「んー…………どうやら複数箇所バラけてるな」

黒影「なら、仕方ねえよな？ 劍帝」

劍帝「あんまりやりたくはないけどねえ……………フンッ！」

九能「な、何をして居るのじゃ!？」

劍帝は黒影に横から話し掛けられると同時に大きく溜め息をつきながら立ち上がり、自分の背部に生えている大きな狐の尻尾を思いつきり引つ張り、四本ほど引き千切り、近くにバラバラに置いた

すると、劍帝の引き千切られた尻尾から劍帝そっくりの人影が四体現れた

劍帝? 1 「わあい! 久し振りにバラけるね! 嬉しいなあ!」

劍帝? 2 「何で俺とかを呼ぶんだよ、頭に來るぜ……………」

劍帝? 3 「別れてすぐにこんな五月蠅くする者達と元が同じだなんて、私は哀しいです……………」

劍帝? 4 「アツハハハツ! 大丈夫だと思っよ! きつとこれから楽しくなるさ!」

劍帝「五月蠅いぞおー、全員俺だけ……………」

黒影「ヒヤハハツ! 流星は喜怒哀楽、それぞれの状態が精神面でも色濃く出てんなあ」

劍帝が引き千切った尻尾から出てきたのはどうやら劍帝の喜怒哀楽の各感情が形を成した劍帝の分身のようだ

そして、劍帝の本体は全員の顔を見てから自分の懐に自分の手を入れて、何かを取り出した

劍帝「取り敢えず、全員分かりやすいようにこれを付けろ」

劍帝？ 2 「ああ？ 何だ？ これ」

劍帝？ 1 「ワハハっ！ 鉢巻だね！ 運動会でもするの？」

劍帝？ 4 「それじゃあ、存分に楽しまないとね！」

劍帝「運動会はしないけど、戦闘はする、ついでにこれはお前等を俺以外が判別しやすくする物だ」

劍帝が自分の懐から取り出した物は、四枚の鉢巻だった、そして、その鉢巻にはそれぞれ喜、怒、哀、楽、の文字が書かれていた

劍帝（怒）「んじゃあ、俺はこれだな、ああ、面倒臭え！ 何で俺がそんなに手間掛けなきゃならねえんだよ！」

劍帝（楽）「良いじゃん良いじゃん！ きつとこれを付けて戦えば楽しくなるよ！ ねっ！ 喜び!!」

劍帝（喜）「うんうんっ！ きつと皆楽しくなってくれるだろうなあ！ 嬉しいなあ！」

劍帝（哀）「相変わらず、喜楽の二人は阿呆な感じがして……同じ存在として私は哀しみが抑えられません……」

劍帝の本体から鉢巻を受け取った劍帝の分身体達は各々それぞれの感情を吐露しつつ、本体からの命令を待っていた

劍帝「取り敢えず、お前等各々が負けるとか確実に有り得ないから、一誠君達の手伝いに行け、其処に着くまでの足なら俺が出しといてやるからよ」

劍帝（怒）「ケツ！何で俺が雑魚のおもりなんぞしながら雑魚の相手をしなきゃならねえんだよ！」

劍帝「良いから、やれ」

劍帝（怒）「……………わあつてるよー」

劍帝の分身体の内怒りの分身体だけが愚痴を溢していると、劍帝は怒りの分身体を睨みつけながら命令をした、すると、怒りの分身体は抗う様子も特に見せずに劍帝からの命令に従った

そして、劍帝は他の分身体からも異論や反論が無いと確認すると、右手の人差し指に漆黒の指輪を嵌め、自分の体の前に右手を広げて構え、再度口を開き始めた

劍帝「《闇よ、あれ》」

そして、劍帝がボソリと呪文のような言葉を発すると、劍帝の足下の影から六体の黒

い狼のような物が飛び出してきた

劍帝「んじや、また後でな」

劍帝（樂）「皆楽しんで行こー！♪」

劍帝（喜）「嬉しいなあ！これから暫く楽しめるんだもん！」

劍帝（哀）「ああ……哀しい……何故敵の元へわざわざ出向かなければならないのか……哀しい……」

劍帝（怒）「苛つくから雑魚をとつとどぶつ飛ばして俺は戻らせて貰うがな！」

黒影「まったなあー」

劍帝の分身体達は各々劍帝に一時的な別れを告げると、それぞれバラバラの方向を向いている黒い狼のような物に跨り、それぞれの方向に向かって飛んで行った

劍帝「それじゃあ、俺達も向かうとしますか……しっかりと後ろから捕まっけて下さいね？」

九能「うむつ、良きに計らえなのじや」

そして、全員が飛び去った後、劍帝も自分の正面で待っていた黒い狼のような物に跨った、その後九能を自分の背中に抱きついているように言っ九能が抱きついてくると同時に狼のような物を走らせ始めた

劍帝（取り敢えず、一誠君の所に行くかな）

劍帝が一誠の元へ向かうと考えながら狼のような影に乗っていると、その思考通りの動きを狼のような影が取り、京都の空に6つの影が飛び散って行った

## 第七十六話 「龍帝の逆鱗」

## 七十六話 「加速する龍帝」

く京都：結界内部く

劍帝「さてさてさて、一誠君が居るのはまだ先かなあ……ん？」

劍帝が自分で呼び出した黒い狼のような影に跨って進んでいると、劍帝の周囲の風景が一気にどこかしらかの駅のホームへと変化した

劍帝（……入れたか、さて、一応警戒はしておくが吉だな）

劍帝が周囲に気を張りながら進んでいると、前方から話し声が聞こえてきた  
?? 「もう逃げられんぞ……赤龍帝！」

一誠「くっ……」

劍帝（うつわ…何あれ、誰が得するんだよ、あんな一誠君の貼り付けとか……）

劍帝が少し進むと、全身黒色の人影のような物が、片手を刃物のように形状変化させ立っていた、そして、その人影のような物の視線の先には柱に黒い糸のようなもので貼り付けにされている一誠が居た



そして、人影はその刃物のように変化させている片手を構えながら一誠に向かつて走って行った、だが、その人影の片腕は一誠の身体にかすりともせず、一誠は床に降り立った

劍帝「危なそうだし……一応援護をつと」

??「くつ……狐火ですか。それにしても不意打ちとは」

劍帝「ああ、やつぱりこの程度じゃ効かないか」

一誠達から少し離れた位置の柱の陰に隠れていた劍帝が片手で作り出した、直径50cmの狐火を人影に向けて放った

しかし、その狐火を当たる寸前で察知した人影が受けとめ、そのまま握り潰されてしまった

劍帝「いやあ、流石にあの程度の攻撃じゃあ、攻撃にすらならないかあ」

一誠「け、劍帝!？」

劍帝「やあ、一誠君、元気そうだね」

??「オイツ、俺を無視して話してんじやねえよ!」

人影は自分の事を無視して一誠と話している劍帝に向かって、右手を刃物に変化させたまま走って近付き、そのまま流れるように劍帝の体を切ろうとした

だが、その右腕は劍帝の身体には当たる事は無かった、何故ならばその右腕は突然劍

帝の後ろから現れた巨大な手に受け止められていたからだ

?? 「何だよ……これ」

剣帝 「危ないじゃアないかあ……まあ、良いや、殺れ」

剣帝がそう口に出すと剣帝の後ろに何時の間にか居た巨大な手の持ち主と思われる真つ黒な巨人が人影を掴み、そのまま持ち上げて握りつぶそうとし始めた

?? 「ぐうっ……グアアア!!何故だ!何故影である筈の俺に触れられる!」

剣帝 「だって、それ、一応影だもん、巨大な影が小さな影を飲み込むのと同様に、影が影に触れない道理がある訳無いだろ?」

?? 「チク……シヨオ……オオ……オツ……」

剣帝 「まあ、濡れるのは勘弁ね」

巨人の様な影は左手で捕まえた人影をそのまま顔と思われる場所の前まで持ち上げると、込める力を強くし、そのまま握り潰した

すると、巨人の影の左手からは大量の赤黒い血が雨の様に降り注ぎ、その血が当たる前に剣帝は赤色の番傘をどこからともなく取り出し、開いて血の雨が自分の体に当たることを防いだ

剣帝 「ふうー、これで一人倒せたね、一誠君」

一誠 「何で……何でアイツを殺したんだよ!」

劍帝「はあ？何でって……敵だからだよ？敵は殺すもんだらう？」

一誠「別に殺さなくても一時的に倒しておけば良かったんじゃ……」

劍帝「そんな甘い事ばかり言っていると……何時か寝首をかかれるよ？」

一誠「いつ……」

劍帝は番傘を閉じつながら一誠に話し掛けて、劍帝が一誠の居る方向を向くと、番傘の処理を終えた劍帝の胸倉を一誠が掴み、文句を言ってきた

だが、劍帝は一誠に幾ら文句を言われても、ハアとため息を付きつつ呆れたような表情を浮かべ、一誠の手首を掴み、無理矢理一誠の手を離してから二条城に向かって歩き始めた

九能「劍帝よ、アレは少し厳しいのではないか？」

劍帝「良いんですよ。彼はこれからもつと血生臭い凄惨な場に立ち会うでしょうから、敵の死には大量に立ち会わせておくべきなんですよ」

その間尻尾の束の中に隠れていた九能に軽く文句のような事を言われたが、劍帝はそんなの知らないと言わんばかりの反応をしていた

↳二条城：門前↳

一誠「よお、待たせたな！」

木場「無事で……何でその男が一緒に居るんだい？イツセイ君」

劍帝「おやおやあ？俺は非歓迎ムードですかねえ？」

ゼノヴィア「英雄派の曹操達と戦う前にお前をワタシの新しくなったデュランダルの  
鍔にしてやる」

劍帝「フフツ……ハハハツ！やりますかあ？甘ちゃん共」

駅のホームから出て行った一誠や劍帝達は二条城の門のすぐ前に集まっていた他メンバー達のもとに向かつて、一誠は走り、劍帝はその後ろを悠然と歩いて付いて行った。そして、一誠が他メンバー達と合流すると同時に、そのメンバーに居た木場とゼノヴィアが劍帝に向けて、木場が白色と黒色が入り混じった劍、ゼノヴィアが全体的に金色の装飾の付けられた劍を構えていた。

それに対して劍帝は右手に漆黒の指輪に加えてもう一つ金色の指輪を中指に付け、更には左手に赤い刀身の劍を持ち、構えていた。

九能「ま、待つんじゃない！今からその様に仲間同士で闘う必要など無いじゃろ!!」

劍帝「……………まあ、俺は冗談ですがね」

劍帝は自分の背後から現れた九能に文句を言われると、つまらなさそうにしつつ左手に持っていた劍を木刀に変化させつつ、二条城の門に向かつて歩いて行った。

木場「イツセー君、彼は協力していると考えても良いのかな？」

一誠「大丈夫……だと俺も思いたいんだがなあ……多分ここに居るメンバー内で一番

強いからなあ」

ゼノヴィア「だが、私たち全員で掛ければ勝てるんじゃないのか？」

そうやって、剣帝から離れた位置で一誠や木場、ゼノヴィアなどがコソコソと話している、その頭上を5つの影が通り過ぎて行った

剣帝（怒）「何だよ！もう既に本体が着いてるじゃねえか！ああ、苛つく！」

剣帝（哀）「ああ…哀しい…分裂したにも関わらず、禄に敵には会わず、骨折り損のくたびれ儲けとはこの事……」

剣帝（楽）「空の旅的な楽しかったんだし別に良かったじゃない！」

剣帝（喜）「そーそー、楽の言うとおりー、それにー、誰かが傷ついてる姿とか見なくて済んで僕は嬉しいなあ」

剣帝「お前等ー、うだうだ言っでとつとこつちに戻れ、これから戦闘だ」

その影に気付いた剣帝達が空を見上げると、其処には京都タワーの上で別れた喜怒哀楽の剣帝と黒影の姿があった

すると、剣帝は自分の分裂体達に向かって手招きをしてから右手の掌を向けた、すると、剣帝の分裂体が黒影を残して全て剣帝と一体化した

剣帝「黒は戻らないのか？」

黒影「面倒だし、頭数的に俺も居た方が良いかと思っただな」

劍帝「了ー解」

一誠（今のは何なのか聞きたいが……下手に質問するとヤバそうだし……辞めておこう）

劍帝が自分の分裂体を全て取り込み終わると同時に二条城の城門がギギギイと重々しい音を鳴り響かせながらゆっくりと開いていった

そして、劍帝や一誠達が二条城の敷地内部に入っていく、ある程度歩いていくと、城の瓦の上に何人かの人影が並んでいるのを発見し、その中に昼間に会った曹操の姿を見付けた

曹操「君達は正に驚異的だ！とある一名を除いて」

一誠「曹操!!」

劍帝（一名って多分俺の事言ってるんだろうなあ……面倒なんで無視しようつと）

一誠達と曹操達が対面していると、一誠達の後ろの茂みの中から左右を黒いスーツのような服に包んだ男に挟まれた、金髪の見目麗しい着物を着た頭に狐の耳を生やした女性が現れ出てきた

九能「母上!!母上!九能です!!母上!どうしたのですか!?!お目覚め下され!」

劍帝「九能ちゃん、今のお母さんに何を言っても聞こえないと思うよ、多分、変な術か催眠か何かを掛けられてる」

曹操「その通り、そこに居る赤龍帝の偽物の言う通り、御母上には我々の実験に協力して頂く為に少々術を掛けて細工をさせて頂きました」

劍帝（偽物って……）

劍帝が自分の事を偽物呼ばわりされている事に少しムツとしていると曹操は片手で持っている槍の柄の先を自分の足元に打ち付けた

すると、劍帝や一誠の背後に居る九能の母親が頭を抱えて苦しみ始めたかと思えば、またたく間に巨大な九尾の狐の姿に変化した

一誠「これが伝説の妖怪……九尾の狐」

九能「母上……」

曹操「九尾の狐は妖怪の中でも最高クラスの存在、そして、九尾と切っても切り離せない関係である京都市は、その存在自体が強力な気脈に包まれた術式都市だ、その都市の力と九尾の狐を使い、この空間にグレートレッドを呼び寄せる」

一誠「何だど!? アイツは次元の狭間を泳ぐのが好きなだけで、実害はない筈!」

劍帝（まあ、今は別の事、というか、物? 人お、に執心だろうけどね、別に言わないし誰とは指名しないけど、まあ、京都市に既に来てるのは変わりないか）

劍帝は曹操の実験の概要の説明を聞きつつ、一誠の物言いを聞きながらボケーツと自分の心の中で独り言を言っていた

曹操「その通り、だが俺達のボスにとっては邪魔な存在らしい、故郷に帰りたいのに困ってるそうだ」

一誠「やつぱり……オフィスか……それで、グレートレッドを呼び寄せてどうする！ 殺すのか!？」

曹操「どうかな？とりあえず捕らえてからだな」

劍帝「悪い事は言わねえから、諦めろ、お前等じや絶対に捕らえるとか無理だから」

曹操「赤龍帝の偽物風情は少し黙っていてくれないか？というか、何故君の様な弱者がこの場に来ている？また俺に負けたいのか？」

劍帝「弱者……ねえ？人の加減すら見抜けないような奴に弱者と言われるとは心外だな？」

劍帝が一誠と曹操の会話に口を挟むと曹操はムツとした表情を浮かべつつ劍帝に黙るように言ってきたが劍帝は一向に黙る気配を見せず喋り続け

劍帝の話の内容を聞き続けていた曹操は段々と表情の怒りを強めていった

曹操「手加減、つまりは昼の戦闘の時は一切本気を出していなかったと？」

劍帝「そうだねー、出して二厘……かな？」

曹操「二厘……割合の単位の中で最も小さな単位の厘か」

劍帝「そうだよお、ゲームの難易度で例えるならベリーイージーなチュートリアル、勝



てて当然、その程度に勝って誇ってるようじゃ、英雄の名が泣くよお？」

曹操「ならば今度こそ本気となった君に勝ち、本当に君を弱者と呼ぶとしよう」

劍帝「なら、俺達の戦争を始めようか」

ゼノヴィア「なら、会話中にスマナイが、先制攻撃をさせて貰うとしよう！」

劍帝と曹操の会話が終わったと同時にその刹那、劍帝の右斜め後ろに居たゼノヴィアが空に向けて手に持っていた金の装飾の施された剣を掲げた

すると、その掲げられた剣から天空に向かつて一本の光が走り、ゼノヴィアはその光を剣ごと曹操達に目掛けて振り下ろした

劍帝「ヒュー、派手にやるねえ」

ゼノヴィア「ハアアア……」

一誠「ハアじゃない！ハアじゃ！一仕事終えたみたいな顔しやがって！」

ゼノヴィア「開幕の一発は大切だ！」

一誠「オイオイオイ……」

ゼノヴィアがその光の一撃を叩き込んだ後、それが振り下ろされた場所には超巨大なクレーターが出来ていて、曹操達の姿は消えていた

だが、その1分後ほどにクレーターになった地面からボコボコと曹操とその仲間達が出て来た

劍帝「うつわ、ゾンビだあ、紛い物の英雄のゾンビだあ」

曹操「いやあ、良いねえ、君達もう上級悪魔の眷属と比べても遜色が無い、いや、上級悪魔よりも強いのかもれないね」

劍帝「んんん？俺の顔に何か付いてるかな？パチモン曹操君」

曹操「いや何、本物の元魔王レヴィアタンの眷属である君よりもそちらのグレモリー眷属の方が強いなど思ったに過ぎないよ」

劍帝「ハツハツハツハツハ、そうかいそうかい」

劍帝と曹操はお互いに笑顔を見せつけながら相手の顔を見つつ、互いに双方に向けて殺気を放ちながら互いを挑発しあっていた

劍帝「まあ、つべこべと無駄口を叩かずに掛かってきたらどうか？パチモン曹操君」  
曹操「ああ、そうさせて頂くとしようか！」

劍帝「あつ、そーだ、一応っ」と

劍帝は自分に向かってきた曹操が伸ばしてきたトゥルー・ロンギヌスの一撃を、腰に帯刀していた木刀を変化させた赤い刃の剣で防ぐと同時に自分の分裂体を創り出した

劍帝「全員、グレモリー眷属の援護！」

劍帝（分）「了解」

劍帝「ああ、それから一応リーダー格同士って訳で君も来てね」

一誠「何で俺までえええ!!」

劍帝は左腕一本で劍を持ち続け曹操の一撃を真正面から受け、後方に押し込まれながら右手で一誠の制服の襟首を掴み、そのまま連れ去って行った

劍帝「一誠君も、曹操ぶつ飛ばしたいだろう?」

一誠「それは……そうだけだよ」

劍帝「それなら良いじゃないか、曹操君も良いだろう? 発展途上の赤龍帝と偽物の赤龍帝だ、相手するのは厳しいだなんて言わないだろう?」

曹操「勿論だとも、逆に君達は精々死なないように気を付ける事だね、これは聖槍、聖なる槍だ、悪魔にとっては弱点に他ならない」

劍帝「まつ、なるようになる、さ!」

劍帝は曹操と一誠に問題が無いか確認を取ってから、曹操に向かって走って近づき、曹操に向けて兜割りを仕掛けた、だが、その一刀は曹操の槍の柄で防がれてしまった

曹操「確かに、昼間に戦った時よりも素早い上に重たい一撃だ、だが、まだまだ足りないな」

劍帝「だろうな、こんなもんでへたばられちゃ面白くも何ともない」

一誠（は、速え……何て速い戦闘だ、一瞬の内にお互いに何発も相手に叩き込もうとしてやがる）

劍帝「コラコラ、一誠君、ボケーツとしてないで君も戦う」

曹操「余所見とは余裕だね」

劍帝「そつちも余程実験が気になるみたいじゃないか、何度も余所見をしてるし、余裕満々だねえ？」

曹操「そりゃあ、相手が赤龍帝の偽物じゃ、余裕が出来るというものだよ！」

劍帝「そりゃ、良かったなつと！」

曹操は劍帝から放たれてくる劍戟を躲したり槍で軌道を逸らしつつ、劍帝の体に向けて何度も槍の銚先を放つが、劍帝はとある部位を狙われる以外は全て紙一重で躲していた

だが、右胸を狙われた瞬間だけそこ以外の箇所を狙われた時の数倍の素早さで、槍の銚先を劍で弾いて逸していた

曹操「右胸が余程大事と見える、何か有るのかな？」

劍帝「誰が教えるか、知りたきや俺を倒してから自分で確認しな」

曹操「ああ、そうさせて貰おうかな！」

劍帝「うおつ！危n……………」

曹操「君は右胸を庇い過ぎだからね、そこを突けば必ず隙が出来る」

劍帝「しまつ……………ゴフツ……………」

曹操は再度剣帝の右胸を狙い、今までの中で最も素早い速度で槍の鋒先を放つてきた、だが、やはり剣帝の右胸には槍の鋒先はカスリともしなかつたが、鋒先を弾かれた瞬間に曹操は剣帝の脇腹に槍を突き立てた

曹操「これで俺の勝ちだ、さて、早速右胸が大事だった理由を確認させて貰おうか」

黒影「死にたくないなら辞めておいたほうが良いぞく？それすると藪からキングゴブラヤらアナコンダやらが群れを成して出て来て、死ぬぜ？」

曹操「誰かな、君は」

黒影「俺か？秘密だ、取り敢えず、忠告はしてやったからな？」

曹操「見るなど言われれば見るのが人の道理というものだ！」

剣帝の脇腹に深々と槍の鋒先を突き立て、曹操は剣帝を倒した。そして、その後すぐに剣帝の着ている執事服の右胸に手を入れようとしている曹操の後ろから何者かが歩いてきた

??「そつちはまだやってるんだあ」

一誠「イリナ！」

??「まあ、本物の赤龍帝だからさ、彼等よりはやるんじゃない？」

一誠「木場！ゼノヴィア！」

??「俺がそつちの赤龍帝とやれば良かったぜ」

一誠「ロスヴァイセさん！」

曹操の後ろから歩いてきた者達はそれぞれ、金髪の女性が栗色のツインテールの一誠の仲間の少女、紫藤イリナと喜楽の剣帝を

白髪の男が背中から生やした四本の白い腕で木場とゼノヴィアと哀の字が書かれた鉢巻を巻いた剣帝を

そして、最後に現れた大柄の男が全身に鎧を纏ったロスヴァイセと怒りの鉢巻を付けた剣帝を運んできた

曹操「君達は強い、強いよ、だが、まだその力では俺達には勝てない」

黒影「それはどうかねえー？」

曹操「また君か……なんだい？また忠告かい？」

黒影「まあ、そのつもりだぜ？剣帝の右胸にはもう手を入れるなよ？というか、右胸に入っている物に触れるなよ？」

曹操「だが、断る」

曹操は黒影の忠告を無視するかのように剣帝の執事服の右胸に手をつ突っ込み、服の内側から一枚の写真を取り出した

そこにはニコニコと笑顔で笑っている妹紅の姿が写っていた

曹操「これは……この偽物の赤龍帝の関係者かな？」

黒影「あーあ……俺様はもう知らねえぞ？どうなってもな」

曹操「フツ、どうにもなりはしないよ、現にこの男はもう倒しと」

曹操は油断しきった態度で自分の後ろに居る黒影と会話をしようとしていると、突如、剣帝の写真を持っていた方の曹操の腕が中を舞った

そして、曹操の足下からその腕に向かって何か白い物が飛び上がり、写真を回収した曹操「なるほど……これが君の本気と言うわけか」

剣帝「穢らわしい手で俺の嫁の写真を触ってんじやねえよ、殺すぞ」

その白い物の正体は九本の大きな狐の尻尾を背後に出現させた剣帝で、その剣帝は曹操達英雄派全員におぞましいまでの殺気をうちななつていた

その殺気を受けた曹操達は各々の武器を構え、双方臨戦態勢となつていた

## 第七十七話 「王の怒りと刑罰執行」

（京都：疑似空間内部）

劍帝「さて、英気取りの阿呆共よ、覚悟は良いな？」

曹操「英雄気取りとは言ってくれるじゃないか」

劍帝「英雄気取りは英雄気取りだろう…あつ、オイツ、黒、これ預かつとけ」

黒影「ハイハイ、あー、人使いの荒い兄貴だぜ……」

劍帝は曹操達を睨みつけながら、曹操達を英雄『気取り』と呼び、多少挑発しつつ、自分の近くに黒影を呼び出した

そして、黒影に自分の大切な写真を持って離れておくように命じると、黒影もそれを承諾し、写真を受け取ってからさっさと劍帝から離れて行った

劍帝「さて、掛かってこいよ、雑魚共」

??「多少見た目が変わった程度で粹がらないでくれるかな!？」

曹操「待て！ジークフリート！」

劍帝「確かに六本の腕とその腕がバラバラに振るう劍は脅威的だ……だが、それは本物のジークフリートの様な達人が扱うならの話だ」



曹操は劍帝に切り飛ばされた腕を片腕の脇に挟みつつ、自分の腕の切られた部分にフエニックスの涙を垂らしていた

その間も続いた劍帝からの挑発について耐えられなくなったのかジークフリートと呼ばれた白髪の男性が、背中から四本の白い腕を出し、その四本の腕と元々からある腕に剣を持ち、合計六本の剣で劍帝に斬りかかった

しかし、ジークフリートの剣は劍帝にはカスリともしなかった、何故ならば、劍帝の足下の影が剣が振るわれてくる軌道に当たるように垂直にまっすぐ上に伸び、劍帝の体を守っていたからだ

劍帝「だから、お前みたいな気取りの攻撃は脅威でも何でもねえ、もういつペン素振りからやり直しな」

ジーク「グウツ……!?!」

劍帝の影はジークが振るってきた剣を完全に止めきると、ジークの腕や剣に絡み付き、ジークの身体を空中で固定するように拘束した

それを見ていた劍帝はジークが身動きが取れなくなった事を確認すると、ジークの腹部に灰色の光弾を一撃だけ叩き込んだ、すると、ジークの身体は後方に向かって勢い良くふっ飛ばされてしまった

劍帝「まあ、こんなもんだろ」

曹操（なるほど……ジークフリートでは相手にすらならないか……）

劍帝「さて、あんまり時間を掛け過ぎて面倒事が起きても嫌だし、さつさと片を付けるとするか」

劍帝は表情を瞬時に冷静な、というよりも、冷徹さすら感じられるような表情に変え、曹操達に向けて右腕をまっすぐ伸ばし、右手を開いていた

すると、劍帝の右手の前にジークフリートの腹部に打ち込まれた光弾と同じく灰色の光の塊が出現し始め、それは時間が経つごとに大きくなり、三秒ほどでハンドボール位の大きさになった

曹操（何だ……この男の異様な力の変わり様は……）

劍帝「これで終わりかな」

曹操「!?避ける!」

そして、エネルギーチャージが終了すると、劍帝の手の前に浮いていた灰色の光球がバチバチと電流のようなものを周囲に軽く展開してから曹操達に向けて極太の光線になつて伸びていった

それを見た曹操は慌てて光線の射線から仲間を蹴って退避させつつ自分も退避し、無事に光線を避ける事に成功した、だが、その光線が通った後はジュワアと音を立てて地面が溶け、その数秒後に疑似空間が大きく揺れた

劍帝「あつちやー、外しちやったかあ」

??「凄え……」

ジーク「何て威力だよ、疑似空間が歪むか」

劍帝「さあて、まだまだ終わらないから楽しませてくれよ？」

劍帝は自分が放った光線に驚いている曹操達を見詰めながらにやりと笑みを浮かべ、今度は無数の小さな菱形の光弾を掌の上に出現させた

そして、それを一気に曹操達に向けてバラ撒くように掃射し始めた

劍帝『『シャインスコール』』

曹操「フフツ、この程度では我々は倒せはしないぞ？」

劍帝「だろうな、知ってる、だから、こうした」

劍帝は掃射し終わると、曹操達にバレないようにコツソリと左手に凝縮していた雷を全身に纏い、曹操に向かって超高速で近付いた

その後、曹操の槍をアツパーカットで上に弾いてから、曹操の腹部に目にも止まらぬ速さで連打を叩き込んで来た

曹操「くつ……ガハッ！ゴホッ！」

劍帝「そーらよつとお！」

曹操「グハアッ!!」

劍帝「ふいー……」

そして、劍帝はトドメと言わんばかりに曹操の鳩尾を目掛けて鋭いストレートを叩き込み、曹操を近くの岩壁に向けてふっ飛ばした

劍帝「さて、まだやるか、リーダー格の曹操はふっ飛ばした、ぞ？」

曹操「怒りのあまりのともんでもない変化だ……槍で受けなければ死んでいたよ」

劍帝「チツ……まだ動けんのか」

曹操「だが、その力は悪魔としての力では無いだろう？その疲労している状態が良い証拠だ」

劍帝「……んだよ、バレてんのか」

劍帝が曹操をふっ飛ばしてから汗だくの額を拭いつつ曹操の仲間の方を見ようとしている、曹操がふっ飛ばされた岩壁の方向からガラガラと音を立てながら曹操が現れ出て来た

どうやら、曹操は劍帝の右ストレートが当たる寸前で槍の柄を劍帝の拳にぶつけてギリギリで防御していたようだ

曹操「では、今度こそ本気となった赤龍帝を倒させて貰うとしようか！」

黒影「おおっと、そいつは駄目だぜ」

曹操が劍帝に向けてトゥルーロンギヌスを伸ばしていると、上空から何本もの金色の

細い糸がトゥルーロンギヌスに絡み付き、トゥルーロンギヌスの動きを止めた

劍帝「遅いぞ……黒」

黒影「仕方ねえだろうが、一旦屋敷まで戻ってたんだからよ、忘却欠片（ルール・フラグメ）をよ」

曹操「忘却欠片？何かな？それは」

黒影「テメエは知らなくても良い存在だから気にすんなつと、ほれ、ドルエリの劍鱗とエレミーオの櫛だ」

劍帝「どうせならアイルクローノの鎌とエレミーオの櫛にしてくれよ……」

黒影「無茶言うなよ、アレはでか過ぎるからトランクから出せねえんだよ、俺じゃあな」

劍帝「あつそ……」

その上空から伸びてきていた糸の一本には黒影がフワフワと飛んでいた、そして、黒影は劍帝に向けて赤い刃のまるで龍の鱗の様な短剣と赤色の十字架が描かれた髪留めの櫛を投げてきた

劍帝はその2つを受け取ると、櫛を自分の懐に仕舞ってからドルエリの劍鱗と呼ばれた短剣を自分の右腕に突き刺した。すると、劍帝の右腕がみるみる内に赤い龍の頭に変わった貌した

劍帝「さあて、まだやるか？俺と黒、二人が相手だぞ？」

ジーク「流石に分が悪そうだ、曹操！撤退しよう！」

曹操「…仕方が無いか………赤龍帝よ！今よりももつと強くなれ！そうすれば槍の本当の力を見せてやる！」

曹操は槍を構えて二人に敵対行動を取ろうとしていたが、ジークフリートから提案を受け、更に周囲の状況を見た、すると、曹操の仲間全員の首にトゥルーロンギヌスに付いている物と同じ金の糸が掛かっていたので仕方無く槍を構えるのを辞めて仲間たちの元に戻って行った

すると、曹操達から少し離れた位置に居た眼鏡を掛けた男が曹操達の元に飛んできて、曹操達の足元に転移用の魔法陣を展開し、曹操達は撤退していった

劍帝「ふい………危ない危ない………」

黒影「なあんて、行き着く暇無さそうだぞお？」

劍帝「分かっているよ、最後の大事なだな、やるぞ？黒」

黒影「あいよ」

劍帝は曹操達が去るとはあー、と溜め息をついてから後ろを振り返った、そこには黒い蛇のような龍にのしかかっている九尾の狐が居た

それを見ていた劍帝はゆっくりと上空に浮かび上がっていき、黒影と並んだ、そして、

二人が同時にお互いに向けて拳を伸ばすと二人の体はギョルギョルと混ざり始め、二人が居た場所から突如巨大な銀色の毛を持つ九尾の狐が現れた

劍帝「クオオオン！」

九尾「キユオオオン！」

一誠「何だよ……これ」

そこから先は最早巨獣対巨獣、と呼ぶに相応しい戦いだった、いや、戦いと呼ぶには些か一方的だった

先ず、狐に変化した劍帝は九尾の狐の身体を尻尾でひっくり返してから押し倒し、狐の首筋に噛み付いた、そして、そのまま狐の首筋に向けて大量の狐火を吐きかけ、狐の状態を一気に弱体化させていき、身動きが取れなくなった事を確認すると、狐から離れ、変化を解いた

劍帝「ふう……さて、仕上げだな」

九尾「母上にこれ以上何をするつもりじゃ！」

劍帝「何をするつもりって……術を解くんですよ。じゃないと貴方の声がお母さんに届かないでしょう？」

劍帝が疲れきった表情で体を揺らしながら九尾の狐に向かって近づいていくと劍帝の目の前に九尾が立ち塞がり、その後ろに一誠とその仲間達が立ち塞がった

一誠「信じられるかよ！アンタは得体がしれ無き過ぎだ！」

劍帝「はあーあー、そんな風に言われると傷付くなあ……」

黒影『ヒヤハハッ、まあ、事実だから仕方ねえだろうさなあ？』

劍帝「うっさい、黒……丁度いいからお前、櫛を持っていつて来い」

黒影「アイアイサー」

劍帝は面倒くせえと言わんばかりの表情を浮かべながら懐に手をつ突っ込んでいると、劍帝の影から黒影の聲が劍帝にだけ聞こえてきた、すると、劍帝は何かを思いついた様な表情を浮かべ懐から櫛を取り出して自分の影に向けて投げた

投げられた櫛はクルクルと回転した後、九能達には見えないように黒影にキヤツチされた、そして、櫛をキヤツチした黒影は劍帝の影から別の影別の影と転々と移動し、九尾の狐の頭頂部を持っていた櫛を押し当てた

すると、パリンという音を立てて九尾の狐に掛けられていた魔術が全て同時に解けた  
黒影「終わったぜー、劍帝ー」

劍帝「ごっくろうさーん」

一誠「なあっ!?何時の間に！」

九能「母上!!ご無事ですか！」

九能は黒影の聲が聞こえてから数秒経った後大急ぎで母親の側に駆け寄り、母親でお



る九尾の狐に声を掛けた

すると、九尾の狐は目を開き九能の名前を呼んだ、そして、その直後九尾の狐の体が光り始め、人型に変化していった

九能「母上！母上え!!」

劍帝「はあー、これで役割終わりーっ」と

黒影「とつとと帰ろうぜ？もう疲れたしよお」

劍帝「そうだなー………んー……『いや、ちよつと待て黒』」

黒影『何だあ？内部連絡に変更って事は何か聞かれたくない事でもすんのか？』

劍帝『いや何、今のままの一誠君だと確実にヴァーリ君とかに殺されるからちと修行をね』

黒影『好きだなあ、お前も』

劍帝は狐の親子の対面に背を向けながら転移用の魔法陣を展開しようとしていたが、それを一旦中止して、一誠の首根っこを掴んだ

劍帝「一誠君、ちよつと良いかなあ？」

一誠「はあ!?!な、何だよ！てか、離してくれよ!」

劍帝「断る!というか、君ら確かサイラオーグ君とレーディングゲームするんだろ？」

一誠「な、何でそれを……」

劍帝「風のうわさで聞いたから、じゃなくて、今のままだと君等多分負けると思うからさ、修行を付けてあげるよ！」

一誠「そんなの要らねえよ！」

劍帝「そんなに遠慮しなくても良いから良いから〜」

劍帝は一誠の意見を一切無視してズルズルと一誠を引き摺って何処かへと魔法陣で転移して連れ去って行った

〜???

劍帝「ほいっと、着いたよ」

一誠「いつて！何すんだ！」

劍帝「だからあ、修行だよ、君のね」

一誠「はあ!?!何でアンタが俺の修行なんでするんだよ！」

劍帝「いやね？今のままの君だと、ヴァーリ君に100%負けるし、殺されかねないからね？だからさ、修行を付けてあげようかなってね、因みに拒否権は無い」

劍帝は一誠をズルズルと引きずりながら転移用の魔法陣から現れ、一誠を自分の目の前に放り投げた

一誠「……………で、いったい俺はここで何をすれば良いんだ？」

劍帝「んつとねえ、取り敢えず今から俺が出す人形と戦って、倒して貰います」

一誠「人形と戦う？随分と簡単そうな修行だな！タンニーンのおツサンのシゴキに比べりや楽が出来そうだ！」

劍帝「さあー？それはどうかなあ？まあ、君が強くなれる、可能性を信じるとしようかな！」

劍帝が地面に手を付くと、地表に巨大な魔法陣が形成されていき、劍帝の手の下から劍帝と同じ姿の人形が出て来た

劍帝「ほいつと……じゃ、この人形と戦って貰うからね」

一誠「速攻で終わらせてやる！」

劍帝（さあてと、俺はゆるりと読書でもするかなあ）

劍帝は人形を出し終わると、懐から赤い背表紙の本を取り出し、ゆっくりと読み始めた

一方その頃一誠は余裕だと思っていた人形相手に悪戦苦闘していた

一誠（何だコイツ……ヴァーリとかより断然早え！）

人形「……………」

一誠「グアツ……ガハッ！このっ！」

人形「……………」

人形は一誠の目が追いつけない程の速度で一誠の体を殴ってきた、だが、その速

度の分多少威力は弱いようで一誠もすかさず反撃を繰り出していた

だが、剣帝の人形は自分の体に付いた傷を自動的に急速に修復し続けた

一誠「オイっ！剣帝!!」

剣帝「何だよ一誠君、人が気持ち良く本読んでる最中に」

一誠「その人形本当に倒せるかよ!？」

剣帝「倒せるよー？傷は付くんだから、修復が追い付かない位の速度で叩けば壊れるよ」

剣帝が一誠に文句を言われたのでヒントを与えると一誠は考え込んでから少しの間動かなくなった

剣帝（んー……こりや面白くなりそうだ）

一誠「……………ブツブツ……………ブツブツ……………」

人形「……………」

剣帝がニヤニヤしながら一誠を見つめていると周囲に不穏な空気が流れ始め、一誠の目の前の地面から何やら大量の人のような陽炎が現れ始めた

そして、その陽炎はグルグルと円を描いていき、少し経つと大きな魔法陣を形成した

一誠「サモン……………オッパァーイ!!」

剣帝（うわぁ……………見ない見ない……………）

劍帝は一誠の行動に呆れたような態度を示しつつ再度本を読み始めた

その劍帝が目の離している間に、バンツ！と何か割れるような音が聞こえてきた

劍帝「ありっ？この音はもしかして……」

一誠「良しっ！倒したぜ！」

劍帝「ほほお、やるねえ」

劍帝が音に反応して一誠の居る方向を見ると、其処には破裂した姿の劍帝の人形と何だか今までよりも細身の身軽そうな赤い鎧に身を包んだ一誠が立っていた

劍帝「んじやあ、次は超遠距離戦闘ね」

一誠「それじゃあ、コツチだな！ビショッブラスターモオード!!」

劍帝が指をならして、自分たちの立っている位置から数キロ離れた位置に自分の人形を創り出した次の瞬間、一誠の鎧の背部から大きな砲座が二本飛び出してきた

そして、その砲座から放たれた赤色と緑色の入り交じる極太の光線が劍帝の人形に見事命中し、劍帝の人形はグズグズに溶けてしまった

劍帝「ほほお、それじゃあ、最後はこれね」

一誠「こういうタイプなら、これだ！」

劍帝が三体目に呼び出したのはとても肉厚な体をした劍帝らしき人形だった

その人形を見た一誠は背部に出していた砲座を消してから、両腕と両足を肥大化さ

せ、打撃の一撃一撃が重そうな状態に変化した

劍帝「素晴らしい、三種三様の変化とは、その上チエスの駒それぞれに王の許可無しで変化するとはね、良いね、これなら大丈夫じゃないかな？………ある程度は」

一誠「それじゃあ、今すぐ俺を部長のところに入れて行ってくれよ！」

劍帝「はいはい」

劍帝は右手の指を鳴らし、一誠の足元に転移用の魔法陣を展開した

そして、一誠は鎧を解除してからその魔法陣を通って、自分の自宅の今に転移していった

劍帝「まつ、アレなら多少は問題無いだろう」

黒影「お前のもあんな感じの進化出来たら良いのになあ？」

劍帝「無理無理、俺のは彼のよりもよっぽと封印が硬い上に外れる兆しなんざ一切無いからねー」

黒影「まつ、仕方ねえな！」

一誠が帰った後、劍帝がボケーツとしてしていると、劍帝の影から黒影が現れ、二人はゆっくりと話し込んでいた

## 第七十八話「酒盛り乱心」

《一誠から別れてから二時間後》

（京都：町中）

劍帝「ああー……不味い……」

黒影『確かに不味いが、口に出すなよ、店の人間に聞かれたら面倒だろ』

劍帝「いやでもさあ……失敗だなあ、うつかハズレ引いたわ」

黒影『何だ？どっかで口直しでも食べに行くのか？』

劍帝が一誠と別れた後、すぐに転移用の魔法陣を自分の足元に開き、セラフォールの側に戻り、その翌日にセラフォールの警護という形で京都観光を続行していた

そして、黒影の提案を聞くと、少し考えるような素振りを見せつつ会計を終わらせてから周囲を見回し、口直しに良さそうな店を探し始め、目星を付け始めた

劍帝「んじゃあ、どれに行こうかなあつと」

黒影『テメエはどうせ焼き鳥しか食わねえだろ？』

劍帝「いんやあ？俺も一応甘味は好きだからね、今回は団子にしようかなと思ってるよん」

黒影『ヒヤハハツ、そうかそうか』

劍帝は黒影と話し続けながらゆっくりと歩き進めながら周囲を見回し続け、店先で売つてある生八つ橋を見つけた

劍帝「おつ、この店の生八つ橋美味しそう」

黒影『そだなー』

劍帝「んじゃあ、買うとしようかつと」

劍帝は生八つ橋の入っている箱を5つ程手に取ると店内に入つていき、レジで会計を終わらせた

劍帝「これで良しつと」

黒影『だがよお？それだと買い食い出来なくね？』

劍帝は黒影からの指摘を受けると、ハツとした顔になつてから店から出て行つた

そして、劍帝はシヨボーンと顔を下に向けながらトボトボと町中を歩いていき、テキトーに目に付いた酒を二十本ほど瓶ごと買つて行つた

黒影『何で酒買つてんだよ』

劍帝「何となく飲みたくなつた、からかな？」

黒影『お前、こつちじゃもう酒飲まねえんじゃねえのかよ！』

劍帝「うるせえよつと」



劍帝は路地裏に入ると、酒瓶が入った紙袋を持った右手を下に降ろし、自分の影の中に酒瓶を押し込んでいった

すると、劍帝のやりたい事を理解した黒影はしぶしぶ酒瓶を受け取り、抱えていたそして、劍帝は続けて生八つ橋の箱の入った紙袋も影の中に押し込み、手ぶらになつてから路地裏から出ていった

黒影『オイコラ、劍帝』

劍帝「何かね？黒影君」

黒影『俺様にばかり持たせてんじやねえよ！』

劍帝「利用出来る物は最大限利用しなきゃ駄目じゃね？」

黒影『テメエ、何時か某首の骨折られた仮面ライダーみたいな死に方するぞ？』

劍帝「平気平気、俺の首折れるのなんて極々限られた一部だけだし」

劍帝はヘラヘラと笑いながら黒影との会話を行つていて、そんな劍帝の様子を黒影は苦笑いを見せながら見ていた

黒影（まあ……コイツの場合は防衛力が高過ぎて折る、折らないの話にならないからなあ）

劍帝「何か言いたげだな？黒」

黒影『何でもねえよ、このクソダイヤモンド野郎』

劍帝「俺の何処が？全然キラキラしてないじゃん？」

黒影『良く言うぜ、鉄バットで殴られても怪我一つしない上に逆に鉄バットを折るくせに』

劍帝「はって、何の事だろ？」

劍帝は黒影から文句を言われると惚けきつたような表情を浮かべていた、その表情を見た黒影は少しだけ眉間に皺を寄せてから、はあーとため息をついていた

劍帝「つと、そろそろ暗くなってきたし宿に戻るか」

黒影『お前、セラの警護はどうすんだよ』

劍帝「大丈夫じゃ無いかなあ？アザゼル居るし」

黒影『どうだろうかねえ？』

黒影は劍帝の言葉に疑問符を浮かべながら対応していた

劍帝「取り敢えず、俺は宿に帰って酒が飲みたい気分なんだよね」

黒影『クソだな、主放置するなよ』

劍帝「……………まっ、自分でやるって言った事を途中でほっぴり出すのは俺の性分に合わないし、宿に戻るまでは警護するかな」

劍帝は黒影に文句を言われると仕方が無いという表情を見せてから、目に付いた店で三色団子とみたらし団子を買って、食べながら警護し続けた

## 《京都：宿》

セラ（今日、警護してくれてた劍帝君、退屈そうだったなあ）

八坂「どうしたのじゃ？レヴィアタン殿」

セラ「あつ、い、いえ、何でもありませんよ？」

八坂「そうは見えぬが……加えてレヴィアタン殿の眷属の方の姿も見えぬ様じゃが？」

セラ「多分、昼間退屈そうだったので宿泊してる部屋で寝てるんだと思います」

セラ「フォルーは九尾の狐、八坂と同じ部屋で対談をしている最中に劍帝の事が気になつていた」

それに感づいた八坂はセラ「フォルーに劍帝の事を聞いていた」

八坂「ならば呼びに行くべきじゃろう、何ならわらわ等が呼びに行こうかの？」

セラ「い、いえ、大丈夫な筈です！ワタシが呼びますから」

セラ「フォルーひゅっくりと立ち上がるうといた八坂の動きを静止すると同時に劍帝に通話用の魔法陣を繋いだ」

セラ「もしもし、劍帝君？」

劍帝「はあい？何れすかあ？」

セラ「……………劍帝君、酔ってない？」

劍帝「酔ってませんよおー？俺は至って平常運転れす！」

黒影「嘘だぞー？顔真つ赤だからなー」

劍帝「五月蠅いぞ！黒!!」

黒影「ブべら！」

魔法陣を繋いだ先からは呂律がおかしい劍帝の声や黒影の声、加えてキンツキンツというガラスとガラスがぶつかり合う音が聞こえていた

セラ「スミマセン、八坂さん、ちよつと失礼させて頂きますね？」

八坂「ふむ……酔った男の元に向かうのに一人では厳しかろう、わらわも行くとしよう」

セラ「えっ……あつ、有難う御座います」

セラフォルーは劍帝との通話用の魔法陣を閉じると劍帝を直接呼びに行こうとし、その後ろから八坂もついて行った

そして、セラフォルーが部屋の前に着いて部屋の扉を開けると、同時に部屋の中から酒の匂いが濃く漂ってきた

劍帝「さあてえ、次はどっちが酒を取りに行くう？黒」

黒影「その辺はゲームで決めようや、劍帝」

劍帝「そだなー、ハハハッ！」

黒影「んじや、行くぜえー」

劍帝&黒影「『最初はグー!ジャンケンポンツ!』」

部屋の中では大量のビール瓶に囲まれ畳の上であぐらをかいて座りこんでいた黒影と劍帝の姿があった

そして、二人はどちらが新しいビール瓶を取りに行くのか決める為にじゃんけんをしていて、劍帝はグー、黒影がチョキを出していた

劍帝は自分が勝ったことを確認すると同時に、じゃんけんに使っていなかった右手で近くにあった空のビール瓶を握り、黒影の頭に向けて勢い良く振り下ろした

黒影「いつてえ!!」

劍帝「よっしゃー!俺の勝ちい!!ほおれ、行つてこおい!」

黒影「クツソー、次は俺が勝つからなあー!」

黒影はビール瓶で頭を思いっきり殴られたにも関わらずヘラヘラと笑いながら走つてビール瓶を取りに部屋の外に出て行こうとしていた

黒影「おんつ?どうしたんだ?セラ」

セラ「ええつとお、劍帝君はあ……もう既に?」

黒影「ああ、俺同様に完全に出来上がってるから、会談に参加は無理だわ、ワリイな」  
セラ「会談は大丈夫だけど……劍帝君、明日とか大丈夫なの?」

黒影「まつ、アイツの回復能力はかなり高いからな、平気だろう……」

黒影はまだ酔いがそこまで回っていないのかペラペラとセラフオールと喋っていた、そして、その最中に何か悪巧みを思い付いた様な表情を浮かべていた

セラ「どしたの？黒影君」

黒影「んあ？ああ、何でもねえよ、取り敢えず俺等は無理なんで悪いが帰つといてくれるか？」

セラ「え、ええ、分かったわ」

セラフオールが黒影のお願いを聞いて退室していくと、黒影はクルリと反転して、ゆっくりと剣帝に近づいて行った

剣帝「んあー？どうした黒」

黒影「いやあ、ちよいと面白い事を思い付いたからな？」

剣帝「面白い事ー？何だそりやあ？」

黒影「なあに、ただ単なる……」

剣帝「ゴフツ………テメエ………この剣は……」

黒影はニヤリとした笑みを浮かべてから自分の側に近寄ってきた剣帝の腹にとある剣を五本同時に突き刺した

すると、その剣は剣帝の体内にズブズブと入っていき、その剣の傷跡は跡形も無く消

えてしまった

黒影「ヒヤハハッ、流石に製作者、一瞬柄を見ただけで分かるか」

劍帝「当然だろ……今のは封印劍『鈎針』、刺した相手の体内に侵入してその相手の能力値を一部封印するって劍だ……」

黒影「その通り！まっ、今回はコッチの世界で限定的に使われるのだがな」

劍帝「で、何で俺にアレを刺した？」

黒影「いやな？お前が無双し過ぎてツマラナイだろうからよ？面白くしようと思つてな？五分封印って訳よ」

劍帝は黒影に腹を刺した事よりも封印の劍を刺した理由を問い質した、すると、黒影は刺した理由をべらべらと喋り始め

劍帝はそれを聞き終わるとはあー、と大きく溜息をついてから理由に納得していた

劍帝「要は俺の修行の為か」

黒影「そゆこと、頑張れー」

劍帝「無責任だなお、オイッ」

黒影「勿論さあ」

黒影は劍帝に無責任と言われても一切怒る素振りを見せず、逆に劍帝の事を茶化してきた

対する剣帝も黒影の茶化しを怒る気配を見せず、仕方ねえなあと言いなから完全に納得し、また修行しないと前向きな事を言っていた



## 第七十九話「痛みの代償の強さ」

「酒盛りしてから数日後：剣帝の部屋」

剣帝「最近暇だなあ……何か面白いこと無いかなあ」

黒影「面白いかは知らんが、俺的に面白いことなら今日の前で起きてるぜ」

剣帝「ん？何それ」

黒影「お前の現在の状態が常識外れ過ぎて笑える」

剣帝が寝泊まりしているセラフォルー領の屋敷の一部屋で黒影は剣帝のベッドに座りつつ、部屋の中で上半身裸で筋トレをしている剣帝を見ていた

その剣帝の筋トレの内容は、まず逆立ちをしてから左腕の指先だけを床に付け、そのまま腕立て伏せをしようものだった

更に回数が五百回に行く度に小指から指の数を減らしていき、最終的には親指のみで自分の体を支えるという内容のようで、現在剣帝の体は中指と人差し指と親指の三本で支えられていた

黒影「ほんつとテメエは頭がおかしいんじゃないかねえのかねえ？」

剣帝「だあまあれ、お前に頭がおかしいとか言われたら他人に言われるより苛つくわ」

黒影「あつそー、そんな事言うんならお前が興味出しそうな事が新聞に書いてあつたけど教えてやんねえー」

劍帝「俺が興味出しそうな事？何だそれ」

劍帝は黒影の言葉に反応を示し、腕立て伏せを終えようとたつた三本の指の力だけで自分の体を空中に押し上げて飛び上がらせて着地し、黒影の側に近寄つた

そして、劍帝が近寄つてくると黒影は劍帝に見えるように冥界の新聞のとある一面を見せてきた、それを見た劍帝はニヤリと笑みを浮かべた後、服をちゃんと着てから何処かに向かおうと部屋を出て行つた

く人間界：駒王町上空く

劍帝「さつてとおー、探すかな」

黒影「見つかるまで何分掛かるかねえ？」

劍帝「さあなつと」

劍帝は自分の気配を消しつつ駒王町の上空に転移してくると街全域に探知用の結界を展開し始めた

劍帝「……………アレ？学園に居ない」

黒影「なら、冥界にでも居るんじゃないかね？修行とかで」

劍帝「それ、勘付いてたなら先に言ってくれねえかな？余計な手間になるじゃん」

黒影「いやあ、どうせ学園に居るんじゃないやあねえかなと俺様も思ってたんでなあ？」

剣帝「嘘ばかりだな、クソ野郎」

剣帝は五分程かけて駒王町全域を結界で誰かを探していたが、どうやら探していた人物は駒王町には居ないようだ

そして、黒影の言葉を聞いた剣帝は自分の真下に転移用魔法陣を展開し、すぐさま冥界に転移していった

冥界：セラフオール領

剣帝「さあて、居るっかなあー？つと」

黒影「てか、見つけてどうすんだよ」

剣帝「んー？秘密」

黒影「あつそーかい」

剣帝は冥界に戻ってくると同時に探知用の結界を大規模に展開し、とある人物を探し始めた

そして、二分経った後、ようやく探していた人物の反応を察知した

剣帝「見つけ…」

黒影「んじゃないあ、さっさと行こうぜ」

剣帝「ああ」

劍帝は探していた人物を見つけられた事が嬉しかったのか少しだけ笑みを浮かべながら爆炎で加速を掛け、自分の後ろにソニックウェーブを出して飛んで行った

「セラフォルー領の外れ」

劍帝「この辺に居る筈なんだよなあ、おーい！匙君やーい！」

黒影『そんなに叫んで、本当に出て来たら笑うぜ？』

匙「さて、今日も会長の為に修ぎよ……う……何でアンタがココに居るんだよ！」

黒影『ブツハ！マジで出てきやがった!!』

劍帝が探していた人物、匙の名前を叫びながら周りを見回していると、劍帝の後ろからその匙当人が歩いてやってきた

劍帝「やあ、匙君」

匙「やあ、じゃねえよ！俺の質問に答えてくれよ！劍帝さん！」

劍帝「いやー、この新聞を見てね、良ければ君に修行を付けてあげようかと思つてね」  
劍帝は匙から質問をされると、手に持つていた新聞を匙に見せながら自分がやってきた理由をつらつらと話していった

それに聞いた匙はふむふむと頷きながら劍帝の言つてきた理由に納得していた  
劍帝「つて訳だから、構えろ」

匙「!!」

劍帝「とつとと、構えろ、じゃなきや……死ぬぞ」

劍帝はゴキリと自分の右手の指の骨を鳴らすと、握るようにながら自分の体の前に出し、構え始め、同時に殺気を放ち始めた

それを見た匙も慌てて自分の神具を展開し、劍帝の行動に対応しようとし始めた

劍帝「それで良い、と言いたいところだが、匙君、スマナインだが本気で来てくれるかな？」

匙「本気って事は……ヴリトラになれって事か」

劍帝「勿論、さあ、さっさとしてくれるかな？」

匙「……どうなっても知らねえぞ……ヴリトラプロモーション！」

劍帝が本気で来てくれという匙は全身に力を込め始め、巨大な蛇の様な龍に化身した

劍帝「おおー、これが龍王ヴリトラ……素晴らしいねえ」

匙『コレなら流石のアンタでも苦戦するだろ』

劍帝「さあ？どうだろう、ねっ！」

匙『なっ、消えっ、ガハッ!!』

劍帝「図体がデカイのとは割と戦ってるんだよね、コレでもさっさと！」

劍帝は音と共に姿を消すと、次の瞬間、ヴリトラに化身した匙の顔を殴り飛ばし、その次に顎を下から蹴り飛ばした

匙『何て素早さだよっ!』

劍帝「いやいや、俺が素早いんじゃないよ……君がまだまだただだよ」

匙『何で!一発も!カスリすら、しねえんだよ!』

劍帝「それはね、狙いが大振りだからだよ」

匙は劍帝に蹴り飛ばされた顔をすぐさま持ち直すと、自分の体を振り、周囲を払う様に動いた

しかし、匙の攻撃を劍帝はするりと隙間を縫うよう回避しつつ喋っていた

劍帝「仕留めたいなら、敵の隙を狙って叩き込まないとね」

匙『隙って……:そんなの戦闘中じゃ狙えないんじゃない』

劍帝「いや?それでも無いよ?隙ってのはどんな状況だろうと必ずあるからね」

匙『例えば、今、とかか?』

劍帝「そうそう、その通りいーって、あつつう!!」

匙『よっしゃあ!ようやく当たった!』

劍帝が回避行動を辞めてべらべらと喋っていると、その間に匙は劍帝に向けて黒色の炎のブレスを吐きかけた

剣帝「あー……アチチツ」

匙『今のもでもアチチツだけで済むのか……やっぱりアンタは規格外だな』

剣帝「でも、普通は俺にアチチツって言われられるだけでも凄いんだよ？ 基本的に俺言わないし、良い成長だね匙君」

匙『アンタにそう言われると嬉しい気がするぜ』

剣帝「そんな匙君にはご褒美をあげよう、目を閉じて口を開けなさい」

匙『こ、こうか？』

黒炎を吐きかけられた剣帝はその数秒後に炎の中から飛び出してきて、体に付いた黒炎を手で払っていた

そして、前に会った時よりも匙が成長していた事を嬉しく思ったのか剣帝は匙に目を閉じさせてから自分の指を少しだけ切り、自分の血を匙に飲ませた

匙『んっ……がはっ！ 熱い！！ 体が燃えるように熱い！！』

剣帝「頑張って耐えるんだ、そうすれば君はもつと強くなれる」

匙「何なんだよ！ これ!!!」

剣帝「秘密、良いから頑張ってその痛みに耐えるんだ、そうすればこれから先、君が大切とする人達を護れるぞ」

匙「大切とする人達……会長……カテレア……」

劍帝（へえ、匙君の口からまさかまさかの人物の名前が出たなあ）

匙は劍帝の血を飲むとヴリトラの姿から元の人間の姿に戻り、地面にのたうち回っていた

しかし、劍帝のとある一言に反応して、蹲りながらも全身の痛みには匙は必死に耐えていた、そして、匙の体を襲っていた激痛はものの五分ほどで全て消えた

匙「はあー……はあー……」

劍帝「まさかマジで耐え切るとは……やはり君は素晴らしいね」

匙「何だか……体に……力が漲ってくる」

劍帝「だろうね、それが君が耐えた痛み之恩恵だよ、但し、その力は振るい過ぎると自分の身を滅ぼす毒になってしまうから使うタイミングはちゃんと見計らうようにね」

匙「あ、ああ、有難うな」

劍帝「気にしない気にしない、それは君が頑張ったからこそ物なんだからさ」

劍帝は匙に謝辞を言われると俺は何もしてないよと言ってから、自分の後ろに転移用魔法陣を展開し、そのまま屋敷に帰っていった

そして、匙は劍帝が居なくなった後もずっと修業と言いつつ、自己修練に明け暮れていた



## 第八十話「偽りと真実の激突」

《匙に力を与えてから数日後》

くセラフオール邸：剣帝の部屋く

剣帝「さて、そろそろ匙君とか一誠君とかがレーティングゲームをしてる頃か」

ドライグ『お前は行かなくて良かったのか？お前の主であるあの女はもう会場に着いている筈だぞ？』

剣帝「ああ、良いんだよ、俺は俺で別に用事あるし、それにセラ様には黒影が付いて行ってるから問題無いだろうしな」

ドライグ『用事？』

剣帝「そう、用事、俺自身の更なる強化の為にジャガーノートドライブを制御下に置くって超重要な用事」

ドライグ『つまり、神具に潜るんだな』

剣帝「そういう事、それじゃ始めるか……」

剣帝は自室のベットに座りながら自分の左腕に現れたドライグの宿る赤い籠手と喋り終わると、ゆっくりと目を閉じてから、自分に宿っている神具に意識を集中させて

いった

「神具内部：精神世界」

劍帝「よつと……ここが神具の内部か……」

ドライグ「そうだ、良く着たな相棒」

劍帝「おつすドライグ、こうしてお互いに神具通さずに会うのは久しぶりだな」

ドライグ「確かにそうだな、前に会った時は俺がまだ生きていて、お前に殺された時だな」

劍帝「確かにそうだなあ、いやあ、お前はマジで強かったなあ」

ドライグ「それを真面目から単純な力のみで振り伏せたのは何処の誰だ？」

劍帝「ハハハッ……それは俺だな、でも、あの時の俺に奥の手を切らせてる時点でこの世界ノドライグよりも圧倒的にお前のが強いからなあ？」

ドライグ「フンツ！御世辞なら辞めろ」

劍帝「別にお世辞じゃないんだけどなあ……まあ、良いや」

劍帝が神具に集中して入り込んだ場所は周囲が轟々と赤黒い炎で包まれた真つ黒な空間だった

そして、その空間の中からまるで劍帝を待つて居たかのように全身が真紅の鱗に包まれた龍、ドライグが現れ出て来て劍帝と喋っていた

剣帝「取り敢えず、ジャガーノートを暴走させない為に呪いを解かないとな」

ドライグ「それは構わんが………確実に試練があるぞ？」

剣帝「やつぱりそうだよねえ………それもかなり難しいだろうよな？」

ドライグ「ああ、普通ならば不可能と言わざるおえない程に困難な試練だぞ、それでもやるか？」

剣帝「勿論」

ドライグ「ならば、送ってやろう、精々頑張れ」

剣帝「あいよっと！」

ドライグが剣帝の意志を聞き届けて口を大きく開くと剣帝の足元に魔法陣が展開され、その魔法陣が光り始めた

そして、数秒後に剣帝はその光に体を飲み込まれ、ただただ広い原っぱのような場所に転送されていた

剣帝「ここが試練の場所か………」

??「その通り、さて、お前は試練を上手く攻略出来るかな？」

剣帝「………確かにこれは困難な試練だな……自分が相手とは………それもこの気配は………」

転送されたばかりの剣帝がゆっくりと首を自分の後ろを覗き込むように動かすと、剣

帝の視界に自分と良く似た姿の男が居た

だが、その男の姿は剣帝の姿とは多少違う部分があった、まず服が黒いロングコートの下に黒いスーツを着込み、背中からは黒い天使のような翼を二対出している

剣帝「神化……………」

??「正解！流石は俺（剣帝）！」

剣帝「分かって当然だろ、本来の世界の自分自身の一番の奥の手だぞ、てか、その姿が相手つて事はほぼ100%全力の俺が相手かよ……………」

剣帝（偽）「さあ、俺に勝ってみよう！俺自身だし可能だろ？」

剣帝「……………はあー、やるしかないか……………」

剣帝は草原に現れた自分が相手と認識すると溜息を大きくついてから剣を構えた  
それを見たもう一人の剣帝も赤い刃の剣を抜き、剣帝に向けてきた、そして、二人は同時に移動を始め、姿を消した、その次の瞬間から草原の様々な場所で金属と金属がぶつかり合う音と火花が飛び交っていた

剣帝（やっぱ辛いなあ……………剣圧が桁違いだし……………）

剣帝（偽）「ハッハッハ！まだまだ終わらんぞお！」

剣帝（……………なあんか俺とは違うような気もするんだよなあ……………喋り方とか）

剣帝（偽）「戦闘途中に他の事にうつつを抜かすのは感心しないなあ？」

剣帝「ヤッベ！ガハッ！」

本物の剣帝が偽物剣帝の言動で少し引つかかる部分がありそれを考え込んでいると、偽物の剣帝がその間に本物の剣帝の脇腹に向けて一太刀薙ぎ払ってきた

すると、剣帝は慌ててそれを防ごうと自分の持つてゐる剣を振るわれてきた剣にぶつけたが、限りなく本来の剣帝の力に近い偽物の剣帝と力が落ちてゐる本物の剣帝では力比べをするまでもなく、本物の剣帝の脇腹にガードの上から偽物の剣帝の剣が押し付けられ、剣帝はそのまま勢い良くふつとばされ、何も無い場所にぶつけられた

剣帝「何だ……これ……壁？」

剣帝（偽）「その通り！この空間は縦450m横800mの四角い空間だからな、逃げられないぞ？」

剣帝が自分がぶつかった見えない壁のような物を軽く叩くと、コンコンツとガラスのような音が辺りに響き、その音を聞いた偽物の剣帝が自分達が今現在居る場所についての説明をしてきた

剣帝「元から……ペツ！逃げるつもりなんざサラサラ無いっての！」

剣帝（偽）「それでこそ俺だ！」

剣帝「黙ってるよ！偽物が！」

剣帝は自分の傷を完全に治し切ると同時に偽物の剣帝に向かって壁を蹴って勢い良

く飛んで近づき始めた

そして、一方の偽物の剣帝は自分に向かってくる剣帝を迎撃しようと剣を片手で構え、左手をフリーな状態にした

剣帝（偽）「そら、これは十八番技だろう？」

剣帝「!!ヤッバ！」

剣帝（偽）「ダラア・ブラストオ!!」

偽物の剣帝は本物の剣帝との距離を把握仕切ると空けていた左手を剣帝に向け、その左手の前に灰色の光弾を作り出した

そして、そのまま本物の剣帝を焼き殺そうと本物の剣帝が最も良く使うであろう大技、ダラ・ブラストを剣帝に向けて撃ち放った

剣帝（偽）「これで終わりかな？」

剣帝「な訳あるか、自分の得意技でやられるってどんな阿呆だよ」

剣帝（偽）「それ、結構な数のアニメとか特撮の敵キャラとかを阿呆って言えるよな……例を上げるとマガグランドキングとか」

剣帝「あんなのはノーカンだ」

しかし、本物の剣帝は自分に向かって放たれてきたダラ・ブラストを何事も無く無事回避し、今度は右手だけで剣を持ち、左手を空けた

剣帝「片手空いてりや魔法とか使えるもんな」

剣帝（偽）「俺の真似じゃん」

剣帝「知るかよつと！」

剣帝（偽）「おっと、遅い弾速の弾だなあ、それに随分と狙いも甘いし、やーい、下手くそー」

本物の剣帝は偽物の剣帝に自分の真似をしたと言われると、偽物の剣帝に向けて自分の爆炎の魔力を込めた光弾を投げつけようとした

だが、その光弾を偽物の剣帝は軽々しく回避し、下手くそーと言ってきた

剣帝「さあ、それはどうだろうなあ？」

剣帝（偽）「ハッ？それってどういう、ンギヤッ！」

剣帝「爆炎ブーメランってな」

剣帝（偽）「巫山戯た真似しやがって……………」

そう言われても、本物の剣帝は全く動じる事も無くただ偽物の剣帝の言葉を受け流していた

そして、偽物の剣帝が本物の剣帝をおちよくる事に夢中になっていると、偽物の剣帝が回避した光弾が弧を描くように曲がり、偽物の剣帝の背中にクリーンヒットし、多々大きめの爆発を起こしていた

劍帝「悔しけりや俺を倒してみな？」

劍帝（偽）「その挑発、乗つてやるよ、それでそんな挑発した事を今に後悔させてやる」  
本物の劍帝に挑発しかえされた偽物の劍帝は頭に血を昇らせて、かなり苛々した表情で本物の劍帝に向かって歩き始め

それを見ていた本物の劍帝もニヤニヤと挑発をまたしようかと考えているかのような表情を見せながら偽物の劍帝にゆっくりと近づいていった



## 第八十一話「虚実の強さ、真実の脆さ」

「劍帝と偽者の劍帝が戦い始めてから十数分後」

劍帝（チツ）……面倒な事になりつつあるなあ

劍帝（偽）「どうしたどうしたあ？さつきまで俺を挑発してきてたくせにこの程度かあ？」

劍帝「うるせえよ、俺の偽者の癖に」

劍帝（偽）「なら、その偽者に未だに勝ててない本物さんは何なんでしょうかねえ？」  
劍帝と偽者の劍帝は互いに片手で劍と刀を構えつつ、相手をジツと見据え、相手の動きを監視して、警戒しあっていた

劍帝（コイツ、戦い始めに比べるとかなり動きにキレがあるんだよなあ）

劍帝（偽）「どうしたあ？反論して来ないのかあ？」

劍帝「うるせえって言ってるだろうがよつと！」

劍帝（偽）「おおっとお、危ない危ない」

劍帝「良く言うよ、余裕バリバリのくせに」

劍帝は自分の偽者に軽く煽られ、ムツとした表情を見せながら偽者に斬りかかった、

しかし、剣帝の偽者はその斬撃を楽々と回避し、余裕を見せつけてきた

剣帝（それにしても……：……やっぱりアレかねえ、腐つても俺なのかねえ？）

剣帝（偽）「さつきから黙ってどうしたあ？俺の顔に何か付いてるか？」

剣帝「ああ、お前には無用の物が大量に付いてる、耳とか口とかな」

剣帝（偽）「要は俺に、聞くな、喋るな、息するなつてか？」

剣帝「そう言ってるつもりだが？」

剣帝（偽）「はあー、うっせえな！」

剣帝「危ねっ！」

今度は剣帝が自分の偽者へ挑発を仕掛けると、剣帝の偽者は元々立っていた位置から一切動かずに、剣帝に向けて衝撃波のような斬撃を地面に這わせるようにしながら放つてきて

その斬撃の通った後は何と真つ二つに切り裂かれていて、それに気付いた剣帝は横方向に向かって跳び、斬撃を上手く回避した

剣帝「ひゃー、危ない危ない」

剣帝（偽）「チッ、やっぱり回避だけは上手いんだよなあ、回避だけは」

剣帝「そこだけ強調すんな」

剣帝（偽）「事実だろう？攻撃は総じて軽い、足も遅い、但し回避能力だけが高い」

劍帝「それは……うん、今現在の俺だとお前に勝つのは厳しいかな」

劍帝（偽）「だろぅ？だからとつと諦めて俺に」

劍帝「だがまあ、かの赤い流星はこんな名言をこのしている……『当たらなければどうと言うことはない』ってな」

劍帝（偽）「……………何が言いたい…」

劍帝「俺の癖に分からないのか？じゃあ、もつと簡単に言つてやるよ、お前の攻撃はノーコン過ぎるから俺には当たりやしねえって言つてんだよ、下手くそお」

劍帝が自分の偽者の攻撃を回避してから偽者に向けて挑発をすると、劍帝の偽者から  
ブツリと何かが切れるような音が聞こえてきて

劍帝（偽）「だったらテメエの腸ぶつた切つて殺してやるよおお!!」

劍帝「うっわ、キレた、フフツ」

劍帝（偽）「何笑つてんだテメエ!!」

劍帝「いや、だつてお前の攻撃当たらないし……」

劍帝（偽）「それは遠距離ならの話だろぅがっつと!」

劍帝「うぐえっ!」

偽者の劍帝は本物の劍帝に挑発されて頭に來たのか劍帝に向けて叫び声のような物を浴びせ、それでも挑発し続けてくる劍帝のすぐ側に目にも止まらぬ速さで近付き、劍

帝の腹部に向けて一太刀叩き込んだ

それに受けた剣帝は口から血を吐きながら体をくの字に折り曲げて壁に向かって吹き飛んでいった

剣帝「ガハッ、ゲホッゲホッ」

剣帝（偽）「当たらなければ、何だつてえ？」

剣帝「あー、やっぱり我ながら頭おかしい攻撃力だなあ……」

剣帝（偽）「オイオオイ？さっきだけで随分と声が小さくなつたなあー？んー？」

剣帝「はあ……はあ……うっぜえ……なつと！」

剣帝は吹き飛ばされ見えない壁に叩きつけられた衝撃で麻痺している自分の体を無理矢理動かして偽者の剣帝に向けて、爆炎の塊を放った

しかし、偽者の剣帝はその塊を手を持った剣で難なく弾いて掻き消して、剣帝に向けて剣を持っていない方の手を向けた

剣帝（偽）「何だあ？今のしよつばいのはあ？攻撃のつもりかあ？」

剣帝「チイ……」

剣帝（偽）「良いか？攻撃つてのはなあ、こう撃つんだよ！」

剣帝（やつべえ……動けねえ）

そして、偽者の剣帝は本物の剣帝に少し前に回避された灰色の極太ビーム、ダラ・ブ

ラストを再度発射した

それを見ていた剣帝はさつき無理矢理体を動かした反動で指先すら動かせず、ダラ・ブラストを真正面から受けてしまい、その体はボロ炭のようになった

剣帝（偽）「ハハッ、ハハハッ！ハアーハッハッハッ！俺の勝ちだあ！」

偽者の剣帝はボロ炭になった剣帝の死体を見ると、上機嫌で高笑いしていた

## 第八十二話 「執念の真、敗北の嘘」

## 第八十二話「」

く神具の中く

劍帝（偽）「それにしても、予想よりも随分と弱かったな、あの男が言っていた事が本当だという証拠かな？」

偽者の劍帝は本物の劍帝だったボロ炭の近くまで歩いていき、本物の劍帝の顔を覗き込みながらしやがみこんでいた

劍帝（偽）「この男の、劍帝の本当の強さを見たいなら……やっぱりあの女、藤原妹紅が邪魔になるのか、なら、仕方無いな、コイツの体を使って殺すか」

偽者の劍帝は本物の劍帝の姿をジッと見詰めた後立ち上がると、そのまま神具を通して劍帝の体を操ろうとし始めて居た

そして、その時劍帝の影にとある一つの影が紛れ込んできた

く劍帝の精神内部く

黒影「おーい、劍帝やーい、何処だー？」

真つ暗闇に包まれた劍帝の精神内部を泳ぐように移動しながら黒影は劍帝の精神を探していた

黒影「おーい……何処に居るん……見い付けたつと」

黒影が平泳ぎをする要領で精神内部を移動していると、すぐに劍帝の精神は発見された

その劍帝の精神は深い眠りに付いているかのように静かに目を閉じ、横になりながら浮かんでいた

黒影「起きろー！劍帝ー!!!」

劍帝「……………」

黒影「チツ、起きねえか……なら、仕方ねえなあ」

黒影は劍帝の側に近寄ると、劍帝の顔に少し自分の顔を近づけて大きな声を出して劍帝を起こそうとしたが。劍帝は微動だにせず、目を閉じ続けていた

そんな劍帝の様子を見ていた黒影ははあーと溜め息をついてから劍帝の耳元に口を近づけて

黒影「このまま寝たままだとあの娘が殺されんぞ？」

劍帝「……………」

黒影「良いのか？あの娘が殺されても」

劍帝「……………だ……………」

黒影「良いのか？『お前の愛するあの娘が誰かに殺され』ちまってもよ」

劍帝「んな事嫌だね！あの娘は俺が護り続けんだよ！」

黒影が劍帝ノ耳元でとある事柄を囁くと劍帝は目を開き、バツと上半身を叩き起こした

劍帝「黒、あの娘を殺そうとしてんのは誰だ」

黒影「ん？お前の偽物だぜ」

劍帝「ああ、さっきのアイツか」

黒影「だけどまつ、お前じゃ勝てねえんじやねえの？火力の桁が違い過ぎるし」

劍帝「どうってことは無いさ、アイツの癖とかは全部見たし、覚えたから」

黒影「あつそ、それなら俺様が手を貸さなくても平気か？」

劍帝「いや、一応は火力が欲しいからな、手を貸せ」

黒影「あーいよつと」

目を覚ました劍帝は、自分が大切にしている女性を傷付けれる事に激昂を見せながら、黒影にその対象を聞いた

そして、劍帝は自分が倒すべき相手を黒影に確認すると、黒影に力を貸せと言ってから黒影と手を合わせて、己の身と黒影の身を融合させてから、身体を急速に再生させて



いった

く神具内部く

劍帝（偽）「さあて、そろそろ完全に乗っ取りが終わつ、危ねっ!!」

劍帝「殺らせはしないぞ？あの娘は俺の大切な嫁だ」

劍帝（偽）「はあー、我ながらしつこいねえ？」

劍帝「何が我ながら、だよ、お前は俺じゃねえだろうが」

劍帝（偽）「はてはて？何の事やら？」

劍帝「何がはてはてだ、お前は俺じゃなくて、ドライグの記憶を元に創られた俺の贋作、偽者だろうが！」

偽者の劍帝が劍帝の肉体の乗っ取りはまだかまだかと待っているとその後ろから複数個の斬撃が地面を走るように飛んできた

が、偽者の劍帝はそれをサツと回避して後ろを振り返った、そこには右半分の髪が赤、左半分の髪が黒色に染まった劍帝が立っていた

劍帝（偽）「……………」

劍帝「凶星、だろ？」

劍帝（偽）「何でえ、バレてんのかよお」

劍帝「当然だろう、お前は俺とは違い過ぎる」

劍帝（偽）「例えばどんな所かねえ？」

劍帝「劍筋、癖、技が大技ばっかりだし、何より妹紅を殺そうとした、それら全部ひつくるめてお前は俺じゃねえ」

劍帝は偽者の劍帝に何処が違うかと聞かれるとスラスラと自分との違いを答えていき、偽者の劍帝もそれを大人しく聞いていて

劍帝（偽）「チエツ、そんなに違いを挙げられたら否定できねえじゃん」

劍帝「否定なんぞさせるつもりは無い」

劍帝（偽）「あつそー、まっ、俺が偽者だろうがお前が本物だろうが、俺にお前が勝てなきや無意味だろう、さっ！」

劍帝「問題無い、お前の癖はもう見飽きた」

偽者の劍帝は本物の劍帝の言い分を聞き終わると本物の劍帝に向けてまた斬撃を飛ばしたが、本物の劍帝はそれを軽々と回避して

劍帝（偽）「俺の癖え？何だそりゃ」

劍帝「言う訳無いだろ？それで対策されたら元も子もない」

劍帝（偽）「ケッ！このケチ野郎が！」

劍帝「ケチで結構、俺はただただお前を倒したいし、試練に勝ちたい、それだけだからな」

劍帝は偽者の劍帝に文句を言われても全く動じる気配を見せず、ただ淡々と偽者の劍帝に向かつて近づいていって

劍帝「さあ、第二ラウンドをさっさと終わらせて貰おうか」

劍帝（偽）「そりゃこっちのセリフだ！」

劍帝「おっと」

偽者の劍帝が自分の近くまで歩いてきた劍帝に向けて劍を振るつたが、本物の劍帝はそれを一瞬見てからスリりと劍の横を通り抜けるように回避した

劍帝「だあかあらあ、お前の癖はもう見飽きたんだよ、つまりどういう事か分かるか？」

劍帝（偽）「知るかよーそんなのー！」

劍帝「はあー、身体の性能は俺ト瓜分たつても脳までは真似られなかつたんだなあ」

劍帝（偽）「あああーウゼエーウゼエウゼエウゼエ!!!」

劍帝「ハッハッハ、かなり化けの皮が剥れてるぞお？」

本物の劍帝は偽者の劍帝が何度も自分に向けて振ってくる劍をやすやすと回避し、偽者の劍帝の事を味笑っていた

劍帝「癖を見飽きたって事は、お前の攻撃はもう当たらないって事だよ、それ位理解してくれよなあ」

劍帝（偽）「ウツゼエ!!」

偽者の劍帝は本物の劍帝が頭を抱えて呆れている姿を見て頭に來たのか本物の劍帝に向けて至近距離でダラ・ブラストを発射した

劍帝（偽）「ハッ、ハハッ!この距離でなら避けられなかつただろ!」

劍帝「いやいやあ、そうでもないんだなあ、これが」

劍帝（偽）「何いつ!?!」

劍帝「何度も言つたらう?癖は見飽きたつて、お前の攻撃の予備動作ももう見切つてるんだよ、それにその技は俺の十八番技、発射までの時間程度なら身体が完全に覚えているから対応出来るし」

しかし、偽者の劍帝が放つたダラ・ブラストは本物の劍帝には一切当たつて居らず、本物の劍帝は無傷の状態で偽者の劍帝の後ろに回り込んでいた

劍帝（偽）「クソが、クソが、クソがああ!!」

劍帝「そうやって叫ぶのも悪い癖だなあ、まあ、これから死ぬお前には治せとか言わないけど」

劍帝（偽）「俺は死なねえ!逆にお前を殺して俺はドライグを自由にするんだよ!」

劍帝「それは無理かなあ……だつて」

本物の劍帝は偽者の劍帝の言い分を聞きながらはあー、とため息をついて、右手を強

く握り締め、偽者の剣帝の顔面に向けて握り拳を振るつた

剣帝「もう、お前は終わりだからな」

剣帝（偽）「アッ！ガッ！ガハッ!!」

剣帝（偽）（な、何だ……さつきとは攻撃の速度も重さも段違いに速いし重い）

剣帝「とつとと俺にい！ジャガーノートドライブのお！制御権をお……寄越しやがれえ！」

剣帝（偽）「グウッ！ガハアッ！」

本物の剣帝は偽者の剣帝が困惑していようと関係無いかのように、偽者の顔面の頬を殴り飛ばしてから腹部を殴り、最後に昇龍拳でも撃ち込むかのようなアツパーを食らわせた

剣帝「所詮偽者じゃ本物にや勝てやしねえんだよつと」

黒影『さつすが剣帝、武器使うよりステゴロのが強いつていうアホさだな』

剣帝「だあまあれ、黒」

黒影『へえいへいつと』

剣帝「さて……どうせまだまだ平気なんだろう？」

本物の剣帝は偽者の剣帝を殴り飛ばしてから黒影と会話した後、偽者の剣帝近くに歩いていった

劍帝（偽）「いやいやあ……俺はお前みたいに再生とかは出来ないから、はつきり言つてもう動ける気がしねえ……」

劍帝「なら、お前はもうギブか？」

劍帝（偽）「そうはしたくないんだがなあ……ダメージがなあ……」

劍帝「なら、さっさと消えろ」

本物の劍帝は偽者の劍帝の近くまでやって来ると、偽者の劍帝の顔をじつと見下ろしていた、偽者の劍帝の顔には汗がびっしりつついていて、今にも死にそうなほど疲弊した顔になっていた

なのでなのかは分からないが、本物の劍帝は偽者の劍帝に向けて最大威力の爆炎魔術をぶつけて、偽者の劍帝の身体を消し飛ばした

劍帝「これで試練は終わりだな」

黒影『んじゃあ、帰ろうぜー』

劍帝「ああ、分かっているとさ」

劍帝は掛けている眼鏡をクイツと上げると、そのまま上空に飛び上がり、偽者の劍帝を消し飛ばすと同時に空に現れた黒い穴に入ってしまった

## 第八十三話 「銀の神と紅の帝王の激突」

第八十三話 「銀の神と紅の帝王の衝突」

《セラフォルーの屋敷：剣帝の部屋》

「ジャガーノート取得の試練終了後」

剣帝「……………んっ……………んっ……………んっ？」

黒影「よっ、ようやく起きたか寝ぼす剣帝」

剣帝「黙れ黒、俺をその呼び方していいのは妹紅と娘達だけだ、てか、ようやくってどういう事だ？アレから数分しか経過してないだろ？」

黒影「何言ってやがんだよ、お前、丸3日は寝てたぞ？」

剣帝「はあ!?! 3日あ!?!」

黒影「おう、3日、その間にセラは里帰り済ましちまったしよお」

試練が終わった後、剣帝が目を覚ますと、剣帝の身体は何故か試練開始時と状態が変わっていて、ベットで横になっていた

それもその筈、剣帝は試練を始めてからずっと意識を身体から手放して眠り続けてい

たのだ

劍帝「なら、さっさと向こうに帰らないとな、妹紅が心配だしよっ」

黒影「それが可能ならもう夜鴉さん来てんじやねえのかねえ？だが、未だに夜鴉さんはきてない、つまりは分かるだろ？」

劍帝「……………そういや、送られる時に言われてた試練してないじゃん…………」

黒影「まっ、帰れない理由は十中八九それだろうな」

劍帝「はあー、面倒臭え……………とつと帰って妹紅に抱き着きたいのに…………」

黒影「うだうだ言ってねえで、とつとセラを連れて試練に行くぞー」

劍帝「何でセラ様連れて行かなきゃならないんだよ？」

黒影「ああ？お前はペタンちゃんから言われた事を忘れてんのかあ？『二人でクリアしろって言われたろ？』」

劍帝「……………あつ！あー、そうだったそうだった」

劍帝はベットの横に立っている黒影に退くように手で指示を出して黒影を退かせるとベットから飛び降りるように立ち上がり、そして、黒影と話しながら部屋を出ようとしていた

劍帝「それにしても、面倒な条件だなあ……………俺一人なら気楽にやれるのに…………」

黒影「そだろうなあ、お前一人なら何回でも死にながら相手を殺すまで戦い続けるだ



けだもんな」

劍帝「そうそう、でも、セラ様を連れて行かないやならないなら、セラ様守らないといけないじゃん……はぁー」

黒影「面倒臭そうにため息つくなよ、気持ちは分かるがよ」

劍帝「まあ良いや、連れて行ってから手を打とう」

黒影「姑息だねえ」

劍帝「姑息言うなバーカ」

劍帝は黒影との会話を続けつつ、自室の床に置いてある鞆の持ち手に手を通して持ち上げてから部屋の扉を開き、そのまま屋敷の廊下を歩いて進み、セラフォルの部屋に喋りながら向かって行き、すぐにセラフォルの部屋の前に着き、劍帝はセラフォルの部屋の扉にノックをして

劍帝「セラ様、いらっしやいますか？」

セラ「起きたのね！劍帝君!!」

劍帝「ええ、つい先程起きました」

セラ「そつかあ……心配したのよ？劍帝君」

劍帝「御心配をお掛けしました。それでセラ様」

セラ「なあに？」

劍帝「そろそろ夜鴉様より通達されていた試練に向かうので、準備をして下さい」

劍帝がセラフォルーに扉越しに声を掛けるとセラフォルーは扉を破るかのような勢いで部屋から出てきて、劍帝に抱きついてきた

そんなセラフォルーを身体から引き剥がすと、自分が部屋を訪ねた理由を劍帝はセラフォルーに告げた、すると、セラフォルーの表情が曇っていき

セラ「それって……どうしてもやらなきゃ駄目？」

劍帝「どうしてもやらなきゃ駄目です」

セラ「………終わったら向こうの世界に戻るんでしょ？」

劍帝「そうだと思いますよ？少なくとも俺はそうだろうなと思っておりますし」

セラ「………劍帝君は戻りたいの？」

劍帝「はい、戻りたいです。妹紅に会いたいですし」

セラ「そっか……それじゃあ向かいましょっか」

劍帝「有難う、」セラ、それじゃあ、俺は先に屋敷の外に居ますので準備をして来てくださいね」

劍帝はセラフォルーの頭を優しく撫でてからセラフォルーから離れて、そのまま屋敷の外に向かつて歩いて行った

その数分後、荷物をまとめたセラフォルーも屋敷から出てきた、すると、劍帝は自分

の足元に魔法陣を開き、転移を始めた

《??》

剣帝「さて、今回の試練の相手は誰かなあつと？」

黒影『この街並みを見る限り、俺様の予想では何かしらのゲームのラスボスだな』

剣帝「奇遇だな、俺もそう思ってた」

セラ「えっ？なにになに？何の話？」

剣帝「今回の試練の相手の予想ですよ。多分相当に強いのが来ると思いますので、セラ様は避難しておいて下さりませんか？」

セラ「嫌、ワタシの剣帝君と一緒に戦うわ」

剣帝「……………はあ、了解しましたが。危なくなったら即座に逃げて下さいね？庇えないと思うので」

黒影『そうこう話してる間に、相手さん来たみたいだぜ』

剣帝とセラフォルーが転移した先に広がっていたのは、倒壊したビルや家屋が並ぶ、何かしらに滅ぼされた後の都会の町中だった

その町中で剣帝とセラフォルー、そして黒影が話していると、三人の立っている地点付近の上空に、何やら卵型の浮遊物体が飛来し、その浮遊物から巨大な銀の肌の空飛ぶ人らしき物が降りてきた

劍帝「これはあ……もしかして」

黒影『ああ、間違いないな』

劍帝「やっぱり、アレだよな、うん、セーの」

劍帝&黒影「うっわ！『ペプシマンだああ!!』ダルイ！」

セラ「ペプシマン？ってあの巨人の事？」

劍帝「そうですね。あの銀色の巨人は通称、うわつと！」

劍帝は何故自分が銀色の巨人をペプシマンと呼んだのか、セラフォールが疑問符を浮かべている事に気付くと、その理由を説明しようとし始めた

しかし、劍帝が口を開いた瞬間、銀色の巨人の掌から劍帝達に向けて光線が放たれてきて、劍帝はそれを回避する為にセラフォールを抱えて後ろに飛んだ

劍帝（うーん………やっぱりセラ様が居ると戦いづらいなあ………そうだ）

劍帝「オイッ、黒」

黒影『何だあ？劍帝』

劍帝「セラ様連れて離れとけ」

黒影『了解』

セラ「えっ!?ちよつと！劍帝君!?!」

劍帝「とつとと行け！黒！」

黒影「あらほらさっさー」

光線を回避した剣帝は、現状で勝つ事が厳しいと感じたのか自分の影に潜んでいる黒影にセラフォルを連れて離れるように指示を出した

すると、剣帝の影からズリリと現れた黒影はセラフォルを慌てて抱えて、瓦礫から瓦礫へ飛び移りながら逃げ去っていった

剣帝「これでよし……さて、待たせたな、神様よお？」

剣帝がくるりと振り返ると相変わらず宙に浮いている銀色の巨人は剣帝に向けて再度光線を手から放ってきて

《荒廃した街：戦闘域外》

セラ「離して！ワタシも剣帝君と一緒に戦うの！」

黒影「あー、それは止めておいた方が良いと思うぜえ？相手が相手だしなあ」

セラ「そういえば、何者なの？あの巨人」

黒影「アレはなあ……地球防衛軍5つて名前のゲームに出てくるラストボスだ、それがあのペプシマンって俺等が呼んだ銀の肌の巨人」

セラ「えっ？ゲームのラストボスが何でこんな場所に？」

黒影「まっ、どーせ、夜鴉さんの仕業だろうさ、気にすんな……とにかくアイツと現状マトモに戦えんのは剣帝位だ、だから、俺様達は足手まといにならないように逃げ

るのが正しい判断って訳だ」

セラ「……………」

黒影「それに、離れておかねえと剣帝がああ姿になれねえしな」

黒影は剣帝からの命令を聞いてセラフォルーを抱えて、剣帝の居る場所から数百メートル離れた地点まで逃走し、自分とセラフォルーの身の安全を確認してからセラフォルーを降ろし、剣帝からの命令の理由等を説明した。それを聞いたセラフォルーは顔を俯けて、地面を見つめ、黒影は剣帝の居る方向を見つめていた、そして、その瞳には赤い角を生やした巨大な怪物の姿が写っていた

《荒廃した街中：戦闘域》

剣帝「セラ様達は充分離れたみたいだし、これで心置きなく戦えるな？ 神よお」

剣帝は首を左右に振り、首の骨をゴキゴキと鳴らしつつ神と呼んでいる巨人を見つめ、話しかけていた、だが、神からの返答は特になく、剣帝に向けて神は再度光線を放ってきた

だが、剣帝はその光線が放たれるのを確認してからバク転をして光線を軽々と回避していた

剣帝「おっと、危ない危ない……まつ、お前は俺が何言っても返答しないよな、それよりとつと片付けさせてもらおうとしようかな」

劍帝はバク転で回避してから左手の指をゴキゴキ鳴らしてから構えを取り、ブーステッドギアを出現させ、目を閉じてから呪文を唱えはじめた

劍帝「我、目覚めるは……覇の理を神より奪いし二天龍なり……無限を喰い、夢幻を憂う……我、赤き龍の霸王と成りて……汝を紅蓮の煉獄に沈めよう……J a g u a r N o t e D r i v e」

呪文を唱えていた劍帝の身体は瞬時に赤い鎧に包まれ、その後すぐにブクブクと肥大化し始めた、まず劍帝の脚が人のものではなく怪物としての足に変化し、手は小さな頭のような形に変化していった

そして、劍帝の背は前屈みに折れ曲がり、デコの辺りからは赤いクリスタルのような角が生えてきて、最後に劍帝の口が大きく広がり、顔は赤い目が前方に2つ、その少し後ろに2つ有るように見える醜悪な怪物のようなものになり、劍帝の頭部からは黒い触手のようなものが伸びていき、その触手は劍帝の全身を包み込み、その触手の下からは赤い棘が生え出てきた

劍帝「さあ……終わりにしようか」

劍帝は変身し終わると、銀色の巨人に向けて、大音量の方向を放ち、方向を放ち終わると同時に頭のクリスタルから巨人に向けて赤黒い太い光線を放った

《荒廃した街中：戦闘域外》

セラ「アレは……前にも見た事がある剣帝君の暴走形態？」

黒影「正確にはジャガーノートドライブな？」

セラ「えっ!?!でも、資料で見た一誠ちゃんのはあんな姿にはなってなかったわよ？」

黒影「そりやそうだろ、あの乳龍帝のはあくまでもドライブの力を開放したジャガーノートドライブ、だが、剣帝のはドライブと剣帝の力が混ざって出来たジャガーノートドライブ、まず根本的に物が違う」

セラ「それで……あんなに禍々しい姿に」

黒影「まあ、あの姿の名前は覇竜じゃなくて、マガタノオロチだからな」

セラ「マガタノオロチ？」

黒影「そつ、とある特撮番組で出てきたラストボス、それが今の剣帝が変身してる姿」

黒影（まあ、夜鴉様の仕業だろうから……多分弱点も再現されてんだろうなあ）

セラ「ゲームのラストボスと特撮のラストボス……それじゃあ剣帝君は勝てるんでしよう?」

黒影「さあてなあ?一応あの姿にや弱点あるからな、そこ突かれたらアウトだわ」

黒影はセラフォルーに勝てるかどうか聞かれると、分からないと返答をしながら剣帝の戦っている様子を見つめていた